

---

# 第三王女のカエル様

romewo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

第三王女のカエル様

### 【コード】

N9364K

### 【作者名】

romewo

### 【あらすじ】

アタシは宮本澄香<sup>みやもとすみか</sup>。

小さい頃から同じ設定の夢を見る。夢の中のアタシは、小国の王女様の、亡き母君様お手製の大事な大事なぬいぐるみ様。五体のぬいぐるみに代わる代わる宿って、王女様を慰めるのがアタシの仕事。どんな美女もイケメンも、布製カエルのアタシには全然全く関係ない！アタシにとって大切なのはたった一人の王女様。

## Prologue

目の前に、ちよつとどうかと思うくらいイイ男どもがいる。

一人は、おとぎ話にでも出てきそうな見事な金髪翠眼。けれど王子様ってんじゃないくて、騎士って感じのマジメで堅物そうな男。

一人は、明るい茶色の髪に真っ青な瞳の持ち主。金髪翠眼と同じ服装だから、多分こつちも騎士なのだろう。着崩した制服からは、茶目っ気と色気がだだ漏れな感じ。

一人は、暗褐色の肌黒髪黒目の、物静かな笑みをたたえた男。体格は先の二人より細身で、文官って感じかな。

一人は、綿菓子みたいふわふわの銀髪に神秘的な紫の瞳をもつ、ちよつとマッドな雰囲気インテリメガネ。個人的には、是非白衣を着てほしい。

そしてアニメには一人はほしい、濃紺なんてあり得ない髪色の男。左右対称の完璧な造作は、無表情すぎて作り物めいて見える。

よくまあ揃えたもんだと感心したくなるくらい、異なる魅力の男たち。

全くもってよりどりみどり。

ああ、これが噂に聞く、女なら一度は夢見る逆ハーってやつなのね。

けどアタシはちつとも喜べない。

「貴様、一体何だ……」

濃紺の男の、腰にきそうな重低音の声。けれども地獄の底から響いてきていることは、多分きつと間違いない。

ヒタリとアタシに向けられた眼差しは、凍傷でも起こしそうなほど冷たい。金色の光彩が、これまたよけいに怖さを煽る。いや鉄面皮だから怖いのか？。

「ええと……」

言葉を濁しながら、アタシはどう答えるべきか考えた。

「言え」

抑制のきいた声でそう言って、金髪の男が白刃を突きつける。目の前に突きつけられたそれは、間違いなく本物だ。

「うわお、真剣。初めて見た。正直怖い。」

かといって、本当のことを話すわけにもいかない。

「うう〜ん」

どうやってこの場をやり過ごそうかと頭をひねる。

そんなアタシの目の前に、ふわふわ銀髪の男がしゃがみ込み、にっこり笑って言った。

「答えなくていいから、バラバラにしていいい？」

「おおっと、出ました！ マッドな発言。」

銀髪紫眼の男は、期待に違わずマッドです！

「いやあ、それはちょっと。あんたのことは自業自得としても、罪もない一族郎党首全員チョンパってのは、さすがに良心が痛むから」

「はあ？」

男たちが、何言ってやがんだコイツって顔で見下ろしてくる。

それにしても、こいつらデカいな。全員絶対百八十超えてるし、

金髪なんか、たぶん二メートルいってるよ。

アタシは百五十八センチ。日本人としては平均的な身長だとは思っけど。世界が違ってても、悲しいかなモンゴロイドはやっぱり小さいらしい。

「ふう〜ん。ひよっとして、脅してるのかい？ オレ達を。それともお茶目な冗談かな？」

どこか楽しそうな声色で、茶髪の男が言った。キラキラした青い眼が、完全に面白がっていることを物語っている。そのくせ眼の奥にある光は、どこか怖い。こういうタイプは、キレるとやばい。多分絶対、性格悪い。

「いやあ、冗談にしたいのは山々なんだけど」

アタシは日本人の得意技、ザ・曖昧笑いをかましたかったが、今の体でそれができたかどうかは不明だ。こんど鏡の前でやってみよ

う。

そんなことを考えつつ、アタシは言った。

「これがまた、純然たる事実なんだよね〜」

そう。

純然たる事実。

王族への不敬罪は、最悪、一族郎党にまで累が及ぶ。

アタシは王族じゃないけど、アタシは王族の所有物。王族のモノを壊して、無事ではいられない。

「大丈夫。完全に燃やしてしまえ、誰にもわかりませんよ。」

おおっ。黒髪の彼が、とんでもなく優しげな口調で、これまたえげつないことをっ。

くどくもなく、あっさりとしすぎてもない。すっきりとした顔立ちの彼。

一番好みなんだけど！ 一番ひどい！？

「ふむ。それもどうだな」

濃紺の髪の方が納得顔でそう言って、うちひしがれているアタシの頭をムズとつかんだ。

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！ げふっ！」

アタシはあまりのくすぐったさに思わず笑って、驚いた男に思いっきり壁に投げつけられた。

ベタンツと、嫌な音がした。

けど、痛くはない。痛くはないけど、むかついた。

アタシは、スックと立ち上がって振り返った。

そして満面の笑顔を作る。

男どもは見事に眼福モノの顔を引きつらせ、なんだか奇妙なモノをみるかのようにこちらをみている。

明らかに先ほどよりも引き気味だ。

怒るときは、満面の笑顔で怒るべし。

うん、親友の恵美ちゃんの言ったことは至極正しい。

「酷いなあ。つたく、これが小動物なら即死だよ。小動物を殺すの

は、猟奇殺人の兆候だって言うし。あんた、ちょっとつてか、相当やばいよ。心のビョーキだね」

アタシは、一步、また一步と、男達に近づいてゆく。

男達は、微妙にだけど、ちよつとずつ後ずさつていく。

「お前が、突然笑うからだろう！」

「だって、急にくすぐるし。そんなにオレと仲良しになりたいのなら、言えばいいのに」

「なりたいわけあるか！」

「そもそもくすぐってないだろうっ。頭を鷲掴みにしただけだろうっ」

「うん、そうだね。思いつきり力任せに掴んでくれちゃってさ。頭変形しちゃって、びっくりするくらい視界がゆがんだよ。視界ってあんなにゆがむもんだねえ」

いや、あのゆがみ具合は、マジで感じ入ったね。

「でもあんたの心の歪みは、きつとあんなもんじゃないんだろうね」

「何なんだ！ 貴様一体なんなんだ！」

金髪の騎士様がほとんど叫ぶようにそう言つて、剣先を向けてくる。

けど、近づいてはこない。心持ち、腰がひけてる。

うっん、百戦錬磨の猛者（推定）すら、怖じ気づかせてしまったか。

ふと窓の外を見る。

この世界では貴重なガラスをはめ込んだ大きな窓の向こうで、ほんのわずかだけれど藍色に白が混ざり始めている。

夜明けが近い。

つまりはタイムリミット。

その証拠に、頭の奥で耳に馴染んだ電子音が鳴っている。

アタシはフツと笑つて、芝居がかった口調で言った。

「ある時は炎のように激しく、ある時は水のごとく静かに、またある時は風とともに飛翔し、またある時は闇にとけ込む。しかしてそ

の正体は！」

「……その正体は!?」「」「」

「あ。ごめん、タイムリミットだわ。悪いけど、コレ、第三王女のとこまで持ってっついで」

そしてアタシは去った。

アタシの抜け殻、先王第四正妃のお手製ぬいぐるみ、カエルのケロタン二号を残して。

ピピピピ。

聞き慣れた電子音で目が覚める。

寝起きの悪いアタシはぼんやりとしたまま時計を見る。

六時十五分。

六時じゃなくて、六時十五分なのは、ちょっとでも寝ていたい心理の表れだ。

我ながら寝汚い。

そんなことを思いながら、一つ大きいため息をつく。

いいんだか悪いんだかわからない夢を見た。

小さい頃から見ると、ほとんど連ドラを見てる気分だ。

今日は珍しく、いい男はいっぱい出てきたと思う。

けれど、そのいい男達に思いつきり不審者扱いされた。

いや、不審物扱いされた。

いやまあ無理もない。アタシだって立場が逆なら、不審物扱いす

るだろう。

いやむしろ、即刻焼却炉に投げ込むだろう。

あゝあ。

アタシは思いっきり背伸びして、起きると頭と体に言い聞かせる。  
それにしたってさ。

肝心のヒロインがカエルのぬいぐるみじゃあ、逆ハ―にはなりそ  
うもない。



## 第一話 カエルも脱皮します

「ぶはははははっ。マジでウケるっ」

周りからのいただけない視線を感じながら、美人は大口を開けて笑っても美人なのだ、アタシは思う。涼しげな眼差しをした和風美人の恵美ちゃんは、黙ってさえいれば楚々とした大和撫子に見えるのに、口を開けば豪快なことこの上ない。口は悪いし手は早い、足はもつと早くて、一度敵と見なせば容赦がない。その容姿に魅せられて不用意に近づこうものなら、鼻の穴に割り箸突き刺されて奥歯ガタガタ鳴らされる程、苛烈な性格なのだ。

「いやいや、ウケてる場合じゃないよ。今朝起きてさ、アタシはマジで自分の精神を疑ったね。いつの間に逆ハ一願望なんか持ったんだよって」

そう言つて、アタシはズズツとアイスラテの残りを啜る。

「まあ、意外と自分のことは自分が一番分かってなかったりするからね」

言葉は慰めているみたいだが、顔は確実に笑ってる。

アタシはズズツとまた啜って、窓の外へと視線を逸らす。

ガラスの向こうでは、焼けるような日差しがアスファルトを焼いている。

人影はチラホラとあるものの、みんな日陰から日陰へと縫うようにして歩いてる。

大方の試験が終わって閑散としてきた構内だけど、カフェは何故か満席で、チラチラと恵美のことを盗み見る男子の視線が、鬱陶しい。それらを丸々と無視して、恵美もまたズズツとミックスジュースを啜った。アールグレイとかの紅茶が似合いそうな女だが、恵美がそんな小洒落たものを飲んでるのを見たことがない。真っ昼間から餃子屋でビールを飲むような女だ。

「えっと、もう十年だっけ？」

「もうすぐ丸九年目」

「で、九年目にしてやっとでてきた男が、そろいもそろって美形つて。しかもいっぺんに五人つて。スミつてば、ひよっとして溜まっ  
てた？」

「何がよ」

「だって、もう二年は彼氏いないじゃん」

「そうだけどさ」。だからってアタシ面食いじゃないし。そりゃ鑑賞する分には、顔がイイにこしたことはないけどさ。けど、アレはアタシの想像の域を遙かに超えてるよ」

恵美こと桧山恵美子は、アタシの例の夢のことを知る、唯一の人間だ。

恵美とは小学校六年生のときに、転校先の学校で知り合った。その後同じ中学に進んで、二年の時に恵美が転校していった。結構仲はよかつたけれど、子供の頃の友情なんて離れてしまえばあつけない。当時から美少女のくせに乱暴だった恵美は印象が強くて、たまに思い出すこともあつたけど、ただそれだけだった。それがなんと大学に入ってから再会したのである。

声をかけてきたのは恵美からで、恵美が言うには「中学校のときから姿形が全く変わっていない」から直ぐに分かったのだという。

再会は嬉しかったが、正直微妙な気持ちだ。暗に子供体型だと指摘されたようなものだ。

肉の付いていない手や足は女子からは羨ましがられることはあるが、胸にも全く肉がないので、嫉妬の対象には決してならない。中学の時からすれば身長は五センチのびたが、スリーサイズは殆ど変わらない。

これでショートカットだと、マジで小学生なので、せめても思い肩下まで髪を伸ばしている。この長さだと半年くらい放っておいても分らないとか、そういう副作用を期待してないわけじゃないんだけれどもさ。

「いやあ、ひよっとしたらさ、その内の一人と恋愛してキス、なん

てことになったら脱皮できるって、設定かもよ」

恵美の言葉で、魔女にカエルにされた王子様が、お姫様の心からの愛のキッスで、呪いが解ける、なんておとぎ話があったことを思い出す。

「メルヘンじゃないんだし。てか、脱皮してもカエルだし、カエル脱皮しないし」

「するよ、カエルも脱皮」

「マジで？」

「マジで。ま、どっちにしても、ワタシはカエルと恋愛できる男は嫌だな。あのおとぎ話のお姫様は、間違いなく勇者だよ。てか猛者だね！」

「アタシだって、嫌だよつ。そんなヤツ」

カエルの王子とお姫様の話は、感動的かもしれないが、カエルが喋る時点で、アタシなら逃げる。そして恵美なら。

「ワタシだったら、どっかの研究機関に高値で売りつけるね」

「そんな女だよ、アンタは。」

「でもさ、あと何年？」

「不意に恵美が訊いてきた。」

「ええと、今十二歳だから、あと四年かな？」

「四年後ってことは、こっちは二五歳か」

「二五つてばさあ、彼女が亡くなったっていう年齢なんだよね」

「彼女って？」

「お姫様のお母さん。第四正妃アデーリア」

彼女は二二で王女を産んで、二五で亡くなった。

王女は今十二で、アタシが王女と初めて会った歳になった。

符号めいているけれど、多分単なる偶然だろう。

王女はあと四年であの国での成人になる。

アタシと王妃の契約は、王女が成人の儀を迎えるまでだ。

その後はきつと、あの夢を見なくなる。

毎日見るわけじゃないし、たまに一ヶ月くらい見ないこともある。

それでもあの夢はこの九年間で、アタシにすっかり馴染んでしまっ  
てる。

それがなくなるとなると、酷く寂しく思うに違いない。

「ふうん」

恵美の気のない返事。所詮は他人事だ。けど、アタシの話を気味  
悪がらずに聞いてくれるのは、多分恵美だけだ。

「ちよつとさ、アタシちよつと思っただけどさ」

「何を？」

「ひよつとして、あの中からリズのお婿さん探せつてことじゃない  
のかな？」

リズつてのは、アタシがつけた王女の愛称である。本名は、ちよ  
つとどうかと思うくらい長々しくて、正直覚える気がしないような  
シロモノだ。

アタシと王妃の契約は、リズの成人まで。夢の中のあの世界では、  
王族や貴族は、成人と同時に婚約するか結婚することが多い。リズ  
の異母姉は、確か成人してすぐ他国に嫁に行ったはず。でもそのこ  
と自体は、何年も前に決まっていた。

「お姫様十二歳よね。ヤローどもは幾つくらいだった？」

「外国人（？）だもん、よく分かんない。見た感じ二十代後半だけ  
ど、ひよつとしたらもつと若いかも」

「どつちにしても二十歳すぎてんじゃあ、歳離れすぎてるよ。ロリ  
コンじゃん。変態だよ、変質者だよ、犯罪者だよ。美形だからつて  
何でも許されるなんて思うなよつ。そんなことのたまうヤツあ、前  
に出て齒あ食いしばれ！」

うわあ、殴る気満々だよ。相変わらず容赦ないなあ恵美は。でも  
まあ確かに気持ちちは分かる。

「アタシらのジョーシキじゃあ、あり得ないよね。キモイし。けど  
ほら、キゾクとかオーゾクだと、政略結婚とかが殆どじゃない？  
だからもうそろそろ婚約者選び始まつてると思うんだよね」

できればリズには、ちゃんと恋とかして、好きな人と結婚して欲

しいけど。

後宮から一步も出られないあの子には、そんな機会ありそうになり。少なくとも成人までは。成人すれば社交界にデビューしたりして、出会いもあると思うけど。変な虫が付かないうちに、さっさと嫁に出してしまう場合も多いらしい。

「あ、分かった。アンタの役目はさ、そいつら変態の魔の手からお姫様を守ることだよ。お姫様のお母さんはさ、政略結婚をさせないように、アンタを派遣したんだよ」

「派遣って。でも、うーんと、そうなのかな？」

アタシの問いかけに、恵美は力強く頷いた。

「うん、絶対そう。お姫様、お母さん似の美少女なんでしょ？ 青田ガリとか先物取引とかってヤツ？」

うーん、イロイロ微妙に言葉の使い方が違うような気もするけど、言いたいことは十分分かる。

「光源氏ってやつだね」

「そう源氏。マザコンのロリコンなんていう最悪ヤロー。うわっ、キモッ。だからさ、スミは絶対ヤツらをお姫様に近づかせないようにはしないとっ。今までみたいにぼんやり徘徊してる場合じゃないよ。最悪殺してもいい！ てかコロセッ」

美少女だった恵美ちゃんには、ロリコンだとか変態に対する積み積もった恨みとか辛みとか殺意とかが山盛りあるのだろう。

「う、うん、分かった。ガンバツテコロシマス」

とりあえずアタシの、奴らに対する態度が決定した、らしい。

その夜早速夢を見た。

確かに連夜の訪問だったにもかかわらず、かの国では三日経って  
た。

ケロタン二号は、まだ帰ってきていなかった。

## 本話休題 カエル戦隊ケロレンジャー（イラスト）

> i6277 — 1011 <

澄香：カエルのぬいぐるみのことを、アタシは勝手にケロタン一号とか二号とか呼んでるけどね、

実はさ、カエルどもにもちゃんと名前があるんだよね。

レッド（ケロタン1号）

アンドリユー・サルダス・ケロタウロス

ブルー（ケロタン2号）

クリストファル・ウディノ・ケロタウロス

ホワイト（ケロタン3号）

エウリディケ・シルファド・ケロタウロス

グリーン（ケロタン4号）

ミリュリアナ・アシエス・ケロタウロス

ブラック（ケロタン5号）

サウザード・ネルス・ケロタウロス

澄香：ちょっとどうかと思うくらいご大層な名前よネ。

困みに。

ファーストネームは歴史的英雄の名前で、

ミドルネームは世界を構成してるって言われてる元素のことらしい。

んでもって、最後のケロタウロスってのは、カエルの学術名

なんだってサ。

これを死の床の王妃が考えたってんだから、逆にコワイ。

色もなんだか、毒持ってそうだし…。

これがいわる、やんごとなき方の考えってヤツ？

ホントマジで意味不明。



## 第二話 カエルは脊椎動物ですが

現実で三日しか経ってなくっても、夢の中じゃあ一ヶ月たってたり。

現実で一ヶ月経ってても、夢の中じゃあ三日も経ってなかったり。或いは全く時間差がなかったり。

そのくせ振り返ってみると、現実も夢の世界も経ってる月日は九年だ。

夢の世界と現実の時間的相関係数は、未だもって皆目不明。

でも九年間のキャリアは伊達じゃない。翌日が三日後でも今更気にしたりなんかしない。

だからこそ、タイムラグを予想して、あのヤロウ共に返しておくように言っておいたのだ。わざわざリスのことを持ち出したのだから、王女縁のモノなら、どんな不審者ならぬ不審物だって、無体な扱いはしないと慮ってのことだ。

ふふん、アタシにだってそれくらいの配慮はできるのだ。

なのに。

三日経ってもケロタン二号が戻って来ていないってっ。

お陰で、リスがこんなに泣いてんじゃねえかつ。

「で、この三日間誰からも何もクリスのことと言ってこなかったのね？」

ひとしきり泣いて落ち着いたリスに、アタシは訊いてみる。

クリスというのは、例の青いカエル、ケロタン二号のことだ。

クリストファル・ウディノ・ケロタウロス。

青いカエル、ケロタン二号の正式名だ。

何度聞いても、馴染めない仰々しい名前だが、制作者である王妃の命名だ。

しかも遺言で。

遺言ってヤツにはYO！ もっと他に書くことあるだろうYO！

と思うのは、アタシだけじゃあないハズだ。

アタシの言葉に、リズがコクンと頷いた。

頷いた拍子でか、大きな瞳にまた涙がジワリと滲んでくる。

アタシはリズの頭を抱きしめて、その艶やかな紫色の髪をなでた。そのお返しとばかりに、リズもアタシを抱きしめてくる。

強く強く。

正直な話、脊椎が折れても不思議がない程エビ反り状態だけど、幸いなことに、この体には脊椎はない。

脊椎がないのに、なんで立っているんだとかいう疑問は、もう今更だろう。

ついでに言うなら痛覚もない。

触覚はあるし、くすぐったかったりはするけれど、どうやらこの体はアタシに肉体的不快感を与えないようにできているんじゃないかと思う。でなければ、リズの相手はムリだったろう。目ん玉ひつつかまれて引きずりまわされたり、首を絞めんばかりにリボンを結ばれたり、足つかまれて振り回された揚句に壁に激突させられたり…。

うん。幼児ってのは、力加減を知らないものだ。

そのリズも、今では十二歳。

母親譲りの美貌は磨きがかかり、この年ですでに傾城もかくやとばかりの美少女っぷりである。

天然名古屋巻き紫の髪に、カラコンなんか踏みつぶしてしまえ！ とばかりに美しい紫水晶の眼。バラ色のほほに陰を落とす長い睫は、つけま睫なんかちゃんちゃらおかしいわと言わんばかり。小さな唇は、グロスをつけなくてもプルンプルンのラズベリーピンク。こんな色をアタシが付けたら、ヒト食ってきたのかと疑われそうだ。涙ダーダーだろうが鼻水ダラダラだろうが、アタシの王女様は今日も可愛い。

「ミリー。クリス、どこいっちゃったの？ もう帰ってこないの？」  
可愛いリズが、アタシに可愛く尋ねてくる。

ミリーってのは、今日の装いのことだ。通称ケロタン四号。正式名ミリュリアナ・アシエス・ケロタウロスは、毒々しいくらい鮮やかなオレンジの腹とおめでたい程デカイ頭の花がチャームポイントの緑のカエルである。

「クリスが帰ってこないなんてありえないわよ。きつと迷子になっちゃってると思うの」

ミリーはちよつと内気な女の子。詩集とお花が大好きで、趣味はお裁縫の優しいお姉さんキャラである。

現実のアタシにはないキャラだけど、リズのためにアタシは精いっぱいミリーを演じる。

「クリスはね、リズが大好きよ。でも冒険も好きよね？」

「うん」

「だから今回は、ちよつと遠くに行きすぎて、帰り道が分からなくなっちゃったのね。仕方ない子だわ」

「クリス、帰ってくる？」

「もちろん、帰ってくるわ。帰ってこないわけがないもの」

アタシがケロタン二号、即ちクリスの中に「降り」れば、そのままスタコラサツサと戻ってくる事ができるんだけど。

残念なことに、アタシには、アタシがその日入るカエルは選べない。

いつどのカエルに入るのか、法則性があるのかどうかも、未だ不明だ。

下手したら、何ヶ月も入らないときもある。

確かに昨日、この世界では三日前、アタシはちよつとばかり羽目を外した。引き返すべきところで、引き返さなかった。

だから、あんな連中に追いかけてまわされたり、ケロタン二号を置いてきぼりにしてしまったり、てなことになってしまったわけだけど。

なんだって、あの連中は、一言も何も言っこないんだらう？

この不審物はこちらの王女の所有物でしょうか？ てな事くらい

訊いてくりゃいいのにさ。

アタシは、腹の中で例の無駄にイケメンな男どもに腹を立てつつ、にっこりと笑って言った。

「だからね、帰ってきたら、こっぴどく叱って、それからたくさんのお土産話を聞きましょう」

まあ、ぬいぐるみに表情なんかないんだけど。

そもそもカエル自体に表情なんかないんだけども。

それでも笑うつてのが、女の心意気ってヤツじゃねえ？

「冒険話？」

アタシの言葉に、リズの表情が少しだけ明るくなる。

王女であるリズは、成人するまでは後宮をでることはない。

おまけにリズの住むレゼル宮は、後宮の中でも一番奥まった場所にある。

もちろんリズは女官や侍女にかしずかれて大切に育てられているけれど、後宮の勢力関係の都合ってヤツなんだろう、訪れる人間はほとんどいない。リズの父親である先王と、教育係の神官、それから侍医くらいのものだ。その中で、男は父親だけ。もちろん後宮なんだから、王様以外の男が出入りできるわけもないんだろうけど。その先王も半年前に亡くなってしまった。

だから、リズの世界はとても狭い。

そんなリズのために、アタシは「男の子」のときは秘密の通路を使って「冒険」に出るのである。ま、やむを得ない時は「女の子」でも出かけるけどね。

幼いリズが眠った後物凄く暇だからとか、そういうことはないこともない、こともない。ということにしておいてくれたまえ。

「ええ。きつと、沢山の冒険話を持ち帰ってくるわ」

そう。

金髪の騎士に剣で切り付けられかかった話だとか、茶髪フェロモン男に言葉攻めされた話だとか、マッドなメガネに解剖されかかった話だとか、黒髪腹黒に燃やされそうになった話だとか、濃紺鉄面

皮に頭つぶされかかった話だとか。

次までに、リズが喜ぶよう楽しめるよう話を練っておこう。

そのときのアタシには、とんでもないオオゴトになっているなんてことは、思いもよらなかった。

ちよつとばかりし不気味なカエルのぬいぐるみが一っ見あたらないうってだけの話。

それが何をどうやったら政治問題にまで発展するのか。

アタシには、全然全く分からない。

### 第三話 カエルだって、白い歯が命です

一体全体、なんだってこんなことになったのか。とりあえず、あの夜のことを振り返ってみよう。

あの日は水曜日で、次の日には朝イチに講義があるものだから、さっさと風呂入ってさっさとベッドに入った。

どこも特別なことはない、何時もと変わらない夜。

そしてアタシは、夢の世界で目を覚ます。

現実の世界と夢の世界の時間的相関関係はないけれど、唯一つ決まっていることがある。

それは、朝寝しようと思えば、夢の世界はいつでも夜だということだ。

その夜のアタシの装いは、青いカエルのケロタン二号。

普段カエルたちは、リズの寢室のカウチに並べられている。

ロココ風って感じの、珍妙なカエルが座るには優美過ぎるカウチだけれど、なんせ大切な形見の品だ。そこら辺に転がしておくわけにもいかないのだろう。

ああ、全く。カエルのぬいぐるみの扱いに苦慮する侍女さんたちのことを思うと、なんだか目頭が熱くなってくる。ような気がする。けれどきつと、カエルになる苦勞に比べれば、些細なことに違いない。

「ねえクリス？」

眠たい目をこすりながら、リズがアタシに訊いてくる。

その夜の訪問は少し遅かったけど、リズは尋ねたいことがあって待っていたらしい。

アタシはリズのベッドにヒラリと華麗に飛び乗って（なぜって身長が1メートルしかないからだよ）、ベッドヘッドに足を組んで腰かけた。

「なんだい、子リスちゃん」

我ながら「頭おかしいんじゃないの？」としか言いようのない言動だが、それがクリスってヤツだから仕方がない。

キザでナンパな青いカエルは、恋多き男らしい。

もちろん、王妃の設定だ。

「あのね。エリーザが今度結婚するんだって」

エリーザってのはリズ付きの侍女である。会ったことはないけれど、部屋に忍び込んで寝顔をのぞきこんだことがある。

いや、だって、ほら。

大切なリズのお世話を任せるわけだから？

人となりを確かめておきたいというか？

寝顔で何が分かるのかとか、こういう非常識な状態で常識的なことは、ワタクシ、聞きたくなんかありませんことヨ。で。

エリーザって子は、この世界の女子には珍しい童顔（要するにアタシから見てちゃんと十代に見えるってこと）で巨乳のマニア受けしそうな美少女だ。確かまだ十八歳。

この世界では十代後半と、結婚適齢期が異様に早い。二十歳すぎれば年増である。

ま、たとえ極上のシルクできていようと、綿の詰まった布製品には関係ない話である。

第一、十八で結婚なんか、マジでありえねえ。

とは思っただけだよ。

年増で悪かったな！ ちつくしょう！

と思っちゃうのは、複雑な乙女心ってヤツである。

「へえ、エリーザが。で、どこのどいつだい？ 可愛いエリーザを浚っていくヤツは」

アタシは、複雑なオトメゴコロを押し隠して、うすら寒いキザなセリフを吐きだした。

ここだけの話、二号程難しいキャラはいない。

自分で言うのも何なんだけど、アタシは恋愛ことに疎い。いや、

そもそも男でもないアタシに、一体どんな女性遍歴を語れと??

ま、幸いにして、純粹培養のリズには、せいぜいシンデレラとか眠り姫だとかをアレンジして聞かせればよかったんだけども。

後宮なんてところは華やかに見えて、実は昼ドラも裸足で逃げだそうとして転んで生爪はがしちゃうほどのドロッドロな世界である。嫌でも耳年増になるうつてもんだ。

そんな環境のせいとか、十を過ぎた頃からリズは、愛だの恋だのに興味を持つようになった。

あれはいつだったろう。

春まだ浅い、おぼろ月夜のことだった。

突然アタシにリズが言った。

「ねえ、ディー。『やり逃げ』って何？」

そのとき白いカエル、ケロタン三号だったアタシは。

「やだ、リズ。そんなこと、女の口からは言えないわ」と言っただけだ。

それからアタシはがんばって、大して興味のない少女漫画を読んだり、これまた大して好きでもない自称フェミニストのナンパ男と付き合ったりしたものだ。

そして見事エセ恋愛マイスターとなったアタシは、リズにささやきかける。

「エリーザを取られちゃったみたいで寂しいのかい？ 子リスちゃん」

アタシの言葉に、リズはちょっとびっくりしたみたいに目を見開いた。

結婚すれば、退職する場合が多い。やめなきゃいけないわけじゃないけれど、後宮に仕える女官や侍女は住み込みだから、要するに旦那や子供と別居しなけりゃいけないからだ。

「寂しい？ うん、そうね、それもあるけど…」

「どうやら、リズが考えていたのは別なことらしい。

「エリーザはね、れんあいけっこん、なの」



それは珍しい。

この世界では、上流階級ともなれば大抵は見合いか政略結婚である。

エリーザは貴族でこそないけれど、後宮で侍女をできるくらいには「いいとこのお嬢さん」ってヤツである。

しっかし、護衛ですら女ばかりのこの後宮で、どうやって男と知り合うんだろうか？

その疑問は、すぐにリズによって解消される。

「この前の宿下がりのおきにね、会って、一目ぼれだったんだって宿下がり、要するに休暇で実家に帰った時ってことだ。

なるほど、彼女たちにはその手があったのか！

けど多分、親が仕込んだ見合いだろうな、とアタシは推測する。

恋に恋するオトシゴロのリズには悪いが、現実ってのはそんなもんだ。

「ねえ、クリス」

「なんだい、子リスちゃん」

「恋するって、どういうこと？　一目ぼれって、どうやってたうできるのかな？」

リズの言葉にアタシはフツとキザつたらしく笑う。

前髪でもあればかき上げたいところだが、残念なことにカエルに前髪はない。てか体毛がない。

代わりにアタシは、キラリと白い歯を輝かせて言った。

歯はあるのだ。カエルにも。

「ふふふ、子リスちゃん。大人びてきたといっても、まだまだネンネだね。恋なんてものはね、しようと思ってするもんじゃないんだぜ。恋ってヤツはさ、気がついたときには、もう墮ちてるものなんだ」

ちなみにこれは、アタシのうすら寒い元彼が、合コンで恋愛について騙ってた（誤字じゃないよ）セリフである。アタシの脳みそじやあ、今後何万年経ったところでひねり出せそうにない迷言だ。

「じゃあ、どうやって恋人を見つけるの？」

「それはね、子リスちゃん。第三の目ってヤツが知らせてくれるのさ」

アタシは飛び出た目と目の間を指さして言った。

カエルには第三の目がある。頭皮に隠れているが、光を感じることもできるらしい。

もちろん、恋とは全く関係はない。

恋愛漫画に飽きて読み始めた手塚漫画の主人公、某古代種族の少年に憧れて言ってみただけである。

だけど、カエルに第三の眼があるのも、れっきとした事実である。

「何にもないじゃない」

「あるよ。物凄く大切だから、隠してあるんだ」

「でも、人間にはないもの」

「バカだね、リス」

アタシは青い指でリスの額を突つついた。

ちゃんと水かきまでであるこの手は、王妃が特に力を入れて作った部位だ。

王妃が。

瀕死の床で。

アタシは、この指を見るたびにしみじみ思う。

王妃とアタシの間に立ちはだから、深くて広い溝ってヤツを。

「人間にだって、ちゃんとあるさ。恋をすれば、そこにあることを思い出す。だからね、リス。決して、第三の眼を感じない男には、指一本髪の毛一筋たりとも、触らせるんじゃないだよ」

王族という身分と母親譲りの美貌を持つリスには、それを目当てに群がる男は掃いて捨てて、死体遺棄してもゾンビになって戻ってくるほどいるに違いない。

アタシがリスを見守れるのは、リスが成人する十六までのこと。

でも本当に危険なのは、成人してからだ。

だからアタシは、リスに語りかける。男に気を許さないよう。用

心深く立ち回るよう。

「クリスは、いつも第三の眼を感じるの？」

「そう。この前もね。物凄く、高い高い塔に住む女の子と知り合っただけだよ」

恋多き青いカエルは、優しいけれど誠実じゃない。

次から次へと、女の子と恋してる。

リズはクリスが好きだけど、クリスの恋愛話も好きだけど、信頼はできないと感じている。

元ネタがラプンツェルの恋愛話は、男が自殺せずに、女の子も妊娠しない。けれど別の日、三号か四号が、女の子との間に子供までできたけど結局はクリスの浮気で破局したって話をリズにするだろう。

クリスは、優しい男が誠実とは限らないと、リズに教えるための存在だ。

多分、これは王妃の経験から、そうなんだろうと思う。

話が終わるころには、リズはすっかり夢の中だ。

さて。

問題は、ここからだ。

夜はまだまだ長い。

この夜のメインイベントは。

ほぼ一年ぶりに、新しい隠し通路を見つけたってことである。

第三話 カエルだって、白い歯が命です（後書き）

\*\*\*\*\*

ヒキガエルやガマガエルには歯はないらしいです。

#### 第四話 カエルは全方向視界です

リズの住むレゼル宮には、少なくとも隠し扉が三つある。

一つ目は、主寝室のどデカイタペストリーが掛かっている壁。

タペストリーを捲ったところで一見何もなければ、斜向かいの壁の小さな風景画を右に一回半、左に半回、更に右に二と四分の一、最後に左に四分の一まわすと、壁が動いて隠し通路が現れる。

その通路は地下水路に繋がっていて、水路からは後宮の他の建物や、王と王太子の住む中宮にも通じている。水路が何処に通じているのかは確かめたことはないけれど、多分いざって時の脱出用の抜け道なんだろうと思う。

二つ目は、同じく主寝室にある飾り棚。意匠の彫刻の一つをポチリと押すと、棚が動いて隠し通路への入り口がポツカリと顔を出す。ここからは、レゼル宮内の隠し部屋や隠し通路に通じていて、廊下や部屋を覗くことができるようになっていて。きつと、客だとか使用人が主人がいないところで何をくっちゃべってんのかコツソリ覗いてやるうって腹なんだろう。物凄く悪趣味だとは思っけど、まあ、金持ちだとか権力者つてのは、大抵悪趣味なもんだ。かくいうアタシも、情報収集も兼ねて何かと活用させてもらってるので、言えた義理じゃあないんだけど。

実はこの二つ目と一つ目の隠し通路、隠し扉で繋がっている。なんで一々隠してんだらうって思うけど、イロイロと都合があるんだらう。

三つ目は、ウォークインクローゼットの更に奥、ウォークインシューズクローゼット（要するに靴部屋だ）にある一番奥の棚。

壁についてるレバーを右に回すと、棚がスライドして更に奥の棚が現れるんだけど、ニュートラルの状態から左に回すと隠し階段が現れる。左に回すにはコツがあつて、レバーの下のちよつとした素材上の出っ張りとしか思えない部分を押しながらじゃないと、左に

は回らない。

階段は降りていて、地下水路よりずっと深い。その先には沢山の横道や部屋があつて、殆ど迷宮といつてもいい程複雑な構造になっている。

部屋の中には、やたらと豪勢な部屋があつたり、やたらと少女趣味な部屋があつたりと、なかなかバラエティーに富んでいる。ただしどの部屋の調度品も、素人目にも高そうで、ついつい売つたら幾らくらいになるんだろう、なぐんて考えちゃうのはしがない庶民の業つてヤツだろう。あと、図書館さながらに本が並んでいる部屋や、用途不明の道具が積まれている部屋、それから標本が所狭しと陳列されてる部屋なんてのもある。標本も虫とかだつたらいいんだけど、動物とかになるとハッキリ言つていただけない。でも何が一番いだけないって。

あの台所の黒い悪魔。

そう、アレ。

標本つてのは、ぶつちやけ死体だ。つまりアレの死体がっ。大小様々なサイズの、薄茶色から真っ黒と色とりどりに、ずら〜〜〜と壁一面にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!

はあ。思い出したら、頭皮かきむしつて叫びたくなつちまつたぜ。アタシは、断固たる決心で、その部屋の扉にバイオハザードのマークを描いたよ!

アレは、万が一アルマゲドンがやってきても、決して公にしちゃいけないものだ。

一体全体、どんなマッドな精神構造の人間がそんな部屋を作つたんだ? てな疑問を持つのはヒトとして当然のことだろう。

それでアタシは思ったんだけど、この地下通路には、公にはできないヒトやモノを隠していたんじゃないだろうか。

例えばご乱心な王族とか、禁書だとか、禁忌の実験だとか。

それから、黒い悪魔の標本だとかっ。

それが、何でレゼル宮にしか通じていないのかは分からないけれ

ど。

で、リズが寝入った後、アタシは三つ目の隠し扉を使って、地下迷路に向かったわけ。

ていうのも、地下の部屋に読みかけの本があったから。

アタシは、真っ暗な中を明かりもなしに降りていった。

実は、ケロタン達の目は優れもので、暗視スコープなんかよりもずっと闇夜に目が利く。

地下迷路を歩くのにランプも松明もいらなし、真っ暗な部屋で本を読むこともできる。

でもそれだけじゃない。

本物のカエルと同じく、上下左右殆ど全ての方向をカバーしているのだ。

それに一体何の利点があるのかっていうと。

例えば。

アタシが背中を向けているとき、リズが悪戯か何かをしようとしていたりしたりする。

「リズ、ダメよ。そんなことしちゃあ」

「ええ！？ どうして分かったの？」

「ふふふ。アタシにはリズのことならな〜〜んだって分かるのよ」

「す〜〜い！」

てな会話を楽しめるってことよっ。へへん。

まあ、それはさておき。

お目当ての本は、アタシが勝手に「緑の間」って呼んでる部屋にある。

深い緑と茶色を基調とした落ち着いた雰囲気のある部屋で、寝室と書斎に分かれています。

書斎には、どうやって運び込んだんだってくらいデカイ机があって、全面の壁には天井から床まで本がずら〜と並んでいる。上の方は一々梯子を使わなくちゃいけないのが面倒だけど、中には面白い本があったりするのだ。

その本は入り口から右手の棚の上の方にあつて、前の時に上巻を読み終えていて、その日から下巻を読み始めるようとしたところだつた。

アタシは梯子を上つて、下巻を手に取つて。

ふと違和感を感じた。

下巻の隣の本が、なんかおかしい。

むうん？

アタシは目を眇めて、まじまじと本を眺めた。

そのときアタシは、その本が他の本よりほんの少しだけ奥行きが長いことに気がついた。

多分五ミリくらい。

今まで、何度も隠し扉を見つけてきたアタシのカンが囁きかける。

これじゃね？ と。

アタシはとりあえず目的の本を置いておいて、そつちの本を手にとつた。

題名は『世界のため池百選』。

なんだそりゃ。

湖とか沼とかさ、せめて水辺なんてのならともかく、ため池ってなんだよ、ため池って。

そんな本、カエルかアメンボくらいしか読みたがらないんじゃないかと思う。

仮にもカエルになつてるアタシへの挑戦か？

と思つたけど、勿論そんなことはない。作者だつて、まさか布製とはいえカエルが読むなんてことは想定していなかっただろう。

きっと広い世の中には、ため池マニアってのがいるのに違いない。そしてそこには、アタシの考えが及びもしない程ディープな世界があるのだつ。

なぐんて思いながら、パラパラとページを捲る。

ダミー本かと思つたのに、意外にも中身はちゃんとしていた。

それらしいイラストが描いてあつて、マジか？ とツツコミを入



れたくなるくらい、熱くそのため池の見所について語っていた。

……。

まあ、人の趣味はそれぞれだね。

アタシは無理矢理納得して、本を元に戻した。

ただ戻すだけじゃなくて、思いっきり奥に押し込んだ。

奥行き五ミリ分。

すると、ガコンツとどこかで鈍い音がして、次いでズズズーと何か重い物が動く音。

けれど、書斎には何一つ異変はない。

ふむ。

アタシは梯子を下りて、寝室の方へと移動した。

案の定、クローゼットがスライドしていて、人一人通れるくらいの穴がポツカリと開いていた。

アタシは、久しぶりの隠し扉の発見に、興奮した。

ドキドキしながら覗き込むと、ずっと奥まで通路が延びている。

アタシは迷わず、更なる暗闇の中へと踏み込んだ。

何分か歩くと、上り階段が現れた。

上ってみて初めて、階段が意外な程長がいことに気がついた。

そのとき、頭の隅にちよつとだけ、マズイかな？ という考えが過ぎった。

けれど好奇心に負けて、アタシはそれを無視した。

やがて二メートル四方程の小部屋に出た。

そして、人一人が屈んでやっと通れるくらいの、つまりは今のアタシにはジャストサイズの扉がそこにはあった。

多分アタシは、ここで一度引き上げるべきだったんだろうって後になって思うんだけど、それこそ後の祭りってヤツである。

## 第四話 カエルは全方向視界です（後書き）

\*\*\*\*\*

2010年、農林水産省主催の「ため池百選」が選定されています。  
びっくり。

## 第五話 カエルの脚力をナメてはいけません

鉄の扉を抜けると、そこは物置だった。

その瞬間、アタシは思った。

アタシのトキメキを返してくれ。

だってさ。一年ぶりの隠し扉見つけたんだよ？ 長々と階段上つてさ。生身だったら息切れするところをだよ？ んで、ドキドキしながら重い扉を開けたらさ。

眼前に広がる、いかにも適当に積み上げましたって感じのガラクタの山。

ホコリ被ったヨロイだとか、ちよっと口の欠けた壺とか、なんか車輪の外れた馬車まであるんですけど。

むう〜ん。

アタシはいささかどんよりとした気分で、隠し扉を閉じた。見た感じ部屋は使われていないみたいだけど、念のためだ。

隠し扉は、物置部屋では壁鏡になっていた。黒ずんでいるから銀製と思うんだけど、縁の装飾を押すと開くようになってる。リズの寝室の飾り棚と同じ仕掛けだ。

アタシは、改めて周囲を見回した。

その部屋は、一言で言うとなかなかデカかった。

天井も高いし、面積も広い。

多分、ウチの四LDKのマンションが五、六個は入るんじゃないだろうか。

けど、物置は物置。いやむしろ産廃処分場？

明かり取りの天窓しかなくて。そこから差し込む月明かりに、キラキラとホコリが舞い踊っちゃったりなんかして。なんか出っ張ってる棒きれみたいなのに足引っかけて転んじゃったりしちゃったり。

ポスツ。

転ぶと、ホコリが孢子みたいに飛び散った。

「うわゝ、。最悪」

青いカエルの黄色い腹が、真っ白になった。はたいたら、手の方も汚れただけだった。

転んでも痛くはないけど、汚れるのは嫌だ。

ケロタン達が汚れたら、侍女さん達がちゃんと洗ってくれる。だけど、シルクでできてるからか陰干しなんだよね。だから乾きにくくて、夜も物干しにぶら下げられてる。その時にそのカエルに「降りた」ときのあのトホホ水感。アレはナイ。アレはナイわゝゝ。アタシは悲しい記憶にゆるゆると首を振りながら、出口に向かった。

ギシリ。

そつと開けても軋む扉にヒヤヒヤしながら、外の様子を覗き見た。深夜の廊下に、人の気配はない。

首が痛くなる程高い天井と、構造上は全く必要なさそうな装飾の施されたデカイ柱。

これ見よがしに貴重なガラスをふんだん使った背の高い窓から、月明かりが遠慮会釈無く注いでる。

建築様式自体は後宮のそれと似ているけれど、後宮独特の華やかさがなく、どちらかといえば厳めしい。

王城つてのは大雑把に言うと、前宮、中宮、後宮の三つのエリアに分かれている。

前宮つてのは別名「王府」って言って、中央政府、日本で言えば霞ヶ関だ。大臣やら官僚やらがそこで働いてるってわけ。

中宮には国王の住むサンデル宮と、王太子のためのエルハラ宮がある。

んでもって、後宮には国王の正妃のための四宮と側妃が住む沢山の舎殿がある。

サンデル宮とエルハラ宮には、例の地下水路で通じているから、行ったことはある。

中宮は後宮とは逆に男の園だ。侍女がいなくて小姓がいる。

妙に小綺麗な男達がピーチクパーチクやってるのって、ハッキリ気持ち悪い。だから滅多に行かないんだけど。

中宮は王権の中枢だからか、何ていうか、目が潰れそうな程ゴージャスだった。

けれどここには、そんなゴージャスさもない。

それでアタシは、そこが王府なんじゃないかと思当をつけた。

なんと、九年目にして初めて訪れたエリアである。

これで好奇心が駆られなかったら、勇者の名が廃る。

いや、勇者じゃないけど。カエルだけ。

リザに話す新しいネタができる。

その時アタシの頭にあっただのは、その程度のことだった。

アタシがそこで最初に見つけたのは、偉そうなオッサンが偉そうに馬に跨った肖像がだった。多分何代目かの王様なんだろう。王様しか身につけられない深紅のマントを着けてるから。

次に見つけたのが、子供が隠れられそうな程デカイ陶器の壺。

飛びついて中を覗いてみたけど、何もいなかった。残念。

ヨロイが飾ってあるかと思っただけど、意外と見あたりなかった。

突き当たりに行き当たると、また偉そうなオッサンの絵があつて、左右に長い長い廊下が延びていた。

左に行くべきか右に行くべきか。もしくは戻るべきか。

アタシは、窓の外を見た。

月は変わらず空にあるけれど、今の季節は朝が。

「早いんだよね」

と呟いたとき。

「何が早いつて？」

背後から低い声がして、ヒヤリとした感触が肩に当たる。

全方位視界のアタシには、振り返る必要はなかった。

二人の男が左右斜め後ろに、アタシの退路を断つように立ちはだかっている。

右の男が金髪で、左の男は茶髪だった。多分、見回りの騎士なんだろう。

なんてこったい。

このアタシが、後ろを取られることになるなんて。

この男達、かなりできるっ！

なぐんてね。別にアタシ、気配に敏感じゃないし。後ろが見えるっただけだから。

ただ、初めての場所で警戒を怠ったのは拙かった。

「貴様、何者、いや、何だ」

何だと聞きたくなるようなモノを脅すアンタらは、ある意味勇者だと思う。

アタシだったら、見て見ぬふりして何もなかったことにする。

かといって、その状況で連中を褒めようとは思わない。

「ふんっ。見て分かんないなら、聞いても分かんないぜ！」

アタシはそう捨て台詞を吐いて、猛然とダツシユした。

剣先が肩に当たって、ピリツと破れる。

こういう時に足がすくむのは、切られると痛いし、死ぬのが嫌だからだ。

けど、今のアタシは痛くないし、死にもしない。破れたら、侍女さんたちがちゃんと繕ってくれる。

「「待て！」」

「待てって言われて待つヤツがいたら、笑っちゃうね！ ひゃくははははっ」

アタシは意味もなく笑いながら、ひたすら突っ走った。

現実のアタシは五十メートルせいぜい九秒前後と微妙だけど、今のアタシはひと味違う。

「カエルの脚力なめんなよっ」

アタシは右に曲がって左に曲がって、また右に曲がった。

男達との距離がぐんぐんと開いていく。

二人の姿が見えなくなった時点で、アタシは適当な扉を開けて直

ぐさま閉めた。

扉に張り付いて、外の様子を伺う。

男達の足音は聞こえない。

「ふう。ここで暫くちよつと様子を見るか」

アタシが、一息ついてそう呟くと。

「『暫く』と『ちよつと』というのは、矛盾しているようですが？」

「アレ、ホントだね」

思いがけない声に、アタシはガバリと振り返った。

そこにいたのは、またもや二人の男達。

黒髪黒目に褐色の肌の男と、銀髪紫眼の男。

「おお驚かさないでよ！」

アタシは思わず叫んだ。

「私たちが先にいたのですけれどね」

黒髪の男が、優雅に笑って言い、

「そうそう。そっちが後から入ってきたんでしょ」

銀髪の男が、好奇心丸出しの表情で言った。

それは確かにそうだけど、人間、凶星を指されるとムツとするもんだ。

「だったら、使用中って書いといてよ」

「ええ？ どうして？」

「そんなの決まってんじゃないっ」

「そんな決まり、ありませんよ」

「決まりとかじゃなくって。ええと、マズイときに入っちゃったら、

気まずいだろっ」

「マズイとき？」

「ああ、イチヤイチャしてるとき？」

「そう！」

「そんなものですか？」

「だって！ それが男同士で、しかも修羅場だったら、すっつっくくイヤだろ？」

アタシは、中宮で図らずも目にしてしまった小姓どもの愛憎劇を  
思い出して、物凄くイヤな気持ちになった。

「うわゝ、それはヤダ」

「それは、女性同士ならいいってことですか？」

「ええっと、男同士はナマイけど、女の子同士ならエロいだけじゃ  
ん？」

アタシの頭はその時完全に男だった。女としてどうだろう？ と  
頭の片隅で思ったけど、自分の女子力について考えてる場合じゃな  
いしっ。

「おお、うまいこと言うね」

「そういうものなんですか？」

「そうそうってっ」

おおっと、暢気に会話してる場合でもなかった。

「悪いがオレは急いでるんでね。邪魔したな、アミーゴ」

アタシは、爽やかな笑顔で無理矢理会話をブツちぎって出て行  
うとしたけれど。

「いえいえ。邪魔だなんて」

黒髪の男が優雅に微笑みつつ、ダンツと扉を押さえつけた。

「そうそう。ゆっくりしていきなよ」

銀髪の男の笑みから、剣呑さが漂い出す。

「死んでも嫌だねっ」

本能的な危機を感じて、アタシは思いっきり男の足を踏みつけた。  
カエルの脚力は、すなわち地面を蹴り付ける威力なり！

「!!!」

流石に痛かったんだろう、男はあくまでも無表情だったけど、扉  
を押さえる力が弱まった。アタシはその隙を見逃さず、慌てて隙間  
から飛び出した。

すると、先程の二人が。

「あ！ いたぞ！」

「待て！」





そこで、振り出し口座に振り込まれる。

挿話 男に女子の「可愛い」は理解できそうにない

「他の誰かが言ったのなら、バカを言うなと笑い飛ばすところなんだがな」

カウゼルⅡセラヴィード・ロルド・イスマイル・アウラ・シス・ナデイシス・ハジエク・イス・イスマイルは、己の腹心達の顔を見廻すと、些か疲れた声でそう言った。

彼こそは未だ正式に即位こそしてないが、イスマイル王国現国王その人である。

御歳二四歳。父親譲りの金髪と母親譲りの青い目を持つ彼は、本来ならば颯爽とした美丈夫だが、今は疲労の色が濃い。

「ひよっとして私は、お前達に明け方まで仕事させたことの方を謝るべきなのか？」

疲れた頭が見せた幻影ではないのかと言外にそう言っているのだが、寧ろそうであって欲しいという願望も見え隠れしていた。

「恐れながら陛下。我々としても大変遺憾ではありますが」

そう言いかけた近衛騎士を、カウゼルは分かっていると言うように手で制す。忠実なる第一近衛連隊長オーランドⅡジャスティア・ハジエク・ド・アルラマイン・アウラ・チェザリスは、目を伏せてそれに従う。

キツチリと結わえ上げられた真っ直ぐな金の髪と真っ直ぐな眼差しをした新緑の瞳を持つ彼は、誰もが思い浮かべる騎士のイメージそのままだが、真面目すぎて冗談が通じないのが玉に瑕だ。

カウゼルは忠実な騎士に内心でだけ苦笑すると、どこか虚ろな眼差しでソレを見た。

「で、ソレは何だ？」

カウゼルの視線の先には、大きめの金色の鳥かごに入った青い物体がある。

「恐らく、お人形じゃないですかね」

肩を竦めながらそう答えたのは、ディンゼアⅡセアフェル・ハジエク・ド・フィアマス・アウラ・ロトウルマである。明るい茶色の髪に真つ青な瞳の持ち主である彼は、第一近衛隊副隊長という立派な肩書きを持ちながら、どこか退廃的な匂いのする男だった。

「人形だと？」

カウゼルが秀麗な眉を不機嫌に顰めるが、それに構わず嬉々として答える声があった。

「頭があつて、胴体があつて手足があつて、どこからどう見ても人形じゃないですかあ」

茶化すようにそう答えたのは、銀髪紫眼の青年だ。

彼の名は、シャルルートⅡネルゼス・アウラ・ネネーシディ・ハジエク・ネラスラス。なんと国王陛下の侍医である。

この大陸では成人した男子は髪を伸ばすのが一般的だが、彼の見事な銀髪は肩よりも短く、癖つ毛であることも手伝つて鳥の巣のような有様だ。けれどメガネの奥の悪戯っぽい眼差しに、自由奔放なその髪は不思議とよく似合っていた。

「人形というものは、愛らしいものだと記憶しているが？」

大きすぎる頭、飛び出した眼球、耳まで裂けた口元、飢えた子供のように細長い手足。カウゼルのソレを見る眼差しは、何処までも胡乱である。

「まあ、確かに愛らしさは足りないかもしれませんがお」

シャルルートはそう言うが、誰がどう見ても足りないどころの話ではなかった。

カウゼルには、皇太子時代に迎えた第一正妃との間に王女が一人いる。王女は先月一歳を過ぎたところで、女の子らしく人形遊びが好きだが、カウゼルは親としてこんなものを与えようとは思わない。「子供にこんなものを与えては、泣き出すのがオチだろう」

「あ、泣き顔を見るためにわざとコレを上げるって手もありますよね」

「口を慎め、変態医者」

呆れる王と茶化す医者、そして威嚇する近衛騎士。

不毛な三つどもえの会話に割って入ったのは、濃紺の髪色をした男だった

「陛下、今はコレが愛らしいかどうかを議論する時ではありません。シャルルルト、貴様も特殊な趣向を引つ込める」

作り物めいて見える程完璧に左右対称の美貌が、その髪の色と相まって彼を神秘的に見せている。しかし、彼をよく知る人間なら、彼が神秘とは一番遠い場所にいることを知っている。

彼、クラリス＝レヴィド・エルド・ノーザン・ハジエク・ソルダークは、現実主義の宰相として、実利を追求することを専ら良しとする人間であった。

「でもねえ、僕ほど問題点を把握している人間はいないと思うよ？」  
尚も言い募るシャルルルトの紫の瞳に、好奇心がキラキラと煌めいている。こういう時の彼は危険だ。

「ほう？」

クラリスの冷やかな眼差しにもめげず、シャルルルトが言う。

「考えてみてよ。これは見ての通り生物じゃない。なのに、生きているかのように動く。走って、喋って、笑いもする」

クラリスは一瞬だけ片眉を〇・五リグだけ上げた。常人で言うところの「苦虫を噛み潰したような表情」というヤツだ。恐らくソレが爆笑したときのことも思い出しでもしたのだろう。

周囲の人間の体感温度が確実に五度は下がったはずだが、シャルルルトは全く気に留めなかった。

「だから、さっさと解剖しちゃおうよ！」

「アホですか、あなたは」

呆れたような声とともに、パスコーンとシャルルルトの頭から軽快な音が鳴った。

「痛いっ」

シャルルルトが後頭部を押さえながら抗議するが、叩いた本人はニッコリと笑って言い切った。

「大丈夫。痛くありません」

その手にあるのは、部屋履きである。

黒髪黒目に褐色の肌をしたその青年は、シャルルートよりも更に髪が短く、額には異教徒であることを示す赤い入れ墨があった。

大陸で最も信仰されているのはアヌハーン神教であり、現存する全ての国がそれを国教と定めている。多神教であるためか異教徒にも寛容ではあるが、やはり様々な面で差別されやすい。しかしナジヤ・エリアーデ・アウラ・カデイスは、己の才によって王佐という確たる地位に就いていた。

「僕の事なのに、何で君が言い切るのさっ」

シャルルートが文句を言うが、ナジヤはきっぱりはつきり無視をした。

「問題は、第三王女殿下の御名が出たということですね」

「そうだ」

カウゼルが、苦虫を噛み潰したような顔で答える。

第三王女はカウゼルには異母妹にあたるが、二人は殆ど面識がない。先王は生前、公式の場にも王族だけの私的な集まりにも王女を出さず、また自分以外の誰かが王女を訪ねることも許さなかった。それを先王の深すぎる愛情故と多くの者は考えているが、問題はそれ程単純なものではない。

「いっそのこと、王女殿下に直接聞いてみたらどうですか？」

デインゼアの茶化するような言葉を、オーランドがスッパリと断ち切る。

「こんな怪しいものを持っていけば、神殿が何を言い出すか解ったものじゃない」

「確かに。レゼル宮は、王宮にあって王宮ではない。治外法権みたいなもんだからね」

デインゼアは軽口めいてそう言うが、それは現在王国が抱える非常にデリケートな政治的問題だった。

後宮の警備は、過去の不祥事のため神殿娘子軍が受け持っている。

中でもレゼル宮は女官や侍女、厨房の下働きに至るまで、神殿関係者で占められている特殊な宮だ。

大神官が亡き第四正妃の後見であり、今は第三王女の後見を務めているからだ。

即位式まであと半年。

この微妙な時期に神殿の機嫌を損ねてもすれば、即位式に支障を来すかもしれない。

誰もがそのことを危惧しているのだ。

コンコン。

ノックの音にナジャが言う。

「キャセリー又達でしょう。お茶を持ってくるようにお問い合わせしたので」

カウゼルが頷くと、ディンゼアが扉を開けた。

「やあ、二人とも、今日も可愛いね」

ディンゼアの口説き文句など、挨拶と同じだと分かっているのだらう。

「ありがとうございます」

「いつも、どうも」

二人の侍女はさらりと笑顔であしらった。

「お茶をお持ちしました」

「軽い食事も一緒にどうですか？」

侍女としては砕けすぎた態度だが、キャセリー又はカウゼルの、ニコラはクラリスの乳姉妹で、他の者にとっても気心の知れた女性である。カウゼルにしても、公式の場でもない限り格式張った態度は必要ないと言い含めてあった。

「あら、陛下、ソレは？」

お茶の給仕をしながら、目敏いキャセリー又が問うてくる。

「二人は、コレを何だと思っ？」

カウゼルにしてみれば、気軽に訊いてみただけだったが。

「カエルですよね？」

「……………はあ!?」「……………」

思いがけなく返ってきたハッキリとした答えに、カウゼルだけでなく彼の腹心達も驚きに目を見開く。

彼らの脳裏に、子供の頃捕まえた、あの水辺を跳ねる動物を思い浮かぶが、どうやって目目の前の物体と結びつかない。

「あ、ホント。カエルですね〜」

キャセリーヌの言葉に、ニコラも同意する。

「どうして鳥かごに入れてあるんですかあ? 可哀想にい」

どうやら二人には、ソレが間違いなくカエルに見えるらしい。

「ねえ! どころ辺が、カエル??」

「飛び出た目玉、掌の水かき、大きな口元。どれもカエルの特徴じゃないですか」

女性というものは男とは視点が違つと常々思つてはいたが、まさかここまで違つとは。彼らには良く見知つた二人が、まるで見も知らない何かに取つて代わつてしまったような感覚を覚える。しかし。

衝撃はそれだけでは済まなかつた。

「ふふ。可愛い〜」

「ほ〜んと。ギョツてしたくなつちゃうわね」

「……………可愛い!?!」「……………」

男達は自分達の耳を疑つた。

「不気味だろっ!」

と指摘すれば、

「ええ。キモカワイイですね」

ニコリとキャセリーヌが言い、

「不細工じゃないか!」

と反論すれば、

「はい、ブサカワイイですう」

ウツトリとニコラが言う。

「キモカワイイって何!?!」



「気持ち悪くて可愛いつてことです」

「ブサカワイイとは!？」

「不細工で可愛いつてことです」

「……………」

男達は絶句したままお互いの顔を見合わせた。だがどの顔を見ても、答えらしきものは見つからない。やがて意を決したクラリスが、勇気を出して問いかけた。

「『気持ち悪い』もしくは『不細工』というのは『可愛い』とは対極に位置する言葉ではなかったか？」

「……ですからあ、そこがカワイイんですよ……」

キヤツキヤと喜ぶ侍女達の声。妙齢の女性が少女に戻ったようにじゃれ合う姿は、本来ならば微笑ましいはずなのだが。

わ、分かんない!!

男達は彼女たちの言っていることを全く理解できそうにもなかったが、理解したいとも思わなかった。

挿話 男に女子の「可愛い」は理解できそうにない（後書き）

主要人物の紹介も兼ねてみました。

## Interlude

最初に虚無がいた。

その他には何もなかった。

虚無が退屈のあまりあくびをすると、光と闇が生まれた。

虚無がそのまま眠ってしまうと、夢が産まれた。

光は風と土と水と火を産み、闇は夜を産んだのち、それぞれ眠りについた。

これまでの神々は双性の独り神にて、創世九柱と言う。

風は空と雲を、土は大地と木々を、水は海と川を、そして火は太陽と雷を産んだ。

また、風は初めの鳥を、土は初めの獣を、水は初めの魚を、火は初めの虫を創った。

その後、風と土と水と火は眠りに就いた。

初め鳥と獣と魚と虫は、夜の闇を恐れた。

夜は彼らのために、月と星々を産んだ。そして後に眠りに就いた。空と雲、大地と木々、海と川、太陽と雷は、初めの鳥と獣と魚と虫とその子孫たちが彼らから糧を得ることを許した後、創世の神々を慕って浅い眠りについた。

これまでの神々は単性の独り神にて、養世十柱と呼ばれる。

初めの鳥と獣と魚と虫は、互いに交わり沢山の鳥や獣や魚や虫、そしてその他の多くの生き物を産んだが、神々の不在を寂しがった。

彼らを憫れんだ月が言った。

神々の夢とお前達の夢に月影の橋を掛けましょう。

けれど月よ、私たちには月影の橋を見つけるすべがありません。

彼らは嘆いた。

彼らを哀しんだ星々が言った。

お前達の強い祈りがあれば、星影がお前達を導くでしょう。

そのため、全ての生き物は、月と星々の出る夜に夢の中で神々と

会うことができるようになった。

けれど、尾のない獣だけは、それでは満足しなかった。

尾のない獣は、空を飛び、地を駆け、水を泳ぐ、美しい獣だった。尾のない獣は、神々に願った。

神様の似姿を、どうぞ我々に授けてくださいと。

創世の神々は深い眠りにあつて、尾のない獣の祈りは届かなかった。

養世の神々は、自分の似姿を嫌って承知しなかった。しかし、夢だけはこう言った。

虚無が眠る間だけ、神の似姿を存在させることができるでしょう。けれどもそれと引き替えに、お前は天高く飛ぶことも大地を素早く駆けることも水に深く潜ることもできなくなるでしょう。優雅な翼も、雄々しいたてがみも、煌めく鱗も失うでしょう。

それでも、尾のない獣は願うことをやめなかった。

夢は、尾のない獣の願いを聞き入れた。

こうして創られたのが、最初の人間である。

## 第六話 カエルも子供をオンブします

二号が「行方不明」になってから現地時間で六日目の夜、アタシは再び夢の世界に降り立った。

昨日一昨日と、既に連夜で一号と三号になった。

そして今宵のアタシは、ケロタン五号。

正式名サウザード・ネルス・ケロタウロス。通称サウザ。黒いボディと紫の腹がなんとなくノールブルな感じがしなくもない、厭世主義の無口なカエルだ。

かつて王妃は言った。リズに家族を与えたいのだ。愛情で包んでくれる、温かい家族を。

けれど、無口はともかく厭世家なんて家族として必要か？ とうかそんな家族はいらないか？

なんてことを思いながら、世のプリンセス趣向の女子たちが恨みそうな程豪華な天蓋付きのベッドに近づいた。言っておくけど、フレームは罷り間違ってもパイプじゃないし、垂れ下がったカーテンは、指で突き破れるんじゃないかと思うくらい薄い極上の紗と目が痛くなるくらい精緻なレースとで二重になってる。

アタシは黒いカエルの手で、そのカーテンを押し開けた。

「サウザ」

リズが悲しそうに五号の名前を呼ぶけれど、五号は黙って頷くだけだ。

こういう時、赤い一号なら、

「リズ、クリスマスなら大丈夫。アイツも男だ。どんな危険な目に遭ったとしても、必ずここへ戻ってくるさ」

と頼もしく言い、白い三号ならば、

「あぐんなの、ほっときゃいいのよ。男なんてさ、糸の切れたタコみたいなもんよ。そんなことよりさ、ちょっと聞いてよリズ」

てな感じで、気を紛らわせることができるだろう。

けれど五号は違う。

「本を読もう」

てなことを言いつつ手に取るのは『アヌハーン聖典』なんて、どうやっても慰めになりそうにない本だ。

いやまあ、それだってアタシが選んでんだけどさ。

『アヌハーン聖典』ってのは、その名の通りアヌハーンっていう宗教の聖書である。

アヌハーンってのは、なんでも古い言葉で、「隠された」とか「秘密の」とかいう意味らしい。「秘密の聖典」なんて言うと、なんかいかかわしい感じがするけれど、そういうことじゃなく、神様の本当の名前が隠されてるからってなことからしい。

もったいぶってるだけじゃね？ ってアタシなんかは思うけど。

こっちの人間は物凄くそのことをありがたがってるらしい。

アタシは寝ているリズの隣に座って、『アヌハーン聖典』「創世記」を読み始めた。

初めに虚無ありき。

隠され賜いし貴き神名を呼ぶはあたわず。

虚無は姿を持たず、声を持たず、また心も持たず。

全き<sup>まった</sup>独り身たるが故に独り身の独り身たるを知らず、

他者を知らずが故に己を知らず。

無垢たるが故に善悪を知らず、善悪を知らざるが故に慈悲を知らず。

これを以て虚無を虚無たりと申し奉るものなり。

要するに、なぐんもないから虚無（仮名）ってことにしとくよって言ってるだけの話だ。

全くまどろっこしい文体である。

『アヌハーン聖典』は、この大陸では王侯貴族から庶民に至るまで読まれている大ベストセラーで、様々なバージョンが出版されている。

リズも小さい頃の頃から読んでいるけど、当然ながらそれは子供用のバージョンだ。

ところが、今アタシが読んでるのは聖職者用のバージョンである。最近リズの本棚に加わった。どうやら教育系の神官さんが置いていたらしい。王女であるリズには、王侯貴族教養用バージョンでもいいはずだけど、後見人が大神官じゃあそういうわけにもいかないんだろう。

チラリと隣を見ると、リズが眠たい目を擦りながらも一生懸命聞いている。

そりゃそうだろう。賢い（身びいきじゃないよ！）といったところで、リズはまだ十二歳。どう考えても、まだまだ早い。

けどさ。

コクリコクリと舟を漕ぎ始めたのを見計らって、

「眠るか？」

なぐんて訊くと、

「ううん。大丈夫」

なぐんてリズが可愛く返してくる。

せっかく読んでくれてるのに、寝るのは悪いと思ってるんだろう。そういう姿を見てるとさ。

もっと幼い頃は構わず寝入ってたんだけど、リズもそういう気遣いができるようになったんだなあ、てね。

そんなことを内心でほくそ笑み、じゃなくて感激ながら、アタシはすまし顔で読んじやってるわけである。

それでも、人間の創造に関与した「尾のない獣」ってのが出てきた辺りで、リズは本格的にウトウトしだした。

このままぐっすり寝てくれないかな、とアタシは思う。

こここのところ、リズは眠りが浅いのか夜中に何度も目を覚ます。そして隣にカエルがちゃんといるかどうかが確かめる。

所謂、別離不安ってヤツだろう。

そんなもんだから、二号が「行方不明」になってから、アタシは夜中に出歩いてない。

リズが寝ている間に、二号を他のカエルで取り返しに行くところとも考えなかったわけじゃない。けれど、逆にもう一体捕らわれるなんてことになったら目も当てられない。第一こんな状態のリズを置いてけない。ここは地道に、二号に「降りる」のを待つのが得策だ。

「リズ？」

すっかり瞼が閉じちゃったリズを呼んでみるけど、答えはない。

うん。「睡眠導入剤代わりの難読本」作戦は上手くいったらしい。いやいやいやいや、成り行きじゃないツスよ？ ちゃんと最初から考えていましたよ？

……ま、終わりよければ全て良しって、言うじゃない！

て、勝手に一件落着いたつもりだったんだけど。

「どうして神様達は、寝ちゃったのかな。みんな、寂しがってるのにな」

不意に、意外な程ハッキリとした口調でリズが言った。

なぬ？ と思って見てみると、さっきまで閉じられていたリズの綺麗な紫の目が、今はパツチリと開いている。

その世にも綺麗な瞳にピツタリと視線を合わせながら、厭世主義のカエルは言った。

「恐らく、神は世界のことに余り感心がないのだ」



「うわ、何ネガティブな答え言ってるんだよ！  
って思うけど、それが五号ってヤツである。」

「好きじゃないの？」

「嫌いというわけではないだろう」

「アタシは、話の流れがどこへ行くのかヒヤヒヤしながら言葉を紡ぐ。」

「父様は、リズのこと嫌いじゃなかったのかな？」

「リズの手が、心細そうにそっと五号の手を握る。」

「おおっと。そうきたか！」

「月に一回程度しか会いに来なかった父親と、たまにしか被造物たちに会ってやらない神様を重ねちゃってるわけだ。完全にネガティブ思考になってるらしい。」

「アタシはちよっと考えてから言った。」

「確かに、子を思わない親はいる」

「アタシの言葉に、リズの体がビクリとなる。」

「アタシはそんなリズの頭を、なだめるように優しく撫でた。」

「しかし、リズの父はそうではないだろう」

「どうして分かるの？」

「…… 我は幼き頃父の背に負われたことを覚えている」

「父親の背中って、カエルが何言ってるやがんだ？ って思うだろう。けれどカエルの中には、卵が孵化するまで見守るものや、孵化した後もカエルに変態するまで養育するものもいる。あの有名なヤドクガエルの中には、孵化したオタマジャクシを父親が新しい水場まで背負って運ぶものもいるのだ。」

「…… うん。リズも覚えてる。とうさまにおんぶされたこと。だっこじゃなくっておんぶがいいって、父様にわがまま言ったの」

「リズと父親との数少ない親子らしいエピソードだ。」

「勿論アタシは、それを聞いて知っている。」

「父の背中は温かった」

「…… うん。父様の背中、凄く、温かかった」

リズは小さく頷くと、安心したのか、或いは何か納得したのか小さな寝息を立て始めた。

顔を寄せて、起きる気配がないかどうか伺ってみる。

「リズ？」

睫がちよびつとピクピクしたけど、起きる様子はない。

うん、ちゃんと寝てる。

よっしゃ！

どうやらアタシは、五号で慰めるという難しいミッションを何とか成功させたらしい。

安堵と一緒に、今更ながらの後悔が押し寄せてくる。

リズの生活は別れが満ちている。両親との死別だけじゃない。仲良くなつた女官や侍女も、結婚や定年、或いは病気など、様々な事情で去っていく。

そして、いつもリズだけが残される。

それでもケロタン達だけは、変わらずリズの側にいたのに。いなければいけなかったのに。

今回のことは、完全にアタシの失態だ。

何やってんだ、アタシ。

二号を、あんな連中に託すなんて、楽天的過ぎた。

心の底から反省する。

うん、反省した。

だから勿論、あの連中にも反省させる。

アタシはやるよ！ やってみせるよ、恵美ちゃん！

アタシは決意も新たに、親友へと報復を誓う。

いやまあ、恵美に誓う意味は全然全くないんだけどさ。

アタシは本を置いて、リズに寄り添った。

掴まれたままの腕があり得ない方向に曲がるけど。なあに、今のアタシは布製品。痛くもかゆくもない。ちよつとくすぐったいだけだ。

そっぴあ、リズがまだもつと小さいときには、いつもこうして

隣に寄り添ってたなあ、なんてことを思い出す。リズは三歳、アタシはまだ十二歳で、アタシは何でこんなことやってんだろう、なんてことを思いながら眠れない夜を明かしてた。リズは当時から相当可愛らしかったけど、心の底から愛おしいと思うのには、少し時間が経った後だ。

初めの頃はリズが成人するまでなんて長過ぎると思ったけど、気が付けばもう三分の二が過ぎようとしているなんて。

これが所謂、花を踏んで同じく惜しむ少年の春ってヤツか。

なんか違うような気もするけど。

そんなことをダラダラと考えてると、不意に眠たくなってきた。

あれ、おかしいな。

アタシがこつちで眠ることってなかったんだけど。

そもそもコレは夢の中なんだから、夢の中で寝ちゃうって有りなんだろうか？

いやでも、自分が眠ってる夢を見るって話聞いたことあるし。

なんとなく、視界まで暗くなってきた。

おかしいと思うんだけど、強烈な眠気が襲ってきて、なんだか上手く頭が働かない。

……………仕方がない、寝るか。

アタシは瞬く間に眠りに落ちた。

この後アタシに降りかかった出来事が、アタシの運命を一変させることになる……。

スイマセン、「運命」は言い過ぎでした。

## 第七話 カエルの恋は合戦です

アタシはその夜、夢の中で夢を見た。

「ゲコ」

ゲコ？

アタシがパチリと目を開けると、隣にいるはずのリズがない。慌てて辺りを見回すと、豪勢なベッドルームは薄暗い空間に変わってた。

「あれ？」

アタシの声に、声が答える。

「ゲコ」

そこにいたのは、真っ青なカエル。

薄暗い部屋に真っ青なカエルがボウツと浮かんで見えた。

この青さは、コバルトヤドクガエルだろうか？

アタシは妙に冷めた頭で考えた。

でも、コバルトヤドクガエルの腹はこんな黄色じゃない。

「ゲコ」

カエルはアタシに背を向けて、ピョンと跳ねた。

振り返って、またピョン。

ひょっとして、付いてこいって言うてる？

「ゲコ」

また呼ばれた（ような気がした）ので、付いていく。

その時アタシは気が付いた。

アタシがアタシだったことに。

いや、アタシはもともとアタシだけ。アタシの姿が、現実のアタシのままだったこと。

水かきのない肌色の手と、肌色の足。

目は二つ、鼻は一つ、口も一つ。いや、これはカエルも一緒か。

髪は肩より少し下。腹は出てないけど、胸も出ていない。

……。  
ともかく、今のアタシは、鏡がないから確認こそできないけれど、多分「宮本澄香」本体だ。

アタシの夢がカエルで、カエルの夢がアタシ？

「う〜ん」

アタシは首をひねった。

考えながら歩いたら。

ガンツ！

「つた〜〜〜つ」

おでこ鼻が同時に痛い。

要するに、額と鼻の高さが同じってことである。

アタシはイロイロ出っ張りたいと、その時マジで思った。

アタシがぶつかったのは、ドアだった。

青いドア。

反対側を覗いても、何も無い。

これは、アレじゃなかるうか？

あの、某猫型ロボットの、例のあの道具。

「ど でもドツ」

アタシは感激のあまり最後まで言えなかった。

なんてこった。夢の道具が目の前にある！

「ゲエコオ」

催促するかのように、カエルが鳴いた。

本当に開けていいのかな？

この向こうに何が待ってるのかな？

ドキドキしすぎて、手が震えそう。

おそろおそろドアノブに手を伸ばす。

「ゲエコゲエコゲエコオオ」

チツ。

「五月蠅いな。ちょっとくらいこつ、ドラマチックな演出くらいさせろってのっ」

文句を言いながら、アタシはドアを引いた。  
開かなかつた。

「あれ？ 押し戸？」

引いてもダメなら押ししてみ。

「なつと」

アタシは押した。

そして落ちた。

「ぎゃああああああああつ」

やっぱり開けるんじゃないか！

アタシは反射的に真つ青な手を上へと伸ばした。

あれ？ 青い手？

さつきまで確かに「宮本澄香の腕」だったのに、目に映るのはひよる長い青い腕。

掌を開けてみると、当たり前のように水かきがある。

アタシ、ひよつとして二号に入った？

なんで？

まさかあの、どこで ドアっで！？

アタシはガバリと起きあがった。

「とうとう動いたか」

途端に掛けられる、聞いたことのあるようないような、重低音の男の声。

声がした方向へと振り返ると、濃紺の髪をした男。

例の夜に会った男だ。

いや濃紺の男だけじゃない。あの夜会った他の四人もそこにいた。

うおお、ここで会ったが百年目じゃあ！ 目にももの見せてくれるわっ！

アタシは拳を握って意気込んだけど。

なんてこつたい！

報復をしようとは決めてたけど、報復の方法は全く考えてなかったのだ。

しかしせめて何かしなくては。

ものを投げるとか投げつけるとか投げ飛ばすとか。

アタシは辺りを見回した。

勿論、投げるものを探すためだ。

けれどその時、部屋にいるのは男達だけじゃないと気が付いた。

高位の神官の服を着た四十くらいの女性が一人、後宮付き神殿娘子軍が二人に、そんでもって第三王女付き侍従武官、確か名前はセルリアンナさんだったか？

要するに、女性がいる。

そう認識した瞬間、アタシの「二号スイッチ」が入る。

サツと立ち上がって、（カエルなりの）優雅なお辞儀を披露する。

「こんばんは、美しい方。今宵の月は格別美しいけれど、あなた方の前にはその美しさも霞むことでしょう」

相変わらず寒過ぎる台詞だけど、九年近く練り上げられてきたキヤラは、勝手に喋るんだから仕方がない。

「おい、他に言うべき事があるだろう」

不機嫌な男の声が割ってはいるが、勿論二号は気にしない。

女性を前にした二号にとって、男は紙くずよりもクズなのだ。

カエルの恋のバトルは戦場と同じ。世に言う「かわず合戦」を制するためには、オスなんかには拘わっている場合ではないっ。

「ああ、叶うことなら、その美しい手に口づけをお許しいただきたい」

彼女たちの方へと伸ばした腕が、ガシャンツと何かにぶち当たる。  
む。

見回してみると、鳥かごに入れられてるんだと判明した。

「なんと、僕と愛しいあなた方を隔てるのはこの無粋な檻か」

因みにクリスは女子の前では一人称が「僕」になる。

「けれども僕の熱い思いは、こんな障害などに負けはしない」

アタシはガツシリと鳥かごの柵を掴んだ。

そしてググツと顔を押しつける。



今のアタシは布製品。綿が詰まってるけど、幼児がどこでも掴めるように柔らい。ついでに言えば、幼児が投げやすいように軽くもある。

だから幅十数センチくらいの隙間なら。

アタシは、自分の顔が後方へと引つ張られ、激しく湾曲していくのを感じる。

「なっ」

「ひっ」

「きゃっ」

「うっ」

「わぁお」

様々な声があちこちから漏れるけど、アタシは構わず顔を前方へと押し出し続けた。

スツポンツと音がしても不思議じゃないくらい、頭が勢いよくすっぽ抜ける。

猫と一緒に、頭が出れば体も出る。

アタシは体を横に向けて、スルリと鳥かごから抜け出した。

その一部始終をじいじいじいじいじいと見続けた（見せられたとも言つ）人々の、視線がなんだかやけに痛い。

なんていうか、さっきまでは、奇異なものを見るような眼差の中に微妙に畏怖つていうか畏れつていうか、そういうのが感じ取れたけど、今は完全に不気味なモノを見る眼差しに取って替わってしまった。ようないきがする。

けれど、そこを気にしないのが二号の長所だ。

ま、真実長所かどうかは、意見が分かれるとは思うけど。

「ふふ。これで、僕とあなた方を隔てるものはなくなりましたね、美しい人」

アタシは完全に女性陣の方へと体を向けて、男達を視界から除外する。

といつても、全方向視界のケロタンには、キツチリ連中の様子は

見えてるけれど。

濃紺の髪の方は、能面もビックリするくらいの無表情。きつと、母親のお腹に表情筋を忘れてきたのに違いない。

黒髪の方は、表情こそ穏やかなんだけど、相も変わらず背負う空気がやたらと黒い。

茶髪フェロモン方は、一見どうでも良さそうにしてるけど、二号に対する警戒心は多分一番強い。

銀髪マツドのインテリメガネは、厭になるくらいの好奇心が今にもポロポロと零れ出しそうだ。

そして金髪騎士は「め、面妖なっ」とか呟きながら、一生懸命冷静さを保とうとしている。

一方の女性陣は、「目をそらしたいんだけど、逆に目をそらせない」みたいな感じで、アタシをじっと見つめてる。

それでも騒ぎ出さない辺り、彼女たちも余程肝が据わってるんだろ。

「そんなに見つめられては、僕の理性が焼き切れてしまいますよ。それとも、僕を試しているのかな、ふふ、憎い人だ」

ガタガタッ。

コレには流石の娘子軍の二人も、心持ち顔色を青くして後退る。

一切動じないのは女性神官で、セルリアンさんは何故か生暖かい目でこちらを見てる。

目があったので、声を掛けた。

「こんばんは、シエル・セルリアン。いつもリズを守ってくれてありがとう。貴女には、いつかお礼を言いたいと思ってたんだよ」セルリアンさんはアタシの言葉にちょっとだけ目を見開いて、それから片手を胸に当てて目礼した。

「それが私の務めですので。けれどケロタウロス殿のお言葉は、ありがたく頂戴いたしましたよ」

おおっと、セルリアンさんってば、真面目に返してくれちゃったよ。

アタシは嬉しくなって話を続けた。

「ねえ、シエル・セルリアンナ。リズはどうしているだろう？ 泣いてやしないかい？」

勿論泣いてる。そんなことは知ってるけど、昼間どうしてるのかが知りたかった。

「青のケロタウロス殿がいらっしやらず、王女殿下は酷くお心を痛めておいですが、私どもに心配を掛けぬためか、昼間は気丈に振る舞っておいでです」

「なんてことだ。こんなところに足止めをくらったせいで。リズには可哀想なことをした」

「ケロタウロス殿がお戻りになれば、王女殿下もお元気になれるかと」

「そうだね、シエル・セルリアンナ。リズのところに戻ろうか」

「ですが…」

セルリアンナさんが、周囲を伺うように言う。

「ふふ。僕にはリズ以上に優先するものはないんだよ」

アタシがそう言うと、セルリアンナさんは何か納得したように大きく頷いた。

「そういう訳ですから、美しい人、貴女方と恋を語り合う喜びは、また次の機会に…」

キラリと白い歯を見せて笑うと、娘子軍の二人はピクリと頬を引きつらせた。

失礼な。

「では行こうか、シエル・セルリアンナ」

アタシとしては、そのままズラかりたかったんだけど。

「貴様、逃げられると思うのか？」

金髪騎士がドスの利いた声でそう言って、アタシの頭を掴もうとした。

勿論アタシには、男の動きは見えていた。

振り向きざま、男のすねに回し蹴り！

ガッ！！

「っ！！」

余程痛かったのか、金髪騎士は声なき悲鳴を上げて膝を突く。

こんな柔らかい体に、なんでそんな力が掛けられるのか非常に不思議だ。けれどケロタンの非常識さを今更どころ言っても始まらない。

アタシは苦悶する男を冷たく見据えて、まるでたったいまその存在に気が付いたかのように言った。

「五月蠅いハエだと思ったら、なんと君、誘拐犯君じゃあないか」

その瞬間、ビシイイイイツと空気が凍った。

アタシはこの時、この国の宰相が詮議されてる真つ最中だなんて思いもしていなかった。

なんの詮議かって？

『第三王女のカエル様盗難事件』について、だつてさ！

## 第八話 カエルの恋は合戦です その2

ちよつと聞いた？ 第三王女殿下が数日前からふさぎ込んでるんですって。

あらやだ、また誰かの嫌がらせ？

ヒステリー持ちの第二正妃？

陰気な第三正妃かもしれないわよ。

動物の死体投げ込んだこともあるって話じゃない？

さいあく〜。

第一正妃様みたいに、ド〜ンと構えてりゃいいのにね。見苦しいで、今回は何やらかしたの？

なんでもさ、王女殿下が大切にしている母君の形見のぬいぐるみが一つ見あたららないんですって。

形見のぬいぐるみ？

あ〜、干してあったの見たことあるわ。

アタシ、なくい。どんなの？

可愛いわよ。カエルの形していてね。

ぬいぐるみっていつても、絹でできてるの。あの色の鮮やかさは、相当の極上品よ。

亡き第四正妃様のお手製らしいの。

殿下はそれはそれは大切になさっているそうよ。

お寂しいのね。

お体が丈夫ではいらっしやらないから、心細いこともあるでしょうにね。

健気だわ〜。

でもさ、母君の形見が見あたらないうってどういっこと？

それがさ〜、レゼル宮のどこにもないらしいの。

やだ、誰かが盗んだってこと？

あそこは女官も侍女も、下女に至るまで、王女殿下に対する忠誠

心が強いわよ？

まあ、アタシたちみたいに適当に配属されたのと違うからね。  
ええ？ どういうこと？

あそこは全員神殿関係者よ。ほら、王女殿下の後見人がヴィゼリ  
ウス大神官だから。

ああ、だからあそこの侍女、娘子軍とも仲いいんだ。

アマリア様、格好いいっ。

イザベル様も素敵よ。

一度で良いから、間近で顔を拝見したいわ。

ところさ、でちよっと聞いたんだけれど。

何よ。

前宮の侍女の話なんだけどね。

前宮？

良いわね、前宮は。出会いがあつてさ。

あ、カレシほし。

で。前宮でなんか面白いネタがあるの？

新しい宰相のことよ。

ものすごい美形っていう？

きゃ、遠目でいいから、見てみた。

何々、宰相に女の影でもあるの？

うわっ。彼女もち？ 残念。

だったら、そりゃ面白いネタなんだけどさ。そうじゃないのよ。

宰相の部屋付きの侍女がさ。見ちゃったのよ？

濡れ場？

違う。

修羅場？

だから違うって。

じゃあ、何見たのよ。

なんとね。ぬいぐるみよ。

ぬいぐるみい？

え、何々？ それってそういう趣味なわけ？  
ってどんな趣味よ。

子供用？

宰相はまだ結婚すらしてないじゃない。

なんで、宰相の部屋にぬいぐるみなんかあるのよ。

それがね、ただのぬいぐるみじゃないの。

どういうこと？

カ・エ・ル。

ええ！？

だからね、極上の絹でできた青いカエルのぬいぐるみ。

なんで？？

……。

王女殿下の無くなったぬいぐるみって何色だったわけ？

……青よ。

そついえばさあ、宰相つてばノーザラン侯爵家よね。

あら、ノーザラン侯爵家つていえば、第四正妃のお輿入れに猛反  
対されたわよね。

そりゃそつよ、第一正妃の後見だもの。

あ~~~~ら~~~~。

てな会話が侍女さん達の間であつたかどうかは知らないけれど、  
まあ、そんなような話が、神殿娘子軍の耳に入ってきたわけだ。  
既に第三王女付き侍従武官からは、噂通り王女殿下のぬいぐるみ  
が紛失していること、そして侵入者の可能性について報告を受けて  
いた。

娘子軍の警備網が破られたのは不名誉この上ないが、だからとい

ってなかったことにできはしない。

まさか噂ごときで宰相に嫌疑を掛けることはできないが。

たかが噂、されど噂。

もしそれが事実なら、娘子軍の警備の不備云々って問題に収まらず、「イスマイル王国」が「神殿」の権威を侵害したってことになるからだ。

アヌハーン神教ってのは、表向き俗世の権力とは関係ないって顔をしてるけど、裏では「領土なき帝国」なんて言われてて、ぶっちゃけ全大陸的規模を誇る圧力団体だ。その影響力たるや、フリーイソンだって真っ青に違いない。なんせ国王が破門なんてされた日にゃあ、周辺各国が大手を振って侵略しちゃうくらい神殿の承認ってのは重要な意味を持つ。

つまり、神殿との軋轢は立派な政治問題ってわけである。

ありやまあ、ずいぶんとデカイ問題に発展しちゃったもんだと、アタシはその話を聞いて内心で戦いた。

あの後すったもんだのあげく、今晩中に必ずリザの元へ返すという条件の下、アタシは彼らの話を聞くことになった。

オブザーバーとして出席しているメリグリニア神官長にも、ちゃんと確約して貰った。

主に話してくれてるのは、娘子軍の二人、アマリアさんとイザベルさんだ。

アマリアさんは、褐色の肌に銀色の髪とピンク色の目をした、ボンキュッボン（死語）なナイスバディの美人さん。

イザベルさんは、クリーム肌の肌でウェーブのかかった茶色の髪と金色の斑点のある緑の瞳をした、華やかな印象の美人さん。

そして、時々注釈してくれるのがセルリアンナさん。

セルリアンナさんは、真っ直ぐな黒髪に深い海の色を瞳にして、特別美人という訳ではないけれど（アタシよりは遙かに綺麗だけどさ）、穏やかな雰囲気人が安心させる、そんな女性だ。リズがよく懐いているのも、分かるような気がする。



「我々の独自の捜査で、宰相殿の元に青いカエルが、つまり……」  
アマリアアさんが言う。

「僕だね」

「そう、貴殿がある、いる？」

モノとして扱うべきか、ヒトとして扱うべきか躊躇っているらしい。

「どっちでもいいよ。僕が入っていない時は、コレは間違いなくただのぬいぐるみだからね」

「では『いる』で。宰相殿の元に貴殿がいることが判明したわけですが」

「まさか一国の宰相を直ぐさま逮捕って訳にはいかなかったわけだ」

「はい。それで神殿を通じてイスマイル王国へ問い合わせてもらったのです」

「で、その鉄面皮は素直に罪を認めたのかい？」

アタシはそう言つて、濃紺の髪のを指さした。

なんとこの鉄面皮、美形のくせに宰相らしい。それはつまり、顔が言い上に頭もよくって仕事ができるってことである。なんかムカつくのは、凡人としての哀しい性だ。

しかも、コイツだけじゃない。

金髪騎士が近衛騎士隊隊長で、茶髪フェロモン男が近衛騎士隊副隊長、黒髪腹黒が王佐、そんなもって銀髪のマッドなインテリメガネは国王侍医である。

そろいもそろつて、顔も頭も良くて地位もある。なんだそりゃ、巫山戯てんのかコンチクショ！。世の男どもに一つくらい分けてやれ！

アタシは内心で叫んだね。

因みに、彼らからも自己紹介は受けたけど。

「僕は男の名前は覚ええない主義なんだ」

とかなんとか言つて、名前を覚えるのは拒否してやった。

外国人の名前を覚えるのが苦手で、もう記憶容量がいっぱいいっ

ばいだっただってことは、勿論内緒だ。

「宰相殿は、貴殿がいることについては認めましたが。落ちているところを拾ったとの一点張りです」

アマリアさんはアタシの「鉄面皮」発言には敢えて触れなかったけど、鉄面皮が誰かはちゃんと分かったらしい。

「ぬいぐるみが一人で出歩くわけなし。だったら何かい、何者かがわざわざレゼル宮に侵入して盗んだあげく、そこいら辺に放置したたでもいうのか？ そんな子供みたいな言い訳、誰が信用する？ って思った？」

「……………思いました」

「僕も思うよ、うん」

誰の顔にも「お前が言うな」って書いてあったけど、アタシは知らないフリをする。

「話は平行線を辿り、決裂かと思ったのですが。そのこのバカが」と言つて、アマリアさんが指さしたのは、国王侍医である。

このふわふわ頭のマッドなメガネは、ふわふわの髪と同じふわふわの理性しか持っていないらしい。

『あれえ、よく分かったねえ。ソレ、本当に王府の廊下をテクテク歩いてたんだよね』

てな、爆弾発言をしちゃったわけである

「ルルの頭の中が奇妙奇天烈なことになっていることは重々承知していましたが…」

「えゝ、酷いや、マリー」

と、アマリアさんの言葉に国王侍医が子供みたいな口調で反論する。

愛称で呼び合う二人は、幼なじみであるらしい。

で、アマリアさんにしてみれば、幼なじみの青年の奇妙な言動は今更なので、「またか」程度にしか思わなかったけど。

「そのルルの頭がおかしいとしか言えぬ意見に、他のれんちゅ、いえ、方々までもが、が同調いたしまして…」

いま、アマリアさん「連中」って言いかけたよね？  
ま、アマリアさんの気持ちも分からなくもない。  
全員、この国の要とも言える人間だ。

きつとその時アマリアさんは、この国の将来が真っ暗に見えたに違いない。

何をバカな事を。

いや、本当だ。

と、殆ど子供の喧嘩と変わらない言い争いは、どこまでも平行線だ。

それに終止符を打ったのが、国王陛下だったらしい。

「三日間だけチャンスを与えてやって欲しい」  
とかなんとか。

その三日の内に何も起こらなかつたら、彼ら全員に対して何らかの処分を下す上に、好きなかだけ取り調べをすればいい。

一国の王にそこまで言われては、神殿側も否とは言えない。

彼女たちの予定では、三日後には容疑者として遠慮なく取り調べできるはずだった。

なのに。

「二日目に、僕が動き出しちゃったわけだね」

アマリアさんとイザベルさんは不本意げに頷いて、男連中は「ほらみる」とばかりに得意げだ。若干一名相変わらずの無表情だけだ。

それにしても、国王は無茶な賭に出たもんだとアタシは思う。

余程のバカか大物か、或いはそれだけ彼らを信頼してるのか、それとも何か確信があったのか…。一つだけ心当たりがないこともないけど、臨終間際だったあの男に、そんな時間があったらどうか？  
けれど、それは今考えても仕方がないので。

「新しい国王は心が広いと言っべきか、思考が柔軟と言っべきか。  
僕なら間違いなく君らを病院送りに行っているよ」

と素直な感想を口にしたら。

「お前が言うな！！」  
と今度はそ全員につっこまれた。

第八話 カエルの恋は合戦です その2（後書き）

副題が、思いつかなかったので「その2」です。

## 第九話 カエルの恋は合戦です その3

とりあえず、ここに至るまでの流れは見えた。

けれど、全く見えてこないもある。

宰相側、もしくはイスマイル王国の思惑と、神殿、つまりアヌハーン神教の思惑ってヤツだ。

どうして、噂が広がる前に、宰相側は何故何らかの対策をしなかったのか。

リスが母親の形見を大切にしている、それがカエルのぬいぐるみだつてことは後宮ではよく知られてる事実だし、そのことをあの夜の時点で宰相側が知らなかったとしても、直ぐに知ることができたはずだ。勿論、なんでそんなものが前宮に「落ちてた」んだって話にはなるだろうけど、泥棒がわざわざ盗んだものを返すわけがないから、容疑者の可能性は低くなる。

次に神殿側にしてみたら、後宮に侵入者があつたとして、それつて後宮の警備を受け持つ娘子軍の責任問題になるわけだから、本来ならオオゴトにはしたくないんじゃないだろうか。

なのに神殿は神官長を送りつけて直接介入してきた。まあ、容疑者が宰相だから娘子軍だけじゃあどうにもならなかっただろうから、何らかの形で神殿が介入する必要はあつたんだろうけど。

疑問は浮かぶけど、答えは出ない。

そもそも社会経験皆無の二一の小娘なんかには、政治の裏側なんてのが分かるわけもないわけで。

要するに、アタシには荷が重い。

せめてゆつくり考える時間があればと、切実に思う。

双方の意図が分からんことじゃあ、何を言っているのか、何を言うべきじゃないのかも見えてこないし、それがリスにどんな影響を及ぼしちゃうのかも、全く見当がつかない。

だったらせめて現状把握して、最悪の事態だけは避けよう、避け

れば、避けるとき、避けね。

なんか違う。

うーん、本格的に逃げたくなった。

アタシはチラリと外を見る。

期待に反して、まだまだ深夜真っ盛り。

まだ暫くは「現実」に逃避行つてのは無理らしい。

それにしてもよくもまあ、こうタイミング良く関係者全員が集ま  
つてたもんだと思う。

全員で四六時中見張るなんてのはどう考えても効率悪い。普通は  
交代で見張ったりするんじゃないだろうか？

そう訊ねてみると、セルリアンさんが答えてくれた。

「侍女頭のコンスタンスが、王女殿下はケロタウロス殿方が動かれ  
るのは夜だというようなことをおっしゃっていたと申しましたので  
王女殿下はご成長遊ばされてからは、ケロタウロス殿のお話は余り  
なさらなくなりましたが、お小さい頃はよくお話しになられたと伺  
いました。お寂しさ故の行動だとばかりと思っておりますが、こ  
うして実際に動くクリス殿を目の当たりにいたしますと、王女殿下  
のお言葉が全て真であったのだと、深く感じ入る次第です」

要するに、夜だけ見張つてたわけか。

まあ、間違いじゃないけど。コンスタンスさん、よく覚えてたな。  
もう三年くらいにはなると思う。リズが人前でケロタン達のこと  
を話さなくなったのは。

『だって、みんなのことを言うと、可哀想な目で見られるんだもの』  
何時だったか、ちょっと拗ねた口調でそう言ったリズは、不憫だ  
ったけど、同時に物凄く可愛かった。

そっぽ向いたときのバラ色の頬のふくらみ具合とか、ツンと上が  
った顎のラインとか、誤魔化すみたいに瞬く度にバツバツサと  
上下する睫だとか。

でへへ。

アタシの可愛いリズは、細部に至るまで可愛らしくできている。

アタシはちょっと和んだ。

なんか変態くさいけど。

お陰でもう少し頑張れるかも、と思う。

そっだよ！ 負けるな、アタシ！

明けない夜はない！

アタシは、心の中で力強く拳を掲げた。

すると、まるでアタシの決意を挫くかのように、メリグリニーアさんが言った。

「では、改めてお伺いします。先程の『誘拐犯』という言葉はどのような意味なのでしょう」

うわお。

いきなりかいっ！

唾液があつたら、間違ひなく生唾飲んでゴックンって感じに喉を鳴らしているところだ。

だつてさ。

メリグリニーアさんの口調はあくまでも穏やだけど、不可思議な銀色の瞳の奥には、冷たい何かがある。ような気がするのだ。

「どういうもそういうも何も、そのままの意味だよ、美しい人」  
必死で思考を巡らせながら、どうとでもとれる言葉を口にする。

リズの周囲は神殿関係者で占められている。

神殿には、リズを大切に理由と意志と、それを実現できる権力と財力もある。

ハッキリ言つて、小国にしか過ぎないイスマイル王国よりも、全大陸的圧力団体のアヌハーン神教の方がよっぽど後ろ盾としては頼もしい。

逆に言えば、神殿を敵に回す方が恐ろしい。

だからアタシは、神殿の、ひいては娘子軍のメンツを潰すようなマネはしたくない。

宰相側の主張通り二号が動いたってことは、二号が前宮をウロウロしてたつてことにも信憑性が出てくる。アタシもまさか、そこを



否定できるとは思わない。

だったら問題は何かというところだ。

どうやって二号が後宮から前宮に行ったのかわかっていることだ。

後宮から前宮に行くには、普通娘子軍の守る麗華門を通らなきゃいけないけど、勿論アタシは通っていない。かといって、バカ正直に言うつもりもない。あの地下迷宮のことをバラすのも、なんかマズイような気がするのだ。

「カレーズの月十一日の夜、何が起こったのか、詳しくお聞かせください」

「…そうだねえ。アレは月の綺麗な夜でね。夜露を含んだ風が僕の頬を撫で、夜の闇に紛れて月香花の香りが甘く漂い…」

時間稼ぎって訳じゃないけど、アタシはボキヤブラリーの限りを尽くして、詩的表現を試みる。だってそれが二号ってヤツだから。

「僕を誘うのは、煌めく星の瞬きか、或いは麗人の悩ましい吐息か

…」

「もう少し簡潔に」

メリグリニアさんの声のトーンが、低くなる。

ヒヤッとしたけど。

アタシは耐えた。

根性で、メリグリニアさんを流し見る。

ケロタン二号のキメフェイスは右斜め四十五度からのやや煽り視線だ。

「ふふ。我が儘かい？ その麗しい唇から出る我が儘ならば、なんだって叶えたくなくなってしまふ。では簡潔に言うよ？ 僕が歩いていたら、剣を持った彼らに襲われてね。気が付いたら鳥かこの中だったってわけなんだ。これを誘拐と言わずしてなんと言う？」

メリグリニアさん満足そうに目を細め、アマリアさんは鋭い眼差しで連中を睨み付け、イザベルさんは面白がるみたいに口元を綻ばせた。そしてセルリアンナさんは、何故かシミジミと頷いていた。

「誘拐だなんて人聞きの悪い」

アタシの言葉にやんわりと反論したのは、黒髪腹黒の王佐だ。

「我々は保護したんですよ。その証拠に、王家の紋章の入った鳥かごで大切に保管していたでしょう？」

心底心外だとも言いたげな表情で言う。

何も知らない人間なら、信じてしまいそうなくらい誠実そうだ。

けれどアタシは、コイツが笑顔で二号を燃やそうとしたことを忘れやしない。

「剣で引き裂くことを、丁寧だと言うとは、この国も随分物騒になったねえ」

アタシはそう言って、綻んで中綿がはみ出ている肩を指し示した。「僕は第三王女のモノだ名乗ったにも関わらず、この仕打ち。まるで親の敵のような扱いだったよ」

ただのぬいぐるみを剣でぶった切っても、精神に疑問は抱かれるだろうが、違法性はない。けれど王族のモノであれば、まあモノによるだろうけど、王族侮辱罪となって最悪死刑だ。なんせこの国は専制君主制なのだ。法律の上に王がいる。理不尽極まりないけれど、一人の命よりも王族の所有物の方が価値がある。当然「基本的人權」は、その概念すらない。

ま、連中は現国王の側近ってことだから、容易くどうこうできるとは思わないけど。

「貴様が第三王女と関係があると言ったのは、傷を付けた後だろう」

金髪騎士がバカ正直に反論する。

傷を付けたって認めちゃいかんよ、騎士君。

いや実際に騎士なんだからこのあだ名はおかしいか。

ええと、直情金髪とでもしておこう。

ホラ見なさい。アンタんとこの副隊長が隣で額を押さえているよ。

「ふふ、おかしい事を言う。アディーリアの形見がカエルのぬいぐるみだってことを知らなかったわけじゃないだろう？ 前宮勤め

の侍女だつて知ってる事実じゃないか。もし君らが、そんな噂はこれっぽちも耳にしたことなんか無い、なんて言ったら、僕は正直この国の将来なんかどうでもいいから、まあいいか」

つい本音をぶちまけてしまったら、直情金髪が声を荒げた。

「なんだそれは!!」

「隊長。話が進みませんから、少し黙つてて貰えませんかね」

いさめる茶髪フェロモンを、直情金髪が睨み付ける。

「しかし、王国の将来をどうでもいいなど!」

「まあ、実際そうでしょう。第三王女には必ずしもイスマイルは必要じゃないでしょうし?」

お、いいところ突くね、フェロモン男のくせに。伊達に近衛隊の副隊長なんてやってないってことだろう。

「シエル・イザベル」

アタシは娘子軍の副隊長に話しかけた。

「なんででしょう。クリス殿」

「貴女の隊長は、自制心があつてよかつたね」

直情金髪が目から殺人ビームでも飛ばしそうな勢いでアタシをを睨み付けてくるけど、勿論無視だ。

「いえ、結構感情が出やすいのですが、あれほど酷くはありません」  
イザベルさんはそう言つて、花が綻ぶように笑つた。

思わず、

「君の笑顔に乾杯」

とか言つちやつたよ。

何も持つてないのにさ。

その時不意に。

ガチャッ。

突然、ノックもなしにドアが開いた。

全員がハッとなつて振り返る。

「どうやら、間に合つたようだな」

そう言いながら入ってきたのは、ガウンを肩に引っかけただけの

寝乱れた姿の男。

少し癖のある金の髪に海のような青い瞳。

寝起きなんだろう、気怠そうな様子がなんだか色っぽい。

その姿が、父親にそっくりだとアタシは思った。

けれど、瞳に宿る力強い光は、その色と同じく父親とはまるで似ていない。

「陛下!？」

皆が口々に彼を呼ぶ。

そう。あの男の息子。

現国王にしてリズの一番上のお兄ちゃん。

名前は、ええと。うん、覚えてないわ。

## 第十話 カエルの恋は合戦です その4

あの男と初めて会ったのは、この世界に來始めて三ヶ月も経ったころだろうか。

勿論向こうは、アタシに「会った」ことなど知りもしなかったけど。

あの男は昼間は殆どリズに会いに來なかつたくせに、時折リズが寝入った夜になってコッソリ顔を見に來ていたのだ。

その時アタシは三号で、リズに体が湾曲する程しっかりと抱きしめられていた。良く寝入るリズを覗き込んだあの男の顔は、妙に歪んで見えた。十二のアタシには分からなかったけど、アレは後悔だった。それから苦悩と、沢山の諦めと。

アデーリアの記憶の中の男との余りの違いに、アタシは驚いたものだ。

「イシュ・メリグリニア。このような姿で御前に出ることをお許し願いたい」

一息ついてゆつたりとした声音でヘイカが言う。

その姿には、一瞬垣間見た父親の面影などまるで無かった。

父親がどこか退廃的で爛れた雰囲気だったのに対して、息子の方は落ち着きと力強さが漲っている。それはアデーリアの記憶の中の男とも違っていて、顔立ち自体は驚く程似ているのに、まるで重ならない親子の不思議さをアタシは思った。

「ご機嫌麗しゆう存じます、カウゼル陛下」

メリグリニアさんが胸の前で両手を組み、僅かに頭を垂れる。

神官独特の作法だ。

それにならって、アマリアさんとイザベルさん、それからセルリアンナさんが胸に手を当てて上体をやや前傾させる。武官としての略式の礼だ。但し娘子軍の二人は左手を右胸に、セルリアンナさんは右手を左胸に。聖と俗では作法が左右逆になるのが通例なのだ。

「余り褒められたことではありませんが、時間が時間ですので、特別にお許しいたしましょう」

一国の主の前だというのに、メリグリニアさんの流暢な口調には、緊張する様子が全くない。尤も、神官つてのは見習いだろうと神以外に跪かないって話らしいから、矜持もそれなりに高いんだろう。

「寛大な言葉、痛み入ります」

意外な程腰の低い態度だけど、これはお約束ってヤツである。

国王といえど一信者にしか過ぎないということを、言葉や態度で示さないといけないのだ。一方で神殿側も国王としての地位に敬意を表する。

「国王ともあるうお方が、一介の神官などに気兼ねする必要などありません」

「いえ、まだ正式には即位しておらぬ身です。どうぞ以前のようにお呼びください」

「お父上亡き今、陛下がこの国における無二の国王であらせられます。どうぞ我が敬意をお受け取りください」

「もったいなきことです。私こそ、一人の人間として、神々に神々に仕える貴き方々に礼儀を尽くすのは当然のことなのです」

謙遜と敬意。

二人の会話は紛れもなくそれをお互いに差し出しているけれど、「譲り合い」は思いやりなんかじゃなくって、打算の産物ってヤツだ。

正直言つて、素人目にも白々しいやりとりは聞いてて寒い。

生身のアタシなら間違いなく鳥肌ものだけど、ケロタンの毛穴一つ無いシルクの体は、ツルツルのスベツスベだ。

……これくらい毛穴のない体が欲しいと、アタシは一瞬思った。薄ら寒い会話を終えて、ヘイカがアタシを改めて見る。

「しかし、本当に動くとは……」

声の調子からは、感心してんだか呆れてんだか分からない。

好奇心はそこにはなく、寧ろ迷惑そうですらあった。

そりゃまあ、自分の城に得体の知れないモノが現れたら迷惑だらうけどさ。好奇心持とうよ、まだ若いんだからさ。

アタシは、父親そっくりだけどもるで違うヘイカの姿を全方向視界の隅に収めながら、ふと思いつく。

最後にあの男に会ったのは、男の臨終の時だった。

隠し通路を使って、会いに行ったのだ。

『もし契約期間中に、あの人が死ぬことがあれば』と、アディーリアがアタシに言付けていた言葉を伝えるに。

ん？

そこでアタシはピンときた。

そうだ！ あるじゃん！

麗華門を通らなくても、後宮から出る方法がっ！

あの地下水路に通じる隠し通路を使って。

行き先は、国王の住むサンデル宮だ。

即位が終わるまでサンデル宮は主が不在で、忍び込みやすいし、サンデル宮から前宮へは、距離的に言えば直ぐ側だ。

ああ、でも。中宮と前宮の間には、近衛が警備する賢礼門がある。うっ〜ん。

「……………おい」

ひょっとしたら、サンデル宮と前宮とを結ぶ隠し通路があるかもしれないけど。

「おいっ」

サンデル宮には余り行ったことないから、そこまで探ったことがない。

「おいっ！ 聞いてるのか!？」

さつきからずっと声を掛けられてたのは分かってたけど、アタシの容量の少ない脳は忙しい。

「聞こえているけど、聞く気はないっ」

アタシはキッパリ言い切った。

「きつ」

多分「貴様」と言いたかったんだろう。間違っても「きゃっ」ではないはずだ。

けれど、直情金髪の怒りは、低く静かな美声に遮られた。

ジルド・エトワ・コンデシールド  
「第一近衛隊長」

腰に来るような美声の主は、濃紺鉄面皮だ。

濃紺鉄面皮の顔に怒りはなく、どこまでも無表情なくせに威圧感は一倍感だ。下手すりゃヘイカよりも偉そうだ。

「陛下と神官長殿の御前だ」

宰相の静かな叱責に、直情金髪は見る見る間に落ち着きを取り戻す。

「すまん……」

直情金髪はそう言って、ヘイカの前に跪いた。

「お見苦しいところをお見せして申し訳ありません」  
それから向きを変えて。

「イシュ・メリグリニアにもお詫び申し上げます」

「よい」

「受け入れます」

ヘイカは慣れた風に、メリグリニアさんは鷹揚に、直情金髪の謝罪を受け入れた。

直情金髪はこちらを恨めしげに見ることもなく、ひたすら己の不徳を悔いているようだ。

多分、物凄く真面目なんだろうけど、真面目すぎて二号ごときの言動すら真っ直ぐ受け取っちゃうんだろうな、この人。

場が収まると、濃紺鉄面皮が今度はアタシを指し示して言った。

「陛下、コレなるはクリストファル・ウディノ・ケロタウロスと申すモノです」

凄いな、鉄面皮。一度聞いただけで二号の名前を覚えているなんて。伊達に鉄面皮じゃないらしい。きつと「寿限無寿限無」も一度聞いたら覚えるのに違うない。



「ああ」

と、ヘイカ。

「クリス、殿。恐れ多くも国王陛下であらせられる」

一瞬尊称を躊躇った辺りに、ヤツの心情が見て取れる。表情には一切でないけど、多分不本意極まりないんだろ。

「ふん」

と、アタシ。

多分挨拶を要求されてるんだと思うけど、アタシは素知らぬふりをする。

「おい、立場を弁えろ」

直情金髪が、抑制の利いた声で言った。

先程注意を受けたにも拘わらず、どうやっても二号のことが気になるらしい。

小姑並みのしつこさだ。

なんて思いながら、

「立場って？」

と態ととぼけた口調で返す。

「国王陛下の御前だ」

ぬいぐるみの立場も何もあるわけねえだろ。そう言いたいのは山々だけど、それは二号のキャラじゃない。

「ねえ、君達に聞くけどね。女王蜂に敬意を表して跪くかい？」

「いきなり何です？」

と、黒髪腹黒。

「え〜、蜂にいい？」

と、銀髪メガネ。

「はっ、まさか」

と、茶髪フェロモン。

「貴様！ まさか陛下を虫ケラうごときと一緒にしているのではあるまいな!？」

と、直情金髪。

濃紺鉄面皮は眉間に皺を寄せ、ヘイカはこちらの意図を探るようにただ見詰めてる。

「跪かない？」

「……………跪くか！」「……………」

期待通りの答えに、アタシはフツと笑って言った。

「僕はね、跪くよ」

「……………は！？」「……………」

完全に虚を突かれた連中の顔が面白い。

そこへ畳みかけるように、高らかに宣言する。

「だって、女王だよ！ 女性だもの！！」

「……………」

絶句して言葉が継げない男達に代わって、そろそろとイザベルさんが言った。

「……………つまり、陛下が女性ではないから礼をしないと？」

「ああ、美しい人。それ以外に何の理由がある？」

「ええと、他の理由が山盛りあっておかしくないと思いますが」

「いいや、美しい人。そんなものは一つもないよ」

そしてまた沈黙。

もはや彼らの二号を見る眼差しは、不気味さすら越えて理解不能の領域だ。

はあっと、大きなため息の後ヘイカは言った。

「分かった。女性ではない私に君の礼を受ける資格はない」

何かを諦めたようなヘイカの口ぶりは、寧ろ受けたくもないと言っているようだ。

言外の非難にめげず、アタシは言った。

「そうだね。無視しなただけでもありがたいと思って貰えるかい？」

「……………そうかもしれない」

二号は呪文を唱えた。

ヘイカは心痛を受けた。

二号は六Gをゲットした。

ヘイカはアキラメを覚えた。  
なんてね。

アタシが内心でほくそ笑んだ時。

ピピピピピ…。

不意に、頭の奥で聞き慣れた電子音が響く。

ピピピピピ…。

こちらはまだ夜だけど、現実ではもう朝らしい。

アタシは休みの日でも目覚ましを掛けることにしている。

一度こちらが夜だと思ってブラブラしてたら、とんでもなく寝坊をしたことがあったから。前の日十時に寝たのに、起きたらなんと夕方だった。

夢の世界と現実世界の時間の相関関係が不明な以上、下手をしたら何日も眠ってるなんてことになりかねないと、その時ゾツとしたのだ。

次第に視界が霞んでいく。

「おや、申し訳ない。時間切れのようだ。ふふ。三人の恋人達が鉢合わせたところでいきなりこっちに降ろされてね。戻ると修羅場かと思うと、ちよつと憂鬱だよ」

適当な事を言っていると、グラリと視界が揺れた。

ひよつとして、ミッションコンプリート？

だってアタシは、彼らに殆ど情報を提供していない。

報復とはいかないけれど、腹いせくらいにはなった。

「それは自業自得って、おい！」

「ちよつと待て！」

「このヤロウツ！ 散々焦らしやがって！」

遠のく意識の中で、容赦ない罵声を聞いた。

うゝん、小心者のアタシとしては、次が怖い。

ちよつとくらいヒントでも置いていくか。

「ふふん。麗華門をくぐらずに後宮を抜ける方法なら、そのヘイカとやらがよく知ってるじゃないか」

思わせぶりな台詞を連中のがどう捉えたかは、次回のお楽しみだ。

第十話 カエルの恋は合戦です その4 (後書き)

やっと一夜が明けました。長い夜でした…。

## 第十一話 カエルは水を経皮吸収するんです

キヤ

!!

バツシャ

ン！！

「うぷっ」

子供の奇声と激しい水飛沫とに容赦なく襲いかかられ、アタシはもうちよつとで鼻から水を飲むところだった。

燦々というよりギラギラと照りつける太陽、むき出しのコンクリートの照り返し。

何年何組と書いたゼッケンを付けたスクール水着の子供の群れ。子供を御すことを諦めた母親達。ひたすら水中往復歩行を繰り返しているおばさま方一行。

これもそれも全部、地球温暖化のせいに違いない。

「で、なんで市民プール？」

アタシは隣の恵美に訊いた。

朝起きて、アタシは恵美にメールした。

相談したいことがあるのだと。

メールは直ぐに返ってきた。

水着持参で、九時に市民プール前集合って。

要するに、市民プールの料金が相談料というヤツだ。我が親友の余りの安上がりっぷりに、思わず目頭が熱くなった。

典雅な美貌に相応しく、恵美は結構良いところのお嬢さんだ。大学に通うのに少し遠いからと一人暮らしをしようと言った娘に、一人暮らしは許せんと運転手付の車を与えようとしたくらいに、だ。

とはいえ、そのセレブな生活は母親の再婚で手に入れたモノなので、由緒正しい庶民のプライドに掛けて断固拒否したらしい。

だからって、流れるプールもウォータースライダーもない市民プールはどうかと思う。せめて健康ランドにすればいいのに、と思うアタシの庶民っぷりも相当なものだ。

ま、料金はアタシの払いだから、安いに超したことはないんだけどさ。

「海はちょっと遠いし、キケンだし」

恵美が水中メガネを装着しながら言う。

海難事故の事を言ってるんだらうか。

「確かに、波がある分キケンだけどさ」

「いやそうじゃなく。海水はダメじゃん」

「海水がダメ？」

「カエルは淡水棲で、水分は経皮吸収。浸透圧であつという間に浅漬けのできあがり？」

「いや、カエル違うし。カエルの浅漬けとか聞いたことないし」

カルキ臭い水だつて、カエルには十分毒だと思っ。

「あ、この前、お兄ちゃんとフレンチ行って、カエル食べた。結構美味かつた」

「……………ふうん、そう。よかつたね」

アタシは何を言うべきか迷ったけれど、結局それだけ言った。

「うん」

と屈託なく笑つと、恵美はバシャバシャと子供の群れに向かって泳いでいった。

伸ばした両腕にはしっかりとビート板が握られている。

昨年の水着を着てるアタシもアタシだけど、競泳用水着を着てその泳ぎはないんじゃないだらうか。白い水泳帽が、哀愁すらそそる。

いやでも、一昨年の「三年A組」のゼッケンつけたスクール水着に比べれば、随分と進化したと思う。いや、アレはいかん。一部の熱烈なマニアによる犯罪の誘発を意図しているとしたか思えない程、キケンな代物だつた。

その時恵美はキツパリと言いつつ切った。

「周りにも同じ様なのがいるじゃん」

いや、体のデコボコ具合が全然違うからつ。

アタシはあの後直ぐ、恵美の兄という人にコンコンと説教をかま

したものだ。

恵美にはそういった常識がないのだから、身内であるアナタ方が気をつけずにどうするのだと。

アタシはその時、大人の男の人に説教する快樂というものを知った。

二時間程泳いで、アタシ達は市民プール近くの喫茶店に入った。今時のカフェじゃなくて、喫茶店だ。ライスカレーだとかナポリタンとかが普通にメニューにあるような、アレである。

そこでアタシはミックスサンドとカフェオレをチョイスして、恵美は冷やし中華とフルーツパフェを頼むと言った。

「小学校のとき、プール行って、散々体冷やしてんにバカだから気がつかなくてさ、帰りにアイスクリーム食べて腹壊す、なんてことなかった？」

暗に冷たいモノは控えろと言っただけだ。

アタシの言葉に、恵美は数瞬思索して。

「じゃあ、デラックスパフェに変えるか」

写真によると、デラックスパフェってのはチョコパフェにフルーツが盛ってあって、その上更にアイスとプリンが乗ってるってゴージャスなシロモノだ。

「更に冷やしてどうする」

「スミは海鮮焼きそばも食べなよ。あ、ミックスジュース追加で」  
無視かよ。って、人の食べる物まで決めんなよ。てか、それ確実に食い過ぎだし。腹壊すし。

「……………好きだね、ミックスジュース」

アタシはイロイロ考えたけど、やっぱりそれだけを言った。



「うん。あの嘘くさくて安っぱい甘みが好き」

嫌いな理由を聞いたと錯覚を起こしそうな答えだ。

きつと、庶民からセレブにのし上がった人間特有の屈託つてのがあるんだろう。多分。

「焼きそば、半分コしよう。だったらスミの小さい胃にも優しいし」  
アタシの胃が小さいんじゃないかと、てめえの胃がデカいんだよ。  
てか、最初っからそのつもりで焼きそば勧めただろう。

「焼きそばと冷やし中華、迷ったんだよね」

どこまでも欲望に忠実な女だよ、アンタって女はよ。

アタシはウエイトレスを呼んでオーダーした。勿論ちゃんと焼きそばも注文した。しなかつたら後が五月蠅そうだから。ウエイトレスはちよつとビックリした顔で「ご注文を繰り返します」と言っ、全部で六品のメニューを間違いなく繰り返した。

ま、女子二人で食う量じゃないわな。

「で？ 相談て？」

空腹を誤魔化すためかお冷やをゴクゴク飲んでから、恵美が言った。

「実はさ、夕べ向こうに行ってきたんだけどさ」

恵美はその美少女っぷりからは全く想像もつかない程エキセントリックな人間なので、正直言って策略には向いていない。それならアタシの方がまだマシなくらいだ。けれど、おつむのときはアタシなんかより遙かに良くできているので、相手の意図を読むことには長けている。と思うのだ。

ま、恵美以外に例の夢のことで相談できる人間なんか、そもそもいないわけだけど。

アタシはお冷やで喉を潤して、昨夜の夢のあらましを語った。

その間に、注文したメニューが運ばれてくる。

「ミニサラダはサービスです」

ウエイトレスはそう言っ、最後に本当に「気持ち」程度のミニサラダを置いていった。

「どこで ドアでカエル間転送っ？」

恵美が食いついたのは、先ずそこだった。

なんだよそりゃ。「亜空間転送」の親戚みたいな言葉は。

「アンタ、最近何のドラマ見た？」

「スタートレック」

やっぱり。

「宇宙大作戦からヴォイジャーまで観たけどね。ワタシは、やっぱりネクストジェネレーションだと思う。データだよ、データ。データ少佐最高」

解説しよう。「スタートレックネクストジェネレーション」は、「スタートレック」シリーズの二番目の作品で、五センチくらいあるんじゃないかと思う程鼻の高い艦長率いる個性的なクルー達が宇宙を舞台に繰り広げる壮大なSFドラマである。データ少佐は中でも人気のキャラクターで、陽電子頭脳を搭載した高性能アンドロイドだ。感情チップ未搭載のため、感情というものを基本的に持っていないが、芸術に関心を持ち、飼い猫を題材とした詩を披露したこともある。

「ああ、うん、そう」

アタシは寧ろ『ディープスペースサイン』の方が好きだけど、スタートレックに関するコメントは差し控えた。なぜなら恵美の綺麗な切れ長の眼差しが、データ少佐への愛に燃えていたからだ。

「フィリス・カダス、それがお前の正式な学名、四足歩行の動物、生まれながらに肉食……」

案の定、恵美はウツトリとした顔で、データ少佐の作った詩を朗読している。

その詩の一体何処にそんなにウツトリとする要素があるのかは不明だが、触らぬナントカに祟りなし、というヤツだ。大変残念なことに、ナントカの部分はこの場合「神」ではない。いや、ある意味「神」か？

「あのさ。今は、カエル間転送（？）より差し迫った問題があるんだわ」

カエル間転送も、そりゃ問題だけど。

便利な機能が一つ増えたくらいで、害はない。今のところ。

「けど、カエル間転送の方法が分かったら、自分で『本日のカエル』を選べるかもしんじゃないじゃん」

切り替えの早い恵美は、瞬く間にデータ少佐の事を頭の隅に追いやったらしい。

冷やし中華の酸っぱい出汁の味がまだ十分残ってる口に、生チョコがたつぷりと乗ったスプーンを差し込みながら、恵美は言った。

アタシは頭の隅で、冷やし中華とミックスジュースを同時に口の中で咀嚼するのとどっちが味覚的にアレだろうと考えながら答えた。

「そんな、日替わりランチじゃないんだからさ」

「同じようなもんよ。今まではさ『シエフの気まぐれランチ』しかなかったのが、自分でメニュー選べるようになるんだよ。凄くない？」

そりゃ凄いだろうけど。

もつと凄いの、プリンを冷やし中華に乗せかえてるアンタだよ。

「『シエフの気まぐれランチ』も何が出てくるのか分からないドキドキ感があって、結構楽しいくない？」

もつとも、アンタの食べ方以上のドキドキはないけどね。

「そっか。まあ、スミはさ、ちょっとギャンブラー体質なところあるからね」

恵美はそう言いながら、何故かプリンをグシャグシャと潰し始めた。

何故潰す!?

そして何故攪拌する!?

アレか? それはこの間一緒にテレビで見たご当地C級グルメ名古屋編に触発されたのか? 謎の小倉抹茶味の Pasta だとか、お汁粉味のうどんとか。アレを目指してんのか?

何故に!?

アタシの頭の中ではグルグルといろんな言葉が乱舞したけど、結局アタシはそのどれも口にしなかった。

「何それ、ギャンブラーって、そんなの初耳だよ」

「じゃあ、行き当たりばったり?」

恵美はそう言って、プリンまみれの冷やし中華を口にした。

「ありゃ、ひよっとして結構イケる?」

「マジか!?!」

こればかりは、つつこまずにはいられなかったアタシであった。

第十一話 カエルは水を経皮吸収するんです(後書き)

恵美のキャラが、なんか可笑しい??

データ少佐に関しては

http://ja.wikipedia.org/wiki/  
E3%83%87%E3%83%BC%E3%82%BF|  
%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3  
%83%88%E3%83%AC%E3%83%83%E3%82  
%AF%29

を参照

## 第十二話 カエルは水を経皮吸収するんです その2

「店の人が気の毒だから、普通に食べ」

アタシは恵美にそう言い含めて、プスリとレタスにフォークを突き刺した。

いつも思っただけど、サラダにフォークって意外と食べにくい。

葉っぱモノって、これがまた、フォークが、刺さらんつ。

何度も果敢に挑戦するアタシを見かねて恵美が言った。

「焼きそばについての箸で食べばいいんじゃないの？」

「あ、そうか」

アタシはフォークを箸に持ち替えて、意気揚々とレタスを口につっこんだ。

ドレッシングがやや酸っぱい。

「で、差し迫った問題って？」

おお、覚えていたか、我が友よ

「つるし上げ食らったけど、間髪でばつくれたこと？」

うわ、身も蓋もない。

けど、確かにその通りなので、アタシは素直に頷いた。

「ばつくれたことはまあ、返って良かったと思う。連中の意図が分からん以上、下手な行動とりたくないからね」

「ああ、お姫様に何かがあるか分かんないし？」

完全に他人事だとばかりに暢気にそう言っつて、恵美は冷やし中華の汁を飲んだ。

冷やし中華の汁って、飲むものだったのだろうか？

いや寧ろ、千々に崩れたプリンを飲みたかったのか？

うむ、そうやって、まっとうな食べ物を汚してしまった証拠を、綺麗サツパリ隠滅してしまいなさい。

ゴホッ。

あ、噎せた。

「てか、寧ろ、それだけが重要」

アタシはやっぱいろいろんな言葉を飲み込んで、ついでにサンドイツチも飲み込んで、敵かに言った。

恵美は見た目に反してツッコミ処が満載な人間だ。

けれどそれをイチイチつつこんでたら、キリがない。

恵美はやりたいたいときにやりたいたいことをやりたいようにやる。そういう人間だと分かっていたいれば、大抵のことは受け流せるものだ。多分。

ただ、小市民的友人としては、他人の目というものをもう少し気にして欲しいところだ。

「なるほどねえ」

冷やし中華（プリン風味）をすっかり片付け終わった恵美は、焼きそばに箸を向けた。

今度は焼きそばとパフェのコラボなんてことをするつもりじゃねえだろうな。

「連中はさ、噂がそんだけ広がる前に、なんで何もしなかったのかな。少なくとも、神殿に介入される前に。自分は無実だから潔白は必ず証明される、なんて暢気なこと考えてるようなヤカラじゃないよ、アレは」

アタシはそう言って、一癖二癖どころか、十も二十も癖がありそうな連中の顔を思い浮かべる。

あのメンツだと、直情金髪の直情ぶりが、なんとも微笑ましいような気さえするから不思議だ。

「ヘイカもな、何考えてんだか分かんないし。二号が動いたからよかったものの、動かなかつたら無条件に処罰って。自分の側近だよ？ ギャンブラーどころの話じゃないよ。寧ろ側近達を処分したがつてんじゃないかと思うね」

「その可能性は？」

恵美はそう言って、焼きそばを口に入れた直後に生チョコを更に口に入れる。

皿の上でコラボするのはやめたけど、口の中でコラボするのはやめないんだな。

一体恵美は、何にチャレンジしてるんだ？

「うーん」

イスマイルでは立太子後直ぐに側近が揃えられるはずだ。将来的に宰相、王佐、近衛となる人間は、エルハラ宮に部屋を与えられて王太子と一緒に長い時間を一緒に過ごす。

つまり、国王と側近の絆は強い。ハズだ。

その事を恵美に言つと、

「ま、一緒に過ごしたからこそその憎悪つてのもあるかもよ？」

と怖いことを言った。  
なるほど。

直情金髪の忠誠心は疑いの余地もなさそうだけど、あとの四人は分からない。

まあ、ヘイカが来て殆ど直ぐにはつくれちゃったからね。

一般ピーポーなアタシに、一目で人間関係を見極める程の眼力はない。

「人間関係がぐちゃぐちゃかどうかは、分かんないな」

そう言つて、卵サンドをゆっくりと咀嚼する。

あ、ここの卵サンド。卵がゆで卵のマヨネーズ和えじゃなくて、卵焼きになっている。

そついやあ、関西圏の友人が、逆にサンドイッチの卵が卵焼きじゃないのにビックリしてたな。きっとここのマスターは関西人なのだろう。

そんなことを考えながらズズツとカフェオレを啜ったら、ふと思ひ出した。

「あ、でも、現実問題として、宰相コケたら、ヘイカもコケる」

「なんで？」

「宰相んちのなんとかって侯爵家は、第一正妃の後見。つまり国王サマの後ろ盾つてヤツだもん」



「じゃあ、国王の側近更迭したいデス説はなしか。因みにデスは Deathね」

「何のこだわりだよ…」

これまでのところ、糸口すら掴めてない。

やっぱり、二一の小娘が二人揃ったところで、どうにもなんないもんか。

三人寄れば文殊の知恵っていうくらいだから、せめてもう一人必要なのか。

アタシはその時、何故かセルリアンさんの事を思い浮かべた。

あの中で、一番話を聞いてくれそうな雰囲気ではあったけど。

セルリアンさんは多分二一じゃない。いや、問題はそこじゃないか。

結局は、セルリアンさんも神殿の息の掛かった人間だ。

「うーん、神殿の考えてることも分かんないしなあ」

アタシは、メリグリニアさんの不可思議な銀色の瞳を思い浮かべた。

冷たいような冷たくないような、何考えてんだか分かんない眼差し。

まあ、あん中で何考えてんのか分かるのは、直情金髪くらいのもんだ。

「後宮の警備を、その神殿とこの女子軍がやってるんだっけ？」

惜しい、女子じゃなくて娘子なだけど。

まあ、意味的には同じか。

「後宮に泥棒が入ったってことは、女子軍の引責問題だから、名誉挽回のために犯人タイホに躍起になってんじゃないの？」

「うーん、アタシだったらさあ、隠蔽に躍起になるけどね。賊なんぞ入ったことごさいませんって。宰相と裏取引するね。何で力エールを持ってんのか問わない代わりに、黙って返せってね」

「うわー、保身に走ってるよ、この女」

「保身に走って何が悪い。正義感でメシが食えるかってんだ」

「でもさ、噂がそんだけ広まった時点で、無理じゃね？」

「噂が広がる前にだよ」

そうか。娘子軍の方も、なんで噂が広がる前に行動しなかったんだろうつて疑問がでてくる。宰相にしても娘子軍にしても、ちゃんと情報網は持つてるはずだから、そんだけ噂が広がる前にどうにかしようと思えばできたはずだ。

「隠蔽する気なら、そういう疑問もアリだろうけど。する気がなかったら？」

恵美の問いかけに、アタシは思案する。

「そりゃ、犯人逮捕しかないよ。娘子軍は後宮内で起こった問題を処理するのが役目なんだし」

後宮内のゴタゴタは娘子軍の権限で処理することができるけど、殺人、姦通罪、王族侮辱罪の三大犯罪は大審院に報告する義務がある。勿論報告するには、証拠を揃えなきゃならないわけだけど。

「あのさ、娘子軍は二号が動くってこれっぽっちも知らなかったわけ」

「まあ、常識的に考えて、そんなこと考えつきもしないわな」

「だから娘子軍は、何者かが忍び込んで、二号を取ったと思ってる。でもさ、娘子軍といやあ、鉄壁の警備網で知られてるんだよ」

「女子達としてはさ、どうやって忍び込んだか知りたいと思うんじゃないかね？」

うーん。間違ってる。間違ってるだけだぞな〜。

「じゃあさ、恵美が忍び込むとしたら、どうやって忍び込む？」

夜中にコッソリと？ 或いは昼間堂々と業者になりすまして？  
どっちにしても。

「ワタシは忍者じゃないんだから、内部の人間に手引きさせるよ」  
「だよねえ」

となりや、当然、手引きした人間は誰かって話しになる。

侍女か女官か、或いは妃の誰かか、娘子軍の人間か。

宰相に疑いの目を向けてるフリをして、犯人を泳がすため？ 或

いはあぶり出すため？

いや、彼女たちは宰相達も疑っていた。

「う〜〜〜ん、分かんない！」

ますます頭がこんがらがってきた。

「まあ、どっちにしる、陰謀があるんだよ、陰謀が。王家、宗教、権力、とくりやあ陰謀だよ」

ケラケラと、恵美は面白そうに笑って言った。

他人事だよ、他人事だよ！ 確かに他人事だけれども！！  
それでもやっぱり、話を聞いてはくれるのだ。

荒唐無稽な、夢の中の出来事なのに。

「はあ」

アタシは盛大なため息をついた。

ため息をつくとき幸せが逃げるっていうけれど、リアルに気力が逃げている。

陰謀なんかアタシの手に余る。平穩無事に、事なかれ主義で生きていきたいのに。

「スミ。お姫様、守りたいんでしょう？」

「そうだった！」

恵美の言葉にハツとなつて、アタシはガバリと頭を上げた。

弱腰になつて居る場合じゃなかった。陰謀があるなら尚更、リズムにだつて危険が及ぶかもしれないのだ。

アタシはサンドイッチの最後の一切れをパクリと食べた。

トマトの酸味とレタスの青臭さが、口の中で混ざり合う。

それを、お冷やでゴクゴクと流し込んだ。

トンツとグラスを置くと、恵美がアタシに言った。

「アンタはさ、知りすぎることと知らなすぎることのバランスが悪いんだよ。だから全くの第三者からの視点で見直してみたら、何か別のものが見えてくるんじゃないの？」

客観的に見て、彼らの行動がどう人の目に映るのか、考えてみるのもいいかもしれない。

てか、視点変えなきゃ、多分ダメなんだ。

「そうか」

アタシは箸を取って焼きそばの皿へと伸ばす。

腹が減っては戦が出来ぬっていうからね。

ところが、アタシは焼きそばを掴む直前でピタリと箸を止めた。

「おい」

アタシはドスを効かせた声で言った。

「どした？」

意地汚くもパフエの底を浚えている恵美は、こちらを見ずに答えた。

「どした？ じゃねえよ。エビやイカは何処やった」

海鮮焼きそばは、見るも無惨なキャベツ焼きそばと化していた。

いやだからって、チョコレートまみれのイカは差し出さんでよしつ。

第十二話 カエルは水を経皮吸収するんです その2（後書き）

註）関西圏だからといって、卵サンドは卵焼きサンドとは限りません。寧ろゆで卵サンドの方がメジャーですが、しかしながらある種の喫茶店では卵焼きサンドが未だ根を張っております。なので、卵焼きサンドを食べたい場合は、関西に行くよりもご自宅で作られた方が確実です。あしからず。

### 第十三話 カエルは水を経皮吸収するんです その3

何故一緒に食べる人間のことを考えて食べないのかと、まるで子供にするような説教を、恵美に言っただけで聞かせようかとも思ったけど、「半分というのは、具と麺を分けるのじゃなく、具も麺も分けることだ」

と言っただけだった。

この台詞も、正直どうかと思うけど。

その後お昼時になって本格的に混んできたので、アタシ達は店を出た。

けれど、炎天下にブラブラして熱射病やら日射病やらになる趣味は全く持ち合わせてはいない。

「どっか行く？」

本屋かレンタルビデオ屋かカラオケか。

アタシが訊ねると、恵美は一言だけ言った。

「眠~~~~い」

そりゃまあ、あんだだけ泳いでたらふく食べりゃあ、眠くもなるわな。

ビート板も、あれだけ酷使されれば本望に違いない。

いっそ幼児が腕に付けてる浮き袋でもした方がいいんじゃないの？。

てか、あんだだけ泳いでて、なんで自力で泳げないんだ？

「どうする？ 帰る？」

「何言ってるの。今日はアンタたちに泊まるのに」

何時の間にそんな取り決めがあったのか。

ていうか、泊まるにしては、荷物が少なくないか？

着替えはどうすんだ？

いや、そもそもコイツが着替えを持ってウチに泊まったことってあつたっけ？

アタシはイロイロ考えたけど、残念なことに、恵美に通じると思われる言葉は一つしか思い浮かばなかった。

「じゃあ、ウチに帰るか」

アタシがそう言っていると、恵美はコクンと頷いて、スタスタとバス停に向かって歩き始めた。

市民プールからウチまでは、バスで二十分くらいの距離である。

バスから降りて、更に歩くこと十分弱。

オートロック式の十五階建てマンションで、ウチは上から二番目の階の角部屋だ。

「いらつしゃ〜い」

新婚さんのエピソードを面白可笑しくトークする例の長寿番組風にアタシは言って、恵美を迎え入れた。

「とりあえず、何か飲む？」

素足でペタペタと廊下を歩く。

一番奥のリビングに入って、とりあえずエアコンのスイッチを入れた。

高性能のエアコンは、直ぐにゴウツと冷たい風を吹き出した。

四LDKのマンションは、天井が高く部屋一つ一つが大きくて、贅沢な作りになっている。学生の一人暮らしには贅沢だけど、本来の持ち主である叔母が渡米しているので仕方がない。アタシ達がここに引っ越してきたのはアタシが高校を卒業してすぐ。アタシが大入学とほぼ同時に渡米してしまった叔母は、結局このマンションには殆ど住まなかったことになる。外資系企業に勤める叔母には、以前からアメリカ行きの話はあったらしい。キャリア志向が強い彼女には、アメリカ行きは願ってもない話だったけど、アタシの大学進学まで待ってくれていたと後になって聞いた。逆に言えば、叔母は何年か待つても欲しい程優秀な人材というわけだ。

「叔母さん、この夏帰国すんの？」

「あゝ、うん、そうらしいけど。去年もトンボ帰りだったから、あんまり無理しないように言ってる」

「外国の企業つてさ、長いバカンスとかあるんだと思つてた」

「ふふ、甘いよ、恵美君。アメリカの経済はね、自虐的なまでに勤勉な一部の人間によつて支えられているんだよ」

勿論叔母も例外ではない。仕事こそが一番のストレス解消法だと豪語する叔母には、願つてもない環境だろうけど、壊滅的に家事に向かない叔母を一人暮らしさせるのは未だに物凄く心配だ。会社から紹介して貰つたハウスキーパーさんに来て貰つていというが、その人が耐えられるかどうかはなはだ疑問だ。叔母の優秀な頭脳には、片づけるといふ概念がそもそもないのだ。仕事は迅速に片づけられるくせに。何故だ??

「冷たいお茶でいい?」

「うん」

アタシ達は冷えたほうじ茶を啜つて、ソファーに寝転がった。

隣に公園があるせいか、十四階にいても蝉の声がよく聞こえる。

水滴を纏つたグラスの中で、カラントと氷が鳴った。

「あのさ、ケロタンが動いた云々つてのは、宰相側は最初は言わないつもりだったみたいなんだよね。一応、国王侍医の失言つてことになつてるんだけど」

アタシはエンボス加工の天井を眺めて言った。

レゼル宮の「本物の」レリーフや絵画で飾られた天井とはほど遠い、チープな天井だ。

分譲だから、施工前に契約していれば、内装にもいろいろ手を加えられたらしいけど。

「宰相側の当初の言い分、『落ちてたのを廊下で拾つた』つてのは、ちよつと聞くとなんだそりやつて感じの主張だけどさ。仮にも一国の政治の中枢にいる人間がよ、そんな子供みたいな主張が通るとは普通思わないよね」

「うん。宰相側がアリバイを証明できれば、その主張も通るんじゃないの? お姫様に聞けば、盗まれた時間はある程度限定できるだろうし。いや、アリバイを証明しても意味ないか。本当に悪いヤ



ツは自分では手を下さないって言うし」

性格は悪そうだったけど、悪いヤツには見えなかった。とは思っけど、政治なんて綺麗事だけじゃあやってけない。

「連中が悪人かどうかは分かんないけど、高い地位持ってんだからさ、生半可な証拠じゃあ捕まえられないだろうね」

「ああ、確実に盗んだっていう証拠ね。今ところは、宰相のトコにそのカエルのぬいぐるみがあるってただけだもんね」  
証拠なんかあるはずがない。

連中は盗みに入ってなんかいないし、盗ませたわけじゃない。

アタシはそれを知ってるけれど、あの連中だって知っている。けれど、それを証明するのは難しい。

「そもそもさ、宰相つてのが盗んだんなら、なんでそんな見つかるような場所に放置してたんだって話になるよね？」

恵美の言葉に、アタシはなるほどと思う。

何も知らない第三者から見れば、確かにその疑問は浮かぶ。

「まあ、盗んだんなら普通は隠すよね。けど、ケロタンの事は後宮に噂が回ってくる程、多くの侍女が目撃してる」

「アンタの話だと、宰相はさ、国王の側近で、国王との関係も良好。つまり今一番イケてる政治家つてことだよな。普通に考えて、そんな人間がさあ、危ない橋渡るかね？ てかさ、お姫様のぬいぐるみ盗んでどうすんのよ？ 子供の嫌がらせじゃないんだからさ」

「あゝ、思わないね、普通。下手したら神殿との関係も悪くなるし。政権交代の危機だよ」

「となるとさ、宰相を陥れる陰謀じゃね？ って話も出てくると思わん？」

アタシはあの異様に顔の整った鉄面皮を思い浮かべる。

アレを陥れるのは、そうとう骨が折れそうだし、失敗したら報復が怖そうだ。

「神殿との関係を悪くさせて、宰相を陥れようって？ だとしたら、リズのところに忍び込むのは最適だと思う。なんせ後見人が大神官だ

から、神殿に真つ向から喧嘩売ってるようなもんだもん」

けれど、実際にはそんな陰謀は存在しない。

少なくとも、この件に関しては。

でも、そういう動きはあるかもしれない。

「ああそうか」

その時アタシはピンと来た。

「政敵の陰謀だつてことにして、政敵を片づけちゃおうって腹つか？」

だったら、連中の行動が一見無防備なのは納得できる。ような気がする。

ケロタンが盗まれたとするんなら、時間帯はリズが寝入っている一晩中だ。その間のアリバイを証明することは難しいし、そもそもさっき言ったように証明しても意味がない。

不利な状況だけど、逆にそれを利用してようって考えだ。

「つまり連中は、ケロタンが動けば疑いが晴れ、ケロタンが動かなければ、政敵を片づけられる。あ、でも、王サマは動かなかつたら何らかの処分するって言つたらしいけど、それはどうするんだろう」

「そんなん幾らでも何とでもなるじゃん。政敵にまんまとぬれぎぬ着せられたらさ、その女子軍だつて、そうそう強くは出れないよ。

せいぜい三日停学とかじゃね？」

いや、学校じゃないから。

「宰相的には、ぬいぐるみは動かない方がよかつたかもね」

「てことはさ、娘子軍も神殿も、連中に利用されちゃつたつてこと？」

「だとしたら、アンタもね」

アタシのことはいい。

けれど、そんなつまらない政治的な駆け引きのために、リズが泣いたと思つたら、物凄く腹が立つてきた。

まだ確信はないけれど。そう思つたら、物凄くそんな気がしてきた。

どっちにしても、リズが泣いたのはヤツらのせいだ。

「そうだ。報復しよう」

アタシが決然とそう宣言すると、恵美は艶やかに笑って言った。「カエルのぬいぐるみが動いた時点で、多少の意趣返しにはなったとは思うけど。それじゃあやっぱり足りないよね。目はえぐれ、歯は全部折れって言うしね」

それはひょっとして、「目には目を、歯には歯を」のアレンジだろうか？

それにしても、物騒過ぎるし、怖すぎる。

そして恵美は生き生きとすぎている。

「うっしや。一寝入りした後、夕飯食べながら作戦練ろっぜ！」

キラリンツと美貌を輝かせて、恵美は言った。

その笑顔は、物凄く悪人臭かった。

ところがアタシとしたことが、昼寝で夢の世界に行ってしまった。

全く作戦練れてないのに。

一応携帯のアラームは設定してるけど。

向こうでどれだけ時間が経つのか分からない。

出来るだけ早く目覚めることを、望むのみだ。

## 第十四話 カエルの吸盤は強力です

アタシの右に赤いカエル、左に緑のカエル、その向こうに黒いカエル。

そしてアタシは白いカエル。

今宵の装いは、ケロタン三号。

正式名エウリディケ・シルフアド・ケロタウロス、通称ディーである。

白い体とピンクのお腹、頭の上には水色のドデカいリボン。色味の優しさから柔らかい印象を受けるけど、中身は小悪魔的で打算的どんな相手だろうと利用することを躊躇わず、そのくせ本当に好きな相手に対しては純情一途、という複雑怪奇な女子である。その上王妃からは、仕草はあくまでもコケティッシュ、口調は蓮っ葉、そしてバイセクシャル、という何やらよく分からない指示が出ている。多分実在のモデルがいるんだろうけど、アタシにはギャルゲーか何かのキャラクターにしか思えない。

アタシはロココ風のカウチを下りて、リズの眠るベッドに向かった。

予想通り、青いカエルはリズの腕の中で、見事に脊椎損傷状態だ。きつと、折れた脊椎は内臓を貫通してることだろう。まあ、あればの話だけれど。

リズは顔を二号に押しつけるようにして、丸くなって眠ってる。

青い月明かりが差し込む中、長い紫の髪がシートに広がって、まるで幻想的な絵画のようだ。

その腕にあるのが、珍妙なカエルのぬいぐるみでさえなかったら。

「リズ？」

アタシはベッドに上がって、リズの形の良い耳にそっと囁きかける。

リズはスースーと寝息を立てて起きる気配はない。

ここのところよく眠れていなかったから、熟睡してくれてるのはいいんだけど。

アタシはリズのまろい頬をチヨチヨイと突いてみた。できれば、今の状況を聞いておきたい。

タイムラグがあるのかとか、誰かが何か言ってきたかとか。

かといって、わざわざ起こすのも忍びない。

アタシはゆつくりとリズの髪を梳いた。

枝毛の一本もない手入れの行き届いた髪は、引っかかりもせずにも毛先までなめらかに指が通る。

因みに三号の手足には水かきはない。代わりに発達した吸盤がある。ついでに言えば一号にも水かきではなく吸盤がある。

勿論それも、瀕死の床の王妃の、文字通り精魂込めた作品だ。

王妃が言うには、二号と四号は半水棲で、一号と三号は樹上性なんだそう。そして五号はなんと地中性らしい。

それだけ設定に凝る意味は何なのか。

しかしお陰で一号と三号は壁歩き（但し四足歩行）ができるので、この件に関しては文句は言わないでおくことにしよう。

とにもかくにも、二号をリズの元に返してくれるという約束は守られたことにホッとす。

後宮は、アタシにとってこの世界でのホームみたいなもんだから、安心度がやはり違う。

アウエー感バツチりの前宮で、明らかにアタシを不審ブツ扱いしてる連中の相手をするのは、正直言ってキツかった。

でも、後宮でなら連中に先ず会うことはない。

ここは未だに亡き先王の後宮で、現国王といえども出入りは制限されている。

各宮に先王の死を伝えられた後、後宮は服喪期間に入る。その間、新国王が後宮を訪れることはない。

表向きは喪に服す彼女たちに敬意を表するためだけ、なんてことはない、義理の母親達との間にまかり間違っても「過ち」がない

ようにするためだ。

彼女たちにとって、先王の死後一年間の服喪期間はある意味で勝負時だ。

国母である正妃は王太后として確たる地位が用意され、死ぬまで何不自由のない暮らしが約束されているけれど、他の妃達は違う。正妃達は実家の爵位に応じて伯爵夫人もしくは男爵夫人の称号を与えられるのと引き替えに、王族から籍を抜かれる。国からは恩給が支給されるものの、贅沢に慣れた彼女達にしてみれば十分とは言えない額だ。側妃ともなると、更に低い恩給が与えられるだけとなる。つまり、実家が余程裕福でもない限り、彼女達の生活は安泰とは言えないってわけである。

しかしそれも、新国王の命令一つで幾らでも変わる。

そのため彼女たちは、なんとか新しい国王と接触して、もっと多くの財産を得ようと画策する。実際、思春期真っ盛りの若い国王を、義理の母親が熟練した性的テクニクで骨抜きにして国庫を危うくさせたって先例があったらしい。

今では直接交渉は難しくなったけど、それでも激しい手紙攻勢で奮闘しているとか。

どうせ連中のことだから、適当にあしらってんだろうけど。

山のような手紙に埋もれて、窒息死すればいいのに。

なんて、非力な小娘の考えることに罪はない。きっと。

「……………ん」

身じろぎしたリズが、小さな眩きを漏らす。

顔を覗き込むと、うっすらと開いた紫の瞳に、白い三号の姿が映り込んだ。

「デュー……………?」

リズは目を擦って、パチパチと瞬いた。

「ハアイ、リズ」

アタシがそう声を掛けると、パツチリと目を覚ます。

「デュー!!」

勢いよく起きあがって、今度はハッキリとした声で三号を呼んだ。  
「ふふ、放蕩者は帰ってきたみたいね」

三号は胸の前で腕を組んで、口元に人差し指を当てて言った。  
軽く肩を竦めるのも忘れない。

コケティッシュな仕草の意味が分からず、苦肉の策として編み出したのがこのポーズである。本当はウインクでもできればいいんだけど、残念ながらぬいぐるみには瞼の開閉機能はついていないのだ。リズはアタシの言葉に、満面の笑みを浮かべた。

「そうなの！ クリスが帰ってきたの！」

リズはそう言うと、二号の首をグワシッと掴んで、アタシの前に突き出した。

ああうん、リズの手も、ケロタンの首を片手で掴めるくらい大きくなっただんなあ。

アタシはリズの成長を感じて、しみじみとする。

でも何故だろう。ちょっと、育て方を間違えたかもなんて思っちゃうのは。

ケロタンのはいいけれど、他人の首は絞めないようにしておくべきだろうか？ でも少なくとも動物の首を絞めたことはないのもまあいいか。

「何時帰ってきたの？」

「今朝早く。セルリアンナが連れて帰ってきてくれたの」

つまり、タイムラグはない。てか、今回は、現実の方が少し時間の流れが速いくらいだ。

「セルリアンナだけ？」

「コンスタンスも一緒だったわ」

侍女頭のコンスタンスさんは、単にその場に居合わせたただけだろう。

「セルリアンナは、何か言ってた？ クリスのことで」

「ええとね。迷子になってたみたいって」

迷子ねえ。確かに迷子ではあったけど。

どうやらセルリアンナさんは、リズには何も言っていないらしい。

「あ、手紙を預かったの」

「手紙？」

「そこに入れてあるわ」

そう言ってリズが指差したのは、優美な猫足のナイトテーブルだ。引き出しを開けてみると、中には手紙が二通あった。

表には「ケロタウロス様へ」と書かれてある。

差出人の名前こそなかったけれど、封蝋の印璽で相手は直ぐに分かった。

一つはイスマイル王国の印璽。もう一つはアヌハーン神教の印璽。イスマイル王国の印璽は葡萄の蔓と双頭の鷲の精緻な意匠で、アヌハーン神教のそれは「尾のない獣」。らしいんだけど、よく言えば素朴、ぶつちやけて言えば小学校低学年の子供が図画工作の時間に作った芋版並みに稚拙なため、「多分四本くらい足があると思われる何かよく分からない生物」にしか見えなかった。まあ、「尾のない獣」ってのが空想上の動物なんだろうけれど、それにしたってこれはない。

アヌハーン神教の歴史は千年以上にも渡る。その長い歴史の間に一人くらいもうちよっとマシなデザインにしようっていう人間はいなかったのだろうか？

アタシは下の引き出しからペーパーナイフを取り出して、手紙を開けた。

細かい言葉遣いや言い回しこそ違えども、手紙の内容は殆ど同じだった。

次にご来臨される日をお知らせ願います。

これをどう受け取るべきだろうか？

昨日の続きがしたいだけなのか？

或いは、また別の思惑があるかもしれない。

第一、カエル誘拐事件は決着ついたのでか？ 決着ついたのでならどうついたのでか。



疑問は積もるばかりで、やっぱり答えは見つからない。

アタシだけの問題ならどうにでもなりそうだけど、リズが絡んでくるとなれば話は別だ。

傍らを見ると、リズは手紙のことを訊ねたくてウズウズしていたらしい。

「ねえ、ディー」

上目使いにちょっと甘えた口調でそういうリズは、甚だしく愛らしい。

「いやね！ この子ったら！ 可愛いじゃないの！！」

感極まったアタシは、リズの頭をギュウツと抱きしめた。

こういう時、あからさまな感情表現ができるのが三号の利点だ。

アタシはリズの顔にキスの雨を降らせた。

と言っても、端から見たら、顔面アタックかましてるようにしか見えないだろうけど。

「ちょ、ディーってばっ」

「ん~~~~！ 可愛い！！」

アタシはついでに、ぐりぐりと頬摺りした。

このぶくぶくと柔らかいほっぺを守るために、アタシに何ができるだろう。

「ディーったらあ」

リズの可愛い文句に、ニマニマしながら考える。

やっぱり、必要なのは情報だと思う。

アタシがこの世界に関して持つてる情報といえば、アディーリアの記憶と地下迷宮の書物から得たものだけだ。ナマ情報は殆どいって良い程持っていない。盗み聞きや覗き見で得られる情報なんて知れたものだ。

散々リズの頬肉の弾力具合を堪能してから、アタシはリズを解放した。

「もっつ」

グロスなんか付けなくてもプルンプルンの唇を、少し尖らせてリ

ズが言う。

元からバラ色に染まった頬が、散々布に擦られたせいで、更に赤い。

アタシはその頬を、吸盤のついた指でプニツと突つつく。

「ねえ、セルリアーナは、今日はどうしてんの？」

「昼間はお休みしてたけど、今晚は夜番だから隣の部屋に思うう。セルリアーナがどうかした？」

「だって、クリスを連れて帰ってきてくれたんでシヨ？ お礼言わなくっちゃなんないわ」

セルリアーナさんは、昨夜のメンバーの中で一番リズに近い位置にいると思う。勿論、神殿とのつながりは無視できないだろうけど、直接リズに接しているということは大きいと思うのだ。

セルリアーナさんからの情報は、多分信頼できると思う。

信用できるかどうかは、また別の話だけ。

## 第十五話 カエルの吸盤は強力です その2

リズは少し迷った後、天蓋からぶら下がっている紐を引っ張った。紐は夜番の控えている部屋に通じていて、鈴を鳴らす。

通常、夜番は侍女と侍従武官が二人づつでやるんだけど、第三王女付きの侍従武官は四人しかいないので、侍女三人と侍従武官一人という構成だ。

といっても、レゼル宮の侍女さん達は大概武術の心得があるので、それでやってけるのだろう。

昼間は可愛らしく笑ってるだろう侍女さん達が、夜中「はっ」とか氣勢を上げて組み手をやってる姿はなかなかの見物だけれど、ちよつと怖い。いやだって、結構分厚い木の板とか煉瓦とか、普通に割ってるし…。

直ぐに姿を見せたのは、侍女頭のコンスタンスさんだ。

コンスタンスさんは、侍女の中でも古株だ。アディーリアが存命の頃から仕えてた彼女は、一度結婚で退職したものの三年後離婚して復職したのだ。

「いかなさいましたか？ フィオリナ様」

フィオリナというのは、リズの長つたらしい名前の一つだ。

こちらの王侯貴族連中は「個人名」神聖名・母方の姓・父方の姓「つてな長つたらしい名前をしている。母方と父方の名字は、順番が変わったりどつちかが欠けたりはすることもあるらしいけど、大抵はそんな感じだ。

個人名は親が付けたもの、神聖名つてのは神殿がつけるもの、クリスチャンでいうところの洗礼名みたいなものだ。

で、フィオリナは個人名で、アタシがいつも呼んでいる「リズ」つてのは神聖名「リズナターシュ」を略したものなのだ。

「あのね、セルリアンナと話がしたいの」

リズがコンスタンスさんと話してる間、アタシは隣で、力を抜い

てダラリンと寝ころんでいる。そりゃ勿論、ただのぬいぐるみのフリをするためだ。誰にどこまでケロタン達のことを知られてるか分からない以上、そうそう正体をバラすわけにもいかないからだ。

「シエル・セルリアンナと？」

侍従武官の地位は女官よりも更に上なので、コンスタンスさんはセルリアンナさんに対して敬称の「シエル」を付ける。

「ダメ？」

リズがコトンと小首を傾げて訊ねる。

リズのこのおねだりポーズに逆らえる人間は、まずいない。

「……………畏まりました」

コンスタンスさんが去った後、リズが不安げにアタシを見つめる。リズはまだ十二歳だけど、ケロタン達が動くということの異常さをちゃんと理解している。

この世界には、魔法がない。

魔王もいなければ、魔女もない。勿論勇者は必要ない。珠を幾つ集めたところでドラゴンは出たりしない。

その点は現実世界と変わらない。

だからこそ、アタシは極力リズ以外の人間との接触を避けてきたのだけだ。

アタシは両手でそつとリズの顔を包んだ。

「大丈夫。アタシに任せときなさい」

そう言って、リズの頬をギョツと押さえつける。

「ひゃっ」

驚いたリズが目丸くする。

ここで普通なら、笑える顔になるとこだけだ。

うーん、美少女つてのは顔を変形させても尚美しいときたもんだ。

「もっつ」

三号の白い腕を振り払って、リズはプイツとそつぽを向いた。

「あらあら、拗ねちゃったわね」

「ディーが変なことするからよっ」

「やあねえ。リズはどんな顔でも可愛いつて、証明してあげたんじやない」

「そんなのウソ！」

「ウソじゃないわ。可愛いわよ。どんな姿形でも、リズは可愛いつて決まってるのよ」

心の底からそう思うから、自然とアタシの口調にも熱が入る。

「そ、そんな証明いらないもんっ」

照れ隠しに怒って見せる姿が、これまたなんとも愛らしい。

アタシはリズのサイドの髪を耳に掛けながら、安心させるように笑って言った。

「セルリアンナなら、きつと大丈夫」

アタシはセルリアンナさんの優しげな表情を思い浮かべた。

昨夜のセルリアンナさんは、クリスマスに対して誰よりも好意的だったように思う。

少なくとも、不信感一杯の宰相達や、目の前の現実と自分の常識との間で葛藤していた娘子軍の二人よりも、友好的だった。

コンコン。

ノックの音の後、セルリアンナさんの声がした。

「殿下、お呼びでしょうか？」

問いかけるようにこちらを振り返ったリズに、アタシはしっかりと頷いてみせる。

そのアタシに微笑み返して、リズが扉の向こうに声を掛ける。

「入って、セルリアンナ」

「失礼します」

セルリアンナさんは颯爽と部屋に入ると、ベッドの側で片膝を折った。

「殿下、お呼びでしょうか」

セルリアンナさんの優しく問いかける声に、リズが答えようとする。

「あのね」

「アタシが呼んで貰ったの」

アタシはリズの言葉を遮ると、ムクリと起きあがった。

一瞬ギョツとしたセルリアンナさんに、アタシは軽く挨拶する。

「ハアイ、セルリアンナ」

そして、チュツと音を立てて投げキッスをかました。

我ながらどうかしてるとは思うけど、三号は好みの相手には男女問わず秋波を送るクセがある。

けれど秋波と言われたところでよく分からないので、分かりやすい行動に出てみることにしたわけだ。

日本人のアタシにはぶつちやけキビシイ行動だけど、これもそれもキヤラクターを保つための試練ってヤツだ。

カエルに投げキスされたセルリアンナさんも残念だけど、してる方だって残念なのだ。ホラ、叩かれた人間だけでなく叩いた人間だって痛いとか、そういうアレだ。

ある意味本当にイタイんだけど。

「昨日はウチのバカがお世話になったわね。アナタにお礼を言わなくちゃって思ったの」

アタシは内心の葛藤をおくびにも出さず、可愛い子ぶって体をクネリとさせた。

や~~~~め~~~~ろ~~~~!!

アタシの本能はそう叫んでるけど、理性で行動するのが人間ってもんだらう?

セルリアンナさんは一瞬パチクリと目を瞬いたけれど、直ぐに真顔になって、

「いえ、私は特に何も…。寧ろ私共の方が、助けていただいたようなものです」

多分、クリスが動いたことで、レゼル宮に賊が侵入した可能性がなくなつて、セルリアンナさん達侍従武官の皆さんはお咎めを受けずにすんだってことなんだろう。

アタシはそのことにホツとするけど、それを表にしたりはしない。

「ああ、そうお？　じゃあ、来て貰ったついでに、ちょっと訊いていいかしら？」

つけ込める時につけ込んで、必要な情報をゲットしておかなくちゃなんないのだ。

「私で答えられることでしたら」

カエル相手にすらこの言葉遣い。宰相達（特に直情金髪）とはエライ違いだ。

アタシとしては物凄く嬉しいんだけど、多分、連中の反応の方が人として当然なんだと思う。

ぶつちやけ、化け物扱いで退治されてもおかしくないと思う。

最初に出くわしたとき、連中が剣を持って追いかけてきたのだから、仕方がないことなんだろう。だからって、連中を許すつもりはサラサラないんだけどもさ。

けれど、とふと思う。

連中の行動がまともなんだとして。

一番退治に乗り出しそうな宗教関係者の方が、寧ろ態度が友好的というのも妙な話だ。

そもそもケロタン達は、この世界の人間にとってどう見えてるんだろう？

「ねえ、セルリアンナ」

不意にわき上がった疑問を、アタシは思わず口にしてた。

「率直に言って、アナタ達から見て、アタシ達ってどうなのかしら？」

「どうとは？」

いぶかしげな表情のセルリアンさんに、アタシは態と戯けた口調で言った。

「化け物？　怪物？　それとも、悪霊付きかしら？」

そのどれも神話や伝説の中だけの存在だけど、科学が未だ胡散臭さの漂う錬金術と見なされているこの世界では、人々の価値観は神話的世界観に則っている。

その中でケロタンという存在を説明しようとするれば、そんなところに落ち着くだろう。

問題は、それらが皆、英雄達に退治されるべき存在だということだ。

視界の端で、リズがアタシ達のやりとりを不安そうに見つめてる。アタシはセルリアンナさんにピッタリと視線を合わせたまま、リズの手をそつと握った。

リズがギョツと握りかえず。

そこから伝わる熱が、アタシに勇氣とやる気と心意気を与えてくれる。

「いいえ。とんでもない」

セルリアンナさんもまた、アタシから視線を逸らさずに答えた。

「ケロタウロス殿達が、悪しきものであるはずがありません」

「どうして言い切れるの？」

「フィオリナ様の周囲に、そのようなものが存在するはずがありませんから」

「リズの…」

王宮でも王族でもなく、リズ個人に要因があるような言い方だった。

そのの意味することはただ一つ。

「はい。神々のご寵愛深き『冠<sup>かん</sup>の聖者』フィオリナ様であらせられますれば」

力強いセルリアンナさんの言葉に、アタシは内心で頭を抱えた。

「聖者」。

その称号がこの世界でどれほど重いか、アタシはそれを知っている。

「アタシ達を人知れず排除するって手もあるわよ？」

黒髪腹黒じゃないけれど、ケロタン達を跡形もなく燃やしてしまえば、可能かもしれない。やったことないから分かんないけど。

「それは可能かもしれませんが、フィオリナ様の御心が神教より離



れてしまいます。神教が、聖者様に呪われるようなことは、万が一にもあつてはならないのです」

その揺るぎない眼差しは、何故かメリグリニアさんの不可思議な銀色の瞳を思い出させた。

そういえば、メリグリニアさんは、昨日の夜何のためにいたんだっけ？

オブザーバーって言ってたけど、そもそも何のオブザーバー？

単純に考えれば、カエル誘拐事件だけだ。

あの夜集まっていた理由は、二号が動くかどうか検証するためだ。そんな荒唐無稽な話に、神官長ともあるうものがどうして立ち会う必要がある？

「ねえ、セルリアンナ」

「はい」

「昨日の夜、神官長はどうしてあの場にいたの？」

「恐らく、イシュ・メリグリニアは………」

セルリアンナさんは少しの逡巡の後、何かを決意したように言った。

「『奇跡』の裁定をされるためかと」

「!？」

アタシの絶句に何を思ったか、セルリアンナさんが力強く頷いた。「ええ。ケロタウロス殿が『奇跡』として認定されれば、フィオリナ女王殿下は『神人』の称号をお受けになられるでしょう」

寝耳に水って、こついうことを言うんだ。

とアタシは思った。

第十五話 カエルの吸盤は強力です その2（後書き）

もしくは、藪からスティック、青天にサンダーボルト。

## 第十六話 カエルの子供は共食いします

「ちょっと待て！」

目を開けた瞬間、驚異的な反射神経でそう言ったのけたアタシを褒めて欲しい。

何故ならそこには、高く上げた腕を今にも振り下ろそうとしている恵美がいたからだ。

お陰で寝起きのだるさも吹っ飛んだ。

「起こそうかと思って」

と言つて恵美は綺麗に笑うけど、今更アタシが恵美の笑顔に誤魔化されるハズもない。

「いや、余計寝るから」

永遠に。

何てつたつて昔も今も美人な恵美は、自らの尊厳を守るため、そして相手の尊厳を踏みにじるため、幼い頃から一通りの武術を習っているからだ。

勿論、恵美は本気じゃない。と信じたい。

けれど一応、注意だけはしておこう。アタシ達の明るい未来と友情のために。

「有段者が素人に拳使ったら、犯罪だから」

「拳違うし、平手だし。段取ってないし」

直ぐさま切り返される言い訳は、多分最初から用意してあったのに違いない。

「確信犯か！」

アタシがそうつつこむと、恵美は意外な程冷静な口調で返してきた。

「あのさ。確信犯つてのは、思想的な信念の下に敢えて違法行為を行う人間のことであって、所謂政治犯とか思想犯のこと。単に悪いことと分かかってて悪いことをやる人間のことでじゃないんだぜ？」

アタシは恵美の答えそのものより、久しぶりに恵美の口から真つ当な言葉が出てきたことに驚いた。

「マジで？」

「マジで。ついでに言えば、有段者の拳は凶器扱いで罪が重くなるつてのはデマだから。酌量に影響はあるだろうけどさ」

「じゃあ、有段者は警察に登録されてるつてのは？」

「そりゃ都市伝説」

「おお、流石、腐っても法学部」

アタシは恵美の知識に、というよりも、恵美もにちゃんと常識があるつてことを久しぶりに再確認できて感動した。

「それを言うなら、文学部のアンタが、何故言葉を誤用するのかね？」

ちよつと耳の痛い指摘だが、アタシにもちゃんと言いつきはある。

「そりゃあんた、『確信犯』は歴史用語じゃないし」

「おお、歴女的発言」

恵美は感心したように言っただけ、アタシは残念ながら歴女じゃない。

「歴女は『歴史上の人物に萌える女子』のことで、アタシは単なる史学科の学生。そもそもアタシは歴史上の人物には別に萌えない」

「じゃあさ、ムソウな三国志とかバサラな戦国とかは？」

それは歴史と言うより、ゲームの話だ。

けれど、歴史に造詣のない恵美には、フィクションと史実の区別などつかないし、つける必要もないのだろう。

「さっぱり」

とはいえ、ゲーム自体を否定する気はない。

恐らくゲームマニアな歴女の皆さんは、アタシなんかよりもよっぽど歴史上の人物の名前を知っているのに違いない。

史学つてのは専門的になればなるほど、あらゆる意味で扱っ幅が短くなる。つまり覚える名前はとも少なく、そして実は覚えなくてもやっていける。そもそも空で研究発表することなどありえない

からだ。

「じゃあ、何に萌えてんの？」

問われて、アタシは考える。

「うーん。動乱期より安定期かな。政治つてのはさ、安定したら次は腐ってくもんじゃん。逆に文化はどんどん成熟していつて、外側の重箱は豪華のなつていくくせに、中身はどんどん腐ってくみたいな？ けど腐りきっちゃうと動乱がやってくるから、腐りきっちゃう手前まで。ぶっちゃけ、腐っていくその課程が、辛抱たまらんわけよ」

アタシとしては、成熟した社会がだんだん衰退していく様を政治的に追つていくのが面白いんだと言いたかっただけなんだけど。

ちょっと言い方が、なんかヤバイ人みたいになってしまった。

「うーん。何でも腐る寸前が一番美味しくてヤツ？」

どうして食べ物に例えるのかは不明だけど、言ってることは的を射ている。

「そんな感じ」

そう答えると、恵美は満足したように頷いた。

「なるほど。子供の頃共食いなんかしちゃってるから、今更、血湧き肉躍るドラマなんか飽きちゃってるんだ」

アタシは恵美の言葉にピンときた。

カエルの中には、オタマジャクシの頃共食いする種類がいる。それをアタシに当てはめようとしているらしい。どう考えても無理矢理だけど、恐らくそれが近頃の恵美のマイブームなんだろう。

「今日もう既に何回か言ってると思うけどさ。アタシ、カエルじゃないから」

何故こんな分切り切っていることをわざわざ言葉にしなくてはならないのか？

言いながら、アタシは甚だしい疑問を感じる。

けれど恵美が、そんなアタシの心情を汲んでくれるはずもなく。

「さっき昼寝してるときに、子供の頃の夢見てさ」

清々しいまでに、アタシの言葉を無視してくれた。

「それで思い出したんだけど。ばーちゃん家が田舎にあつてさ。夏休みによく行ってたんだけど。向こうの方に山があつてさ、入道雲が湧いててさ、蝉の声が物凄くて。田んぼがず〜と続いてんの。んでさ、ため池があつてさ。アメンボだとかタニシだとかカエルだとかがいるわけよ。そこである時、オタマジャクシが親カエルに群がってるのを見たんだよね。んで、よく見たらオタマジャクシが親食つてんの。当時はまだ、アタシも純真無垢な子供だったもんだから、物凄くショッキングでさ。カエルがオタマジャクシにどんどん食われていく様をずっと眺めてたんだよね。まあ、今思えば、親かどうかは定かじゃないんだけど」

まるで夢見るように遠くを見つめて、思い出を語る恵美。

その横顔は、一言で言えば麗しい。

麗しいんだけどなあ。

途中までは確かに長閑な田園風景だったのに、突然猟奇な世界になっちゃったな、うん。

「…………物凄くポエティックな思い出話をありがとう。うん、思い出したよ。確かに親も兄弟も食つてたよ」

アタシはやけくそになってそう言つてやった。

とにもかくにも、アタシは恵美に避けられない状態の人間に手を挙げるんじゃないと言つた。

そしたら恵美は、悪びれもせず、

「昔はよく、授業中に寝てたアンタを起こしてやったじゃん」

言われて、そんなこともあつたなあと思ひ出す。

「けど、アンタの起こし方は派手すぎて、アタシが居眠りしてたの

先生にバレバレだったじゃん」

「そりゃだって、親切心で起こしてたわけじゃないからね」  
曰く。

自分が眠いのを我慢しているのに、他人が寝ているのを見るとムカついたから。

だそうだ。

非常に恵美らしい非常識な理由だった。

「そんなことよりさ。昼寝るとき、スミ、お姫様んどこ行ってたよね」

恵美の言葉に、アタシは頷く。

「ああ、だからさっきアタシを叩き起こそうとしたわけか」

どうやら恵美には、アタシが向こうに行ってることが分かるらしいのだ。

そもそもそのせいで、恵美に夢のことを話すハメになったわけだが。

恵美が言うには、呼吸も脈も正常なのに気配が全くないらしい。

それが一体どういう状況なのか、当然ながらアタシにはイマイチ分からないけど、武術を嗜む恵美には「気」とかそう言うヤツが読めるらしい。

例えて言うなら、死体が息をしているみたいで、非常に気持ちが悪いらしい。

らしいらしいで不確かな言い方だが、アタシには自覚がないからそうとしか言いようがない。

「だって、まだ報復計画立ててないのに。例の宰相とやらに会ったら困るじゃん」

恵美の言葉に、一瞬アタシのことを気遣ってくれたのかとも思ったが。

「仕返しが中途半端になったら、面白くなくなるし」  
結局は自分の楽しみが減るのが惜しいらしい。

まあ、いいんだけどさ。

「アタシも、最初は焦ったんだけどさ。今回は三号に入ったし。まあ、二号もリズムとこに戻ってただけど。後宮に連中は入ってこないからなんとか無事だった」

そんなことよりも、とんでもないことを聞いてしまったの思い出す。

聖者とか奇跡とか神人だとか。

アタシの頭の隅で、赤い警告灯が明滅してる。

「隠し通路使ったら入ってこれるじゃん」

恵美の言葉に、一瞬何の話かと思ったけど。

直ぐに話の流れを思い出す。

「ああ、それは大丈夫。どの通路がレゼル宮に続くか分かんなくしてあるから」

地下水路へ向かう道の分岐点には、パツと見には分からないけど、触るとそれと分かる道標が彫られてある。

けれどもアタシはそれを、一々削り落として日本語に書き換えたのだ。当然日本語の分からない連中には、意味不明の文字である。

ダミーの横道は沢山あるので、よっぽど運が良くなければちよつとやそつとでレゼル宮に辿り着くことはできないだろう。

「それに、流石にリスクが高すぎる。連中だつてバカじゃない」

運良くレゼル宮にたどり着けたとしても、寝室の直ぐ隣には侍女や侍従武官が控えてて、紐を引つ張れば直ぐに誰かがやってくる。

レゼル宮は神殿関係者ばかりだから、神殿が連中と取引すれば口止めはできるだろう。

けれどそうになったら、連中はもう神殿との対等な取引などできなくなってしまう。

イスマイルという国は、代々神殿の影響力を抑えようとしてきた。それが一気に神殿に攻勢を掛けられて、下手をすれば神殿の傀儡王国と成り果ててしまうかもしれないのだ。

「ていうか、今は連中のことはどうでもいいから」

「まさか報復止めるわけ？」



恵美が不満そうに眉間に皺を寄せる。

アタシはそれに慌てて言い返す。

「まさかつ」

勿論、そんなことはありえない。

報復はキツチリとさせて貰う。

けれど今は、小さな国の政治的陰謀よりも、もっとデカい問題がある。

その方が、リズにとっては切実かつ重要なのだ。

「ひよつとしたら神教は、リズを一生縛る気かもしれない」

アタシが真剣な眼差しで恵美にそう言った時。

チャラチャチャチャチャン、チャラチャチャチャチャン、チャラ  
チャチャチャチャチャチャン。

今更のように、携帯の目覚ましが間抜けな曲を奏でた。

三分間で料理の下ごしらえから盛りつけまでしてしまおうって  
いう無謀な料理番組のテーマ曲だ。

途端に恵美の腹が鳴った。

ギョルギョルギョルギョル~~~~~。

典雅な美貌に似合わない、豪快な音色だった。

まさか、脊髄反射に仕込んでるんじゃないだろうな。

色んなタイミングの間抜けさに、アタシは思わず脱力した。

第十六話 カエルの子供は共食いします（後書き）

三分クツ　ングって、三分じゃないですよね。

## 第十七話 カエルの子供は共食いします その2

冷蔵庫に入っていたのは、ナスの浅漬けとキュウリと発泡酒。

基本的に自炊派のアタシだけど、叔母さんが渡米して一人暮らしになってからは、どうしても手抜きになりがちだ。おまけにこう暑いときは、料理する気なんか失せるってもんだらう。冷蔵庫の中身が乏しいのは、決してアタシの怠慢じゃない。ハズだ。

ナスの浅漬けはスライスして芥子を添えて、もろみ味噌があつたのでそれをキュウリに乗せてみた。

あとは炙ったスルメがあると最高なのに。

まるでどこかのオヤジの如く思うアタシは、れっきとした二一の乙女であることを敢えて主張しておきたい。

時計は六時を過ぎたところで、空はまだ明るくて気温はまだまだ暑かった。

アタシは冷えた発泡酒を飲みながら、セルリアンナさんとのやりとりを説明した。

恵美はそれを、発泡酒片手に中華デリと宅配ピザと宅配寿司のメニューを見比べながら聞いていた。

泳ぎ疲れと昼寝の気怠で自炊も外食も面倒臭くて、出前を頼むことになったのだ。

麗しいはずの恵美のその姿は、まるで競馬予想に明け暮れているオヤジのようだった。

アタシが話し終えると、恵美はやおら立ち上がって冷蔵庫からマヨネーズを取り出した。

「それ、何にかけんの？」

アタシがそう尋ねると、恵美は物凄く思慮深い表情で、  
「もろキュウにかけたら美味いんじゃないかと思ってさ」

それはまるで、最高裁の裁判長の如き厳かさだった。

だからアタシは、被告人たるもろキュウのために尋ねてやった。

「もろキュウに？」

「もろキュウに」

恵美は力強く頷いて、もろみキュウリにマヨネーズをぶっかけた。「もろキュウにマヨネーズをかけたくはない」というアタシの意は、ものの見事に無視された。

「マヨネーズはキュウリにも味噌にも合うから、イケると思うんだよね」

そりゃそうかもしれないが。

美味しいもの同士を合わせたからといって、美味しいものになるとは限らない。

いい加減それを学習してくれないかと、アタシは思う。

それとも、プリン風味の冷やし中華を美味いと感じるような恵美の味覚に、それを望むのは無謀だろうか。

それでもアタシは問わずにはいられない。

「アンタさ、今日は何でそんなことになってんの？」

「それはね、太陽が眩しいからさ」

なんだそりゃ。カミュか？ 『異邦人』か！？

アタシの魂の叫びが聞こえたのか、恵美は言った。

「殺人より全然マシじゃね？」

確かにそれはその通りなんだけど。

トンデモ食と殺人を同列にされた日にゃあ、太陽が眩しくて殺されてしまったアラブ人も浮かばれないだろうな。

ノーベル賞作家の不条理小説よりも、恵美の思考の方が余程不条理に違いない。

なんてことを思ったけれど、アタシはそれを口には出さなかった。なんてったってアタシときたら、不条理の代表格たる夢の世界での陰謀なんてものに立ち向かおうとしてるんだから。

その居た堪れない事実の前には、恵美の不可解な味覚など瑣末な問題に違いない。多分。

「状況を整理するとさ」

マヨネーズのたっぷりかかったもろキュウを睨みながら、リズの顔を思い浮かべてアタシは言った。

「宰相側は政敵の追い落としを計画してたかもしれないけど、神殿は神殿の思惑があつて、敢えて宰相側の話に乗ったみたいなんだよね」

セルリアンナさんの話を聞いたリズは、綺麗な紫の瞳を不安に揺らめかせていた。

「神人」は人々の尊敬を崇拝を受けるけど、既に王族としての教育を受けているリズには、ただそれだけじゃないことを十二分に理解しているんだろう。

王族は国の道具だが、神人は神教の最強の武器だ。

神教はそれを最大限に利用しようとするだろう。

ましてやりズには、他にも神教が欲しがる理由がある。

『大丈夫よ。アタシ達が絶対にリズを守ってみせるから』

世の中「絶対」なんてありえない。

けれどもアタシは自分自身に言い聞かせるために、敢えてそう口にした。

その時のリズのアタシを信じ切ったような表情が、何よりアタシを奮い立たせる。

アタシは、何が何でもあの表情に応えなくちゃいけないのだ。

アタシは何故だか決意を試されているような気がして、マヨもろキュウを思い切って口の中に放り込んだ。

ポリポリポリ。

咀嚼する音は小気味よく、口腔内に広がる味は美味いとは言えないものの意外と食べられる味だった。

「あ、普通に食える」

アタシがそう呟くと、恵美は感心しように頷いた。

「へへ、じゃあ食べてみるか」

てか、トンデモ食を作った本人がまだ食ってなかったのか！

アタシはちょっと嵌められたような気がして、恵美を睨みつけた。

恵美はそれを涼しげな顔で受け流して、マヨもろキュウを口の中に放り込む。

「ちよっと思っただけどき、そのセルリアンさんって何者？」

恵美の意外な質問に、アタシは戸惑いながらも答えた。

「え？ リズの侍従武官だけど？」

アタシにはそうとしか答えようがないけれど、それは恵美の望む答えではなかったらしい。

「そうじゃなくて。宰相つてのと神殿は、裏取引みたいなことしたわけだよな？」

アタシは恵美の言葉に頷いた。

セルリアンさんの話によれば、今回の件で娘子軍の動きが鈍かったのは、神殿の指示によるものらしいとのことだった。

なんでも、ケロタン二号が行方不明になった次の日には、神殿から宰相側に接触があったらしいのだ。

「王宮に神官が来るのは珍しいことじゃないだよな。王宮内の礼拝堂で定期的にお祈りするし。王族の教育係になることも多いし。

でも神官長クラスの高位の神官が動けば直ぐに噂になるから、多分普通の神官が接触したんだろうって」

「つまりさ、最初神殿側は表ざたにするつもりはなかったわけじゃん？」

「多分ね」

「でも結局、神官長のお出ましで大々的に公にしちゃったわけだよな」

「そう」

「でさ。アンタの話聞いた印象じゃあ、女子軍は宰相側との裏取引めいたものがあつたのは知ってたかもしれないけど、ケロタンの事は心底バカバカしいと思つてたつて感じなんだよね」

なるほど。

娘子軍の宰相側に対する警戒心は、ひよつとしたら容疑者に対する疑心じゃなくて自分たちの行動を制限された苛立ちからくるもの

だったのかもしれない。

でも確かに、二号のことは心底驚いていた様子だった。

「でもさ。そのセルリアンナさんとやらのカエルに対する態度はさ、不自然なくらい友好的じゃね？」

恵美の言葉に、アタシはまた頷いた。

あの中で、セルリアンナさん程、すんなり二号の存在を受け入れていた人はいないと思う。メリグリニアさんに関しては何とも言えないけれど。

「それってさ、神殿がアンタのお姫様をそのシンジンにスカウトしようとしてるってことを知ってたんじゃないかねえの？」

いや、芸能プロの新人スカウトキャラバンじゃねえから。

アタシは内心でツッコみつつ、反論した。

「なんでそうなるわけ？ 二号を受け入れるかどうかはセルリアンナさんの個人的な問題だと思うけど」

何を受け入れ何を拒絶するかは、その人の心のありようの問題だ。「神殿の思惑通りに事が運んでるのを喜んでるからって見方もある」穿った見方だとは思いつけど、それを否定しきる程アタシはセルリアンナさんを知ってるわけじゃない。

「ええと、それはセルリアンナさんが神殿関係者だから…？」

それでも一応弁明を試みる。

だってさ、リズが懐いている人だもん。

けれど、だからこそアタシが警戒しなけりゃいけないってことも分かってる。

「そもそもさ、神殿直属の女子軍が知らないさそうなことを、どうして後宮勤めの人間が知ってると思う？」

「うぐっ」

恵美の指摘に、アタシは息苦しさを覚えた。

ていうか、マヨもろキュウを喉に詰まらせてしまった。

「ゲホゲホゲホッ」

咳込んだアタシは、慌てて発泡酒を流し込む。

発泡酒の炭酸が喉を洗って、胃の滝つぼにマヨもろキュウを落とし込む。

「ふう…」

もうちよつとで、マヨもろキュウで窒息死してしまうところだった。

そんな死に方は嫌だと心底思った。

恵美はそんなアタシの様子を、背中をなでることもなくジッと見ていた。

「そのセルリアンナさんつてのを、全面的に信用するのは、ちょっと待った方がいいだろうね」

アタシは恵美の冷静な意見に、神妙に頷いた。

一つ分かったら、一つ謎が増えてしまった。

セルリアンナさんの身元について調べる方法を考えなくちゃいけない。

「でさ」

落ちこむアタシに、恵美が畳みかけるように言う。

「宰相側はさ、神殿側に裏取引を承諾させる代わりに何をしたらと思う？」

神殿相手じゃなければ、賄賂とでも答えたいところだけれど。

「政敵を追い落としできるくらい噂が広まるまで女子軍の動きを止めてもらうために、宰相側はさ、何を差し出したと思う？」

アタシは思いもつかなくて、ジッと恵美を見返した。

すると恵美は、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべて言った。

「或いは、何のネタで強請ったか」

一瞬思い浮かんだネタに、アタシは気が遠くなるような気がした。最早アタシの頭の中は殆ど飽和状態だった。

分かった事実よりも深まった謎の方が多い。

謎が謎を呼ぶというのは、こういうことに言っただろう。

恵美が指摘してくれないとアタシには思いもつかない事だけど、恵美のせいで謎が深まったような気がしてしまう。



完全に八つ当たりなんだけれどもさ。

いやまだ当たってないから、八つか。って「八つ」って何だよ！

アタシはアタシの混乱した思考に、頭を抱え込んだ。

「あとさ」

まだあるのか！？

アタシは恐恐とした気持ちで恵美を凝視した。

すると恵美は、今まで以上に真剣な表情を浮かべて言った。

「エビチリとカニマヨと照り焼きチキンと、どれにするのが問題だよね」

その恵美の手元には宅配ピザのメニューが確りと握られている。

恵美の敵かな言葉に、アタシは一言だけ呟いた。

「アタシはマルゲリータがいい」

それが、その時のアタシには精一杯の言葉だった。

## 第十八話 カエルの子供は共食いします その3

恵美は四つの味を食べるために、サイズのハーフ&ハーフを二枚頼もうと言った。

アタシは、宅配ピザは結構高いのでLサイズのハーフ&ハーフを一枚だけ頼むべきだと主張した。それで足りないのならインスタントラーメンでも食えと。

恵美は散々悩んだあげく、照り焼きチキンを選んだ。但し、生地はイタリアンタイプは断固として拒否すると主張した。

僅かでもポリウムを出そうとする恵美の涙ぐましい主張を、アタシは広い心で受け入れた。

ま、アタシは生地にこだわりはないんだけど。

恵美の執拗なサイドメニューの要求も受け付けず、無事宅配ピザ屋に電話で注文し終わると、何となく今日初めて恵美に勝利したような気がした。

けれどアタシは直ぐに、勝利の味というものは時として空しいものだと気が付いた。

何故なら恵美が、ナスの浅漬けにウスターソースをかけていたからだ。

いつの間にそんなもの持ってきてたのか。

アタシはその行為に、怒りよりも悲しさを覚えた。

「あのさ。素朴な疑問なんだけど」

アタシの気持ちなんて構いもせず、ウスターソース色に染まったナスの浅漬けをパリポリと咀嚼する。

マヨもろキュウを食べるのは用心したくせに、その動作には何の躊躇もなかった。

パリポリパリポリ。

余程気に言ったのか、恵美は猫のように目を細める。

その小気味の良い音を聞いてると、恵美の口の中であらゆる常識

までも細かく粉碎されていくような気がしてくる。恵美にとって一般常識なんてものは、ナスの浅漬け程の歯ごたえもないのに違いない。

だから多分、アタシは恵美に夢の話をするのだろう。

「そのシンジンって、一体何？」

恵美の疑問に、アタシは何も説明していないことに気がついた。

「『奇跡』を授かった『聖者』のこと」

余りにも簡潔すぎたかもしれないが、それ以上に説明のしようがないというのが実際のところだ。

恵美はアタシの答えを数瞬だけ吟味して、

「つまり、アンタのお姫様はセイジャってヤツなんだ？」

「そう」

「じゃあ、そのセイジャってのは？」

「生まれつき紫の髪が目、もしくは両方を持つてる人間のこと」

またもやアタシの答えは、簡潔だった。

それが不満なのだろう、恵美の切れ長の瞳が胡乱気に細められる。アタシはそんな恵美に、最後のマヨもろキュウを挟んだ箸をクルクルと回して見せた。

恵美の視線がマヨもろキュウに引き寄せられて、クルクルと回る。こういうところが、一々物凄く猫っぽい。

けれど猫は猫でも、尾が九つくらいに分かれた化け猫に違いない。なんてことを思いながら、マヨもろキュウを口の中に放り込むと、

恵美は何故か恨みがましそうな顔をした。

「どうやら食べさせて貰えると思ったらしい。」

ふん。可愛い可愛いリスでもない女に、なんで「あ〜ん」をしてやらねばならんだ。

パリパリポリポリと咀嚼したマヨもろキュウを飲み込んで、アタシは言った。

「紫ってのはさ、向こうでは物凄く高貴な色なんだよね」

「何で？」

恵美はそう言つて、マヨもろキュウへの未練を断ち切るように、芥子をたっぷりとつけたソースナスをポイツと口の中に放り込んだ。流石に芥子を付けすぎたらしく、クツと呻いた後、眉間を指で抑えながらパンパンとテールを叩いた。

そんな恵美に発泡酒を注ぎ足してやりながら、アタシは言った。「人間の創造主っていう夢の神様のイメージカラーだから。なんでも、最初の人間ってのが紫の目と髪をしてたらしいよ」

「向こうのアダムとイブってヤツか。でもそれなら、向こうの人間全員紫の髪と目してなきゃなんないじゃん」

「全員がそうなら、そりゃただの普通の人だよ」

正確な割合は分からないけど、紫の目や髪というのは向こうでも相当珍しい。

紫よりも更に違和感のある紺やピンクの方が、多いくらいだ。

「珍しいのは劣性遺伝ってことだよ。紫の目や髪が発現してる人間に、紫以外の遺伝子はないってことじゃないの？」

所謂、メンデルの法則ってヤツである。

中学生で習うその初歩的な生物学的情報だけしか持たなくても、

最初の人間＝紫の目と髪説は疑わしい。

けれど、それが真実かどうかは問題じゃない。

「そこら辺は神話なんだからさ、勘弁してやってよ」

要するに、そう信じられてることが重要なのだ。

「ともかくさ、紫の目だとか髪だとかつてのは神様の寵愛の証だつてんで、大切にされるわけよ」

紫の目を持つてる人間を「玉の聖者」、紫の髪を持つてる人間を「彩の聖者」、目も髪も紫色の人間を「冠の聖者」と呼ぶ。その地位は希少性に比例して「冠」「彩」「玉」の順に高い。

つまり紫の髪と目を持つリズは、一番位の高い「冠の聖者」ということになる。

「けどさ、目はともかく、髪なんか染めたら分かんないじゃん」  
まだ納得いかないのか、恵美が不満げに言葉を漏らす。

多分、本人には何ら責任のない遺伝上の理由で特別視する姿勢が、気に入らないのだろう。それは逆に言えば、遺伝上の理由での差別もありうるからだ。

恵美はぶつちやけ言って公正な人間ではないけれど、そういう意味での差別はしない主義だ。

「紫の染料は神殿が独占してて、一般には流通してないし。それを手に入れるとなるとそりやもうバカ高い金が必要なんだよ」

紫は聖者と神人にだけ許された色だ。

何せどんな大国の王族も、大神官ですら純粹な紫は着られない。

下手に紫色の服なんか着た日にゃあ、神への冒瀆だつてことで成敗されかねないのだ。

因みに、ケロタン五号の腹に使われている紫の布は、アディーリアが「彩の聖者」だったからこそ手に入れられた一品である。

「一ヶ月もすれば根本から地毛の色がバレバレだし。聖者を騙つたつて知れたら極刑だよ」

そもそも聖者は、一部の例外を除いて生まれるのと殆ど同時に神殿に引き取られるから、偽物を仕立て上げるのは難しい。一部の例外つてのは王族や有力貴族の家に生まれた聖者のことで、というのも彼らには経済的な保護が必要ないからだ。

聖者は大抵虚弱体質で生まれる。

向こうの世界は、こちら程医療技術が発達していない上に、社会福祉だとか医療保障なんて概念がない。

ぶつちやけ言えば、医者にかかるなんてのは裕福な人間の特権だ。そんなだから、乳幼児の死亡率が高くて平均寿命も短い。

だから神教は貴重な「聖者」を死なせないように引き取るのだ。

「でもさ、相当な見返りがあるんなら、するんじゃね？」

「見返りって言ってもさ、医療費とか学費の免除くらいだよ。まあ就職や結婚では、相当有利に働くことは確かだけど。紫の染料がコストナントに買えるだけの財力のある人間には、意味がないと思うよ」

「でも崇め奉られたりするんじゃないの？　そういうのって自己顕示欲の強い人間にはたまらないと思うけど」

「『聖者』は信仰の対象じゃないんだよ。ただ物凄く尊敬はされるね。その分、プレッシャーも凄いけど」

「神様に愛されてる人間が、優秀でないはずがないってか？」

「そう。だからさ、子供の頃から神教系の学校で英才教育を受けさせられる」

聖者が優秀なら、その後ろ盾になっている神教の評判も上がる。

聖者の優秀さを喧伝するのも神教なら、優秀に育てるのも神教なのだ。

それが聖者の「保護」の内幕ってヤツである。

「それってマッチポンプってヤツなんじゃねえの」

身も蓋もない言い方だけど、つまりはそういうことである。

「ふ〜ん。じゃあさ『奇跡』って何？　やっぱりさ預言しちゃうたり、海が割れたりしちゃうわけ」

恵美の言葉にアタシは思わず想像した。

後光を引っさげて神々しく預言を放つケロタンを。

もしくは、暴風にマントをはためかせながら海を割るケロタンの堂々たる姿を。

「ぶはははは」

「そこ笑うところ？」

「いやゴメン。ちょっと想像しちゃうってさ」

アタシの言葉に、恵美はピンときたらしい。

途端に恵美はゲラゲラと笑い出した。

恵美には以前、ケロタンの姿を描いて見せたことがある。

上手いとは言えないアタシの絵なので、恵美の頭の中ではドえらい想像図ができあがっているのに違いない。

けれど残念なことに、そんなスペクタクルな展開はない。

「神人」の物語なら幾つかリズに読んで聞かせたことがあるけれど、大抵の場合聖者が何らかの事情で困っていると、神様の使いで

ある精霊がやってきて便利アイテムを授けるってだけの話である。  
ある時井戸の水が濁って聖者が困っていると、精霊がやってきて水を綺麗にする装置を置いていったとか。

ある時聖者がずぶ濡れで風邪ひきそうになってたら、一発で火をおこす装置をくれたとか。

ある時聖者がちよつと寂しくなつて音楽でも聞きたいな〜と思つたら、掌サイズの音楽がなる器械をくれたとか。

アタシが恵美にそれを言うと、

「それってさ。浄水器とチャツ マンとiPODじゃね？」

「あ、やつぱさそう思う？」

「…何て言うかさあ。神様っていうよりド えもん？」

恐らく、日本人なら誰もが同じようなことを思うだろう。

恵美の正直な感想に、アタシも頷くより他はない。

誰だつてドラ もんは欲しい。ドラえ んは人類の夢である。

けれど、の 太君依存症の猫型ロボットと同列では、神様もありがたみはイマイチだ。

「大体それが神様から貰ったもんだつて、どうやって分かるのさ」

「貰った本人にしか使えないこと。動力が不明なこと。そこら辺がポイントだつたと思うよ」

「怪しいな〜。意外とその神教つてのが、何か仕込んでんじゃないの？」

アタシはそれを肯定も否定もしなかった。

神様の存在自体が信じがたいアタシ達には、結局のところ何がどうなつても胡散臭く思えてしまう。けれど、夢の中の出来事に近代科学を当てはめようとする事自体、無茶な話じゃないだろうか。

「ま、いいけどさ。で、そのシンジンとやらになると、何が不味いわけ？」

恵美の問いかけに、アタシは苦虫を噛み潰したような気分になつた。

リズがもしタダの聖者だつたなら、不味いということはない。

そう。

リスが、リスでさえなかったら。



## 第十九話 カエルの子供は共食いします その4

チャイムの音と共にピザが来た。

恵美がインターホンに出て、恵美が玄関で受け取って、恵美が箱をビリビリに破いて、ついでにピザも破くように千切って食らいついた。

余程腹が減ってたのか、その姿は飢えた野獣のようだった。

人間なのに。

美人なのに。

恵美は全くもって残念な人間だ。

お陰でピザはハーフ&ハーフ頼んだ意味がない程、混沌とした状態だ。

ピザの切れ目が悲しそうに震えてさえいるようじゃないか？

アタシはため息をつきながら、照り焼きチキンにのし掛かられるモツツアレラチーズを救出した。

「神人になったら、一生神殿に軟禁状態だし。結婚相手だって選べない。でもさ、王族だって同じようなもんだよね」

王族である以上リズに自由恋愛なんて望めないし、多分どこかの王家に嫁ぐだろうから結婚しても自由に出歩くんなんてことはできないだろう。

神人は宗教儀礼に明け暮れるけど、王族は政治行事に明け暮れる。結局のところ、リズに本当の意味での自由なんてものはない。

「国に利用されるか、宗教に利用されるかってわけか。だったらさ、シンジンってのになっちゃった方が、下手なことされなくなるんじゃない？ なんせ『奇跡の人』ってわけだしさ」

なんだそりゃ、ヘレンケラーかよ。

ただでさえ、「王族」で「聖者」なんて二重苦なのに。

そこに「神人」加えて「奇跡の人」なんてもんにしてなるものか。いや、もう一つあるから、やっぱりもう既に三重苦かも…。

アタシはヤサグレた気分になって、ゲビリと発泡酒を煽る。口の中に広がる味がやけに苦い。アタシはそれを打ち消すように、ちよっぴり甘い照り焼きソース風味のマルゲリータに食らいついて、トマトと酸味とバジルの爽やかな風味のコラボレーションを堪能した。一息ついたアタシは、とある言葉を口にする。

「フィオリナ」リズナターシュ・ロラン・イスマイル・ハジエク・イス・イスマイル」

アタシは久しぶりに舌に乗せたそれを、つつかえずに言えたことに満足する。

「何の呪文？」

恵美の言葉にアタシは笑う。

「リズの名前」

「長っ」

「だよね」

初めて聞かされた時、アタシも同じことを言った。

その時アディーリアは自然に覚えるだろうから、気にしなくていいと言った。

その言葉の通り、何年か経って、アディーリアの記憶がすっかりアタシに馴染む頃には自然と覚えていた。

そして同時に、その名前の重みも知った。

「フィオリナが個人名で、リズナターシュは神聖名。ロランは王族女性の修辭詞で『ロラン・イスマイル』はイスマイル王家の王女って意味。ハジエクは父性の前にくる冠詞みたいなもんで、母姓だったらアウラがつく。んで、『イス・イスマイル』はイスマイル王統の血筋ってこと」

「さっぱり分かんねえよ」

恵美はそう言って、チーズと照り焼きソースで汚れた指を舐めた。それは世間では艶めかしい仕草のハズだが、恵美がやると悪ガキのソレにしか見えないから不思議だ。けれどそれは、アタシの目にはそう映るってだけの話なのかもしれない。どんな暴挙に出ても、

恵美がモテる女であるのは間違えようのない事実だからだ。

「まあ、分かんなくていいよ。で、ちよっと話飛ぶけどさ」

「うん？」

恵美は発泡酒を煽りながら、視線だけこちらに寄越す。

空いた手は、見てもいないのに正確にマルゲリータのピースを掴んでいる。

きつと恵美の優美な指先には蛇のような嗅覚センサーが何かついていて、食べ物匂いを敏感に嗅ぎ分けているのに違いない。

「アヌハーン神教ってのはさ、『世界の秩序の守護者』ってのが存在理念なんだよね」

「ふ〜ん」

「でさ、秩序の一つに血筋ランキングってのがあるわけよ」

「何それ？」

「その名の通り。王侯貴族の血筋の格付けやってんの」

「血筋ってのは、家名とは違うわけ？」

「微妙に違う。そうだな。恵美、アンタのお母さんの旧姓は？」

「有吉だよ」

「アンタはさ、今は楡山だけど、元は楡川だったよね？ つまりさ、アンタの血筋は有吉と楡川で、家名は楡山。向こう風に言えば、『

恵美Ⅱエカテリーナ・ニアン・楡山・アウラ・有吉・ハジエク・楡川』ってことになる」

「ニアン」てのは貴族の女性につく修辞詞だ。

「エカテリーナって何？」

「たった今アタシがつけた、アンタの神聖名。洗礼名みたいなもんだよ」

由来はロシアの女帝エカテリーナ。ついでに言えば、専制君主として知られる二世の方だ。

「じゃあさ、ワタシの子供はさ、有吉と楡川と楡山のどれを受け継ぐわけ？」

「有吉か楡川のどっちか。大抵は血筋ランキングが上位の血筋を受

け継ぐみたいだよ」

因みに、母系血筋にしる父系血筋にしる、より高い方がその人の血筋ランクとなる。

「それにどんな意味があるわけ？」

「そうだなあ。うーんと、例えばさ。イスマイル王家は国こそちっさいけどさ、血筋ランキングは三位なんだよ。でさ、今向こうじゃあ、デカイ国が三つくらいあるんだけど。血筋はイスマイル王家より下なんだよ。んで、デカイ国が勢力強めるために、周辺諸国に人質代わりに嫁寄せせとか言うじゃん？」

「ああ。ひよつとして、血筋ランクが下だとどんなに国がデカくてもそれができないわけか」

「そう。やったら漏れなく神教から茶々が入る」

「でも、そういう血筋こそ欲しがられるんじゃない？」

「勿論。イスマイル王家の女子は引く手数多ヨリドリミドリ。まあ、政略結婚には違いないんだけどさ」

「ふーん。じゃあ、世界ランキング三位のアンタのお姫様はモテモテってトコか」

「ところがさ、実はリズの血筋ランキングは三位じゃないんだよ」

「だって、さつき三位だっていったじゃん」

「父方の血筋はね。問題はさ、リズには公にされてない母姓があるんだよ」

つまりは、アディーリア由来の血筋だ。

アディーリアは公には平民出身の聖者ということになっているけれど、実は三十年程前に滅んだ、大陸西部の小国クリシアの王族だ。西の大国ゴーシュによるクリシア侵攻は炎のごとく瞬く間に小国を滅ぼし、神殿が調停に入る間もなかったらしいけど、元を正せばクリシア王家のゴーシェ王族への不当な非難が発端だったため、周辺諸国のクリシア王家への同情は薄い。それでも今でもレジスタンス活動が活発なきな臭い地域なのだ。

神殿は「聖者の保護」の名目の下、アディーリアの家名と血筋を

伏せることにした。

恐らくイスマイルでその事実を知るっているのは、前王と当時の宰相だけだ。

だから、リズに母姓がないことを不思議に思う人間はいない。

アデーリアの正式な名前は、サシアナ「アデーリア・ロラン・クリシア・ハジエク・クルス・クリシア・アウラ・エス・エイシアン」。

だけど、重要なのはクリシア王家の血筋じゃない。

「アデーリアの母姓『エス・エイシアン』。エイシアン王統って意味なんだけどさ」

「うん」

「これがさ、なんと血筋ランキング一位なんだよね」  
王族で聖者で血筋ランキング一位。

「やっぱりリズは既に「奇跡の人」かも。」

「それって最強じゃねえの？」

「そこが問題なんだよ」

「どういうこと？」

「この『エス・エイシアン』の由来なんだけどさ」

「王統ってんだから、どつかの王家のものなんじゃないの？」

「エイシアン王統を王族に戴く国は、現在ないんだよ」

「じゃあ、どこ由来なわけ？」

「『名の秘された皇国（仮名）』って国なんだよね」

「何ソレ」

「千年前に滅んだっていう、全大陸統一国家」

「てか、その（仮名）ってどういうこと」

「本当の名前はもつたいたないから秘密だけど名前がないと不便だから仮名つけてみました、ってヤツ」

「なんじゃそりゃ。ホント、もつたいぶってるな！」

「本当の名前は神教のごく一部の上層部しか知らないって話」

「なんで宗教関係者が知ってんのかの方が不思議だけど」

勿論それには、ちゃんとした理由がある。

「そもそもアヌハーン神教は『名の秘された皇国』の国家宗教が母体なんだよ」

「んん？ なんかきな臭い匂いがする」

勘の良い女だ。

「でさ、一つ言い伝えがあるんだよ」

貴き名を戴く神人の導きにより、皇国は再び立つ。

アヌハーン神教の聖典の最終章は、厳かにそう締めくくられてい  
る。

「アヌハーン神教の究極目的は『名の秘された皇国』の復活なんだ  
よ」

つまりリズが「神人」になるってことは、神教が切望して止まな  
い手駒になるってことだ。

アタシは深いため息をつきながらピザに手を伸ばした。

腹が減っては戦ができぬっていうからね。

と思っただのに。

いつの間にかピザは、一切れ残さずなくなっていた。

そう言えば、恵美は会話中ずつと何かを咀嚼してた様な気がする。

ああ、アタシの愛しのマルゲリータ。

まだ二切れしか食ってなかったのに……………。

てか、そんだけ食って何故ヤツの腹はペチャンコのままなのか？

既に胸よりも腹が出ているアタシは、一体どうすればいいのか??

アタシは何だかやたらと悲しくなつて、何も考えずにソースナス

をパクリと食べてしまった。

哀愁を噛み締めるようにポリッと一噛みすれば。

「ゴホッ」

瞬間ナスが口の中から飛び出した。

「うわっ。汚ねっ!」

恵美が罵声と共に非難がましい眼差しを向けてくる。

美人ってヤツは顰めっ面でさえ美しい。

けれど今更アタシが恵美のそんな表情に見とれるはずもなく。

「アンタね！　なんてもんを創りやがったよっ！　マジで不味い！」  
アタシは口の中に残った奇妙な味を消すために、発泡酒を流し込んだ。

一体どういう味覚を持てば、あんな風に満足気にコレを咀嚼できるのか？？

それは、人間が食べて良い味をしていなかった。  
何というか。

ウスターソースの甘さを含んだスパイシーさとナスのほんのりとした酸味と塩気がビツクリするほどミスマッチなシロモノだった。

アタシがその事を告げると、

「そこがいいんじゃない」

恵美はニツコリと艶やかに笑って言った。

恵美。

アンタ、随分遠いヒトになっちゃったな。

アタシは親友の遙かなる旅立ちを祝福すべきかどうか、遠くを見ながら考えた。

## 第二十話 カエルの子供は共食いします その5

結局インスタントラーメンが必要になったのは、アタシの方だった。

インスタントとはいえ調理をする気力がなかったもので、ドンブリに麵を入れて湯をかけて蓋をして三分待つっただけの、例のあの鶏ラーメンだ。

卵を落としたいところだが、残念なことに卵がない。

貧相な冷蔵庫の中身を思い、明日にでも買い出しに行こうと決心した。

「要するにさ。神殿を牽制しつつ、どうやって宰相共に報復するかってことだよな」

そう言った恵美の前には、同じくドンブリが置かれている。

「どんだけ食う気だよ。」

呆れてつつこむ気にもなれないが、真剣な表情で三分という時間を待つ恵美は、些かの汚点もない程楚楚とした大和撫子に見える。

立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花、というのは恵美のような人間を言うんだらう。

実際は、喋れば悪魔、食えば餓鬼、殴る姿は人でなし、てな人間なのに。

「でもさ、宰相達の政敵追い落とし云々ってのは、アタシ達の想像の域を出てないんだよな」

アタシがそう指摘すると、恵美は神妙な顔で頷いた。

「そう。ここはやっぱり、宰相共の正確な狙いを知っておきたいよね。相手のダメージを狙うなら、相手を知っておかなきゃだしさ」

但し「神妙」の対象は、目の前のドンブリであることを、敢えて言っておきたい。

「ジリリリリリ…」

キッチンタイマーが三分経ったことを告げる。



恵美はすかさず蓋代わりの皿を取り、ズズズズツと勢いよく麵を吸い上げた。

「ほら、スミも食べ。ラーメンは作るのも食べるのもスピードが勝負だぜ？」

「いや、インスタントだから。」

作るといふ程のモンでもないから。」

とは思ったけれど、インスタントだからこそ麵が伸びるのが早いのも事実だ。

アタシ達は暫し無言でラーメンを平らげた。

ズズズズズ。

年頃の女子二人が無言でラーメンを貪る姿は、余り美しいもんじやない。

けれど、誰にも見られてないなら気にしないのが女子ってもんだ。

「アタシ、今日、炭水化物ばかり食ってるような気がする」

食べ終わって、少し汗ばんだ額をぬぐいながらそう言つと、

「いいじゃん。グルコースが一杯とれて。考えることは沢山あるんだからさ。脳には栄養は必要だぜ？」

そう言つて恵美は、ゴクゴクとハイボールを飲んだ。

酒類は、発泡酒からウイスキーに変わっていた。

ウイスキーは叔母さんのもので、アタシは飲まないから、氷の浮かんだグラスの中身はウーロン茶だ。

「ていうか、食い物ないのに、なんで酒ばかりあるんだ、ウチは？」「アタシ、ちよつと思つただけだよ」

「何？」

「連中の政敵が、リズの味方とは限らないんじゃないかって」

今、宰相達が追い落としたい政敵がいるとして、多分きつとそれは王位継承権が絡んだ問題だ。

つまり、第二正妃か第三正妃が相手つてことだ。

正確に言えば、二人の実家勢力つてことだけど。

二人とも、過去リズに嫌がらせをした張本人だ。

だから、二人が失脚すること自体は全然全く構わない。

ていうか、ぶつちやけ言えば、諸手を挙げて歓迎したいところだ。「ああ、そんなことはいいんだよ。重要なのはさ、連中の弱みを握るってことだから」

恵美はそう言っつて爽やかに笑った。

綺麗に並んだ白い歯が、ヤケに眩しい。

自分自身には何の被害も被ってないにも拘わらず、会ったことのない宰相達に思う存分報復しようとする親友の人間性について、一瞬アタシは考慮すべきかどうか考えたけど。

結局のところ、アタシにもリズにも被害はないから気にしないことにした。

「そうか」

向こうに行ったら、早速隠し通路使つて情報収集せねば。

後宮だけじゃなく、中宮や王府の方まで足を伸ばした方がいいだろう。

「あ」

「どした？」

「いやさ。タベ連中に会った時さ、去り際にチラツと隠し通路のこと言っただじゃん」

あの時は娘子軍に妙な嫌疑が掛けられないようにと、麗華門を通らずに王府に入る方法があることを仄めかしておいたのだ。

今思えば、そんな必要ななかったのかも知れない。

宰相側と神殿側を対立させた方が、良かったのかも。

そのことについて恵美に意見を求めると、

「いや。それはそれで良かったんじゃない？ 神殿は凄くデカイ勢力なんだから、やたらと喧嘩売るようなマネは考えモンだと思う」  
なるほど。

アタシは頷いて、二人分のドンブリを下げた。

流しには、発泡酒の缶が幾つも並んでて酒臭い。

その殆どは恵美が飲んだものだ。

「あのさ〜」

アタシはドンブリを洗いながら、恵美に呼びかける。

「ん〜？」

「宰相達も神殿も、ケロタン達に会いたって手紙寄越してきたんだよね〜」

「別々に？」

「別々に。それってさ、情報がある程度集まるまで、避けるべきかな？」

「いや〜。寧ろ会うべきじゃね？ 連中の口からでなきゃ聞けない情報もあるだろうしさ」

「そうか〜」

問題は、それがアタシに出来るかだ。

再びリビングに戻ると、恵美がペンと白紙のチラシの裏を示して言った。

「ちよつと整理する意味で、時系列的に状況を並べてみてよ」

一瞬アタシは、ウチにはノートというものがあるんだと、恵美に教えるべきかどうか悩んだ。

けれど恵美が普段から、白紙の広告やミスプリントのコピー用紙を適当な大きさに切って、メモ代わりに持ち歩いていることを思い出して止めた。

それを見た大抵の人間はイメージとのギャップに顔を引きつらせながら、「桧山さんってエコなんだね〜」とどうにか納得できる答えを探す。

けれど実際は、節約だとかエコだとかのタメじゃなく、単に恵美が自分のイメージなんてもんにもんに全く頓着しない人間だからだ。

アタシはペンを取って、これまでの出来事を思い出す。

「う〜んと。アタシが連中に捕まったのが、『カレーズの月十一日』の夜。十二日の朝には二号の行方不明が発覚。その夜セルリアンナさんは娘子軍に報告。セルリアンナさんによれば十三日には神殿側から宰相側に接触」

再度二号に入ったのが、六日目の夜。

その夜は『カレーズの月十七日』の夜で、彼らが寝ずの番をし始めてから二晩目だ。

「娘子軍が宰相側と直接交渉したのは、十五日かな。そんなときケロタンが動く云々が国王侍医の口から洩れて、その夜から寝ずの番してたって話だから。で、十七日に二号が動いたと」

アタシは説明しながらチラシに箇条書きした。  
「なるほど」

恵美は少しの間思索して、

「こうしてみると、その国王ジジイの『失言』ってのが、何か違和感ありまくりだよな」

うーん。『ジ』が一字多い。しかも残念ながらジジイじゃないし。イケメンですらあったし。

但し、かなりマツドな印象だったけど。

アタシは、向こうでは珍しいフワフワの短髪と銀縁眼鏡の奥の紫の瞳を思い浮かべた。

「ああ!!」

アタシはその事実気づいて、思わず声を上げた。

「どした？」

「アタシとしたことがっ。うっかりしてた」

「大丈夫。スミは常々うっかりしてる」

親友よ、何の労りにもならない慰めをありがとう。

アタシは、恵美の言葉を無視して続けた。

「あの国王侍医てば、『聖者』だよっ」

紫の瞳。

つまり「玉の聖者」ってことである。

神教は特に医学に力を入れていることから、神官が医者を兼任したり、聖者が医者になることは珍しくない。

「神官の姿してないから、分かんなかった」

いや、聖者だからって神官とは限らない。

神殿は聖者の独占って批判を受けるのが嫌がるから、多分割合は半々くらいだ。

アタシは、自分が思ってた以上にテンパッてたらしい。

「じゃあさ、最初に宰相側にコンタクトを取った神殿側の人間って、ソイツじゃね？」

「その可能性は大きいね」

だとしたら、セルリアンさんは、何故その事を言わなかったんだらう。

彼女なら、国王侍医が聖者だつてことは知ってたはずだ。

やっぱり、セルリアンナさんのことも調べなきゃ。

「でも、なんでこのタイミングで言ったんだろ？」

アタシはトントんとその箇所をペンで突く。

宰相側の都合なら、宰相達は望みを叶えたつてことになる。

けれど、もしアタシ達が考えてた通り政敵にケロタン誘拐事件の濡れ衣を着せるつもりなら、神殿の裁定がで出た後でなけりゃ不可能だ。

或いは、神殿側のタイムリミットがそれまでだったのか。

となると、宰相側が神殿側に待って貰う条件つてのは、神殿にとつてそれ程重要なことじゃない？

アタシはグルグルと思考が空回りしていくのを感じた。

きつと脳みそはグルコースを山のように消費しているのに違いない。

「スミ、ストップ」

恵美の制止の声で、ハッとす。

お陰で、思考のスパイラルから抜け出せた。

バチリと恵美と目が合うと、恵美は大げさに嘆息する。

「取り敢えず、情報、集めてきな」

「わ、分かった」

直ぐに思考に埋没する自分を叱咤しながら、アタシは答えた。

そんなアタシに恵美は満足げに頷くと、一転してニヤリと笑って

言った。

「でもそのためには、スミ」

悪戯っ子というには悪辣過ぎるその笑顔に、流石のアタシも引き気味になる。

「え、恵美さん？」

「アンタにはやるべきことがある」

明らかに良からぬ事を考えついたと分かる恵美に、アタシは返事をするのを躊躇った。

けれど、恵美の辞書に「容赦」という文字はない。

「スミ。今夜は徹夜ね」

「な、何で??」

言ってる意味が分からず問い返すと、恵美は至極当然とばかりに笑って言った。

「勿論、変態共にギャフンと言わせるためじゃん」

いや、その意見には賛成だけど。

「だからって、何で徹夜…?」

「いいこと！ マヤ！ 紅天女の道は遠いわ！」

「つ、月影先生!? 何で??」

「千の仮面を掴むのよ！」

その夜、何故かアタシは、恵美からたっぷりとケロタンの演技指導を受けた。

恵美の演技指導は、月影先生にも負けない鬼っぷりだったと断言できる。

漸く恵美から合格を貰ってベッドに入ったのは、すっかり夜が明けた後だった。

「く、くれないてんにゃっ」

その夜の最後の記憶は、恵美の意味不明の呟きだった。

疲労困憊したアタシは、すっかり目覚ましをセットするのを忘れてしまっていた。



第二十話 カエルの子供は共食いします その5（後書き）

長い「現実」でした。お疲れ様でした。

恵美の演技指導は名作『ガラスの仮面』を参考に想像してみてください。さい。



## 挿話 騎士は布製カエルの夢を見る、かも

壮麗な柱廊に午後の日差しが降り注ぐ中、紳士淑女達がさざめき合いながらゆったりと往来する。

王府は立ち入り禁止区域が殆どだが、この中庭は憩いの場として多くの者が利用している。

といつても、利用しているのは外来の客が殆どだ。

大抵は貴族や中産階級の者、若しくはその使者で、陳情に来た者、申請に訪れた者、或いは行儀見習いとして王城に娘を出仕させる手続きにやって来た者など、要するに役所仕事に付きものの膨大な待ち時間を潰しているのだ。

そこにあるのは、礼儀正しく静かではあるが、どこか間延びした空気感。

天候と健康と無責任な噂話が花開く。

そこへ、厳めしくも規則正しい足音が割り込んだ。

カッカッカッカッカッカッカ。

精悍な美貌を彩る翠の瞳、歩きたびに揺れる癖のない金の髪。

意志の強そうな眉と、堅く引き締められた口元。

黒い近衛の制服を一分の隙もなく着こなし、真っ直ぐ前だけを見据えて歩く。

そんな彼に紳士達は神妙な顔で道をあけ、淑女達はヒソヒソと囁きながら頬を染める。

それに一々反応しないのは、別段無視をしているわけではなく、余りにも日常的すぎて視界に入っていないからだ。

彼、第一近衛隊長オーランド・ジャスティア・ハジエク・ド・アルラマイン・アウラ・チェザリスは、その清廉な美貌と人柄で、人をして騎士の中の騎士と言わしめる人物である。

と同時に、些か融通の利かない人物でもあった。

彼の真っ直ぐに伸ばされた背筋は、彼の真っ直ぐな人柄をよく表

している。

そんな彼の背中に、間延びした声が掛けられた。

「お、たいちよ、おはよ〜さん」

第一近衛隊副隊長ディンゼア「セアフェル・ハジエク・ド・フィアマス・アウラ・ロトウルマである。

少し癖のある茶色の髪を結いもせず、上着を羽織っただけという姿は、オーランドに比べて如何にもだらしない。それでも剣技も知力もオーランドと比べて何一つ遜色がないことは周知の事実であり、寧ろ知略に置いては、融通の利かないオーランドよりも優れていると言えた。

そんな己の副長に、オーランドは振り返りもせず言う。

「もう『お早う』という時間ではない」

「あっはっは、そりゃそうだ。でもさっき起きたから『お早う』でいいんだよ。お前だってそうだろう?」

ディンゼアはそう言って、オーランドの横に並ぶ。

そんな彼をチラリと一瞥しただけで、オーランドは直ぐに前向き直った。

二人は夕べ夜番でもないのに、明け方まで起きていた。

青いカエルのぬいぐるみが動き出すかどうか、一晚中見張るために。

そしてカエルは動いた。

いや、動くこと自体は知っていた。

実際それを既に目撃していたのだから。

あの優秀な宰相は、動き出すことも想定して計画を立てていた。

だから、動き出したとしても、こちらの予定にさしたる支障はなかった。

はずなのだ。

それでも、五日間もピクリとも動かなかったのだから、あと二日くらい動かずにいればよかったものを、とオーランドは思わずにはいられない。

そうすれば、少なくとも自分はこのような鬱屈を抱え込むことはなかったのに。

「いや、他人のせいにしてはいかん。全ては己の未熟が招いたことだ」

オーランドは自分に言い聞かせるようにそう呟くが、言った側から夕べの青いカエルとのやりとりを思い出し、

『五月蠅いハエだと思ったら、なんと君、誘拐犯君じゃあないか』  
ガツ。

反射的に壁を殴りつけていた。

「……………」

正直痛かった。

痛いどころか、物凄く痛かった。

何せ我を忘れての行動だ。力加減も何もあつたもんじゃない。

オーランドは決意した。

今後は、手の甲も鍛えよう。

「おいおい、いきなりそんなことしたら、痛いの決まってるだろう」  
デインゼアの呆れ返ったような声に睨み返したいのは山々だったが、痛みの方が勝って身動きがとれなかった。

左手で顔を覆い、どうにか痛みをやり過ごす。

しかし日頃の鍛錬の賜物か、立ち直るのにさほど時間はかからなかった。

ふうつと息を吐き出して、姿勢とともに気持ちを立て直す。

「大丈夫かよ」

デインゼアの口調はあくまでも軽いが、長いつきあいから心配しているのだと分かる。

「すまん。ちょっと思うところがあつてな」

平静を取り戻し、再び歩き出そうとするが。

『あ、君らはいいいよ。男の名前は覚えなない主義だから』

『女性が目の前にいるのに、一体どうして男と話をする必要があるんだい？ 僕は男色家じゃないんだよ？』

『正直この国の将来なんかどうでもいいから、まあいいか』  
次々と青いカエルの無礼な台詞が思い出されて、怒りが再度こみ上げる。

「くっ、あやつつ。あのっ…」

オーランドは皆まで言えなかつた。

言つてしまえば、止め処ない怒りに捕らわれそう。

騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱してはならぬ騎士たるもの容易く取り乱しては…」。

と、一心に師の教えを心の中で唱えるが。

「ああ、ひよつとしてあのカエルのこと思い出してんのか」

デインゼアの不用意な言葉に、オーランドはカッと目を見開いた。

「私の前で今後二度と『カエル』の話はするな！」

時間が止まつた。

と、デインゼアが一瞬そう思つてしまふほど、辺りが静まりかえつた。

それまで行儀良く見て見ぬふりをしていた紳士淑女の視線が、二人へと集中する。

任務中や訓練中に声を荒げることがあつても、普段は多少無愛想な感は否めずとも抑制の利いた物静かな人物と思われていただけに、周囲のオーランドを見つめる瞳は驚愕に彩られていた。

しかも大声で言つた内容が内容だ。

(カエル？ カエルつて言つた？)

(カエルつてあの？ 水辺とかにいる？)

(第一近衛隊長殿はカエルが苦手なのか???)

(まさか！ あのオーランド殿だぞ!?)

(しかし、震えてるぞ?)

(苦手なんじゃなくて、怒ってるんじゃないのか?)

(カエルにか???)

とても耳がよいオーランドに全ての会話が筒抜けになっているなどということなど露知らず、余人の会話は進んでいく。

(おお、確かにっ。あの冷静沈着な隊長殿が震えておられる！)

(怒りか!? 憎しみか!? はたまた嘆きなのか!?)

(オレには分かる！ オーランド卿から尋常じゃない憎悪を感じる！)

(カエルにか!?)

(ああ、お勞しい！ オーランド様！)

(一体何があつてそこまでカエルを憎むんだらうな)

(さあ。さっぱり思いつかんか、しかし余程のことがあつたに違いない)

( )( )( )………一体カエルに何されたんだらう? )( )( )( )

紳士淑女達は、第三王女のぬいぐるみが盗難されたらしいという噂は知っていたが、それがカエルのぬいぐるみだということまでは知らなかった。

そのため、幸か不幸か、オーランドの口にした言葉と第三王女が結びつけられることはなかった。

お陰で第一近衛隊長オーランド「ジャスティア・ハジエク・ド・アルラマイン・アウラ・チェザリスは、何かよく分からないがカエルに甚だしい恨みを持っている、ということにされてしまった。

(うゝゝん。ある意味では間違いないんだけどな)

第一近衛隊副隊長ディンゼア「セアフェル・ハジエク・ド・フィアマス・アウラ・ロトウルマは、何も知らない彼らの無責任な噂話に真実が含まれていることに妙な感慨すら覚えた。

チラリと隣を伺い見れば、上官であり親友であり幼なじみでもある男が、常ならぬ己の失態に酷い自己嫌悪に陥っている。

オーランドは普段とても上手く隠しているため、実は彼が直情型の人間だと知る者は少ない。近衛の中にですら、そうと知らない者もいる程だ。

それを、夕べはここ数年見ないほどの直情っぷりだった。

神官長、娘子軍、そして王女付き侍従武官の前で、それを晒してしまった。

態度にこそ出さないが、そのことに酷く落ち込んでいることを、デインゼアは知ってる。

あの青いカエルの自分たちに対する態度は、神経を逆なでするのが目的としか思えないようなものだったが、オーランドがあそこまで感情を露わにするのを、実はデインゼアでさえ内心で驚いた。

(多分、相性つてヤツが悪いんだろうな)

デインゼアはそう心の中で結論づけると、慰めるようにオーランドの肩に手を乗せた。

そして一言。

「…………それは無理だろう」

今後も、カエルの話をしないわけにはいかない。

デインゼアは心の中でだけ付け足した。

勿論、水辺にいる罪のない両生類のことではなく、真っ青な色をした布製品の方である。

アレが生物なら、間違いなく有毒だろう。

オーランドがどんなに望もうとも、あの珍妙な青いカエルとは暫く関わらずにはおれないことは明白だった。

少なくとも、先王第三王女殿下がこの王城を去るまでは。

それにはどんなに短くとも、あと半年はある。

「…………分かってている。分かってはいるのだっ」

何かを堪えるように堅く拳を握りしめるオーランド。

親友の深い苦悩が刻まれた横顔を気の毒そうに見つめるながらも、その実面白がっていたデインゼアは、自分が同じ立場に陥ることをこの時はまだ知る由もなかった。

## 挿話 聖者には思いやりが必要である

行政の実質的長である宰相の仕事は多岐に渡り、尚かつ雑事も多い。

各省庁から上がってくる日々の書類に目を通し、毎日何某かの会議に出なければならぬ。省庁の連携を計るのも宰相なら、どの省庁にも属さない仕事をするのも宰相だ。

だからといって。

「まさか布製力エルの対応を任されるはめになるとは……」

一リグたりとも動かない表情でそう言ったのは、イスマイル王国の若き宰相クラリス・レヴィド・エルド・ノーザラン・ハジエク・ソルダークである。

闇に溶けそうで溶けない濃紺の髪と、思慮深い金色の瞳。

それは夜空に浮かぶ月を思わせ、美の女神スィムディエの恋人と称された故ソルダーク男爵に生き写しの美貌もあって、彼は密かに「月影の君」と呼ばれている。

密かに、とは言うが、彼が王城内での噂を把握していないはずがなく。

しかし、それを知ったときの彼の反応はと言えば。

「ケッ」

と、無表情に吐き捨てただけだった。

余りにも無口すぎて知る者は少ないが、就任したばかりの宰相閣下は非常に口が悪かった。

その彼の、細いが意外と節くれ立った手には一通の手紙がある。

印璽も差出人の名前もないそれが、娘子軍経由で届けられたのは午前中のことだった。

「ねえ、ソレ、何て書いてあった？」

どこか浮かれた様な口調でそう訊ねたのは、国王侍医シャルル・ト・ネルゼス・アウラ・ネネーシディ・ハジエク・ネラスラスだ。

目が悪い訳でもないのにメガネをかけ、実験用の白い長衣を着ている。

どこかの世界のどこかの国では、一部の女性に熱狂的に喜ばれそうな出で立ちだが、ここでは誰もそれを気に留めることはない。彼の外見で問題になるとすれば、紫の瞳を持つ「玉の聖者」でありながら、異教徒のように髪を短くしていることだろう。

「神殿に出された手紙の方には何と？」

宰相は国王侍医の質問には答えず、逆に問い返す。

シャルルートはそれを気にすることもなく、何故か踊る様に体をくねらせながら上機嫌で答えた。

「うーんとねえ、『アタシにデートの申し込みなんて百万年早いわよん　内臓洗って出直してらっしゅ』」

パスコ

ン！

「いったく〜いつつ！！　何すんのさ！」

シャルルートが後頭部を押さえながら振り返ると、

「ああ、すいません。余りにも気持ち悪かったので、生理的な拒否反応が出てしまいました」

と、黒髪の王佐ナジャ・エリアーデ・アウラ・カデイスが、ニッコリと爽やかすぎる笑顔で、部屋履きを懐に仕舞うところだった。

褐色の額に浮かび上がる赤い花の入れ墨は、夜の双性神ヨリナエティスを主神とするヨグナ教徒の証である。

アヌハーン神教の象徴とも言える「聖者」と「異教徒」。

相反するような立場の二人だが、二人の間にその手の確執は見られなかった。

「ていうかね！　君、いつも部屋履き懐に入れてんの??」

シャルルートの些か甲高い抗議にも、ナジャは笑顔を崩さない。

「勿論、入れていますよ」

「ええっ！　言い切っちゃうの??」

「ええ。何時何時、例のカサコソ動き回る黒い物体に出会うとも知れませんかからね」



落ち着き払ったナジャの言葉に、シャルルートは両手で顔を挟んで叫んだ。

「ちよつと待つて！ まさかその部屋履きっ!？」

顔を真つ青にさせるシャルルートに、ナジャはフツと遠くを見遣った。

「な、何?? その目!? その沈黙!？」

「世の中、真実を知らない方が幸せなこともあります」

思わせぶりなナジャの台詞に、シャルルートは卒倒せんばかりに叫んだ。

「ひぎゃあああああああああああああああああ!!!」

ガコッ!

「がはっ」

何処からともなく分厚い本が飛んできて、シャルルートの頭を直撃した。

その場に倒れ伏すシャルルート。

「………ナイヤード・リウリンゲル宰相閣下。コレでも陛下の侍医なので、頭が悪くなると困ります」

王佐のあんまりな言い方に、しかし宰相は賢明にも「お前の部屋履きはいいのか?」とは問い返さなかった。

「そうか。今後はもう少し薄い本にしよう」

「そうしてください」

「うむ」

国王侍医が昏倒している間に、彼に関する薄暗い約定が成立した。

十分後。<sup>マニス</sup>

意識を取り戻したシャルルートは、瘤の浮き上がった側頭部を氷で冷やしながらプリプリと怒って言った。

「も、僕の優秀な頭がどうにかなったらどうするのさ。それって、物凄い世界の損失だよ？」

僅か十二歳で医学博士を取得し、更に植物学、数学、天文学の博士号を持ち、成人と同時に「賢者」の称号を贈られた彼のことを、人は間違いなく「天才」と呼ぶだろう。

そんな彼が小国の侍医の地位に甘んじている理由は、余人には計り知れない何かがあるのだろう。というのは「聖者」に敬意を表しての表立っての意見だが。

「アナタはどつちかというと、天才とは紙一重のアレの方に限りなく近いので、ちょっとおかしくなっただくらいが丁度いいんですよ」

ナジャの言葉が端的に示すように、奇矯な素行のせいで恰も左遷されるが如くイスマイルに追いやられた、というのが大方の見方だった。

良くも悪くも神殿と繋がり深いイスマイルでなら、大抵のことは握りつぶせると考えたのだろう、と。

「何それっ。酷いっ。言っとくけどね、頭打った衝撃で記憶喪失になんかなったりしたら、今開発中の新薬の完成が遅れちゃうんだからねっ」

「おや、出来なくなるのでは？」

「何言ってるの。僕は天才なんだから、記憶がなくなっても直ぐに理解して研究を続けるさっ」

「なら、問題ないだろう」

「あ、そっか」

あっさりと言いくるめられてしまったシャルルートに、宰相と王

佐が目配せし合う。

コイツは本当に天才なのだろうか？

お互いの目はそう問いかけていたが、その答えが「是」あることもイヤと言うほど知っている二人であった。

「僕が天才なのは今更だから置いといて。そっちの手紙の内容はどうだったのさ」

頭の回転の速いシャルルートは、気持ちの切り替えも早い。

本を投げつけられた事に、何故とも問わず謝罪も求めず、好奇心の赴くままに行動する。

「全く同じ文面だな」

宰相はそう言つて、シャルルートに手紙を渡して見せた。

シャルルートは何の遠慮もなく受け取つて、素早く文面に目を走らせる。

「あ、ホントだ。同じだね」

「最後のは差し出しカエルのサインでしょうか」

ナジャがシャルルートの背後から覗き込んで言う。

「何ソレ。差し出し『カエル』って」

「差し出し『人』ではないでしょうか？」

「そりゃそうだけどさあ」

「『エウリディケ』って書いてありますね」

「鮮血の女帝ティレジナの神聖名だね。ほら、一八〇〇年前に文字通り酒池肉林を繰り返して、皇国を崩壊の危機に追いやつたっていう」

「でも、例の青いカエルは、男でしたよね」

「名前は確か『クリストファル・ウディノ・ケロタウロス』だったな」

「そう言えば『クリストファル』は放蕩王マグナートの神聖名だ。

二二〇〇年前に子供二百人作つて跡継ぎ決めずに死んじゃったもんだから、その後二十年にもわたる内戦を招いたっていう。うーん、どっちの名前もあんまり使わないよね」

スラスラと伝説上の人物の逸話を披露するシャルルルトに、感心したようにナジャが言う。

「良く覚えてますね」

「二人とも『聖典』に載ってるじゃない。ああ。ナジャはヨグナ教徒だもんね」

「そういう問題ですか？」

「二人の狂皇のことは知ってるが、神聖名までは一々覚えてないぞ。『聖典』を一言一句違えずに覚えているヤツと一緒にされてもな」  
「そんなの、物心着く前から繰り返し読み聞かせられてたら、誰だって覚えるよ」

肩を竦めながら軽くそう言う国王侍医に、宰相と王佐は「覚えねえよ」と思ったが、敢えてそれを口にすることはなかった。

天才というものは得てして、凡人の能力の限界にというものを理解しないものだからだ。

尤も、二人とも「凡人」と称するには、些か優秀過ぎる嫌いはあるが。

「しかし、この手紙で分かったことは幾つかあるな」

「そうだね」

「動くカエルは『クリス』だけではないということですね」

「布製カエルは五体あるという話だ」

「この『エウリディケ』は何色なんでしょうね」

「ああ、それは白だよ」

「何故そうと分かる？」

「だって、あの王女付きの侍従武官がそう言ってたって話だし」

「誰に聞いた？」

「マリーから」

マリーというのは、彼の幼なじみだという後宮付き神殿娘子軍の隊長である。

手紙を宰相の元に届けたのは副隊長の方だったが、彼女がそのことを知らないはずはなかった。

「何故、こちらにはその報告がない？」

「今更、何言ってるのさ。娘子軍は神殿の犬だよ？ 訊かれもしないのに君らには言うわけないでしょ。ま、僕も他人のことは言えないけど。僕の場合は犬っていうより蝙蝠かな。どちらにも情報を流してる」

まるでつきり楽しそうにそう言うシャルルートに、自分を卑下している様子は見えなかった。

大抵の聖者は、神殿に逆らえないように育てられる。

端から見ればそれは悲劇にしか見えないが、彼にしてみれば単なる事実でしかないのだろう。

しかし、メガネの奥の瞳が影っていることを二人は知っていた。

そして同時に、その鬱屈を慰める言葉がないことを。

どこか淀んでしまった雰囲気、ナジヤは徐に懐に手を伸ばした。

パスコ                      ン！

「なななななつ、何するのさ！ いきなりっ」

「いえ、蝙蝠の鳴き声って聞いたことがないので。どうなのかと好奇心が…」

「それって動物虐待じゃない！？ 動物虐待反対！！」

「本物の蝙蝠なら叩きませんよ。蝙蝠は夜の双性神の眷属と言われてますからね」

「だったら、僕を叩いても、蝙蝠の鳴き声なんか分かんないでしょ」  
「」

「何事も挑戦する心が大切って言うじゃないですか」

「それ挑戦違う！」

ガコツ。

「うっ」

「おっと」

バサツ。

何処からともなく飛んできた本に、シャルルートは見事に当たり昏倒した。

同時にナジヤは素早く避けて、本は空しく床に落下した。

ナジヤは、先程のものと比べれば少しばかり薄い本を拾い上げながら言った。

「……………クラリス。シャルルルトは運動神経が皆無なので、不意打ちは止めてあげてくれませんか」

賢明にも宰相は「お前の不意打ちはいいのか？」とは訊かなかった。

「分かった。今後は投げる前に予告しよう」

シャルルルトが昏倒している間に、またしても薄暗い約定が成立した。

**挿話 聖者には思いやりが必要である（後書き）**

同日、なんだかしっくりこなかったので副題変えました。

## Interlude

肩に掛かる希有な紫の髪を無造作にはらって、美女は言った。

「貴女には、私の願いを叶える義務があるわ」

命令し慣れた高飛車な口調に、黒髪の少女はフンツと鼻で笑って言った。

「何それ。頭おかしいんじゃないの」

「何よ！ 本当に腹の立つ子供ね！」

「それはアタシの台詞。頭のおかしい女が毎晩夢に出て、訳の分かんないこと言って、マジでムカつくんだけど」

「訳の分かんないことですよって！ キー！ ムカつく！ って、アタシの口調が移っちゃったじゃないのよ！」

「そんなのアタシが勝手にやってんじゃない。バツカじゃないの」

「バカって言った？ この私に、バカって言ったわね！」

「へ〜ん、バカバカバカバカバカ」

「何よ！ バカって言う方がバカなんだからねっ！」

そう言って地団駄を踏む美女に、少女はウンザリとした口調で言った。

「子供かよ」

少女が天を仰ぐと、まん丸い月が世界を蒼く染めていた。



## 第二一話 カエルに横隔膜はありません

最初に目に入ったのは、煌々と輝くまん丸い月だった。夢の世界だからと言って、月が二つあるわけじゃない。

月は一つ、太陽も一つ。

東から上り、西へと沈む。

残念ながら太陽の姿を拝んだことはないけれど。

この世界は人も動物も植物も、現実の世界とよく似てる。

だからといって同じとは限らない。

この世界の生物が、酸素じゃなくて窒素で呼吸していない保証はない。

何せケロタンには、そもそも肺が存在しないのだ。

カエルはちゃんと肺呼吸なのに。

因みにカエルには横隔膜はないので、口をポンプの様に使って肺に空気を送り込む。非常に効率の悪い呼吸方法だけど、大抵半分くらいは皮膚呼吸なので、カエルにしてみればそれで十分なのかもしれない。

なんてことを考えながら、アタシは今宵の自分を確認する。

吸盤の付いた赤い手はケロタン一号、正式名アンドリユー・サルダス・ケロタウロス、通称リユーの証である。

赤いボディに緑の腹のコントラストが目痛いけど、一号の中身はもつとイタイ。

「とっつ！」

アタシは変身ヒーローさながらに掛け声を上げると、クルリと宙返りしてカウチから飛び降りた。

生身では流石にもう無理だけど、小学校の頃体操教室に通ってたアタシには、宙返り程度ならお手の物だ。

ただ言うまでもないことだけど、着地の後の決めポーズは二十歳過ぎた女のやることじゃない。

でもそれが一号ってヤツなのだ。

別に王妃は、変身ヒーローを指定してきたわけじゃない。

けれど、「自由をこよなく愛する流離いのトレジャーハンター」なんて、十二のアタシには全く想像つかなかったのだ。

単純に性格がフリーダムなんだろうなと考えたアタシは、クラスで一番フリーダムな男子がいつもヒーローごっこをしてたので、それを参考にしてみたのだ。

アタシは一号になりきるために、毎週日曜日に早起きしてはヒーロー番組で勉強した。

叔母さんは、

「澄香は、男の子の番組が好きなのねえ」

なんて言ってたけど、別に好きで見てたわけじゃない。

ただ実際、物凄く役に立った。

敵を倒すアクションとか決めポーズなんかをしてみせると、リズが物凄く喜んだのだ。

問題は、一度固定してしまったキャラは、今更もう崩せないってことである。

「リユー！」

リズがアタシを振り返る。

こんな夜更けにバルコニーに出て何をしてるのかなんて、一号は訊かない。

二号なら「今夜の月は格別に美しいね。子リスちゃん、君もいつかあんな風に輝くばかりの女性に成長するだろう」なんてクサイ台詞を吐きだして、三号なら「あらやだ、寝不足は美容とお肌の大敵よ！」とか言っただけ強引に部屋に連れ戻し、四号なら「体を冷やして風邪を引いてしまっただけはいけないから、中にお入りなさい。話はそれから聞きましょう」と、やんわりと諭すだろう。五号なら、内心で風邪を引かないかヤキモキしながら、無言で隣に佇むだけだ。

でも一号はフリーダム。

「よ！ リズ！ いい夜だな。月はどっちに出てる？」

いきなり問いかけられて、リズは目を丸くする。

大きな目もつと更に大きくなって、物凄く可愛らしい。

「えっと、南かな」

「風はどっちに吹いてる？」

「えっと、多分、北西かな」

「フン。こんな夜は航海日和なんだがなあ」

と言つて、ぴよんとバルコニーの手すりの上に立つ。

勢いが付きすぎて下の植え込みに落ちたのは一度や二度じゃない。その度に侍女さん達に繕ってもらわなきゃならなかったけど、それを臆さず、尚かつ同じ危険を冒してしまうのが一号である。

ま、落ちたとしても、ケロタンの体なら何の支障もないから出来る事なだけどさ。

因みに、船旅なんてしたことのないアタシには、航海日和つてのがどんな日なのか、皆目見当も付かないんだけど。フリーダムな一号は、そんな細かいことなど気にしない。

「リズにもいつか海を見せてやりたいぜ」  
内陸にあるイスマイルには海がない。

周りを山で囲まれ、尚かつ高地にある。それが天然の要塞となつて、お陰でイスマイルは建国以来戦知らずだ。

二百年ほど前に大国から攻め込まれたんだけど、敵軍は高山病にかかつて、スゴスゴと引き返してしまつたらしい。高山病になるのは二千メートルくらいからで、富士山で言えば五合目に辿り着く前に、なる人はなる。現実世界の気と人体の生理学的な条件が同じとすれば、イスマイルの標高はそれ以上つてことになる。

多分イスマイル人は、全員強靱なスポーツ心臓の持ち主に違いない。

この可憐なリズもそうかと思うと、何だか不思議な感慨がある。

「海なら、絵で見たことがあるよ」

リズの声は心なしか沈んでる。

月が南中に差し掛かるうとしてるこんな夜更けに、十二の女の子

が眠れないなんて何かあったに決まってる。

でもアタシは敢えてその事には触れないで、

「バカだなリズ。百聞は一見にしかずだぜ。四角い額縁に収まった絵なんかじゃあ、海のデカさは分からない。海を見たら、そりゃもうぶったまげるぜ！」

上機嫌にそう言つて、意味もなく月を指差す。

アタシの思い違いじゃなければ、ヒーローってヤツは何でもかんでも指差したがるものだ。

「そんなに大きいの？」

目をパチクリとさせて、リズがそう訊ねると、

「そうだな。でっかい海つてヤツを眺めるとな、自分がちっぽけに思えて、悩みなんかどうでもよくなつちまう」

一号は悩みの全くなさそうな脳天気な口調で言つて、ガハハと笑つた。

「そうなの？ 見てみたいなあ、海」

リズはポツリとそう言つて月を見上げた。

月の光に照らされたリズは幻想的で、まるで妖精のようだ。

憂いを帯びて陰る瞳はこの上なく綺麗だけれど、アタシは全然嬉しくない。

折角二号が無事に帰ってきて、リズの安眠が守られると思ったのに。

神殿や宰相から、何か言つて寄越してきやがったんだろうか。

もしそうなら、勿論アタシは許さない。

以前、リズに酷い嫌がらせがあった。

リズに直接何かをしかけたわけじゃない。

レゼル宮から出ないリズに直接接触すること自体が難しいからだ。でも物凄く悪質だった。

動物の死骸を庭に投げ込んだり、毒の入ったお菓子を匿名で届けたり。

大体が、第二正妃と第三正妃の仕業だ。

血筋ランク三位のイスマイルでは、王女は優良な「輸出品」だ。

正妃達にはそれぞれ娘がいて、勿論縁談は山の様になる。

けれどリスが生まれて、しかも聖者らしいと知られてからは、縁談相手の格が確実に下がってしまった。

誰だつて、より良い品を欲しがるもんだ。

つまり、娘の嫁ぎ先のランクが落ちた腹いせつてヤツである。

第一正妃が静観を決め込んでいるのは、そんなことでギヤーギヤー騒ぎ立てるのは、彼女のプライドが許さないんだろうと思う。何せ大國ナデシスの王女様だ。イスマイル貴族出身の他の二人とは、プライドの高さも質も違うんだろう。

チラツと覗き見た彼女は、美人と言うよりは頭の良さそうな人で、物凄く凜とした印象だった。

それに比べて、第二正妃は癩癩持ちで、第三正妃は陰湿だ。

勿論報復は念入りにさせてもらった。

犯人捜しは、侍女ネットワークの盗み聞きでやった。

例の、宰相のカエル盗難疑惑を広めたネットワークである。

貴族だとかの高貴な人間ってのは、侍女や女官を家具かなんかの一部と思ってる節がある。

つまり人間と認識していないから、好き放題に喋るのだ。

それで、動物の死体を投げ込ませたのはヒステリー持ちの第二正妃で、毒入りお菓子を送りつけてきたのは、陰険な第三正妃と分かっていたわけだ。

当然の如く、アタシの報復行動も侍女さん達の間で噂になった。

曰く、ある朝第二正妃が目覚めると、床と言わず天井と言わず真っ赤な血文字で「死<sup>アシス</sup>」だとか「殺<sup>カッサード</sup>」だとかいう文字が殴り書きされており、部屋中に謎の白い鳥の羽が舞っていた。誰が何のためにやったのかは不明だが、とても人間技とは思えない。

曰く、ある朝第三正妃が目覚めると、お気に入りビスクドールの首が、血にまみれの状態で天井から鈴なりにぶら下がっており、床には異臭のする液体がまき散らされていた。誰が何のためにやっ

たのかは不明だが、とても人間技とは思えない。

あれはね、一晩丸々かかったよ。はっはっは。

因みに、「血文字」だとか「血まみれだ」とかは、単なる赤い塗料である。

後宮の隅にある倉庫から失敬した物だ。

アタシは動物の命を粗末にするヤカラは死ねと思うし、リズにいやがらせするようなヤカラはやっぱり死ねと思う。けど実際に殺すのは躊躇われるので、ちよつとばかり恐怖に戦って貰おうと思ったわけだ。

第二正妃も第三正妃も、外聞を慮って表沙汰にはしなかった。

勿論、しないと分かっていてやったんだけれど。

表沙汰になったところで、じゃあ誰がやったんだってことになる。どう考えても人間の仕業じゃない。だったら正妃は「悪霊憑き」なんじゃないか、なんて噂を流されかねないからだ。

悪霊も神様の眷属である精霊の一種なんだけど、気に入らない人間に神様が遣わすのが悪霊だ。

神様に愛されてるのが聖者なら、神様に疎まれているのが悪霊憑き。

そうだったら、王女達の縁談が更に減るのは間違いないってワケである。

お陰で、それ以来第二正妃と第三正妃からの嫌がらせはなくなつた。

今回だって、宰相だろうが神官だろうがリズを困らせるヤツは許さない。

「リズ、イヤなことがあったなら、俺サマに言えよ」

アタシはグツと親指を立てて、頼もしく笑って言った。

するとリズは、困ったみたいに眉尻を下げて、

「ありがとう。でもイヤなことがあったわけじゃないの」

「じゃあ、何があった？」

「今日、イシユ・ローザベルが来て言ったの」

イシュ・ローザベルは、リズの教育係の神官さんだ。

「父様の喪が明けたら、ここを出て神殿に來ないかって。私、ここを出なきゃいけないのかなって思うと、物凄く寂しくなっちゃったの」

リズはそう言い終わると、小さくため息をついた。

「どうやら、神殿が本格的に動き始めたらしい。」

さて、どうするアタシ？

第二一話 カエルに横隔膜はありません（後書き）

子供の頃はバック宙もできたんですけどね。重力にはもう逆らえ  
ません。



## 第二二話 カエルに横隔膜はありません その2

ともかく、神殿に答えを出すにしても半年は猶予がある。

神殿側は準備があるからとかなんとか言っただけで返事を早く聞きたがるだろうけど、そんなものはほっときゃいいのだ。

「リズがレゼル宮に居たいのなら、居ればいいさ。リズの兄ちゃんなら、泣いて喜んで飛び上がるぜ」

一号の脳天気な口調でアタシは言った。

あのヘイカが実際そんなことをやるとは思えないけど、そうなたら是非でもやらせよう、と心に誓う。

「周りのことなんか、関係ねえぜ！ 後のことはまかせとけ！」

アタシは親指を立ててニツカリと笑って言った。

一号は頼もしい男だ。

但し、頼れるわけじゃない。

何せフリーダムな一号は、自分の言動に責任を背負わない。

言いたい事を言っただけ、やりたい事をやるだけだ。

誰もが憧れるけど、実在すれば間違いなく傍迷惑な人間だ。

多分、聖者として或いは王妃として常に大きな責任を背負わされたアデーリアは、そういう人間に憧れたんだろう。神殿や王宮に閉じこもった生活も、トレジャーハンターなんて職業を夢見る要因になったに違いない。

因みにこの世界でのトレジャーハンターってのは、『名の秘された皇国』時代の遺跡の発掘が主な仕事だ。新しい遺跡を発見すれば、神殿から莫大な賞金が出るらしい。

リズもアデーリアと一緒に、一号には憧れている。

一号の荒唐無稽な冒険話に、幼心を時めかせながら聞き入るのだ。「リズ、眠れないんなら、何時だったか女の子と旅した時の話をしよ。竜巻に家ごと吹っ飛ばされて無事だったっていう、不幸なんだか幸運なんだか分かんねえ女の子なんだがな」

アタシはそう言ってリズをベッドに寝かせた。

「竜巻って何？」

リズは毛布を被りながら興味津津で訊いてくる。

「お、竜巻のことは教えてなかったかな？ 竜巻ってのは…」

何だったっけ？

アタシはちよつと考えた。

何時だったか竜巻が頻発したってニュースで話題になったことがある。

確か積乱雲で渦巻き状の上昇気流が発生して、それが地上にまで伸びたものが竜巻だったと思うけど。勿論そんな解説楽しくない。

「風の精霊が回転舞踏でぐるぐる回ってたら、勢いがつきすぎて止まらなくなっただってヤツさ」

回転舞踏ってのは神官が儀式の時に踊る奉納舞ってヤツで、見たことはないけれど、ひたすらぐるぐる回って神に祈りを捧げるらしい。

どう考えても気分が悪くなりそうだけど、多分、気分が悪いのを乗り越えて初めて神様に祈りが届くってなノリなんだろう。アタシなら、どんなバツゲームだよって思うけど。寧ろそんな祈りを捧げられた神様も、迷惑なんじゃないだろうか？

「じゃあ、その女の子のお家は、風の精霊の回転舞踏に巻き込まれて飛ばされちゃったの？」

「そうさ。しかも別の世界に」

「別の世界！？」

この世界では神様が住むのが「神界」、人間が住むのが「現界」、その間にあるのが「夢幻界」で、それらひっくるめて一つの世界でありそれ以外の「世界」は存在しない。ってことになっている。

けれど物語や伝説の中に「異世界」はちゃんとある。こちらの世界にも「浦島太郎」だとか「壺中天」に似た話が存在してるのだ。

「そう。俺はたまたま女の子が飛ばされた所へ行き合わせたんだ。

で、俺は女の子に教えてやった。『この世界は魔法使いが支配して

いて、元の世界に帰るためにはその魔法使いに会いに行かなきゃなんねえぞ』ってな」

一号の言葉に、リズがハッと息を飲む。

魔法のないこの世界では、魔法使いもまたフィクションでしかありえない。けれど魔法使いつてのは、何と言ってもイメージが悪い魔法使いは精霊を無理やり捕まえて使役するとされていて、神様の眷属たる精霊をそんな風利用するのは神への冒瀆であり、そのため魔法使いは必ず悲惨な最期を遂げることになっている。

だから一号版『オズ』には、ヒロインに加護を与える魔法使いは出てこない。

「魔法使いに会いに行くなんて、危ないわっ」

リズが一号の赤い腕をギュッと握って訴える。

必死さの滲む紫の瞳には、既に物語の世界に引き込まれていることが見て取れる。

そんな姿を心の中で微笑ましく思いながら、アタシはあくまでも素知らぬふりで肩を竦めた。

「俺もそう言ったさ。それでもドロシーはどうしても元の世界に帰りがたがった。おじさんとお婆さんのいる世界へね」

「おじさんとお婆さん？」

リズが小首を傾げて訊ねてくる。

アタシはそれに頷き返し、

「彼女の両親は彼女が小さい頃に死んじゃったのさ」

「私と同じ？」

リズは訊ねるように呟いた。

アタシはそんなリズの頭を撫でる。

「そうだな。おじさんとお婆さんはいつも忙しく働いていて、ドロシーとは余り遊んではくれない。いつも難しい顔をして、ドロシーの頼みごとを聞いてくれやしない。それでもドロシーはお家に帰りたいと言ったんだ」

リズは少し考え込むように俯いた。

リズの周囲の女官さんや侍女さんたちは、何時も忙しく働いている。勿論、常に誰かが側にいて相手をしてくれるけど。リズはそれが彼女たちの仕事だって知っている。

愛情を感じないわけじゃない。けれどもそこには確かに隔たりがある。

リズが、ドロシーと自分を重ね合わせていくのが手に取るように分かった。

きっとリズは、同じ状況になった時自分ならどうするだろうって、その小さな頭で考えているのに違いない。

「どうしてドロシーは帰りたかつたのかな？」

リズは答えを欲しがるけれど、アタシはそれには応えない。

「さあね、人間じゃねえ俺には分からんよ。けれど俺は、そんな小さな女の子の魔法使いに会いに行こうって心意気に惚れたのさ。だから俺はついていくことにしたんだよ」

リズに分かって欲しいのは、リズ自身が本当に何を望んでいるのかって確り考えなきゃいけないってことだ。この先どんな道を選ぶにしても、それを分かった上でして欲しいのだ。

もしそれが分からないままだと、後悔すらできないからだ。

旅の途中、ドロシーは仲間たちに出会うだろう。

そうだな。浮気癖の治らない案山子と、厭世家のブリキの樵、刺繍が趣味のライオン、それから生意気でコケティッシュなニワトリなんてどうだろう。勿論モデルはケロレンジャーだ。となると一号だけそのままってわけにもいかない。

「俺はその時、カボチャ頭をやつててな」

カボチャ頭とニワトリは『オズシリーズ』の別の話に出てくるキャラだ。

話が変わることになるけど、キャラが足りないんだから仕方がない。

彼らは力を合わせて次々と立ちはだかる五人の魔物を倒し、ついでに魔法使いも倒しちゃおう。

五人の魔物は、直情噴火男、マッドな眼鏡、慇懃腹黒、色気過多に鉄面皮。

言わずと知れたにつくき宰相連中がモデルである。

けれど結局のところリズは、浮気癖の治らない案山子に出会った辺りで寝入ってしまった。

そもそもリズに夜更かしは無理なのだ。

リズは日中、勉強だけじゃなく礼儀作法やダンスのレッスン、楽器の練習だとか護身術だとか、なんせやるべきことがてんこ盛り。これで眠たくなれないわけがない。

リズの教育の殆どを監督してる神殿なら、その状況を知らないはずがないのに、何故この時期にリズの心を煩わせるようなことを言い出したりしやがったんだ。

そついやあ、二号が必要以上に宰相の手元に置かれたのは、神殿の意向もあつたはずだ。

まさかりズを不眠症にさせるのが目的なんじゃないだろうな。

なんて冗談は置いておいて。

神殿つてのは、基本的にリズを大切に扱っている。

けれど、世の中自分が正しいと信じている人間程質が悪いものはない。

独善的過ぎて、他者の意思を尊重しない。

自分たちは正しいことをやっているのだから、彼らも何時かそれを理解して受け入れ感謝するだろう、なんてことを平気で言いやがるのだ。

アディーリアはそんな彼らの典型的な被害者だ。

リズの父親との出会いすら、神殿が仕組んだものだった。

二人の間に愛情が生まれたお陰で、決定的な悲劇にならずには済んだけど。

リズもそうならないようにすることが、アタシの使命だ。

アタシはリズの手を毛布の中に仕舞いこみ、その隣に寝転がる。

さて、今夜はおとなしくリズの側でいるとしよう。

本当は、隠し通路を使って情報収集したかったんだけど。

勿論宰相達の動向を知るためだ。

『麗華門をくぐらずに後宮を抜ける方法なら、そののヘイカとやらがよく知ってるじゃないか』

三日前の夜、去り際に二号が残した言葉。

よっほどのボンクラじゃなけりゃあ、隠し通路を調べるはずだ。

ま、隠し通路の道標はアタシがすっかり削り落しちやってるから、そりゃもう迷いまくったことだろう。

ふふん、ザマーミロってんだっ。

アタシは連中の右往左往する姿を思い浮かべて、ほくそ笑む。

ただ、連中がそれにどう対処したのかも気になるところだ。

三日もあれば、正しい道を見つけることもできただろう。

こんな風に過ごしてる間に、連中はそのタペストリーの掛った壁の向こうにいるかもしれない。

或いは、仕返しとばかりに、アタシが書いた道標を削り落したりもしたかもしれない。

アタシなら、間違いなくそうしてる。

そうなったら、次の手段を考えなきゃ。

なんてことをつらつらと考えてたら、ふと気がつくとき空が白みがかっていた。

今夜はこれでタイムアウトだなと、遠のいていく意識の隅で思った。

起きたら恵美に「く、くれないてんにゃ」の意味について訊ねてみよう。

と思ったのに。

目を開けると、そこは薄暗闇の空間で。

「オゲー。オゲゲゲゲエー」

緑の腹の真っ赤なカエルが、何か吐いてんのか？ って感じの声で鳴いていた。

酷く具合の悪そうな鳴き声だけど、赤いカエル自身は至って元気そうである。

「オゲエ。オゲエエエエ、オゲー」

どうやらアタシは、「カエル間転送」の場面に来ちゃったらしい。その時になってアタシは初めて、目覚まし時計をセットし忘れてたことに気がついた。

### 第二三話 カエルに横隔膜はありません その3

オゲゲー、オゲエ、オゲー。

アタシが夢の世界から「離脱」する条件は、今のところ三つ。  
オゲゲー。

夢の世界で夜が明けること。

オゲエ。

現実の世界で、目覚ましが鳴ること。

オゲゲゲエ。

それから、現実の世界でアタシの体が危険に晒されること。  
オゲー。

三番目の条件は、定かじゃないんだけど。

オゲゲゲ、オゲ、オゲエエ。

ただ、先の二つの条件以外で目が覚めたとき、そこには殆ど必ず  
と言って良い程恵美がいた。

オゲ。

腕を大きく振りかぶった恵美だとか。

オゲゲゲ。

肘を構えた格好でのし掛かろうとした恵美だとか。

オゲエー。

背後からスリーパーホールドを掛けようとしていた恵美だとか…。  
オゲゲー。

実際に攻撃を受けたことはないけれど、どう控えめに言っても恵  
美の行為はアグレッシブすぎる。

オゲゲ、ゲゲ、ゲエー。

それでも恵美がいることで、ちゃんと現実に戻る保証がある。  
オゲー。

うん、大丈夫。

オゲゲゲゲー。



アタシは、どうにか冷静さを取り戻した。  
オゲエエエエ。

「ていうか、五月蠅いっ」

「オゲッ」

アタシは真つ赤なカエルと見つめ合った。

カエルは数瞬の間沈黙を守った。

けれど。

「オゲゲゲエエー、オゲー、オゲゲゲエ、オゲオゲ、オゲエ、ゲ  
エオゲ、オゲゲゲ、オゲエエ、オゲー、オゲオゲ、オゲッ、オゲ  
ッオゲゲッ、オゲゲゲエエ、オゲー」

「あゝ、分かった、分かった、分かったからっ」

思いがけない大音量に、アタシは耳を塞いで言った。

何が分かったのか全然分かんないけど。

「取り敢えず、冷静に話し合おう」

冷静になって何を話し合うのかは、全くもってサツパリたけど。

「オゲー」

それは了解か？ 了解したのか？

アタシはカエルの表情をマジマジと伺ってみたけれど、カエルの表情なんて分かるはずもない。そりゃそうだ、そもそもカエルに表情筋がない。多分、あの鉄面皮宰相もカエルの無表情っぷりには負けるに違いない。ていうか、勝ったらヒトとして終わってる。

「え〜と」

アタシは前回、この薄暗い空間に来た時のことを思い出す。

あの時目の前にいたのは青いカエルで、青いカエルに付いていっ  
たら青いドアがあつて、青いドアをくぐったら二号の中に入ったと  
「つまり、今回はアンタについていったら赤いドアがあつて、赤い  
ドアを潜ったら、一号に入ると」

てか、さっきまで一号に入ってたんだけど。

わざわざ「どこ もドア」じゃなくて「カエル転送ドア」を使う  
必要はないんじゃないか。

アタシがそう言うと、赤いカエルは目を半眼にしてジツトリと見つめてくる。

その目が言っている。

なんて残念な子なんだ、と。

表情筋がなくなっても、何考えてるのかは分かるらしい。

これは確実に呆れてる。若しくは馬鹿にしてる。

両生類に馬鹿にされた！

ガンツとシヨツクを受けて、次の瞬間ハツとなった。

いや待て。そんな種差別主義的なる見では、今後カエルとつき合っていくのに支障を来す。そもそも人間は優れた動物ではない。食物連鎖の頂点に立つてもいないし、文明は知性の高さの証明になりはしない！ それらは全て、人間至上主義者によるプロパガンダに過ぎないのだ！

「……………」

「…………… オゲ」

「ゴメン、今ちょっとどっかに飛んでたわ」

「オゲエ」

カエルはアタシを慰めるみたいに、小さく鳴いた。

その後、何だかよく分からないままに、アタシはカエルの後を付いて歩くことになった。

「オゲゲ、オゲエ、オゲゲゲ、オゲエエ、オゲ？」

器用なことにカエルは飛び跳ねながら、鳴いた。

それはまるで何事かを説明している様に聞こえなくもなかったけれど、相変わらず何を言っているのかはサッパリだった。

けれどアタシは返事した。

「ふん、そうなんだ」

一体何に対して「そう」なのか、言ってる側からサッパリだけど。

「オゲー、オゲゲエ、オゲエエ」

「ふんふん、それで？」

「オゲゲ、オゲ、ゲ、オゲエ」

「へ〜、そういうワケだったんだ」

言いながら、一体どういうワケなのか、誰でも良いから説明して欲しいと思った。心の底から切実に。

そう言えば昔、これと同じような会話をしたことがある。

勿論相手はカエルじゃなくて人間だけだ。

まだリズが小さい頃、言葉もちゃんとしゃべれなくて、アタシ自身もまだ夢の世界の言葉をちゃんと使いこなせなくて。何事かをフニヤフニヤ語りかけてくるリズに、アタシはワケも分からず「へ〜、凄いな〜。へ〜、そうなんだ〜」なんて相槌を打ったものだ。

リズはキャツキャツと喜んでいたので、結局内容はサツパリだったものの、ちゃんと会話として成立していたんだらう。

それにしたって一体こは、どういう空間なんだらう。

アタシはふと思って、周囲を見渡してみる。

三六〇度、何処を向いても「果て」がない。

上を向いても薄暗くて、空があるのかどうかも定かじゃない。

月や星でもあれば、距離感だとかもあるんだらうけど。

それすらも分からない。

確実なのは、歩ける地面があるってことだ。

このまま果てしなく歩かされるんじゃないだらうか？

そう不安になった時。

「オゲエ」

赤いカエルが立ち止まって、一際高く鳴いた。

すると、どこからともなく別の声。

「キュルルルルル」

てか、腹の虫??

声の方を振り返ると、いつの間にそこにいたのか、ピンクの腹の白いカエルが鳴いていた。

「キュルキュルキュル〜」

白いカエルはドライアイでもあるまいし、デカイ目をやたらとパチパチ瞬きさせている。

その白いカエルに、赤いカエルが何事かを鳴いて伝えた。

「オゲゲゲゲエー」

「キュル〜」

嘔吐と腹の虫。

まともに鳴けるカエルはいないのか？

そう思ったら。

「ゲコ、ゲコゲコゲコ」

おお、コレだよコレ！ これぞカエルの鳴き声だよ。

と、またも声のした方向を振り返る。

そこにいたのは、黄色い腹の青いカエル。

多分、この前出会ったカエルだろう。

カエルの個体識別はできないけれど、こんな色合いのカエルなんて世の中に二匹といえないに違いない。と思う。

ま、何事にも絶対はない。

絶対の正義も絶対の真実も絶対の愛も、世の中には存在しない。

なんて五号みたいなことを思ってたら、やたらと強い視線を感じた。

「ん？」

強い視線の主を捜して当たりを見回すと、紫の腹の黒いカエルがジイイイイイイイイイイイイツとアタシを見てた。何だろうと思っただけを合わせてみるも、黒いカエルはピクリとも口を動かさそうにない。

そんな一人と一匹を差し置いて、赤と白と青のカエルが何事かを話してる。

「ゲコ〜、ゲコゲコ、ゲコ〜」

「キュルルルルル」

「オゲゲー、オゲ」

「キュルツ」

「ゲコゲコゲ」

「オゲゲゲ、オゲエ、オゲ」

彼らには、せめて人語を話すという親切心はないんだろうか？

アタシは思った。

ないんだろうな。カエルだもんな。

これまた思った。

勿論、ここまでくればアタシにだって分かってる。

これらのカエルが、一号、二号、三号、五号に関係してるとてこ  
とくらい。

でもその関係性は全く以て掴めない。

誰か説明してくれないかな。

アタシは果てのない「空」を見上げると、見えない星に向かって  
祈った。

すると祈りに応える様に、鈴を転がす様な鳴き声が出た。

「ケロロ」

この涼やかな鳴き声は、きつとケロレンジャーの良心四号に違  
ない！

バツと振り返ると、確かにそこにはオレンジの腹の緑のカエルが  
佇んでいた。

「ケロロ、ケロ、ケロロロ」

「よんご〜う〜」

アタシは緑のカエルに飛びついた。

いや、飛びつこうとしたんだけど、バツと素早く避けられた。

それから鈴を転がすような可憐な声で。

「ケロ、ケロロケロ、ケロケロケロ、ケロロ、ケロ、ケロロロロ

ロ！」

多分アタシは怒られてる。

そりゃそうか。アタシなんか飛びついたら、カエルなんか潰れ  
ちやうわな。

でも上手くいったら、シャツに張り付いて例のあの根性溢れる平  
面カエルができあがるかも…。

と、ちよっぴり期待したことは内緒だ。

特にけたたましく鳴いている緑のカエルに対しては。

だって、夢の中なんだもん！ ちょっと夢見たっていいじゃないか！

とは勿論口が裂けても言えないので。

「ごめんなさい」

素直に謝っておいた。

「ケロ〜」

緑のカエルは仕方がないとも言いたげに、ため息混じりに鳴いてくれた。

何だろっ、アタシ、物凄くダメな子になった気がする。

これで全てのケロレンジャーに対応するカエルが揃ったわけだけど。

「オゲゲゲゲ、オゲエー」

「キュルキュルル、キュルルッ」

「ケロケロ、ケロロ」

「……………」

「ゲコゲコ、ゲエコオオ」

アタシを置いてきぼりにして、何やら話し合いが始まったらしい。

「キユキユッ」

「オゲエ、オゲー」

「……………」

「ゲコツ、ゲエコ、ゲコツ」

「ケロロ、ケロ」

相変わらずサツパリ何を言っているのか分からない。

けれども、そんなカエル達の話も何某かの結論を見たらしい。

カエル達がアタシを見ながら言った。てか鳴いた。

「ケロ」

「キュル」

「オゲ」

「ゲコ〜」



第二三話 カエルに横隔膜はありません その3 (後書き)

どこかドアって道具があるらしいです。

どこにいくのかわかんないドア。いらなと思います。



## 第二四話 カエルに横隔膜はありません その4

最初に目に入ったのは、煌々と輝くまん丸い月だった。その光景に軽いデジャ・ビュを覚える。

続いて聞こえてきた声に、その感覚は更に強まった。

「リズにもいつか海を見せてやりたいぜ」

わははははと、脳天気な笑い声が夜空に響く。

この頭の悪そうな笑い声は!?

ガバリと体を起こしてみれば。

バルコニーの手すりにもたれているリズと。

バルコニーの手すりの上に立っている、赤いカエルのぬいぐるみ

!?

なんで??

ハツと自分の体を見てみると、オレンジの腹に緑の手足。

ケロタン四号、ミリーである。

どうなんてんの!?

頭を抱えようと手を挙げれば、おめでたい程デカイ花に阻止された。

一瞬花をむしり取りたい衝動に駆られたけれど、縫いつけてあるので勿論無理だ。

驚きと苛立ちが緋い交ぜになり、アタシは脳天気には喋り続ける赤いカエルを恨みがましく睨んだ。

「バカだなりズ。百聞は一見にしかずだぜ。四角い額縁に納まった絵なんかじゃあ、海のデカさは収まりきらない。海を見たら、そりやもうぶつたまげるぜ!」

それは間違いなく、数時間前にアタシが言った台詞だ。

赤いカエルのぬいぐるみは、アタシの記憶にある通り意味もなく月を指差す。

端から見ていると、何か、物凄く頭が悪そうだ。

アタシは一号をバルコニーから蹴落としたい衝動に駆られた。  
恥ずべき過去は抹消せねば！

けれど勿論、一号を蹴落とすわけにもいかない。  
過去が変わってしまう。

タイムパラドックスとか何とか、そう言うのが起こって面倒な事態になると困る。

一体何が起こるのか皆目見当も付かないけれど。

或いは、そういうのが起こらない様に過去には干渉できない様になっっているのかもしれない。

試してみる価値はある？

狙いを定めるつもりで、アタシは赤いカエルの背中を見据える。  
けれど不意に我に返って気が付いた。

四号が一号を蹴飛ばすなんてことはあり得ない。

これが三号だったなら「何頭の悪い事言ってるのよ！」と蹴飛ばしてもおかしくはないけれど。

面倒見の良いお姉さんキャラのミリーは、五号以外のケロタン達を「あの子」と呼んで「バカな子程可愛い」という態度をとっている。

つまり、リズに四号の暴拳など見せるわけにはいかないのだ。

アタシは全身の力を抜いて、カウチに背中を凭せ掛けた。

そもそも一体全体どうしてこんなことになってるのか。

あのカエル共はアタシに何をしたのか？

ひょっとして、前回五号から二号に移った時も、時間の重複があったんだらうか？

ただ、別の場所にいたからそれと分からなかったっただけで。

てことはつまり、あの薄暗い空間では時間を遡れるんだらうか？  
アタシの乏しい知識によれば、通常有機生命体は同時に二つ以上の場所には存在し得ない。

でも今ここにいるのもアタシなら、あそこで意味もなく笑っているのもアタシである。

う～～んと。

え～～と。

そうか！

アタシは今、少なくともこの世界では「有機生命体」ではない！  
布製カエルに憑依している何モノかだ！

.....

自分で言っただけ、何か、微妙なイキモノになっちゃった気分だ。

アタシは微妙に落ち込んだ。

そうこうしていると。

一号がリズを連れて部屋に戻ってきた。

間違っても一号とは視線を合わさぬ様にと虚空を見る。

アタシはぬいぐるみ！ タダのぬいぐるみよ！

と、恵美の演技指導を思い出して、自分にそう言い聞かせた。

あの時は何でこんな事やらされるのかと思っただけ、まさかソレが役に立つとワ！

「リズ、眠れないんなら、何時だったか女の子と旅した時の話をし  
てやろう。竜巻に家ごと吹っ飛ばされて無事だったっていう、不幸  
なんだか幸運なんだか分かんねえ女の子なんだがな」

「ええ！？」

そんなことを話しながら、リズと一号がアタシの前を通り過ぎて  
いく。

あの時、アタシはここにいたんだ。

つまり既にアタシは、このワケの分からない状況に陥ってたって  
ことである。

そう考えると、ゾツとなった。

一体全体アタシに何が起こってるのか。

アタシは悩んだ。

『スタートレック』と『スターゲート』、どっちが参考になるだ  
ろう。

……。  
ま、全ては夢だといえば夢なのだ。

今更深刻ぶったところで、この不条理から逃れられるわけもない。だったら、この状況を最大限に利用するだけの話だ。

夢の中で子育てしてきたなんていう九年間の「非常識な経験」値は、伊達じゃないのだ。

一号とリズが天蓋のカーテンの内側に入ったのを見計らって、アタシはソロリと起きあがった。

心が決まれば、やるべき事は唯一つ。

勿論、隠し通路を使って宰相連中の動向を探りに行くためだ。

本来ケロレンジャーの女子達は、「冒険」をしない。

というのも、リズには女の子が夜出歩くのは危険だと言い聞かせたのであるからだ。

言ってる本人がそれを破ってちゃあ、意味がない。

タバコを吸ってる教師に、「タバコは百害あって一利なしだから止めなさい」なんて言われても何一つ説得力がないのと同じだ。

ただ、キツチリそれを守るのが四号で、敢えてそれを破るのが三号だ。

だから時々三号の足の裏は汚れてる。

それに気づいたリズが拗ねたり怒ったりするのが、これまた可愛いんだけどさ。

アタシは、一号に気づかれない様、カウチから這いずる様にして降りた。

ベッドとは逆方向に、匍匐前進で這っていく。

目指すは、飾り棚の奥の隠し扉だ。

地下水路へは、タペストリーの奥の隠し扉を使う方が早い。

けれど、その隠し扉を開けるには、壁に掛かっている風景画を回さなくっちゃいけない。

ところが、ケロタンの背丈じゃあ踏み台のための椅子が必要だ。

幾ら何でも、椅子を運んでたらバレるだろう。

だからちよつと遠回りになるけれど、飾り棚の奥の隠し扉を使うことにしたわけだ。

そこから続く隠し通路はレゼル宮内を巡ってるけど、地下水路への隠し通路とは隠し扉で通じてるのだ。

飾り棚は、高さが大体七十センチ、幅一メートル二十センチくらいだろうか。

脚はなくて、十センチ程のちよつと高めの土台がある。

アタシは飾り棚の意匠の一つをポチリと押した。

すると、土台から上の部分が滑らかにスライドする。

床にキズが付くのを防ぐための工夫だろう。

そのお陰か、隠し扉の作動音は静かなものだ。

時代が違うのか、仕掛けそのものが違うのか、地下迷宮のそれが派手な音を立てることを考えれば、物凄くありがたい。

まあ、隠し通路の存在が秘密つてこともあるだろう。

隠し通路つてのは、基本的に王と王太子にしか知らされてない。

といつても、彼らの側近達は知っている。

そのくせ、他の王族には知らされない。

他家に嫁ぐ王女や、謀反を起こすかもしれない他の王子、代が替われれば出て行く妃。

そんな彼らに、教えられるわけねえだろうつてことらしい。

じゃあ何のための脱出路なんだつて話になるんだけどさ。

アタシが思うに、邪魔になった彼らを暗殺するために使ったんじゃないかと思う。

王家なんてものは、血なまぐさいのが基本だ。

そんな隠し通路の存在を、先王が病に伏せるアディーリアに教えたのは、気まぐれだったのか、或いは慰めだったのか。

今となつては分からない。

ただ、アタシはその恩恵を十二分に利用させてもらっただけだ。

アタシはポツカリと開いた入り口にスルリと入り込んだ。

内側からレバーを回して、飾り棚を元の位置に戻す。

すると辺りは真っ暗になった。

けれど優れもののケロタン・アイは、暗視スコープもビツクリの視界の良さだ。

さて。

リズの寝室は二階にある。

三階は女官や侍女さん達の部屋で、一階は厨房とダイニング、殆ど使ったことのない応接間なんかがある。

タペストリーの裏の隠し扉だと直ぐに階段があつて地下に直通なんだけど、こちらの隠し通路は先ず建物を半周してから一階に下りて、また半周すると隠し扉がある。そこから地下への階段と合流するようになってる。

因みに逆に回れば、三階へ上がる階段に繋がっている。

隠し通路には各部屋からの話が漏れ聞こえる様、通風口のような配管がある。

深夜と言うこともあつて、そこから漏れてくる声は殆どない。

アタシはそれを背後に流しながら、地下へと急いだ。

どれくらい時間があるのかわからない。

二号の二の舞はゴメンなので、取り敢えず連中が地下を調べたかどうか分かれればいい。

地下水路へは全速力で走れば十五分くらいだろうか。

但し、それは疲れを知らないケロタンだからこそその時間である。

地下へ入ると周囲の壁は、荒削りの岩になる。

階段を下り、慣れた道を左へ右へと曲がつてく。

やがて、流水音が聞こえてくる。

「とうっ」

勢いづいたアタシは、思わず一号の様な掛け声を上げて、地下水路へと躍り出た。

その瞬間。

「誰だ!？」

激しい誰何と共に、目映い光に晒された!

くっ。

暗闇に慣れた目が、一瞬だけ眩む。

けれどケロタンの目はしっかりと捉えた。

四つの人影を。

まさか、鉢合わせするなんて考えていなかった。

ていうか、こういう場合、鉢合わせするのを避けようとするんじゃないだろうか。

それとも、連中も鉢合わせを避けるだろうと見込んだのは、手札の揃っていないアタシの希望的観測でしかなかったのか。

アタシは一瞬怖じ気づいたけど。

連中の顔にも、動揺があることを見て取った。

若干一名、全く表情がなかったけれど。

ふん。ケロタン・アイを舐めるなよ！

アタシは、背筋をピンと伸ばして彼らと向かい合う。

「あら、相手の名を知りたければ己から名乗るといふ礼儀は、もう失われてしまったのかしら？ 人の世というのは、何とも移ろいやすいものなのね」

四号ミリーは、礼儀を重んじる淑女だ。

但し、リズ以外の人間を毛嫌いしてる。

それが、恵美と練り上げたミリーの新たな隠し設定だ。

隠し設定ってのは、つまりリズにはバレないようにすることだ。

アタシはクツと顎を上げて、彼らを見据える。

ケロタンの体には、動機も息切れも目眩もない。

彼らにアタシの動揺は伝わらない。

「名乗るべき名がないのなら、お引きなさい」

だから、アタシ、ケロタン四号は、高飛車に言い放った。

第二四話 カエルに横隔膜はありません その4（後書き）

恵美ちゃんの「ぬいぐるみの演技指導」は、キタジママヤが人形役で舞台上に立った時の稽古を真似たもよう。

でも人形ではなくぬいぐるみなので、竹で手足を縛られたりはしませんでした（笑）。

敵軍は一名足りません。さて誰でしょう。



## 第二五話 カエルに横隔膜はありません その5

アタシの予定としては。

先ず十分に情報収集をして、丹念に対策練って、その後何時に何処そこで会いましょうと約束して、対決する。

というつもりだったのに。

予定は未定とは、よく言ったモンである。

ぶっちゃけ、アタシの頭の中のデスノートは白紙のままだ。

何せ連中の名前すら覚えていない。

だからといって、ここで弱腰などところを見せたりなんかして、つけ込ませるワケにはいかないのだ！

「まさか挨拶の仕方の方方も教えてもらってないのかしら？ 一体どういう躰けをされてきたの？」

何か近所の小五月蠅いオバさんみたいな台詞だな。

とは思いつつ。

「昔の子達は、もう少し礼儀を弁えていたと思うけど」

アタシは右手を頬にあてて、小さく首を振った。

今度は懐古趣味のバアさんみたい。

う〜ん。もう少し嫌味の勉強をした方がいいかも、アタシ。

自分で自分がいたたまれない。

アタシはつい連中から視線を逸らして、見るともなく壁を見る。

地下水路の壁には、極彩色の壁画が描かれている。

壁画ってというと、高松塚古墳やピラミッドに描かれているものや、

『最後の審判』や『アテネの学堂』なんかのフレスコ画を思い出すけど。

ここのは何を描いているのか分からない、抽象的なものだ。

ジッと見ると、アレに似てる。

視点をぼかすと何かが浮き上がってくるっていう、ステレオグラム。

描かれた年代は、よく分からないらしい。そもそもこの地下水路がいつ頃誰によって造られたかも分かんないって話だし。

大抵そう言う場合は、『名の秘された皇国』時代のものだったことにされる。

仮にも史学を学んでる人間としては、その大雑把さはどうかと思う。

まあ、科学的な年代測定法なんてないだろうから、調べようもないだろうけど。

そついやあ現実世界でも、ネアンデルタール人が描いたなんてウソかホントか分かんない説もある壁画があったな、なんてことを思い出す。

それって何年くらい前のものだったっけ？

フランスのナントカって場所にある。ラスコーじゃなくってさ。

アタシはこの時、本格的に現実逃避に入ってた。

現実じゃなくて夢だけでもさ。

そんなだから。

「『昔』というのは、いつ頃ですか？」

誰だかからの問いかけに、無意識に答えてた。

「そうねえ、三万二千年程前だったかしら？」

口調だけは四号のままだったのが、救いと言えば救いと言えるかもしれないけれど。

……………。

アタシ今、誰の質問に答えた？

ハツととなつて振り返ると、四人の男達の姿が目に入る。

瞳目してるのは直情金髪と黒髪腹黒。胡散臭げに見てるのはフェ

ロモン男。鉄面皮は相も変わらず一ミクロンも表情筋が動いてない。

そう言えば、マッドなインテリメガネがいない？

まあ、隠し通路探検なんて、医者のことじゃないけれど。

それを言うなら、宰相や王佐のする仕事でもないはずだ。

何て事を頭の隅で考えながら、口から出た言葉といえは。

「あら、まだいたの？」  
一気に空気が悪くなった。

「嘘くせえ」

直ぐさま鼻で笑ってそう切り捨てたのは、フェロモン男だ。

勿論、三万二千年云々のことについてである。

どうやらアタシの無意識の眩きは、認識されてしまったらしい。

「俄には信じがたい話ですが……」

何やら信じる気配さえ見せる黒髪腹黒。

腹黒な人間が、そんなに簡単に信じちゃいけませんって教わらな  
かったんだろうか？

「くっ。カエル如きに礼儀を諭されるとはっ」

ええ？ 今その話？ とツツコミたくなる事を呻いているのは直情  
金髪。

何故だろう、その苦悶の表情を見ると、何かホッとしてくるよ。  
「……………」

無言のまま、思わず視線を逸らしたくなっちゃう程見つめてくる  
のは鉄面皮。

怖いよ、その沈黙が。一番怖い。

ぶっちゃけ言って逃げ出したかった。

だって大の男が四人がかりで睨んでくるだもん。

小娘のアタシが逃げ出したくなくても、しょうがないと思うのだ。連中の持つてる明かりを叩き落とせば、真っ暗闇になってその隙に逃げられるかも。

なんてことまで考えるけど。

淑女である四号にそんなことはさせられない。

「困った子達ねえ。一々『お名前は？』と訊いてあげなければ答えられないの？」

そう言つて、できの悪い子供を見つめる様に生温い視線を投げかける。

勿論、呆れたように溜息をつくことも忘れない。

何で気管のないケロタンに、溜息がつけるのかは謎なんだけれどもさ。

同じような仕草を、小学校の頃先生によくやられたものだ。

アタシは目立った子供じゃなかった。

叱られもしなければ、褒められたりもしない。

ただ授業中の居眠りが多かったので、時々職員室に呼び出されたけれど、アタシの「家庭の事情」を知ってる先生達は、アタシを強く叱れない。

根本的な原因は本人にはないからと、ただ溜息まじりに首を振つて軽く注意しただけだ。

その度に、叱られない事にホツとするよりムツとした。

知ったかぶんなつ、アンタがアタシの何をしつてやがんだよつ。

てのが、アタシの当時の正直な考えだった。

今思えば、先生達の態度も分かんないでもないんだけどさ。

でも今でも同じ事があつたら、やっぱりムツと思うんだよね。

だから連中も、怒ると思つたのに。

怒つて、三万二千年云々のことは綺麗サツパリ忘れて欲しい。

だってこの先、三万二千年前はどうでしたか？ とか訊かれたら困るじゃないか。

と切実に願うのに。

なのにヤツときたら、なんとまあ！ 怒るところか、バサツと長衣の裾を払って跪いたのだ！

「これは失礼致した。お初にお目にかかる。我が名はクラリスⅡレヴィド・エルド・ノーザラン・ハジエク・ソルダーク。イスマイル王国宰相の地位を預かる者だ」

と、言葉こそぶつきらぼうながら最上級の礼をしやがった。

跪くと、丁度顔がケロタンの目線の高さになる。

アタシの視線は、鉄面皮の金色の眼差しと真っ正面からぶつかり合った。

……………キモッ。

正直言っただけの一言だ。

だって、物凄くお綺麗な顔が、無表情で喋ってんだもん。

しかも超良い声で。

物凄く良くできたCG見てるみたいで、逆に不気味だ。

そんなことを思いながら、アタシは鷹揚に頷いた。

こうなつては、もう早々に立ち去れないと覚悟しながら。

鉄面皮に続いたのは、黒髪腹黒だ。

「私は王佐を勤めさせていただいております、ナジャ・エリアーデ・アウラ・カデイスと申します」

そしてフェロモン男。

「第一近衛隊副隊長のディンゼアⅡセアフェル・ハジエク・ド・フィアマス・アウラ・ロトウルマと申します。この度は、お目にかかれて光栄です」

と、ちつとも光栄とは思っていない口調で言った。

態とらしくつり上げた口角が、これまた更に胡散臭い。

最後は直情金髪だ。

「……………第一近衛隊長、オーランドⅡジャスティア・ハジエク・ド・アルラマイン・アウラ・チェザリスと申す。以後お見知りおきを……………」

こつという場合、身分の高い方から挨拶するもんだと思うけど。多分、カエルに礼儀を質された後遺症が後を引いているんだろう。それにしても、相変わらず名前が長い。

二号のときは、覚える気がないって態度で誤魔化せたけど。今回こそは、覚えなきゃいけないんだらうな。

覚えられる自信がない。

なんて思ってることはおくびにも出さず。

「ふふ、良くてきました。褒美に我が名を授けましょう」  
ま、何処までも上から目線ってのはご愛敬。

連中の、少なくとも黒髪腹黒とフェロモン男と直情金髪のこめかみに、血管がピシッと浮き上がりはしたけれど。

布製カエル如きに跪いた時点で、貴様らの負けなのだ！

「私はミリュリアナ・アシエス・ケロタウロスの名を戴く者です。

この度の出会いも何かのご縁でしょう。宜しくお願いますわ」

アタシは礼儀正しく、右足を下げちょこんと膝を折った。

身分の高い女性が対等な人間、若しくは目下の者にする礼だ。

言外に、お前らなんかと馴れ合うつもりはないってことだ。

だから敢えて「立て」とは言わない。

見下ろされると威圧的で、ぶつちやけ怖いってのもあるけれど。

「ところで、あなた方の態度から察するに、私達のことはご存じの様子。もしか、クリスの言った誘拐犯というのは、あなた方の事かしら？」

ピシッと空気が割れる音がした。

おや、アタシとしては、話の糸口を差し出したつもりだったのに。

あれえ、おかしいな、ミリーは癒し系なのに。

何て言う気はサラサラないけど。

いい年した大人の割に、ちよつと怒りすぎじゃないだろうか？

まあ、犯罪者扱いされれば怒ると思っけど。

「あんの青カエルのお陰で、俺たちがどんな目につ」  
直情金髪が、拳を握りしめて言う。

「どうやら何かあったらしい。」

「……………我々のことは、クリス殿から聞き及びではありませんか？」  
そう言つて、黒髪腹黒がゆっくりと立ち上がる。

誘拐犯扱いするヤツに、膝を折るつもりはないってことだろう。  
その証拠に、優しいげな笑顔が物凄く黒い。

髪も目も真っ黒だけど、腹ん中も真っ黒いって感じである。

他の三人も、続いて立ち上がった。

お陰で物凄い圧迫感を感じた。

思わずたじろぎそうになつたけど、アタシはリズの笑顔を思い浮かべて踏み止まつた。

可愛いアタシのリズを泣かせたのは、何処のどいつだ？

そうだよっ、コイツらなんだよ！

アタシは怒りを燃え上がらせて、自分で自分を奮い立たせる。

けれど勿論四号は、怒りをぶちまけたりはしない。

無害を装つて、不思議そうに呟いた。

「そうねえ。私が聞いた話では、何でも海賊だか山賊だかに襲われて、牢に閉じこめられていたのだとか。そこで四人の美しい人間の女性と出会つて、愛の逃避行をしたとかしなかつたとか…」

出鱈目にも程がある。

とは思つけど、二号なら間違いなくそんな話をリズにするだろう。てか、するつもりなんだけど。

「なんでそうなる!？」

案の定、直情金髪が怒つて言った。

素直というか真っ直ぐというか、相変わらず食いつきがいい。

ここで他のケロタンなら、更に気持ちを逆なでするようなことを言つとこだけど。

四号は違つ。

「そうよねえ」

一度は相手の意見に同意を示す。

「私も思うの。幾ら何でも無茶だつて」

「ふうん。ミリユリアナ殿は話が分かるらしいね」

そう口を挟んできたのは、フェロモン男だ。

本人自身その言葉を信じてないって分かる程、嫌味ったらしい口調だった。

何だろっ？ 二号の時より嫌味成分が増えてないか？

とは思いつつ、アタシはそれには全く気が付かないふりで。

「だってそうじゃなくって？ 四人と一度に交際するのは、余り褒められたことではないわ」

「『『『『そこか！』『』『』『』』』」

全員につっこまれて気が付いた。

ん？ ひょっとして落としどころ間違えた？



## 第二六話 カエルに横隔膜はありません その6

ここはツツコミを入れられる場面じゃなく。

二号のいい加減さで盛り上がって。

盛り上がって油断してたところで。

でも四マタは犯罪じゃないけど、誘拐は犯罪だよね。

と、落とす。

ウケケケケ、ザマーミロ。

というのがアタシの目論みだったんだけど、連中の早すぎるツツ

コミによって脆くも崩れ去ってしまった。

なんでだ？

と疑問を浮かべて、ハツとなる。

この世界では、庶民はともかく王侯貴族じゃあ一夫多妻制が普通だ。

そんな世界じゃあ、同時に複数の女性とつき合うこと自体別に問題ない、なんてことは…。

「もしかあなた方、複数の女性と同時につき合ったりしているの？」

アタシがまさかと思いつつもそう訊ねると。

「ゲホゲホゲホッ」

「ゲフンゲフンッ」

「ゴホゴホッ」

「……………ゲッ」

態とらしい咳払い。

うわ、全員かよ。

しかも真面目そうな直情金髪までもか！

なんだかちよつと裏切られた気分だ。

これが文化のカベってヤツか？

アタシは文化ってのは、理解できなくても尊重すべきものだと思ってる。

でもこれはちょっと、生理的に受け付けられない。

こっちの女子は、それを受け入れてるんだらうか？

アタシはリズのことを思っただけ不安になった。

周囲も憚らず身悶えそうになっただけ。

イヤ待てよ。

と思ひ直す。

侍女さん達のガールズトークによれば、浮気や二股は許せないとか言ってたな。

そうだ。

アタシはそれで、女子の言い分は世界が違ってもそう違わないんだな。なんて思ったものだ。

そもそも、王侯貴族の婚姻は政治的なものだ。

複数の婚姻で、多重多層のネットワークを造るためのものだ。

政略結婚なら仕方がないと割り切れるけど、事恋愛となれば話は別なんだとか。

アタシなら先ず政略結婚そのものがお断りなんだけど、「良いト

コのお嬢さん」である彼女たちはそうも言ってもらえないだろう。

そこでアタシは気が付いた。

何に気が付いたかって？

態とらしい咳は、連中の後ろめたさを物語ってるんじゃないかって。

要するに、この連中は。

女子が嫌がると分かかっていてやってる。

ってことにだよなっ！

チョーサイアク。

アタシは冷たい眼差しを連中に向けた。

連中は、アタシの視線を避ける様に顔を背けた。

その態度にまたムカつく。

悪いことと思っただけなら、最初からやんなってんだっ。

とはいえ、堂々されてもムカことに違いない。

かといって、アタシには連中の素行について文句を言う権利はない。

けれど、こんな女の敵がリズの側にいるかと思うとゾツとする。

「……………リズには半径一万リグダ以内に近づかないでいただきたいわ」

ーリグダは約一キロメートルだ。

この大陸がどのくらいの大きさなのかは知らないけれど、これくらい離れば十分だろう。

「それでは、国から出て行かなければなりませんか？」

ヒクリと口元を引きつらせながら黒髪腹黒が言う。

アタシは、女の子らしくポンと手を合わせて言ってみた。

「あら、素敵。国外追放ね」

可能ならば、可憐に頬だって染めて見せたことだろう。

「『素敵』じゃねえ！」

すかさずフェロモン男からツッコミが入る。

勿論そんなの予想済みで、アタシは反論に口を開きかけたところだ。

「おいつ。女性に暴言を吐くんじゃない」

と、直情金髪がフェロモン男の腕を掴む。

意外だ。

直情金髪からこんな紳士的な台詞が聞けるとは。

フェロモン男の方がフェミニスト臭いのに。

「女性だあ？ ただのカエルじゃねえか」

フェロモン男は直情金髪の腕を乱暴に振り払う。

何だろう。男の二号より女子の四号への辺りがキツイ。

ひょっとして女性不信か何かだろうか。そんだけフェロモン撒き

散らしておいて、それはないんじゃないだろうか。

「いえ、流石に『ただのカエル』ではないと思いますが……」

黒髪腹黒が冷静なツツコミを入れるものの。

「何庇ってたんだ。お前だって、カエルのことは嫌ってるんだろっ」  
フェロモン男の苛立ちの前にサラツとなかったことにされてしまった。

「アタシは見た！」

黒髪腹黒の表情が凍るのを！

「私が気に入らないのは、青いカエルであって、ミリュリアナ殿ではない」

「ハンツ。カエルはカエルだろうが」

「そもそも、生物学的に言えば彼らはカエルですらないのでは」

「カエルに見えればカエルでいいだろうがっ」

「最初とてもじゃないがカエルには見えないと言っていたのは何処のどなたでしたでしょうか？」

「カエルにだって雌雄の別はあるぞっ」

「うん。」

何が何だか、グツチャグチャである。

これが仮にも国の要職に就く人間の会話だろうか？？

アタシは彼らの会話を聞くともなしに聞きながら、始終無言でいる鉄面皮を振り返ると。

「ふああ」

大きな欠伸をしていた。

お綺麗な顔というのは、欠伸しても綺麗なもんだ。

歯医者で大口開けて色んな器具を突っ込まれても、きつと美しいのに違いない。

「……………寝不足？」

答えるかどうかは怪しかったけど、アタシは一応訊いてみた。

「こここのところ徹夜続きでな」

驚いたことに、鉄面皮は頷きながら素直に答えた。

「特にこの三日は、殆ど寝ていない」

「ああ、だから彼らにはあんなに苛ついてるのね？」

人間、生理的欲求が満たされないと苛つくもんだ。理性だつて容易く吹き飛ぶ。

それにしたつてあの会話はどうかと思うけど。

「新しい国王は、随分と人使いが荒いのねえ」

アタシがボソリと呟くと、鉄面皮は金色の眼差しでギロリと睨んできやがった。

「誰のせいだと思つてやがんだ」

「さあ？」

多分二号のせいなんだろうけど、アタシは勿論すつとぼけた。

「……………アンタの仲間の青いカエルのせいだろうが」

何て言うか。

ひよつとして、この鉄面皮、口悪い??

「あんの青カエル。地下通路を使つているなどとぬかしやがつて。

王も王だ。何故俺たちが地下探索なんぞをせねばならんつ。それならそれでテメエの代わりに処理してやつてる書類を片づけてくれりゃあいいものを」

そして意外な程、饒舌だった。

しかもその間も、顔に殆ど表情はない。

怖いよ。ある意味、すつごく怖いよつ。

アタシはある種の危険を感じて、ソツと後退ろうとする。

ところが鉄面皮ときたら、アタシを逃がすまいとするようにズイツとこちらに踏み出してきて。

「大体なあ！ アレはなんだ！ 本来の道標を消して、訳の分からん落書きを書きやがつて！！ 一体ここに辿り着くまで何日かかったと思つてんだ！」

寝不足で理性が吹っ飛んでんのは、コイツもか！

アタシは驚きつつも、内心でほくそ笑んだ。

迷えばいいと思つてたけど、本当に迷つたのかと思つと、ウケケと笑いがこみ上げてくる。

「あら、そうなの？ それは知らなかつたわ。私、ここより先には

行ったことがないから」

素知らぬふりで無実を装う。

「……………それを信じると？」

いつの間にバカバカしい言い争いを止めたのか、黒髪腹黒がアタシ達の会話に割って来た。

てか、いい加減名前覚えなきゃいけないな。

何て言ったかな、こいつ。

ホラ。

小説であつたじゃん、同じ名前がさあ。

主人公の女性の言動がシユール過ぎて何が言いたいんだかよく分かんなかった小説。

ええと。

「ナジャ？」

「はい」

アタシの問いかけに、黒髪腹黒が頷いた。

良かった。合ってたか。

アタシは内心で胸をなで下ろしながら、ニッコリと笑って言った。

「別にあなた方に信じてもらう必要なんてないもの」

ここで信じて欲しいと言ったところで、連中がそれを受け入れるとは思わない。

「何故と訊いても？」

だからアタシは逆に連中を突き放す。

「人というものは、信じたいものを信じたい様に信じるだけの生き物じゃなくって？」

その言葉にあからさまに顔を顰めたのは、直情金髪だ。

「我々の信頼や信用など、意味がないと？」

コイツの名前は、アレだよ。ハリウッド俳優と同じ名前。

ほら、海賊と一緒に海賊退治に出かけるヘタレな好青年役の。

「オーランド」

「何だ」

合ってたかと、思わず頷くアタシ。

もうちよつとで「ブルーム」って付けるトコだったけど。

名前を当てたことに気をよくして、アタシは思わず満面の笑顔を浮かべた。

「それは、『意味がない』ものに対して失礼じゃなくって？」

瞬間、ピシッと空気が凍った。

うん。流石に満面の笑顔で言う台詞じゃなかったか。

直情金髪は、グツと拳を握って怒りを抑えようとしているらしい。二号の時の様に取り乱したりしないのは、四号が女子だからだろうか？

けれど勿論アタシが、ありがたがるハズもない。

へんつ。テメエらと馴れ合う気持ちは、こちとらサラサラねえんだよつ。

と、江戸っ子みたいなおもてなしを心の中で言ってみる。

「こんなカエルと無駄話してる場合じゃないだろう。こんなの無視して、さっさと先へ進もうぜ」

我慢しきれないとばかりに、フェロモン男がそう言ったけれど。

「ならアンタは、こんなところに何しに来た？」

冷ややかな鉄面皮の言葉が、フェロモン男の言葉を打ち消してしまった。

あ、コイツの名前は、実は覚えてる。

忘れるハズがない。

なんてつたつて、永遠のヒロインの名前である。

ロリコン伯爵に捕らわれて、世界的大泥棒の孫に助けられる、あの美少女だ。

「クラリス」

アタシは心持ちウキウキとした気分で、その名を呼んだ。だつてさ。

リアルで堂々とこの名前を呼ぶ機会なんてないもんね。

「何だ？」

だけど美形は美形でも、デカくてゴツイ美形じゃなあ。  
返ってきた声の野太さに、ガツカリだ。

「別に」

「……………」  
イヤな沈黙が支配する。

流石に名前呼んでおいて「別に」はなかったか。  
と思つたものの。

「だから、こんなカエル相手にしても仕方がねえって言ってんだろ」  
痺れを切らしたフェロモン男が、大げさに両手を広げて言い放つた。

コイツの名前かあ。

コイツの名前はなんだつたかなあ。

アタシは名前を思い出そうと、ジツとフェロモン男の顔を見た。

「何だ。文句あんのかつ」

フェロモン男は喧嘩腰に言うけれど、アタシは思い出すことに集中した。

う〜ん。最初の音は何だつたかな。

濁音だつたうよううな。

「ダ」

ピンチ、じゃねえな。

「ボ」

ツカチオ、でもねえな。

「ビ」

ザンチン、は人の名前ですらないな。

う〜ん。

「ひょっとして、俺の名前だけ覚えてねえとか言うんじゃねえだろ  
うな」

フェロモン男がドスの利いた声で言う。

「ド」

ビッシュー、これも何か違うな。



待てよ。二文字目は小さい「マ」とか「ヤ」だったような…。

あ！

閃いたアタシは、パンツと両手を合わせて言った。

「ジャイアン！」

「全然違う！！」

あ、やっぱり？

第二六話 カエルに横隔膜はありません その6（後書き）

名前連想ゲームの元ネタが分からなかった方のために。

ナジャ アンドレ・ブルトンの小説。

オーランド 名字がブルームのヒト（くまんまや）。ワタシは  
ジヨニデの方が好きです。

クラリス ジブリアニメ『カリオストロの城』のヒロイン。

モリス・ルブランの原作『カリオストロ伯爵夫人』ではクラリス  
は伯爵夫人に誘拐されたルパンの恋人です。

## 第二七話 カエルに横隔膜はありません その7

フェロモン男の名前は、デインゼア「ナンタラカンタラ・ムニヤムニヤムニヤ」と言うことらしい。

うん。覚えきれん。

とは勿論言えないので。

「これを機会に改名してはどうかしら？」  
なんてことを言ってみる。

「どんな機会だよっ」

ツツコミ早いな。ここまで早いと天晴れだ。

「そう？ いい名前なのに」

アタシは心底残念そうに呟いた。

実際、心の底から残念だ。改名してくれたら、名前を覚える手間が省けるのに。

「そんなワケの分からん名前、いるかつ」

フェロモン男は心底イヤそうに言った。

まあ、そりゃそうだろう。「ジャイアン」はこちらの言葉では「天然ボケ」の意味になる。

誰だつて、「俺の名前は『天然ボケ』さ！」なんて言うのはイヤだろう。

しかしまあ、所変われば品変わるとは良く言ったもんである。

ザ・ジャイアンズムの提唱者「ジャイアン」が、まさか「天然ボケ」に成り下がってしまうとは。

天然ボケが「オレのモノはオレのもの、お前のものはオレのモノ」なんて言っても、全然全く迫力がない。ただのボケに終わってしまった。

「いいか、二度とそんな名前で呼ぶなよ！」

フェロモン男が念を押す様に言う。

だけど勿論自信のないアタシは、敢えて「うん」とは言わなかつ

た。

てか、絶対言ってると思う。

「おいっ。聞いてんのか!？」

そんなアタシの気配を敏感に察知したのか、フェロモン男が念を押す。

そこへ黒髪腹黒が容赦なく割って入った。

「そんな事はどうでもいいんですよ」

一瞬フェロモン男が黒髪腹黒をムツとした表情で睨みただけで、黒髪腹黒はものの見事にスルーした。

「あなた方が、我々を犯罪者呼ばわりすることについて、話し合う必要があると思うのですが」

アタシは黒髪腹黒の真っ黒い微笑みが怖すぎて、思わずフェロモン男の方を見てしまった。

「……………貴方のお名前を覚える練習をしましょうか」

黒髪腹黒と話し合うのはイヤだと、目線でフェロモン男に訴える。「お、おう。そうだな」

するとどういうワケか、フェロモン男はアタシの話に乗ってきた。ひよつとして、フェロモン男も黒髪腹黒の黒さに怖じ気づいているんだろっか？

そんなことを思いつつ、アタシは心の中でフェロモン男に感謝した。

けれどその目論みも空しく終わる。

「もう一度言っぞ。俺の名前は…」

「黙れ! こんガキヤツ!」

罵声の主を振り返ると。

怒ってるのに笑ってた。

お前は竹 直人か! と物凄く突っ込みたいけど突っ込めない。

「ナ、ナジャ?」

金髪直情が、戸惑いながら黒髪腹黒の名前を呼ぶ。

「どっどっ、鎮まれ、どっどっ」

フェロモン男が、何故か馬をなだめる様に声をかける。

鉄面皮は数秒沈黙を守ってたけど、

「確かに、我々は犯罪者ではない」

と、重々しい口調で言った。

すると黒髪腹黒はフツと真顔に戻り、

「というわけなので、王女殿下や神官長殿に、その旨伝えていただけないでしょうか？」

まるで先程の罵声などなかった様に、穏やかな口調で言った。

けれど勿論、目は笑っていない。

うっっん。

現実的な地位はともかく、コイツらの力関係みたいなもんが見えた様な気がする。

それにしても、怖いよ、腹黒！

けれどお陰で、見えてきたことが一つある。

どうやら誘拐犯云々で神殿から攻勢を掛けられているらしいって事である。

アタシは勿論、内心でニンマリとする。

ヤツらが困ってるなら、困らせておけて正直思う。

だからアタシは、関係ありませんっっんって顔で言う。

「それはクリスに言わなくてはね。私たちは、クリスから話を聞いただけなもの」

「海賊やら山賊やらに攫われて、女性と愛の逃避行、ですか？ そんなにいい加減な話を信じるって？」

「でも、以前実際にあったことだもの」

「……………は？」

一瞬キョトンとする黒髪腹黒に、畳みかけるべくアタシは言った。「あの時はね、女性は四人じゃなくて六人だったわ。それに相手は海賊でも山賊でもなくて、何かの宗教の狂信者だったわね」

勿論出鱈目である。アタシはそんな目に出くわした事など二二年間一度もない。

「随分、波瀾万丈だな」

「狂信者がカエルを攫って何をするというのか？」

「っていうか、カエル相手に逃避行する女が本当にいんのか？」

三人三様の呟きに、「んなわけね〜〜だろっ」と激しくツツ  
「ミたかったけれど、淑女たる四号になりきって必死で堪えた。

いやそれよりも、腹抱えて今にも笑い出しそうだ。

微妙に緩んだ空気に、けれども黒髪腹黒はそれに流されはしな  
った。

「あくまでも、言葉を撤回しない？」

「ここであんまり突っぱねると、何か恐ろしい事になりそうだ。

だからアタシは、その場凌ぎだとは知りつつも、

「それはクリスに言いなさい。当事者たる彼が納得すれば、私た  
ちは別にあなた方が犯罪者だろうと親切な保護者だろうと、構わな  
いのよ？」

「では、クリス殿と話し合いたいのですが、彼はいつ現れますか？  
へっ、「お話し合い」ときやがったか。

話し合いする気なんざ、サラサラなくせに。

きつと自分達の都合の良い話をごり押ししてくるつもりだろう。

アタシは心の中でそんなことを考えながら、肩を竦めた。

「さあ」

勿論、アタシの答えに連中が納得してくれるとは思わない。

けれど、実際そうとしか答えようがないから仕方がない。

「それは、拒絶ととって？」

黒いオーラを垂れ流しながら、黒髪腹黒が脅す様に言う。  
てか、多分実際脅してる。

だからって、怯んでる場合じゃない。

この手の連中は、弱味を見せたら何処までも付け込んでくる。

ならばアタシはどこまでも、お前らの事なんかこちとらどうでも  
いいんだって強気な態度を崩すわけにはいかないのだ。

「どうとでも。そもそも人というものは、物事を見たいようにしか

見ない生き物でしょう?」

その瞬間、ブオツと効果音が出そうな勢いで、黒髪腹黒の背後から黒いオーラが吹き出した。

その勢いたるや、天井までも覆い尽くさんばかりである。

他の連中も、仲間の余りの黒さに退き気味である。

くっそう。

可愛いリズのためなら、真っ黒いオーラだってそよ風のように受け流す! フリくらいはしてみせる!

リズのクルンクルンの瞳。リズのキツラキラの瞳。リズのぶつくぶくの頬。

ケロタンの掌よりも小さかったリズの手を、ケロタンの首に回らせるまで育てたのは、このアタシなんだという自負が、どんな時でもアタシを支えてくれるのだ。

「あら。怒っているの? ふふ。人というものが凶星を指されると怒るといのは、本当なのね」

「ミ、ミリュリアナ殿、こ、これ以上の刺激はっ」

「謝れ! 取り敢えず謝っどけ!」

「アంత、死ぬぞ」

なんでか味方みたいな事を言う三人には悪いけど(しかもフェロモン男すらっ)。

ここで退いたりなんかしたら、女がじゃなくなっつて、ケロタンが廃る!

だから考える! アタシ!

何が一番コイツらにとつてイタイかを!

「そういえば、ねえ、あなた方。この国が亡くなった後は、どうするの?」

アタシはグルグルとまだ考えの纏まらない頭のまま、気が付くとそう口にしていた。

いきなりの方向転換に、黒髪腹黒の気が僅かに緩む。

「何を突然」

アタシは黒髪腹黒の言葉には敢えて答えず、

「神殿はイスマイルの解体など瞬く間に終えるでしょうね」と如何にも感慨深げに連中を見渡した。

「そうれはどういう？」

戸惑う声は誰のものだったのか。

多分この時のアタシは、一種のトランス状態だったんだと思う。テンションの高くなり過ぎたアタシの頭には、判別がつかなかった。

黒髪腹黒の黒いオーラが収まっていたことにすら、気が付いてなかった。

それでもアタシは言葉を紡ぐ。

「そもそも、この国はリズナターシュを生み出すためだけに創られた国ですものねえ」

それはアタシの予想を超えた、けれどアタシの頭の片隅でいつの間にか芽吹いていた考えだった。

そんなSFじみた考えはバカげると直ぐに捨てた考えだけど、いつの間にか根付いてしまっていたらしい。

計画的な、アディーリアと前国王との出会い。

アヌハーン神教の真の目的。

そして、あの地下図書館で読んだ、イスマイル王国の隠された建国の歴史。

今までバラバラだったものが、この瞬間一つの点へと、リズナターシュへと収束しているように思えてならなかった。

「奇跡」の話聞いた時、なんで気が付かなかったんだろう。

これまで現れた六人の「神人」は、何れも「聖地」で生まれ、「聖地」で奇跡を授かった。

イスマイルなんて小国に大神殿が置かれているのは、この地が「聖地」だからだ。

そして「神人」を生み出した「聖地」は、漏れなく神殿の直轄地「神領」となっている。



あながちアタシの推測は間違いないと思うのだ。  
アタシはゾツとなった。

アタシの可愛いリズが、アヌハーン神教なんていう巨大な力にワケも分らず飲み込まれようとしているのだ。

途端にアタシは、リズの顔を見たくなった。

こんなどうでもいい連中の顔じゃなく、リズの健やかな寝顔を見なかった。

「私はもうそろそろリズの元に戻らなくてはなりません」

アタシはそう言って、イロイロと訊きたいだろう連中を放り出すことにした。

ぶつちやけ今すぐ駆け出したい。

「次お会いできるのは何時ですか!？」

必死に問いかけてくる声が邪魔くさくて、アタシは素っ気なく返す。

「それは我が主の御心次第です」

我が主とやらが誰かは全く知らないけれど。

取り敢えず、アタシの意志で何時誰が来るかは分からないってことくらい承知しておいて貰いたい。

「主というのは!？」

尚も追いつがる質問に、アタシはふと悪戯心を覚えた。

以前チラツと思つた事を試してみようと。

「我が主の名を知りたいですか？」

振り返りもしないアタシの問いかけに、全員が全員、必死な顔で頷いた。

うーん、全方向視界つてのはこういう時に便利である。

それなら言つてえ聞かせやしよう!

アタシは大きく息を吸い込むと、一気に吐き出す様に言った。

「『寿限無寿限無五劫の擦り切れ海砂利水魚の水行末雲来末風来末食う寝る処に住む処やぶら小路の藪柑子パイポパイポ パイポのシユーリンガンシユーリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポ

コピーのポンポコナーの長久命の長助』よつと」

おっしや！ 言い切った！

フン！ 覚えられるもんなら覚えてみやがれってんだ！

アタシは心の中でガッツポーズを取りながら、意気揚々と振り返った。

連中の困った顔を想像しながら。

ところが、なんてこったい！

全員その場で、気絶していた。

第二七話 カエルに横隔膜はありません その7（後書き）

「寿命無」に関しては第十話でスミちゃんは思いました。

## 第二八話 カエルに横隔膜はありません その8

「次何時来るのかって聞かれてもさ、アタシ自身分かんないんだから、答えようがないってえの」

アタシの殆どくだ巻き状態の愚痴に、恵美は飲み屋で蘊蓄垂れるオヤジの如く答えた。

「そんなのさあ、『神様仏様裏のご主人様の言う通り、左へ回って三軒目、トントコピーのピツポツパー』とか何とか答えときゃいいじゃん」

そんな会話をしたのは、午前二時を回った頃の事。

それはひとときの休息时间。

子供の頃の懐かしい「呪文」に、暫し心が和んだ。

「神様仏様」はともかく何故「裏のご主人様」なんだろう、てか「裏のご主人」はどれだけ権力持ってた？ なんて子供心にも思ってたものだ。

ところで紅天女への道とやらは何処まで行けば、恵美は納得してくれるのか？

そもそも原作が辿り着いていない道を、どうやって究めようというんだらうか？

是非とも「裏のご主人様」とやらに訊いてみたい。

なんて事をぼんやりと考えた。

あれから一体どのくらいの時間が経ったのか、随分昔の事の様だ。恵美の凄いとこころは、全くピントが合っていないのに、あながち間違いとも言えないトコだ。

その時アタシは、実際どこかの誰かが「どれにしようかな」で今夜のカエルを決めてんじゃないかと思っただ程だ。

なんて感慨にふけりながら、アタシが何をやっているのかという

と。

気絶した連中を、横一列に並べている真っ最中だ。

アタシは、二メートル近い男達の足首を持って、ズルズルと引きずっていく。

仰向けだろうが俯せだろうが取り敢えず引きずって、所定の場所に着いたところで、俯せだったらひっくり返す。

アタシはそれらの作業を黙々と繰り返しながら、人間って意外と仰向けに倒れないもんなんだなああと、妙なことに感心する。

あと、鼻が高いと損をすることもあるんだとか。

体がデカイと、真っ直ぐ引きずれなくて蛇行しがちだとか。

擦りむき加減が特に酷い鼻を見て思う。

アタシは四人の死体、じゃなくて遺体、でもなくて死骸…。

ああ、いかん、アタシかなり疲れてきてんな。つい願望がただ漏れに…。

ともかくアタシは四つのデカイブーツを並び終えたわけである。

「これぞ枕を並べて死屍累々？」

なんか違うような気もするけど。

まあいいか。

気絶した連中を目の前にして、逆にアタシは冷静さを取り戻した。

というか、気が抜けた。

連中がなんで気絶したんだとか。

アタシの朗々たる「寿限無」をちゃんと最後まで聞いたのか？

とか。

大体さっきのスーパーハイテンションなトランス状態は何だったんだとか。

なんてことも、今はいい。

取り敢えず、息ははしてるから無問題。

ただ折角こうして気絶してくれたんだから、それを利用しない手はないと思うのだ。

さて。

こっちの男の人の服装つてのは、三国志と三銃士を合わせて二で割ってコサックダンスを大さじ二杯足した感じだ。

ちょっと分かり難いので言い換えると、三銃士のトップとボトムに三国志のアウター着て、アクセントにコサックダンスを取り入れている。更に言えばで文官は三国志色が強くて、武官はコサック色が強い。

うーん、余計分かり難いか。

でもまあ、コイツらのファッションなんてどうでもいいから、まあいいか。

アタシは先ず、鉄面皮の懐を探った。

言っておくけど、別に痴漢行為をしているわけじゃない。

大体文官つてのは、懐に携帯用筆記用具を持っている。

アタシは、それを探しているだけだ。

ところがどっこい。

意外と厚い胸板以外に、コイツは何も持ってなかった。

懐の中はスツカスカ。小銭入れさえ入っていない。

ちっ。

宰相の癖に、何で持ってないんだ？

いや、財布じゃなくて筆記用具だよ？

宰相は書く方の人間じゃなくて、書かせる方だからってか？

偉ぶりやがってっ。

てか、この筋肉はいらんだろう？

胸板なんてなあ、意味ねえんだよ。

殴る時に必要なのは、背筋と安定した下半身だよっ。

………何か、八つ当たりくさくなっちゃった。

仕方がないのでアタシは、黒髪腹黒の方へ向かった。

正直言つて、コイツの懐は探りたくなかった。寝てても黒いオー

ラが垂れ流されていそうで、イヤな感じだし。

さっきのトランス状態だつて、きつとコイツの黒いプレッシャーでイっちゃったと思えない。

だだまあ、あの時至った考えが否定しがたいことは事実だ。

とはいえ、あの時は間違いないと思っただけれど、冷静になっ

ると確信は薄れてくる。

イスマイルの隠れ建国史を読んだのだから、随分前の話でうる覚えだし。

そもそもアレが信頼できる史料なのかどうかも分からない。ただ分かるのは、調べるべき事がまた増えてしまったということだけだ。

アタシは嘆息をつきながら、先程よりも若干慎重に黒髪腹黒の懐を探った。

うん、コイツも結構いい筋肉持ってんな。

じゃなくて。

あった。

アタシは何かを掴み当てた手を引き抜いた。

筆だ。

蓋の方にちよつとインクが入ってて、一筆くらいならサラサラと書けるようになってる。

あ、筆だけじゃなく、インク壺まで。

どんだけ書くつもりだよ。

と思つたら、和綴じになった紙束が出てきた。

大体B4くらいの大きさだろうか。

結構分厚い。

良くこんなに入れてたな。

四次元ポケットも真つ青なくらいの懐具合だ。

心は物凄く狭そうなのに。

けっ。

なんて思いながら、一体何を書いてんだらうと、パラパラと捲ってみる。

すると。

「ぶっ。ぶぶぶ」

アタシは思わず声を出して笑った。

いや、これが笑わずにはいらりようかつ。

そこに書いてあったのは、多分、いや間違はなく、アタシが隠し通路に書いた字を書き写したものだ。

平仮名や片仮名や英字は、まあ良く書けてるとは思っけど。

漢字に関しては、どこの楔形文字だ？ って感じである。

コレなんか、多分「袋小路」だとは思っけど、物凄くエライことになってる。

こちらでは、文字というのはアラビア文字に似た表音文字だ。

右から左へと横に書くのもアラビア語と同じところだ。

この大陸には五つの語圏があるけれど、基本的に文字は同じだ。

そんな連中に見れば、特に漢字なんかは「訳の分からん落書き」にしか見えないことだろう。

この文字の拙さから、連中の苦勞が伝わってくる。

「たっぷりと悩みなさいな、人の子らよ」  
なんちゃって。

アタシは、和綴じのノートを黒髪腹黒の懐へと戻す。

用事があるのは、筆とインクの方だからだ。

アタシはインク壺の蓋を外し、筆を突っ込んでタツプリとインクを含ませる。

ニヤリ。

と、自然と口が緩んでくる。

おお、いかんいかん。

淑女にあるまじき笑い方をしてしまった。

まあいいか。

誰も見てはいない。

アタシは連中の胸の上に乗りに上げた。

ケロタンは軽いので、上に乗っても連中が目覚ます気配はない。

アタシは徐にサツと筆を構え。

連中の顔を使せん代わりに。

サラサラサラサラサラサラ~~~~ツと、字を書いた。

君がため惜しからざりし命さへ、夢の通ひ路人目よくらむ。



百人一首だ。

但し、上の句と下の句は別の歌だけだ。

元ネタは、上の句が。

アンタのためなら死ねる！  
って言ったけど、ぶっちゃけ命惜しいです！

と平安貴族にあるまじき本音ぶちまけな歌で。

下の句は。

夢の中でさえも会いに来ねえって、アンタ、気持ち冷めたんかよ！  
と平安貴族らしく失恋にむせび泣く歌だ。

両方とも恋を詠ったところが共通点だけど、一緒にしちゃうと当

然ながら意味不明だ。

それをこちらの定型詩クレアリットの形式に沿って、翻訳する。

定型詩は古語や雅語を使うので、物凄くもったいぶった文になる。  
すると、意味不明な文章が、物凄く意味深なものになる。

これをこの連中がどうい風ふうに解釈して、どんなことになるのか  
と思うと。

「ウケケケケケ」

いかん。思わず笑い声が。

思わず漏れた声に、連中の様子を伺い見るけど。

連中が目を覚ます様子はない。

そりゃそうだ。

あんだけ顔に擦り傷作って、目が覚めないんだもんな。

インクがキズに浸みそうなのに、とことん昏倒してる連中はどこ  
までも昏倒したままだ。

上機嫌になったアタシは、最後にデカデカとハートマークを描い  
てみた。

真っ黒いハートマーク。

真っ黒い腹のアンタに、物凄くお似合いだよ。

と心の中でほくそ笑みつつ、一番左に寝転んでいる黒髪腹黒の懐  
へと筆とインクを戻した。

「さっ。リズが待つてるから、帰らなくっちゃ」  
アタシは超高速でスキップしながら、レゼル宮へ戻った。  
と言つても帰りは、飾り棚の裏じゃなくタペストリーの裏へ通じ  
てる近道を使う。

隠し扉の横のレバーを回せば、少し擦る様な音と共に扉が開く。  
こちらの扉は、レバーを押さえていないと直ぐに閉まってしま  
うので、パツと手を離すと同時に扉をくぐる。

直ぐさまカシユツと背後で扉が閉まる。

実は一度、隠し通路に入ろうとして間に合わず、挟まってしま  
たことがある。

その時は、上半身は辛うじて隠し通路の中だったので、何とか腕  
を伸ばしてレバーを回すことができたけど。ケロタンの体は痛みを  
感じないものの、くすぐったくって笑い死にしそうだったのだ。で  
も盛大に笑つてリズを起こすわけにもいかず、必死で笑いを堪える  
余り腕に力が入らなくて困ったものだ。

アタシはそつとタペストリーを捲り、部屋の中の様子を伺う。

一号のアタシに、気づかれるわけにはいかないからだ。

気づかれても問題はないのかもしれないけれど、気づかれたとこ  
ろで何をどう話していいのかわからない。

なので、また四つん這いになって、カウチまで戻るとするか。

なんて思つて身を屈めると。

ぬつと目の前に黒い影が立ちはだかった。

いや、「立ちはだかる」ってのは正確じゃない。

何せアタシも相手もしゃがんでたから。

「うっ」

思わず相手の名を呼びそうになったアタシの口は、相手の手で塞  
がれた。

いや、口塞がれても、声自体は出るんだけれど。

「五号……」

だから勿論、アタシは相手の名を呼んだ。

すると黒いカエルは若草色の目で、キツとアタシを睨み付けた。

「しっ。黙って。それより早くしないと、夜が明けちゃうわ」

五号じゃない声で、五号が喋った。

しかも女言葉で。

「も、どれだけヒヤヒヤさせるのよっ」

と声を潜めながら五号は言った。

ええ！？ 五号、何時からニューハーフに！？

と思った瞬間、アタシの、つまり四号の体は宙に舞った。

第二八話 カエルに横隔膜はありません その8（後書き）

ウチの地方では。

「どれにしようかな裏の天神さんに聞いたらよく分かる、きんこんかんこんアブラムシ、裏から回って三軒目、チントンシヤン」  
でした。

最後のチントンシヤンは、やってる人間が自分にあたった時に、裏技的に付け加えます。

## 第二九話 カエルの鼓膜は剥き出しです

結論から言えば、アタシは五号に投げ飛ばされたのだ。

ケロタンの軽い体はクルクルクルツと自転しながら、タペストリ  
ーからカウチまで綺麗な弧を描いた。

生身なら、間違いなく三半規管が悲鳴を上げたことだろう。

当然ながら、カエルにも三半規管はちゃんとある。

目の後ろにある剥き出しの鼓膜の奥に、殆ど人間と同じモノがあるというのも不思議だけれど。

全方向視界のケロタンの目に、寝室と窓の外の風景が万華鏡を回すが如くクルクルと入れ替わる。

部屋の中は暗く、東の空は白い。

視界の隅で、黒いカエルがアタシを追いかけるように走っているのが見えた。

ポスンツとカウチに体が着地したその瞬間。

脊椎真つ二つな姿勢のまま。

アタシは夢の世界とおさらばしてた。

そして目が覚めたのは、例の薄暗いカエル転送空間。

こうなれば流石に、予想も付くので驚きはしないけど。

何時になったら現実世界に戻るのか？

アタシは呆れたらいいのか怒ったらいいのか分からないまま、背後の人影に声を掛けた。

「で、何でアンタがいるの？ アディーリア？」

長く豊かな紫の巻き毛に満月みたいな金の瞳。

完璧な美貌に完璧なプロポーション。

薄暗い空間の中で、彼女の周囲は滲む様な淡い光で包まれている。その姿は、黙っていれば美の女神か愛の女神かってくらしいの神々しさだ。

彼女を見ていると、本当の美人というものはチャームポイントというものがないのだと分かる。というのも、どこか一つのパーツだけが優れているということがなく、要するに全部のパーツが完璧なのでどこか一つだけ魅力を挙げると言っても不可能だからだ。

但し、それもこれも全部黙っていればの話。

「そんなの決まってるでしょ。貴女がイロイロやかしちやっただか  
らじゃないのっ」

絶世の美女は、腰に手を当てて偉そうにふんぞり返りながらおっしゃった。

その美しい唇から出た言葉が「女王様とお呼び」じゃないのが不思議なくらい、偉そうだ。

「可哀想に、アディーリア」

仕方がないので、アタシは小さな子供を諭す様に言っただけだ。

「アンタ、死んじゃってるんだよ。とっくの昔に。だからさっさと成仏しなよ」

ついでに手を合わせて「南無南無」と拝んでみせる。

「あいつかわらず、腹の立つ子ね!!! キー!!!」

「ああ、懐かしい『キー』だ。それを聞くと、『ああ、アディーリアだな』ってシミジミ思うよ」

「妙な所で懐かしまないでよっ」

キッと睨み付けてくる顔も、こりゃまた当然美しい。

アディーリアに出会うまで、アタシはこの世の中に「キー!」と

言う人間が本当にいるとは思ってもみなかった。そして後にも先にも、アディーリア以外にそんな事を言う人間をアタシは知らない。いや、一人だけいたか。ヒステリー持ちの第二正妃だ。彼女が夜中に侍女さん達を呼び出して文字通り「キーキー」唸ってた。初めて聞いた時は、猿でも飼ってんのかと思つた程だ。

「貴女！ また変なこと考えてるでしょう！」

詰問口調で詰め寄るアディーリアに、アタシはなんで分かつたんだろうと思いつつ、

「まさか。しみじみと懐かしさを噛み締めてたんだよ、アディーリア。会えて本当に嬉しいよ」

その言葉自体は嘘じゃないので、心を込めてそう言った。

するとアディーリアはピッとそっぽを向いて。

「そ、そう？ 貴女がそこまで私に会いたかつたのなら、少しくらいおしゃべりしてあげてもよくつてよ」

相変わらずのツンデレ属性が。

そつという顔をしていると幼く見えて、本当にリスによく似ていると思う。

そもそもリスは父親の遺伝子なんざ一塩基も受け継いでないかのように、アディーリアにそっくりだ。

「でも、アレまで似るのは困るなあ」

「なんですって!?!」

地獄耳のアディーリアは、アタシの密かな呟きも聞き逃すということがない。

「何でも」

「嘘おつしやいー！」

そして勿論容赦もない。

でも彼女が感情を隠さないのは、アタシに対して心を許しているという証拠でもある。

アディーリアは猫かぶりだ。しかも相当デカイ猫を飼っている。

裏表はありまくりだし、人の好き嫌いも激しい。

でもそんなことは、どうでもいいのだ。

「聖者」なんてものはそれくらい性格悪くないと務まらないだろうというのが、アタシの考えだからだ。

リズだって、将来のことを考えればそれくらい性格悪くてもいいはずだ。

けれど、妙な男に惚れちゃうようなところまで似て貰っては困るのだ。

それをアディーリアに言ってみたところで、理解してもらえないと思わない。

「ホント、何でもないから」

「……………まあ、いいわ。くだらないことに時間を浪費している暇はないものね」

アディーリアはどこまでも高飛車にそう言っつて、肩に掛かる髪を無造作に払った。

そんな何気ない仕草の一つ一つが、本当に絵になっている。

それは彼女が、自分の美しさというモノを熟知しているからこそその美しさだ。

アタシは心の中で拝む様に鑑賞しながら、あくまでも素っ気ない口調で言った。

「アタシとしてもさ、アディーリアの貴重な時間を浪費するのは心が痛むから、さっさと成仏しちゃいなよ」

「何よそれ！ 私が折角貴女のために出てきてあげたのに！」

アディーリアは案の定、カツと怒りに頬を染める。

実は彼女の怒った顔が一番好きなんだけど、勿論言っ気はサラサラない。

「そもそも私は『ブツディスト』じゃないから、成仏なんかしないわよっ」

「……………なんでそこだけ英語なの？」

「そんなの知らないわよっ。それ以前に私が日本語話してること自体おかしいと思いなさいよっ」



アディーリアの「開き直りか？」としか思えない反論に、けれどふと考える。

「……………」

あれ、そういえば。

「アディー、日本語話してる??」

「そうよっ。ていうか、どうして直ぐに気が付かないのよっ。それから、人に勝手な愛称をつけないでよっ」

一つ聞けば二つ以上の答えが返ってくるとは、どこまでも文句の多い女だ。

「じゃあ、リア」

「そう言う意味じゃなくってっ」

アディーリアは「あゝ、もう、だからこの子はっ」とか何とか言いながら身悶えた。

美女は身悶えても美しい。

というか、妙に色っぽくて、未知の世界へ足を踏み出しそうである。

いや、踏み出しはしないけどさ。

解説しよっ。

アディーリアは当然だけど、日本語を話せない。

そしてアタシは、今でこそアディーリアの記憶のお陰で、向こうの言葉も話せるけれど。

かつては日本語しか話せなかった

じゃあ、出会った当時、アタシ達はどうやってコミュニケーションを取っていたのかというと。

ご都合主義的自動翻訳機能が働いていたからだ。

何故なら、それが夢ってもんだから。

うゝゝん。解説する程のことでもなかったか。

「だからそれは、神々の恩恵でしょうがつつつつ」

と、アディーリアは言うけれど。

「えゝ、神様がいないとは言わないけどさあ、見たことも会ったこ

とも食ったこともないし、俄には信じがたいというか、信じられない  
というか、ぶつちやけどうでもいいというか」

「そんな事ぶつちやけないですよ！　ってというか、貴女、神を食べる  
気なの??」

「今更なぐに言ってるの。お米の一粒一粒には七人の神様が  
いるんだよ?」

「お米一粒に七人の神…」

アディーリアはそう呟いて真っ青になった。

一体何を想像したのか。

「き、気持ち悪いっ」

と呟くと、ふらつとヨロめいて崩れる様にしゃがみ込んだ。

何だか芝居がかつてるなあと思いつつ、アタシには彼女の考えて  
いることが不思議と手を取る様に分かった。

お茶碗にウジャウジャとアリの如く蠢いている神々の姿を思い浮  
かべたのに違いない。

うーん、流石にそれは気持ち悪い。

「変な想像するからだよ」

アタシは彼女の背中を撫でながら言う。

「貴女が想像させたんでしょ!」

「しろとは言っていないじゃん。アディーは想像力が逞しいよねえ」

「私のせい?　私のせいなの?　どうして貴女と話していると、私は  
こんなにも無力感に襲われるの??」

アディーリアはよよつと、泣き崩れた。

そんな彼女の儂げな背中に向けて、

「人というものは、無力な存在だ」

と、五号風に言ってみる。

「何、達観したような口利してるのよ!」

顔を上げたアディーリアの頬には一滴の涙も流れていない。

「やっぱ、嘘泣きじゃん」

リズはそりゃ素直な子だけど、女の子なんだから嘘泣きなんかし

よつちゆうだ。

九年間もアンタの娘の嘘泣きを見守ってきたこのアタシに、嘘泣きなんか百万年早いんだよつ。しかも可愛いリズならともかく、アンタの嘘泣きなんざ見てて楽しくもなんともない。

いや、リズの泣き顔見て楽しんでるわけじゃないよ？

あくまでも嘘泣きつてのが前提だから。

あの、「これなら騙されるだろう」っていう感じが見え見えな「迫真の嘘泣き」が、見ていて可笑しくもあり微笑ましくもあるっヤツである。

「く、くやしいつ。しかも子供の頃より質が悪くなつて」

「そりゃそうじゃん。アンタは死んで成長しないけど、アタシは生きてて日々成長してるもん」

「……………酷いこというのね」

急に真顔になつた彼女は、けれども少しも悲しそうにも悔しそうにも見えなかった。

事実を事実として受け入れる、ある種の気高さがそこにあった。

それは確かに美しくはあったけど、決してリズにさせたい表情じゃあなかった。

「まあいいわ。私が死んでいるのも事実だし、私が年を取らないのも事実なものね」

ここできつちり嫌味を返してくるのが、アディーリアって人間だ。その事に少しだけホツとしながら、アタシは言った。

「で、なんでアディー、日本語話してんの？」

アディーリアは、そもそも神聖名を略して愛称にするなんて貴女くらいよ、とか何とかブツブツ言いつつ、

「……………私が、サタシアナ⇨アディーリア・ロラン・クリシア・ハジエク・クルス・クリシア・アウラ・エス・エイシアンであつてサタシアナ⇨アディーリア・ロラン・クリシア・ハジエク・クルス・クリシア・アウラ・エス・エイシアンではない存在だからよ」

それはまるで神託でも告げるかのように厳かだったけど、

「あのさ、無駄に長い名前繰り返して面倒臭くない？」

「無駄に長いっていうな！！」

「うわお、ちょっと会わない間に、随分口が悪くなっちゃって。」

「オゲエ〜」

「アタシの心の眩きに同意するかの様にカエルが吐いた。」

「じゃなくて鳴いた。」

第二九話 カエルの鼓膜は剥き出しです（後書き）

美人というものは我が儘で性格は悪くあるべきだと、ワタシは思います。

でも根性が腐ってはいけません。

第三十話 カエルの鼓膜は剥き出しです その2

「いたんだ」

カエル共。

アタシの声に答える様にカエルが鳴いた。

「オゲゲゲゲエ」

「ゲコゲコゲコツ」

「キュルキュルキュルルルツ」

「ケロ、ケロケロケロロ」

「……………」

何やら非難がましく聞こえるのは、きっと気のせいに違いない。

所詮人間でしかないアタシには、カエル語を理解する日は来ないだろう。

「ゴメン、アタシには種の壁を乗り越えられそうもないわ」

「ご都合主義的翻訳機能すら越えられないものを、一介の小娘が越えられるとは思わない。」

てかぶつちやけ言つて、越えたくもない。

それでも、一生懸命何事かを訴える様に鳴いている彼らに、酷く申し訳ない様な気がしないでもない事も無い様な気がしないでもなかった。

……………自分で言つて何だが、結局どつちなのか分からない。

「貴女、一体何の話をしてるのよ」

戸惑うようなアディーリアの問いに、アタシは答えた。

「カエルと人間の相互理解について」

するとアディーリアは奇妙なモノを見るような目でアタシを見た。ケロタンに入ってる分けでもないのに、そんな視線を浴びせられるとは。

アタシは慥然となって言い返す。

「だって仕方がないじゃんか。両生類と人類じゃあ、脳の構造が違

いすぎる。あ、勿論、人間の方が脳の構造が複雑だから高等だなんてバカなことは言わないよ」

そもそも人間以外の生き物は本能のままに行動しても「矩」を越えることなんてないけれど、人間はどんなに頑張っても七十にならなきゃ「矩」を弁えるようにならない生き物だ。

本当に高等生物ならば、自分のしてる事が一体何を引き起こすか理解できるはずだ。

氷の無くなつた北極で何日も泳ぎ続けるシロクマ。

パーム椰子の栽培のため、森を失って傷ついたオランウータン。

象牙のためだけに密漁されるアフリカゾウ。

今更地球温暖化だとか生態系の破壊だとか騒ぎ始めても遅いのだ。彼らはもう既に、「矩」を越えた人類のツケを支払わされている。

「だからもう、人類は宇宙人とかに絶滅させて貰えばいいと思う」  
文明を捨てる勇氣も自殺する氣概もないアタシは、時々本気でそう思う。

まあ、実際に宇宙人が攻めてきたら、足掻きまくって逃げまくると思うけど。

つまり、人間なんて、アタシを含めて、心底しようもない生き物なのだ。

「貴女の根源的な人間不信の話はいいわ」

アディーリアの言葉で、アタシは自分の思考がズレてたことに気が付いた。

けれど同時に、アディーリアの言葉を疑問に思う。

「ええと、アタシ、人間不信？」

そうだろうかとアタシは思う。

アタシには信頼できる友人も家族もいる。

けれどアタシの問いに、アディーリアは肩を竦めただけだった。

今はそんな話をしてる場合じゃないってことだろう。

そりゃそうだ。

アディーリアだって、まさかアタシの人間観について議論するた

めに出てきたワケじゃないはずだ。

アタシは黙って頷くと、それを承諾と思ったのか、アディーリアが話し始めた。

「私が言いたいののはね、何故彼らが貴女にはカエルに見えているかということよ」

彼女が行儀良く掌で差しし示した先には、カエルがこれまた行儀良く並んでる。

「…………カエルだからカエルに見えてるんだと思うけど」

カエルをカエル以外に見ると言っても、妙なフィルターが掛かっているワケでもないアタシの視神経は、そんな素敵なことをしでかしてはくれないだろう。

「貴女がそんなのだから、彼らの言葉も理解できないのよ」

「いやだから、それはさっきも言った様に、種の壁は越えられないっていうかさあ」

一体何が言いたいんだろう、この女は。いや、お姫様は。じゃなくしてお姫様は。

アタシがそんな事を思いつつ生温い視線を投げかけると、アディーリアはキツとアタシを睨み付けた。

「あのね！　ここは貴女の夢なのよ！」

「ああうん。それはそうなんだとは思っけど」

現実にはアタシは寝ているワケだから、確かにこれは夢なのだろう。というか、アタシ以外の夢だったらビックリだ。

と思つたのもつかの間。

「まあ、厳密には貴女だけの夢ではないのだけれど」

「えええええっ」

うわあ、ビックリだよ！

思わず、ここ数年無いくらい大きな声を出してしまった。

そんなアタシにアディーリアは、形の良い片耳を綺麗な指で押さえて言った。

「嫌ね、大きな声出さないでよ」



「ええっ!？」

こりやまた更にビツクリだ。

今まで散々アタシを怒鳴りつけてた人間の言葉とは思えない。

アタシが目を皿の様にしてみつめてみると、その視線の意味に気が付いたのか、アディーリアはツンツと顎を上げて、

「貴女が私に大声をださせたのよ」

と言い切った。

「うわあああ」

女王様だ、女王様がここにいる!

リアルに王妃だから、そのまんまを言ってるようなものなんだけどっ。

アタシが更にマジマジ見詰めていると、アディーリアは何故かカッと頬を染めて、

「今はそんな込み入った話をしている時間はないのよっ」

と言い放った。

アディーリアの性格が「女王様」だというのは、そんなに込み入った話だろうか?

とは思ったものの、頬を上気させた表情がリズに似ているので、勘弁することにした。

「ああ、うん、そうだねえ」

そもそも「時間がない」の意味が分からないけど。

その事も含めて勘弁する。

「もうっ。貴女と話していると、話が逸れて困るわっ」

困っているのは寧ろアタシの方だと思う。

けれど勿論、そんなことを口にするような愚かなマネはしない。

ここでリズなら、教え諭すような事もするんだけど。それはアタシにはリズに対する責任があるからで、ぶっちゃけ言っただけアディーリアにはそれがない。

「ああ、うん、ゴメンよ。全部アタシが悪いんだよ」

「分かればいいのよっ」

ふて腐れたような表情が、何かを誤魔化すために怒ってる時のリズにそっくり過ぎて、物凄く可愛いと思うアタシは、多分末期だ。「もう、何の話してたのか、忘れちゃったじゃないの」

多分ここで、健忘症なんじゃないの？　なんて言おうものなら、へソを曲げて暫く口も利いてくれない事だろう。

へソを曲げた顔も可愛いかもしれない、なんて思いつつ、アタシは素直に教えてあげた。

「ここがアタシの見てる夢だって話」

「ああ、そうだったわね」

アディーリアはそう言っただけで、完全に思い出したのだろう。

「だから貴女の意識がこの世界を形作っているの！」

「……………」

片手を腰に当てて、もう片方の手でアタシをビシッと指差してる。ただ単にそれだけのポーズなのに、美少女戦士も真つ青な程のキマリッぷりだ。

けれどカエル相手には掌で、アタシには人差し指ってのは、どんな差別なんだろう？

「ええと、夢はどっちかっていうと無意識の領域じゃないかと」

「意識だろうが無意識だろうが、貴女は貴女でしょ！」

アタシは何で怒られてるんだろうと思いつつ、ある事に気が付いた。

「『無意識』なんて言葉、よく知ってたね」

夢の世界、つまりアディーリアの生きた世界には「無意識」や「深層心理」にあたる概念がない。例えば夢は「夢幻界」に魂が訪れた状態で、それは精霊の領域ということになる。

初めてアディーリアと会った時も「精霊のお導き」云々なんて言ってたもんだから、「こんな夢見がちな美女が出てくる様な夢を見ているアタシって、相当ヤバいんじゃないかねえの？」と思っただけだ。

「だから、私はアディーリアであってアディーリアではない存在なの」

「意味が分かんないんだけど」

アタシの端的な答えに、アディーリアは思案気に首を傾げた。

「そうねえ」

それを見てアタシは、そのちよつとした仕草で一体どれくらいの男が落ちるんだろう、なんて考える。

「私は『宮本澄香の記憶の中のアディーリア』とでも言えばいいかしら?」

もつと分かん。

アタシの心の声を察知したのか、アディーリアは更に続けた。

「貴女はね、アディーリアの記憶を受け継いだ時、無意識に全てを受け入れる事を拒絶したのよ。でもそれは当たり前的事。他人の人生の記憶を丸ごと受け入れるなんてことをすれば、貴女という人格は間違いなく崩壊していたわ」

アタシはその言葉に顔を顰めた。

てことは、アディーリアはアタシに随分と危険な事を強いたという事だ。

「でもだからといって、貴女に必要な知識だけに移すなんて便利な事は不可能だった」

そこまで言うと、アディーリアはコホンと小さく咳払いして、

「言っておくけど、アディーリアにだって、随分危険な賭だったのよ?」

言い訳がましい言葉なのに、高飛車に聞こえるのは何故だろう。

でも、確かにそうかもしれない。

アタシが壊れたら、アディーリアは希望を失うわけだから。

けれどどちらにしろ、死んだ人間の「危険」と生きてる人間の「危険」は、相当意味が違うと思う。

「結局貴女は上手く対処したんだから、それでいいじゃない」

いや、それはアタシが言うべき言葉だと思うけど。

アンタが言ったんじゃないあ、単なる開き直りにしか聞こえない。

とは思うものの、実際済んでしまった事をアレコレ言っても仕方

がない。

アタシはアディーリアの切実な「願い」を知っている。危険だとは分かっているけども、結局アタシはアディーリアの「願い」を受け入れたのに違いない。

「で？ アタシは何をどうやって危険を回避したわけ？」

アタシの問いに、アディーリアは小さく頷く。

「貴女は『アディーリア』という器、つまりこの私ね。それを作って、そこに『有害』な記憶を封印し意識の奥底に沈めたのよ」「有害って……」

流石に他人様の人生を「有害」と言うのは気が引ける。

けれどアディーリアはキツパリと言い切った。

「貴女という人格を破戒するかもしれないモノだもの。それはつまり『有害』なのよ。実際アディーリアは、ご両親に大切に育てられた貴女には耐えきれない様な酷い経験もしているわ」

「……………」

それは多分、子供の頃の話だろう。

アタシには、アディーリアの子供の頃の記憶が殆ど無い。

その多くは、二十歳を過ぎてからのものだ。

十二のアタシに、「大人の記憶」は他人事として一歩退いた目線で見る事ができた。

けれど、子供のアタシに「子供の記憶」は混乱を招いたに違いない。

なるほど、それならアタシは「結構上手くやった」らしい。

「で、そのアディーリアであってアディーリアでないアディーリアが、今更何で出てきちゃったのさ？」

アタシがそう訊ねると、アディーリアは途端に険しい顔をして。

「それは貴女が、『日本語』を話したからよ」

更に意味が分かりませんか？

### 第三一話 カエルの鼓膜は剥き出しです その3

「ほぼ生まれた時から日本語しゃべってますが？」

我ながら何で敬語なんだろう、とか思いつつ、アタシは当たり前  
の事を噛み砕く様に言った。

「知ってるわよ!!」

そこで怒られても、アタシとしてもどうにもしようがないとい  
うか？

「アレはただの『日本語』じゃなかったわ! 一体どういう事なの  
か、説明しなさい!」

アレってのは、やっぱり「寿限無」のことだろう。

何かよく分からないけど、宰相連中が気絶したのと関係あるん  
だろうか？

「説明って言われても…」

「寿限無」の説明と言ったら、やっぱりアレしかないだろう。

アタシはコホンと一つ咳払いして。

「え、ここに縁あって夫婦になった二人がおりまして、そんなこ  
んなである日ポッコリ子供が生まれやした」

「一体何の話をしてるのよ!」

ここで恵美ならパスコ〜ンと一発入れられるトコだけど、育ち  
のいいアデーリアが殴る何て事はない。但し時々つねられるけど。

「だから、お笑いを一席？」

「落語か!」

アデーリアが何で「落語」なんて言葉を知ってるのかはさてお  
き。

「てか、落語だし」

「誰が落語を話せと言ったのよ!」

「言ったじゃん。たった今」

「私が言ったのは、あの奇妙な『日本語』について説明しろと言っ

たのよ！」

「だから説明なんじゃん」

「落語が!?!」

「落語が」

「.....」

「.....」

「ひょっとして、私たちの間に、何か齟齬があるのではなくて？」

「多分ね」

アタシ達二人は、ここに初めて一つの合意を得たのであった。

なんて言ってる場合じゃなくて。

「あのさ。アタシは今までだって結構向こうでも日本語話してきたよね?」

今でこそ向こうの言葉 エル・イダール語に不自由こそしないけど、昔は一々頭の中で翻訳しながら話してたのだ。ポロツと日本語が出た事も一度や二度や百度じゃ済まないくらいだ。

「リスに日本語で子守歌を歌ってたし」

アタシがそう言うと、アデーリアは思案顔で呟いた。

「私は、貴女の中でずっと微睡んでたわ。それが突然何かによって無理矢理目覚めさせられたのよ。そしたら貴女が、『日本語』で訳の分からない事を言ってるじゃない? 奇妙な感じだったわ。日本語だと分かるのに、意味が分からないくて」

その時の事を思い出しているのだろう、アデーリアは僅かに顔を顰めた。

「アレは訳の分からない事じゃなくて、れっきとした人間の名前だよ」

但し、そんな名前の人間は会った事も見た事も食ったこともないけれど。

「随分と長いのね」

「アデーリアのだって相当長いよ」

「ちゃんと意味があるもの」

「『寿限無』にだって意味があるよ。アレはねえ、子供の幸せを願って、お目出度くもありがたい言葉を並べてあるんだから」

ポンポコピーだとかポンポコナーの何処が目出度いのかは分からないけど。

「『聖文』の様なものかしら？」

聖文つてのは、神官が儀式の時に唱える祈りの言葉の事だ。

そんなに大それたモノじゃないけど。

一々説明してたらキリがないし、第一名前の由来全てを知ってるワケじゃない。

ので。

「うん、そんな感じ」

アディーリアはほんの少しだけ納得いかない様な顔をしてたけど、時間がないんじゃないの？」

と言つてやつたら、渋々頷いた。

「実はね、アレを聞いている内に無理矢理引きずり出されるような感覚があつて、気が付けばサウザードの中に入つてたの」

それから、アディーリアは金色の眼差しをピタリとアタシに向けて言った。

「ねえ、貴女。あの時、貴女、変じゃなかった？ といつても、貴女大抵変だけど」

「……………何で一ター言多いんだろうね、このお妃様は」

そんなことをブツブツいつつ、確かにあの時のアタシはおかしかったと思ひ出す。

「物凄くテンション上がつて思考は纏まりがなくてバラバラなのに、どっか頭の芯は冷静で…」

今まで関係ないと思つてた事柄が、たった一つの事を指し示している様にしか思えなくなつて。

「千ピースのパズルが一瞬で解けたみたいないな感じだった」

そこまで言つて、アタシはふと思ひ直した。  
いや待てよ。

あの時、アタシは、最初に何を言った？

この国が亡くなった後は、どうするの？

バラバラのピースが一つの絵になったのは、その後だ。

アタシはまるで、最初から答えが分かっていたみたいだった。

「……………」

こうして振り返ってみると、我が事ながら不気味すぎて、言うべき言葉が見つからない。

するとアディーリアが、ふと思い出した様に言った。

「昔、貴女と同じような状態の人間を見た事があるような気がするわ」

「随分曖昧な言い方だね？」

アディーリアにしては珍しい。

「五歳前後の記憶だから……」

曖昧なのよと、アディーリアじゃないアディーリアはそう言って、何かに耐える様に唇を噛んだ。

二二でリスを生んだ彼女は、生きていれば三四だ。

その彼女が五歳の頃というと、二九年前。母国クリシアが滅んだ頃だ。アディーリアは神殿に保護されて戦禍を免れたけど、ゴースユの侵攻は凄惨を極めたという。

幼かったアディーリアには逃げるしか道が無かったとは思っけど、その事が成長した後、彼女の心に影を落とす。

国民を捨てて逃げた王女だと。

恐らく、アディーリアは戦禍を見たのだろう。

多分それが、罪悪感に繋がっている。

我が儘いっぱいに育ったようなアディーリアだけど、どんな人間にだって光の差さない部分はあるのだ。

アタシは何か言葉をかけるべきかと思っただけど、平和ボケした日本人のアタシには言うべき言葉が見つからない。

「まあ、五歳の頃の記憶なんて、大抵定かじらないもんね」

アタシはそう言って、この話題を打ち切った。



どつちにしろ、曖昧な記憶にヒントを見つけようとする事と自体、無理な話だ。

「それより、アディーが目覚めたのと、連中が気絶したのって、関連性があるんだろうか？」

一方は気絶して一方は目が覚めるって、全く真逆のようだけど。タイミング的には合っている。

「取り敢えず、ここでもう一回『寿限無』を唱えてみるってのはどうだろうか？」

もしアディーリアが、何某かの異常を感じたら『寿限無』が何らかの原因だつて事が分かる。

「ちょ、ちょっと、待ちなさいよ！ もう一度アレを聞くのなんて嫌よ！」

アディーリアは大げさなまでに耳を押さえ、身を振った。

その仕草がこれまた何とも言えず艶めかしかったけど、

「まあまあ、そんな我が儘言わないで。カエルもホラ、応援してるから」

アタシの言葉に心える様に、カエル共は鳴いた。

「ゲコ」

「オゲエ」

「ケロロ」

「キュルツ」

「……………」

相変わらず約一匹無言のままだけど。

「何その気の抜けた声！ 全然応援なんかしてないじゃないっ」

「仕方がないなあ。じゃあ、もう一回いい？」

アタシはカエル共に向かって、指を構えた。

それを指揮棒の様に振り下ろして。

「サンハイ」

「オゲエエエエエ」

「キュルルルル」

「ゲコオオオオオ」

「ケロロ~~~~」

「.....ッ」

「いやあああ！ そんな応援、嫌よおお！」

アディーリアは髪を振り乱して叫んだ。

そんな狂気じみた姿も、これまたビツクリする程美しい。満月の下でなら、きつと尚皿美しいのに違いない。

とういうか、アディーリアの反応は、まるでカエルが何を言っているのか分かってきているみたいじゃないか？

「ひよつとして、アディー、カエル語が分かるワケ？」

「カエル語なんて分かるわけないじゃないのっ！ っていうかカエル語って何よ！！」

「ああ、やつぱり？」

アディーリアの最後の言葉は無視をして、そりゃそうかと思う。

幾ら非常識な程の美女だとしても、流石にカエル語は分からんか。

なんて納得したのもつかの間。

「だから、どうして貴女には、彼らがカエルに見えて、カエルが鳴いているようにしか聞こえないのかって訊いてるのよ！！」

アタシは、アディーリアの言葉に軽い既視感を覚えた。

ええと、カエルがカエルに見えて、カエルがカエル語を話すのは当然だと、また最初から言わなければならぬんだらうか？

それだと、「ふりだしに戻る」みたいに、また話がループするんじゃないだらうか？

アタシがその時思ったのは、面倒臭いの一言だった。

けれど、いや待てよ、と思い直す。

アディーリアは、その後なんて言ってたっけ？

アタシがこの世界を形作る？

「ねえ、もしかして、アタシがカエルとってるからカエルに見えるってコト？」

「だからそう言ってるでしょうっ。ここには貴女の『常識』が反映

されてるのよ」

「キュルツ」

「ゲコツ」

「オゲエツ」

「ケロツ」

「……………」

アディーリアの言葉を後押しするかの様に、カエルが鳴いた。そんな彼らを一匹一匹吟味する様に見詰めてみる。けれど、どこをどう見ても、カエルはカエルだ。

「オゲツ、オゲエー」

「ゲコゲコ、ゲコ」

「キュルルルツ」

「ケロ、ケロケロロツ」

「……………ツ」

そしてカエルはカエルの声で鳴く。

「っていうかさ、アタシの常識じゃあ、カエルは腹の虫の音や嘔吐してるような音では鳴かないよ」

もしリアルで「カエルの鳴き真似をしてみて」と言われて「オゲエ」だとか「キュルキュル」とか言った日にゃあ、確実に常識を疑われる。

常識なんて所詮「所変われば品変わる」程度のモノだけど、そんなものでも疑われれば人間関係に支障を来す。

「せめて『ワン』とか『ニヤア』とか鳴いてくれるように言ってよ。ニヤアは知らないけれど、ワンと鳴くカエルは存在する。」

「どうして犬猫のマネをさせるのよ！！ 人語を話すようにすればいいじゃない！！！」

おお、流石死んでも聖者、あつたまいい〜。

と思つた瞬間、ポンツとアディーリアが消えた。

「ええ?? ちょっ、アディー!??」

時間が無いって、こういうコト???

と言った瞬間、パツとアタシは目が覚めた。

眩しいくらいの光が降り注ぐ視界に最初に映ったのは、何故か涙ぐんでる恵美で。

「スミのバカ~~~~!!」

と恵美は叫んで、駆けだして行った。

「な、何事??」

世の中、夢も現実もままならないと、諸行無常を噛みしめたアタシだった。

第三一話 カエルの鼓膜は剥き出しです その3 (後書き)

夢の終わりは唐突です。

## 挿話 耳に残るはカエルの歌声

「あ~~~~っはっはっは、い~~~~っひっひっひっ、ひ  
や~~~~っはっはっはっはっはっはっは」

世界で最も天に近い城とされるイスマイル王城。

清澄な朝日を受けて輝く黄金の意匠を纏う白亜の城に、盛大な笑い声が響き渡る。

「え~~~~っへっへっへっ、によ~~~~っほっほっほっ、だ~~~~  
っはっはっはっはっは」

一体何の鳴き声だ？ と思わず問い質したくなる笑い声の発信源は、王太子の住まうエルハラ宮。

その一室で、朝早くに叩き起こされたためか普段よりも二・三倍（自社比）鳥の巣がかった銀色の癖毛を威勢良く跳ねさせた国王侍医が、希有な紫の瞳に涙すら浮かべて爆笑していた。

「あっはっはっはっはっは！ 全く可笑しいね！ そろいも揃って君らがさ！！」

やや薬品で荒れた指が、不躰な子供の様に指し示す先には。

「いい加減そのバカ笑いを止めろっ」

唸る様にそう言って、ギリギリと奥歯を噛みしめる第一近衛隊長長。

「いやはや、私としたことが、しくじりました」

穏やかに微笑みながらドス黒いオーラを垂れ流すのは王佐。

その隣では。

「あんのカエル、巫山戯た事しやがって！ 絶対今度会ったら串刺しだ！！」

第一近衛隊副隊長が、いつもの飄々とした薄笑いの仮面を何処へやってしまったのか、辺り構わず怒鳴り散らす。

そして、本来ならば彼らのまとめ役でもある宰相はと言えば。

「……………こんなに顔を擦りむいたのは生まれて初めてだ」



そして彼らに残されたのは、バカ笑いを止めようとしもない国王侍医だけとなった。

どうにか文字を写し終えた後、彼ら四人は顔を洗ってさっぱりとした。

気分の方も違う意味でさっぱりだったが、それを口にしたら最後に目の前でキラキラと子供の様に目を輝かせている国王侍医に、何を言われるのか分かったものではなかった。

国王侍医が無垢な子供の様な目をしている時は要注意だ。

何故なら彼は間違いなく、無責任に面白がっているだけだからだ。

「へっへっん。僕を連れていかないから、こんな事になるんだよ？」

救急箱から消毒液を取り出しながら、やたらと楽しげに国王侍医が言う。

「お前が自分から行かないと言ったんだらうがっ」

容赦なく睨み付けるオーランドの怒気を含んだ口調に、シャルル―トはしかし、肩を竦めただけだった。

「だあって、イシュ・メリグリニア辺りに『隠し扉の在処は？』」

なぐんで訊かれたら、ぺらぺら喋っちゃうでしょ。だからね、僕は知らないのに限るのさ。僕だって、イロイロ気を遣ってんだから」

幼い頃から「聖者」として神殿で育てられた彼は、教育という名



の洗脳の下、恩義という名の刷り込みで、神殿に逆らえないように育てられた。殆どの聖者がそうであるため彼が特別というわけではないが、ただ彼が他の聖者と異なるのは、そのことを十二分に自覚しているということだ。

「黙っていれば分からないでしょうに」

ナ ज्याの呆れたような言葉に、

「ダメダメ。そんなことをしたら精神的な負荷が掛かっちゃって、下手したら発狂しちゃうから」

シャルルートは何処までも軽い口調で言うが、そこに強い暗示の存在が垣間見える。

神殿のやり口の汚さに、職業柄人間の闇の部分に嫌という程見えてきた彼らですら、嫌気がさす程だ。

「天才の僕が発狂なんかしちゃうたら、世界の損失だよ。間違いない文明の発達が千年分は遅れちゃうね」

千年と随分大きく出たものだが、実際に彼がいなければ、幾つかの難病の特効薬は作られておらず、多くの命が失われた事だろう。

彼は確かに、優秀なのだ。

例え人間性に問題があろうとも。

「まあ、僕は訊かれれば答えるけど、訊かれなければ答えない。』  
ケロタウロス殿は地下通路にどのような記号を書いていますか？  
なんて訊かれない限り、答えやしなないよ」

そう言うって国王侍医は、空いている片手で紙束をパラパラと捲る。一度使った紙を漉き直して作られた紙は薄墨色で、そこには彼らが地下通路で見つけた意味不明の記号が書き写されている。

本来ならばシャルルートに任せるべきではないのだが、謎の記号を解読できるとすれば、彼以外にいないというのが現状だ。

何故なら彼には、十歳にしてそれまで謎とされていた古代ローダス文字を、見事解読した実績があるからだ。

恐らくそれらの記号は、あのカエル達の正体について知る手がかりとなるだろう。

化け物か、悪霊か、或いは他のモノなのか。

未だに布製の力エルが生きているかのように動くということを受け入れられずにいるが、目の前で起こった事実は否定しようがない。

「問題は、定型詩の方だが……」

「そつちは、君らの方でどうにかしなよ。文学は僕の専門じゃないし。文学博士のリオラード教授に助言を請うといい。彼は古文体の権威だから、きっと隠された意味も読み取れるだろうね」

シャルルートの珍しくもまともな助言に、宰相達は素直に頷く。

そんな風にしてしていると、実は彼がこの中で一番年長だということ  
を思い出す。

恐らく彼の知性を以てすれば、定型詩の解説など大した仕事ではないだろう。

しかしそれをしないのは、その内容が神殿側に漏れるのを懸念していることだろう。

シャルルートは分別のない人間の様で、実際分別は皆無だが、神殿よりは自分たちの方に情の様なものを感じてくれている事は明らかだった。

そのくせ、彼の二面性を利用していると十二分に自覚のある自分たちには、彼に完全にこちら側に来いとも言えない。

けれども、決して短くはない付き合いで、言ってしまいたい衝動に駆られたこともある。

利用されたままでいいのかと。

けれど、彼はヘラリと笑って答えるだろう。

利用しているのは自分の方だと。

そして、それも彼にとっては真実なのだろう。

年を経る毎に、距離が近くなる程に、言えない事が増えていく。

神殿はイスマイルの解体など瞬く間に終えるでしょうね。

緑の力エルが何気なく言った一言を、シャルルートには伝えていない。

神殿に属する彼になら、この言葉の意味も分かるかも知れないが、

彼に訊ねるといふことは即ち神殿側に情報を与えるといふことだからだ。

そして恐らく彼とて、自分にもたらされない情報があることを承知している。

「で、頭打ったって聞いたけど、目眩や吐き気はない？」

不意にシャルルートが医者顔になって言う。

「それはないな」

「ありません」

「ない」

「ねえな」

「ふん。でも念のために、今日一日は激しい運動は控えてね」

「分かった」

「承知しました」

「うむ」

「りょーかい」

「あと、顔に傷があるから、お化粧はしないように」

「……何の話だ！」「」「」

「え、ノリ悪いなあ」

「つたく、ちよつとまともな事言っただと思えば」

「僕はいつでもまともです」

シャルルートはそう言っつて、利かん気のない子供の様に唇を尖らせた。

シャルルートの内面が気かりなのは事実だが、このしゃべり方に腹が立つのも事実である。

「お前ね」

「バカか」

「子供か」

「アホウですか」

苛立ちを隠すことなく、顔を顰める。

整った顔立ちの人間がそんな表情をすると、並みの人間よりも遙

かに迫力がある。

それが本来の姿だったなら。

「ぷっ」

険しい表情を浮かべる擦り傷だらけの顔に、国王侍医は逆にまた笑いが込み上げてきたらしい。

「ぷははははははははははっ！ も、もう勘弁して〜っ、ひ〜〜〜ひっひっひっ、わ、笑い死ぬ〜〜〜っ。あ〜〜〜っはっはっはっは！ い〜ひっひっひっひっ！ ひゃ〜〜はっはっはっはっはっ！」

恐らく、せめて治療中はと我慢していた反動だろう。

何時までも止まない笑い声に、痺れを切らした宰相が、その秀麗な顔をピクリとも動かさずに王佐を呼んだ。

「ナジャ」

「はい」

「投げるぞ」

「是非」

その短い会話が何を示しているのか、近衛隊の二人には分からなかったが、しかしそれも直ぐに悟ることとなる。

バキッ。

「あがつー！！」

ガタ　ン！

宰相がどこからともなく取り出した本がシャルルートの頭を直撃し、彼の体は椅子ごと床に倒れた。

「約束通り予告はしたぞ」

宰相の言葉に、王佐は頷きながら答えた。

「はい、確かに承りました」

宰相はつい先日、運動神経の鈍いシャルルートにモノを投げつけるのは予告してからと、王佐に約束したばかりだった。

それは本来ならば「シャルルートに」予告するという内容だったはずだが、賢明な王佐はそれについては敢えて指摘しなかった。

その朝、エルハラ宮に国王の体調不良のため急遽呼び出されたはず国王侍医が、何故か担架に乗せられて運び出される姿があったとかなかったとか。

挿話 耳に残るはカエルの歌声（後書き）

副題の元ネタは映画『耳に残るは君の歌声』です。

勿論この話とは全く関係ありませんが、切ない話という点では似ています（笑）。

## 挿話 誰がためにカエルは鳴く

彼はソレを目にした時、咄嗟に腰の剣を握った。

木々を渡る風の音、小鳥たちの囀り、威勢良い訓練の掛け声。

それらが全て遠のいてゆき、ジリジリとした焦燥感だけが迫り上がる。

殺られる前に殺れ。

幼い頃散々聞かされた師の声が、耳の奥で木霊する。

緊張で、指先が燃える様に熱かった。

彼は意を決して、掌に力を込めた。

「あれ？ 副隊長？ 何やってんです？ 道の真ん中でボクッとして突っ立って」

気の抜けた副官の声に、第一近衛隊副隊長ディンゼア「セアフェル・ハジエク・ド・フィアマス・アウラ・ロトゥルマは、ガツクリと肩を落とした。

そんな彼の背中越しに、薄紅色の髪の副官がヌツと覗き込む。

目が細すぎて虹彩の色すらよく分からない副官は、ソレを見つけると嬉々となった。

「あ、カエルじゃないですか。か〜わいいな〜」

ドンツ。

「おわっ」

副官は容赦なく上官を押し退け、カエルを掌に載せる。

「うわ〜、しかもコレ、『小さな淑女』なんて言われているイスマイルル・ケロタウロス・エチエンヌじゃないですかっ」

標高の高さの割に湿度が高いイスマイルルには、様々な固有種が棲息するが、中でもイスマイルガエルはその鮮やかな色彩で人気が高く、熱狂的な愛好家までいる程だ。

どうやら副官も、その一人らしい。

細い目を更に細めて、副官は熱すぎる口調で言った。

「見てくださいよ。このエメラルドの如き背中！ 夕焼けの様な腹！ この鮮やかなコントラスト！ そして極めつけは、憂いを秘めた薔薇色の瞳！ って、アレ？ 副隊長、何やってんですか？ ってさつきも訊きましたけど」

カエルがどんな憂いを秘めているのかは定かではなかったが、それはさておき、副官は四つん這いになっている上官を不思議そうに見詰めた。

「キ〜〜ア〜〜ニ〜〜ス〜〜！」

怨嗟の籠もった台詞を吐きながら、ディンゼアは振り向き様に剣を抜く。

ガキーン！

副官は、驚嘆すべき反射神経で上官の剣を受け止めた。

彼は、利き腕を空けておく癖が身についていて良かったと心底思いつつ、必死で上官に訴えた。

「うわぁ、ちよつと！ 副隊長！？ カエル持ってんですよっ。握り潰しちゃうそうじゃないですかっ」

「握り潰せばいいだろう。いや、寧ろ、握り潰せ！ 命令だっ！」

「わ〜〜！ その顔で迫らんでくださいっ。力が抜けるじゃないですかっ」

副官はそう叫びながら、ディンゼアの平均以上に整った顔から巧みに視線を逸らせた。

何故ならそこには、どう考えても転けて作ったとしか思えない擦り傷があつたからだ。

「擦り傷なんぞ、珍しくもないだろうっ」

「た、隊長とお揃いの擦り傷なんて、可笑しいだけですって」

「なら笑えっ」

「笑ったら、力抜けますっ」

「抜けばいいだろうっ。さあ！ 思う存分斬ってやる！」

「あれ？ 目的がカエルから俺に変わってる？ ってぎゃああ、本気ですかっ」



何処までも本気に近い力加減で剣を合わせたまま、巫山戯ている  
としか思えない言い争いをする近衛騎士。  
そんな自分たちの姿が、誰かに見られているとは思ってもみない  
二人だった。

二階のその部屋からは、教練場へと続く小道がよく見えた。  
特に意図があつた訳ではなく、ただの気晴らしに窓の外を眺めて  
いただけだった。

そこへ飄々とした足取りで現れた人物が、不意に立ち止まったま  
ま微動だにしなくなったのだ。

おまけに何やら剣呑な気配まで漂い出すではないか。  
それが気になって、様子を見守っていた訳だが…。

「あの二人は、一体何をやってるのだ…」  
全くの時間の無駄だったと、溜息を吐きながら振り返れば。

「陛下」  
己を呼ぶ、王佐の黒い瞳と目が合った。

イスマイル国王カウゼル四世は、黒曜石の瞳から一リグたりとも  
逸らさぬ様に見詰め返す。

決して、額や鼻や頬に視線が揺らがぬ様に。

腹心の王佐は、そんな主君の意図を正確に読み取つたらしい。

「陛下…」

ヒクリと顔を引きつらせる王佐の肩に、カウゼルは宥める様に手

を置いた。

視界に入ったとしても注目してはならないと、己に強く言い聞かせながら、カウゼルは言った。

「揃ったようだな」

「…はい」

「そうか…」

カウゼルは覚悟を決めたかの様に固く目を瞑り、クルリツと体ごと向きを変えて、眼を開けた。

決して王佐をまともに視界に入れない様に。

あからさますぎる国王の意図は、その場にいる者全員にバレバレだった。

「くっ」

「うぐっ」

「ぶっ」

一瞬吹き出しそうになった彼らだったが、王佐の剣呑な眼差しを敏感に感じ取り、辛うじて耐える事に成功した。

視界の端に黒いオーラがうねっているのは、うん、見えていない事にしよう。

その時主従の心は一つだった。

「では、始めてくれ」

そう言ってカウゼルが促すと、彼らはスツと背筋を正した。

第一近衛隊の中隊長達である。

近衛隊は第一から第三までがあり、それぞれが隊長、副隊長の下に三個中隊を抱える大隊規模の部隊である。

近衛隊の主な任務は王族の警護と王城の警備だが、ほぼ全員が王太子親衛隊からの持ち上がり組という第一近衛隊は、国王の手足として様々な諜報活動も行っていた。

「報告致します」

先ず口火を切ったのは、緑の髪をした第一中隊長エルリードである。

「ダスターシユ伯爵家、クレリード伯爵家、共に神殿との接触した事は間違いありません」

ダスターシユ伯爵家は第二正妃の、クレリード伯爵家は第三正妃の実家である。

「ダスターシユ伯爵家はルクライン神官長を、クレリード伯爵家はヤーディツシユ神官長を自陣に引き込もうとしている模様ですが、お二人からはまだ確約を取り付けてはいない様です」

ユージェニア大神殿には、ヴィゼリウス大神官の下に五人の神官長が在籍している。その内、ルクライン神官長とヤーディツシユ神官長は共に、ヴィゼリウス大神官の後継と目される有力な神官長だ。カウゼルは即位式の際に、己の後継者となるべき者を指名しなければならぬ。

正式に王太子として立てるわけではないが、万が一の時のため、そして不要な争いを避けるため、そうする事が習わしなのだ。

現在、カウゼルには男子がない。

イスマイルでは直系の男子がない場合に限り女子の継承権も認められているが、王女は未だ幼すぎる。

そのため、後継者は三人の王弟の誰かという事になるのだが。

第二王子は第二正妃の、第四王子は第三正妃の腹で、第三王子はカウゼルと同腹である。

カウゼルとしては第三王子を指名したいところだが、それでは第二正妃派と第三正妃派が黙ってはいない。彼らの後ろには、サザンプトン侯爵家とゼファードル侯爵家が控えている。第一正妃の後見であるノーザラン侯爵家に次ぐ勢力を持つ二家は、虎視眈々とその地位を狙っているのだ。

「さて。愚か者と臆病者と、どちらが無害かな」

それを見極めるために、第三王女のぬいぐるみ紛失の件を、利用した。

国王と神殿の間に亀裂が入るとなれば、彼らは間違いなく動くだろう。

「けれど、まさかここまで分かりやすい行動に出るとは思いませんでしたね」

王佐の呆れ返った様な言葉に苦笑しながら、カウゼルは自分達が仕掛けた罠が予想以上の効果を生んだ事に満足げに頷いた。

「ご苦労だった。卿らは引き続き、彼らの動向には注意してくれ」  
「……はっ」「」

「では、解散です。皆さん、職務に戻ってください」

王佐のその一言で、その会議は終わるはずだった。

しかし誰一人その場を下がるうとせず、互いの顔を見合わせた。

「何か気に掛かる事でも？」

王佐の問いに一瞬躊躇いはしたものの、第一中隊長エルリードが意を決した様に口を開いた。

「陛下、一つお伺いしても宜しいでしょうか？」

通常、家臣から主君に対して許可なく質問するなどという事は許されることではなかったが、カウゼルはその辺に関しては鷹揚だった。  
「どうした？」

「今回、隊長と副隊長は別行動の様ですが」

「ああ。二人には、別の任務を与えてある」

「お差し支えなければ、どのような任務かお伺いしても？」

他の者への任務に関しては、知らされない限り追求しないというのが不文律だが、それを破る理由が彼らにはあるのだろう。

「何故だ？」

「あの、お二人の様子が、こここのところ、時々、普段と違うようなので……」

その言葉に、カウゼルは、第一近衛隊隊長オーランドに関する奇妙な噂を思い出す。

オーランド卿は、カエルに甚だしい恨みがあるらしい。

その噂を聞いた時、事実とはほど遠いにも拘わらず、真実にほどよく近いと言う事に妙に感心したものだ。

「なるほど。しかし教えることはまかり成らん。が、卿らの心配も分からんでもない。ただ、そうだな…。非常に複雑怪奇な問題だただけ言っておこう」

奇妙な表現ではあるが、そうとしか言いようがないというのが、カウゼルの正直な心情だった。

そんな国王に、第二中隊長が恐る恐ると言った風に問いかける。

「あのう、それは…。隊長と副隊長が、宰相閣下と王佐殿とお揃いの傷を作っている事と関係が…？」

途端に、視界の端でズズツとどす黒いオーラが広がった。

「……ひっ」「」

「先程、副隊長が、カエルを潰せとかなんとか叫んでいたのとは…？」

ズズズツ。

「……ひっ！」「」

「あ、じゃあ、じゃあ、先日、隊長殿がカエルに向かって怒鳴り散らしていたのとの関係は…？」

ズズズズツ。

「……ひいっ！」「」

問いかける度に王佐の背負うドス黒いオーラが大きくなっていく。しかし、長い付き合いの彼らが王佐の反応を予想しえないはずもなく。

結局の所、怯えていても彼らもまたそれなりの性格の持ち主なのだろつ。

ひよつとしたら、度胸試しでもしているつもりなのかも知れない。

「陛下は、追求を禁じられたはずですが？」

トドメとばかりに、王佐が怨嗟の籠もった声で言う。

その瞬間、ブオツとドス黒いオーラが一気に部屋中に広がった。

「……はひいひいっ！」「」

敬礼もそこそこに、中隊長達はその場から逃げる様に辞して行った。

隊長と副隊長に対しては、遠慮会釈無く笑い飛ばした彼らだが、王佐相手にそれをできる胆力のある者はいなかった。

「ナジャ」

カウゼルは遠い目で、彼らの去って言ったドアを眺めながら言った。

「はい」

「お前は挙動不審になるな」

「肝に銘じます」

そう自信を持って答えた王佐を唾う様に。

ケロロロ。

窓下でカエルが鳴いていた。

挿話 誰がためにカエルは鳴く（後書き）

副題の元ネタは、言わずと知れた文豪ヘミングウェイの名作『誰がために鐘は鳴る』です。

### 第三二話 カエルは意外と毒性が強いです

アタシは恵美が駆け出していった白いドアを呆然と見た。そのドアが、ゆっくりとスライドして閉じてゆく。ん？

ウチの勝手に閉まるドアじゃない。白くもなければ、あんなに長くてデカイ銀色の取っ手も付いてない。

アタシは自分が見慣れぬベッドにいるのに気がついた。

いや、正確に言おう。

よく見るベッドだ。

医療系ドラマなんかで。

つまり。

病室のベッド。

しかも明らかに個室だ。

部屋の隅のドアは、おそらくトイレだろう。

それから、腕には点滴の針。

現実に戻ってこれた喜びに浸るはずが、次から次へと予想外のモノを見てしまったお陰で、そんなものは何処かに吹っ飛んでしまった。

「何事??」

恵美の涙にも、アタシ自身の状況にも、全く頭がついていかない。アタシは昨日、というか今朝、確かに自分のベッドで寝たはずだ。なのに何故、病院と思わしき場所に寝ているのか??

きっと恵美なら説明できるだろに、その恵美は泣きながら何処かへ行ってしまった。

綺麗に切れ上がった瞳に浮かんだ涙。

恵美は滅多なことじゃあ泣いたりしない。

短くはない付き合いの勘が告げる。

「アイツ、一体、何やらかした??」



何時だったか、恵美は以前、キンピラゴボウを作ろうとしてル・クルーゼの大鍋を焦がしたことがある。

何故ウチで作ろうとしたのかとか、何故そんなに大量に作ろうとしたのか、沢山言いたいことはあったけど、その時アタシには、「料理の本に『だし』とあるのは、出し汁のことで、出汁の素のことじゃない」

と言うのが精一杯だった。

どうやら恵美は、出汁の素は入れたものの、水は一切入れなかったらしい。

お陰で、鍋の中いっぱい半生ゴボウ飴とでも言うべき得体の知れないモノが出来上がっていた。

あの鍋は高校に受かったお祝いにと、叔母さんから貰ったモノだった。

キャベツの丸ごと煮を作るのに丁度いい大きさで、しかも可愛いからそのまま食卓に出せるという優れたものだ。

勿論、恵美にはきっちり鍋を洗わせた。

その時もあんな風に涙を浮かべて、

「鍋め、ワタシを侮辱しやがって！」

とか何とか、訳の分からない事をブツブツと言っていた。

けれどそれも、今の状況に比べるとマシだったと思う。

なんて思っていると、ドアが開く音がした。

恵美か！？

と思つて顔を上げると、全く知らない医者がいた。

いやまあ、医者の知り合いなんて一人しかいないけど。

「やあ、目覚めたんだってね」

三十半ばだろうか。医者は、どこか楽しそうな声でそう言った。

「はあ。お陰様で」

アタシはとりあえず、無難な相づちを打つ。

医者はそんなアタシを見てクスリと笑う。

感じ悪いな〜と思つていると、その医者の背後からヒョッコリと

見知った顔が現れた。

「スミちゃん」

「瞬市さん？」

アタシは目を見開いて彼を見た。

彼は、恵美の血の繋がらない長兄である。

血が繋がっていないだけに、恵美とは全く似ていない。

特別ハンサムという訳ではなく、寧ろ一度会ったくらいでは中々覚えられないような顔立ちだ。けれど独特の柔らかい雰囲気相手に無条件に安心感を与える、そんな大人の男性である。

少なくとも、一見した限りでは。

「お早う、スミちゃん」

そう言って、瞬市さんが柔らかく笑う。

夢の中の腹真つ黒男のそれと違う、正真正銘春の陽だまりのような笑顔に、一瞬状況を忘れそうになる。

「はあ、オハヨウゴザイマス」

因みに瞬市さんは、若いながらも売れっ子美容外科医である。

医者知り合いとは、彼の事だ。

腕が確かだというのもあるんだろうけど、こんな笑顔で、

「大丈夫、綺麗になりますよ」

なんて言われたら、誰だって全幅の信頼を寄せるに違いない。

けれどアタシは知っている。

彼が、必ずしも安心できる人間ではないことを。

彼は初対面の時に言ったのだ。

「大学に入ってから、恵美子がスミスミ言うもんだから、僕は実は密かに君に殺意を抱いているんだよ」

一欠片の黒さも無い、親しみのある無害な笑顔で。

逆にそれが怖かった。

例えるなら、無害そうなアマガエルだと思って触ってみたら意外な事に有毒だった、みたいな感じだ。

アマガエルに限らず、大抵のカエルには強弱の差こそあるけど毒

性がある。

アマガエルだって、ただ手で触ったくらいではどうとでもないが、その手に傷があったりその手で目や口を擦ったりすると、エライ事になるらしい。

運が悪けりや失明することもあるんだとか。

数ヶ月ぶりに見た彼の笑顔は、これまた尋常じゃない程柔らかかった。

その威力は凄まじく、有毒だと分かっただけでもついつい癒されてしまう程だ。

アタシは、和みそうになる自分を心の中で叱咤した。

瞬市さん。さっき恵美が、泣きながら逃げて行きませんでした？

「うん、来たよ。スミちゃんが起きたって言いだね」

やっぱり恵美のヤツ、嘘泣きだったか。

多分、瞬市さんに丸投げしたんだろう。

「じゃあ、ちよっと、状況説明してください」

「いいけど。その前に、診察受けてね」

柔らかな笑顔の奥に、有無を言わさない力があつた。

「……………いいですけど」

本当は先に説明して欲しかったけど、アタシは渋々承諾した。

アタシは再び医者の方に視線を戻した。

すると医者が、感心したように呟いた。

「いやあ、凄いね。瞬市の笑顔に絆されない子がいるとは」

「いやいや、ちゃんと絆されますよ。ただ、自分を見失わないように

気を付けてるだけで」

「警戒心が削がれないんだ」

「削がれますよ。でもその状況に警戒心がわき上がるので」

「うーん、スミちゃんは人間不信なのかな？」

何で初対面の人間にちゃん付けで呼ばれなきゃならないかは置いて、最近誰かにも同じような事を言われた様な気がする。

けれどアタシは、自分がそうだとは思わない。

自分の事なんて意外と自分が一番知らないものかもしれないけれど。

四六時中他人を疑ってたら、疲れるだけだ。

そして物ぐさなアタシは、そんな事に貴重な労力を使ったりはしない。

医者は遠藤だと名乗って、一通りアタシの体を検診する。

体温を測って、脈を診て、瞳孔診て、心音を聴く。

「気分は？」

「ある意味悪いです」

「吐き気や目眩は？」

「お腹が空きすぎて吐きそうですが」

夕べ結構食べたのに、尋常じゃないくらい空腹だった。

きつと「紅天女」への道が余りにも過酷だったせいだろう。

ああそつだ。

さつさと恵美をとつ捕まえて「くれないてんにゃ」について問いたださねば。

なんて思っていると。

「まあ、三十時間以上寝てれば、お腹も空くだろうね」

「は？」

アタシの間抜けな相づちに、医者が苦笑する。

「スミちゃん、今、何時か分かる？」

「午後四時十三分」

アタシは部屋の時計を見て言った。

寝たのは午前四時だか五時だったから、十一、二時間は寝た事になる。

普段の睡眠時間が七、八時間だから、ケロタン二体を渡り歩いた割には、睡眠時間は延びていない。ちよつと寝過ぎた程度だ。

前回五号から二号に転送されたときも睡眠時間は通常通りだったから、目覚ましさえ掛けてればカエル間転送は問題がないハズだ。

一体どうい仕組みなのは、相も変わらず不明だけれど。

ただ今回どうやって起きたのかが分からない。

アタシが夢の世界から現実の世界に戻る条件は。

夢の世界で夜が明ける。

現実世界で目覚ましが鳴る。

現実世界で危機が迫る。

今回の場合、多分三番目のパターンだと思うけど。

危機って一体何だろう？

腹が減りすぎた飢餓感だろうか？

ていうか、病院に運ばれた事に気がつかないのって、どんだけ寝汚いんだよって話だけど。

「スミちゃん。じゃあ、今日は何日？」

いい加減この人、人の事ちゃん付けて呼ぶのやめてくれないだろうか？

なんて思いつつ、小心者のアタシは素直に答えてしまっ。

「八月一日ですか？」

「違うよ」

答えたのは、医者じゃなくて瞬市さんだった。

「はい？」

「今日は八月二日だよ」

「違いますよ」

「違うわい」

瞬市さんはそう言ってポケットから携帯を取り出すと、アタシに画面を見せた。

アタシはそれを見て、目を皿のように見開いた。

デジタルな文字で表示された日付は間違いなく、八月二日。

この際、待ち受け画面が妹の写真である事は触れないでおく。

「マジで？」

「マジで」

つまりアタシは、

「三五時間くらい寝てた？」

そりゃ腹も減るだろう。  
じゃなくて。

寝汚いにしても、それは異常だ。  
想定外にも程がある。

前回と今回とでは何が違ったんだろう？

目覚ましを掛け忘れた事と、アディーリアに会った事だ。

今までだって目覚ましを掛け忘れた事はあったけど、ここまで長く眠った事はなかった。

とすれば、問題はアディーリア？

アディーリアと会話した時間は短かったと思うけど。

多分時間そのものは関係ない。

じゃあ何の関係してるのか、アタシにはサッパリだ。

今まで「まあいいか」で済ませてきた事が、ここに来て重くのかかってくる。

けれど一番の問題は、自分では何一つコントロールできないってことだろう。

カエル間転送にしても、アディーリアとの事にしても、常にアタシには選択権がない。

そもそも、アディーリアとの契約の時だってそうだった。

いや、正確には、選択肢は他にもあったけど。

あれを選択肢と言えるかどうかは、疑問だ。

アタシは歯がゆさを噛み締めながら、取り敢えずは今日の前にある問題に集中する。

そうでもしなけりゃ、訳が分からなさ過ぎて頭が爆発しそうだ。

「でもなんで病院に？」

三五時間は明らかに寝過ぎだけれど、寝過ぎという理由で病院へ入れたりはいしない。

すると瞬市さんが、こんな時ですら安心感を与える笑顔で言った。「だってスミちゃん、恵美子に抓られても叩かれても全く起きないんだもの」

瞬市さんの言葉に、アタシはハツとなつて頬を押さえた。

……… 何だかさつきからやたらと顔がヒリヒリすると思ったら。

恵美のあの捨て台詞は。

コレを誤魔化すためかつ。

アタシの怒りは、けれど続く医者言葉で掻き消される。

「君、昏睡状態なんじゃないかって、ウチに運び込まれたんだよ」

「はい？」

いやいや、ただ寝てただけですが？

アタシがそう反論する間もなく、瞬市さんが言った。

「スミちゃん、子供の頃、交通事故で昏睡状態に陥った事があるよね？」

恵美に抓られた頬が痛すぎて、アタシは言葉を継げなかった。

第三二話 カエルは意外と毒性が強いです（後書き）

しばらく「現実」が続きます。



### 第三三話 カエルは意外と毒性が強いです その2

それは十二になった最初の週末だった。

社員の父親とパート勤めの母親、そしてアタシ。

誕生日の御祝いに、家族で遊園地に行く事になっていた。

長雨の後の青空は本格的な夏の気配がして、朝からお母さんがお弁当作って、アタシはおにぎりには蜂蜜梅じゃなくて酸っぱいのを入れてくれと、我ながら小学生とは思えない渋いリクエストをした。紀州南高梅を使った果肉の多い蜂蜜梅はとても美味しいけれど、アシはあくまでもお茶請け用で、おにぎりには酸っぱいシソ梅が一番だというのが、当時のアタシのコダワリだった。何でそんなコダワリを持っていたのかは謎だけど、子供つてのはそんなものだ。

それから、ワイワイ言いながら三人で車に乗って。

お父さんの。

「アム口、行きまゝす!!」

という当時のアタシには全く謎の掛け声で、出発した。

それから車の中で、何故か誰が一番「カエルの歌」を哀愁を込めて歌えるかを競った。

哀愁のあの字もしらない小学生に何をやらすんだって、適切なツッコミを入れられる人間は残念無念な事にその場にはいなかった。

何度思い返しても、頭の悪い家族だったと思う。

そして。

その日の記憶は、そこでお終い。

全部。

お終い。

「うん、大丈夫。ただの夏バテ。友達が大げさにとっちゃって。うん。そう。ここんとこ、寝苦しくてあんまり寝れてなかったから。検査結果も、異常なし」

公衆電話なんて、一体何年ぶりだろう。

なんてことを頭の隅で考えながら、アタシは電話の向こう側へと耳を澄ます。

『本当に？ 何かあつたら、遠慮なく言うんだよ？ 僕では、頼りにならないだろうけど』

優しい気遣いに溢れる大人の男の人の声。

「まさか。そんなことない。叔父さんにはイロイロしてもらってる」  
『でも…』

叔父さんの声が僅かに沈む。

後悔だとか、罪悪感だとか。

叔父さんは優しいから、そんな感じなくていいものを感じている。アタシはそれが居たたまれなくて、無理矢理に話題を変えた。

「それよりさ、ゆかりちゃん、元気？」

『あ、ああ。ゆかりなら、元気だよ』

「中学生になつたんだよね？」

『ああ。夏休みなのに、クラブ活動で毎日学校に行ってるよ』

「へへ、クラブ、何？」

『バスケット』

「うわ、ハードそうだね」

『毎日へばって帰ってくるよ』

従姉妹に当たる少女と顔を合わせたのは、数える程だ。しかも彼女は、まだ幼稚園にも入ってなかったと思う。

「でも、ゆかりちゃんも、もうそんな歳かあ。ちよつと前まで、掌に乗るくらい小さかったのにね」

アタシは記憶を辿りながらしみじみと言う。

『それは、幾ら何でも小さすぎだよ』

電話の向こうから届く、遠くで打ち寄せる波の様な笑い声。

男の人なのに、こういう時の笑い方がお母さんにそっくりだと思う。

実際は、そんなに似ていないのかもしれないけれど。

アタシの記憶の中で繰り返し返されたそれは、いつの間にか叔父さんのそれと入れ替わっているのかもしれないけれど。

『本当に、何かあれば連絡しなさい。でないと、僕が凧子さんに叱られちゃうからね』

「それは、怖いな」

『そう、怖いんだ』

アタシと叔父さんは、またひとしきり笑って電話を切った。

ピーツという電子音と一緒に吐き出されたテレフォンカードを受け取る。

すると、ドツ疲れがのし掛かってきた。

叔父さんの事は嫌いじゃない。寧ろ好きだし、純粹にいい人だと思う。

けれど、話したり会ったりするのは、やたらと疲れる。

それでも、例の馴れ馴れしい医者が連絡しちゃった以上、話をしない訳にはいかないのだ。

だって、病歴を訊く必要があったからね。

医者は言った。

叔父さんは、アタシの後見人だ。

更に言えば、いざというときの連絡先は、アメリカにいる叔母さんじゃなく九州の叔父さんってことになっている。

つまり、大変結構極まりなく真つ当なご意見なんだけど。

「はあ」

アタシは大きく溜息をついて、自分の病室に戻るべくトボトボと歩き始めた。

「スミちゃん」

すると正面から、瞬市さんの声。

「あ、アタシ、シュークリームが食べたいです。生クリームとカスタードが入ってるヤツ」

疲れたときは甘いもので癒されるに限る。

アタシだって、いっぱいのおトメなのだ。

「……………何の話？」

「何か買いに行くんでしよう？」

恵美のパシリで。

すると瞬市さんは、大袈裟過ぎる程肩を落として言った。

「酷いな。君が遅いんで、心配して見に来てあげたんじゃないか」

仮にアタシに殺意を抱いていようと、大人としての分別はある人だから、彼の言葉の何割かは本当なのだろうけど。

「恵美にせっつかれましたか？」

「うんそう」

やっぱり。

「そういう時は、甘やかさずに恵美を超越せばいいんですよ」

「公衆の面前で可愛い妹が説教されると分かっていて、恵美を送り出せと？」

瞬市さんはそう言ってアタシの横に並ぶと、柔らかい微笑みを湛えて背中に手を添えてきた。

さっさと戻れという事らしい。

「説教なんてしませんよ。恵美がトンチンカンなのは今に始まったことじゃなし。そりゃもう、恵美は子供の頃から素っ頓狂な子で…」

瞬市さんは、恵美の子供時代の話をされるのがとても嫌いだ。

自分が知らないからだろう、全く傍目にはそうと分からないまま不機嫌になる。

「恵美子の素っ頓狂さなら、君に言われなくても十分知っているよ。」

君も小さい頃から恵美子を知っている割に、随分常識的で退屈な女性に育ったもんだ」

「恵美の素っ頓狂さを理解している割には、恵美がスクール水着で公衆の面前に出る事を何で予想できなかった様ですが？」

「それは、恵美子の素っ頓狂さが僕の予想を遙かに超えていたからさ。恵美子は僕の期待を常に軽々と飛び越えてしまうからね」

一応断っておくけれど、これでいて、瞬市さんとしては恵美を褒め讃えているつもりなのだ。

アタシと瞬市さんの会話は、実は全く成り立っていない。

受け答えとしては成り立っているが、二人のベクトルがまるで逆方向に向いているからだ。

「恵美の事だから、きつとムーンサルトでもしながら華麗に飛び越えてるんでしょうね」

「ムーンサルトなんてもんじゃないよ。リューキンだよ、リューキン」

「何ですか、ソレ？」

「後方三回転宙返りさ」

そりゃ凄い。

てか、愛する義妹に何をやらせるつもりなんだ、この人は??

まあ、何でも良いんだけどさ。

「瞬市さん」

アタシは立ち止まって窓の外を見下ろした。

夕刻だというのに威力の衰えない陽光が燦々と降り注ぐ庭には濃い色の影が落ち、唸る様な蝉の声が二重サッシにもめげずに鼓膜に届く。

事故の後、約二週間ぶりに目覚めたのもこんな日だった。

「ん？」

一、二歩進んでから立ち止まった彼に、アタシは深々と頭を下げた。

「この度は大変お世話になりました」

結局の所全く必要のなかった事とは言え、今回の事でイロイロと動いてくれたのは瞬市さんだ。

「いいえ。お礼はいらないよ。今回の事では、スミちゃんにはちょっとぴり感謝してるしね」

「はあ」

「だって、恵美子はね。真つ先に僕に電話をくれたんだよ。父でもなく義母でもなく、葉璽でもなく。この僕にね」

「それはまあ、そうだと思いますけど」

恵美の父親は会社の社長で、母親はその秘書で、弟の葉璽さんはIT関連の会社勤めだ。

友人が意識不明の重体（と思い込んだ）場合誰に連絡すべきかなんて、幾ら非常識な恵美だってそれくらいの判断はできるだろう。

けれど瞬市さんには、そんな現実的な問題は関係ないらしい。

「君もそう思うかい！ それは確かにそうだろうけど。でもね、恵美子がいざという時に一番に誰に頼るのか、改めて知る事ができて、僕はとても嬉しいんだよ」

瞬市さんは、一点の曇りもない晴れやかな笑顔で言い切った。

その笑顔を見ていると、何だか逆に、お礼を言って損した気分になるのは何故だろう。

「はあ、そうですね」

アタシは気のない返事をして、再び歩き出した。

今回の検査では、何にも異常がなかった。

アタシの体は全くの健康体だ。

敢えて言うなら、体脂肪率が平均より低いくらいか。

暗に胸が薄いと言われている様な気がするの、僻みだろうか？？

まあそれはともかく、ちょっと人間ドックに入った様なものだと  
思って、健康を喜ぼう。

臨時の出費としては、ちと痛いけど。

「スミちゃん」

「はい？」

「アメリカにいろつて言う叔母さんには知らせないの？」

「こういう気が回る点では、ちゃんとまともな人なのに。」

「元からこういう人なのか、恵美と出会ったからこうなったのか。」

「向こうは、まだ真夜中ですよ。」

「アタシの答えに、瞬市さんは「それもそうか」と頷いた。」

「多分、叔母さんの方には叔父さんから連絡が行ってるだろう。」

「問題は叔母さんをどう納得させるかだ。」

「叔母さんは、叔父さんみたいにアタシの言葉を鵜呑みにしない。」

「手っ取り早いのは、お医者さんと直接話をして貰う事だ。」

「名前何だったっけ？ 遠藤？」

「彼に後で話してみるか。」

「ところで、素朴な疑問なんだけど。」

「何ですか？」

「緊急時の連絡先はともかく、どうして君の後見人は叔母さんじゃなくて、叔父さんなんだい？ ずっと一緒に暮らしてたんだよね？」

「瞬市さんは、「事故の後」とは言わなかった。」

「でもそれが思いやりかどうかは、甚だしく疑問だ。」

「単に、敢えて言う必要がないと思つてのことだろう。」

「何故つて、その方が何かと面倒がないからですよ。」

「面倒？」

「そういう個人的な話は、礼儀として聞くべきじゃないと思つてますが。」

「うん、でも君に気を遣うのも面倒だしね。ただの好奇心。」

「優しいさ三〇〇パーセントな笑顔で、何てことを言うんだこの人は。」

「といつても、特別な事情がある訳じゃないから、教える事に支障はない。」

「ただ単に、叔父さんの方がアタシの血縁者つてだけですよ。母の弟ですから。」

「叔母さんは？」

「叔父さんの元奥さん。」

アタシを引き取った時には、既に二人は離婚していたけれど。そこまで言う必要はないだろう。

「それってつまり」

アタシと叔母さんは。

「赤の他人って事ですね」

アタシがそう言つと、瞬市さんにしては珍しく何とも言えない微妙な顔をした。

「別に珍しい事じゃないでしょう？ 恵美と瞬市さんだって、言つてしまえば赤の他人じゃないですか」

アタシがそう言つと、丁度良いタイミングで病室に着いた。



### 第三四話 カエルは意外と毒性が強いです その3

次に現実というものを認識した時には、一人でベッドに寝かされていた。

白い天井と、白い壁と、白いドアと、点滴と。知らない内に世間は夏休みに入っていて。

アタシの枕元には、叔母さんだけがいた。

他の親戚はたまたま遠くに住んでいて、叔母さんだけがたまたま近くに住んでいた。

ただそれだけの話だった。

アタシはそれを利用した。

病室に入ると、恵美が豪華な重箱弁当を広げてた。

「ほはへひ」

成人女子が口の中を食べ物でいっぱいにして喋るなど言うべきかどうか迷ったけれど、言うのは止める事にした。

そもそもそんな事に気が回る人間なら、とつくの昔に実践してる。

「ただいま。その豪華弁当、どうした？」

「はやほひゃんが、ひよひよへへふれた」

亜矢子さんが届けてくれた、と言いたいらしい。

亜矢子さんというのは、松山家のお手伝いさんだ。

「なんで？」

「ひょういんひよくはあひへないらるうって」

「病院の食事は味気ないだろう？」

我ながら良く聞き分けられてんなと思いつつ、一応確認のために鸚鵡返しに訊き返す。

いや、この場合鸚鵡返しとは言わないか。

恵美はアタシの言葉にコクンと頷くと。

モグモグモグモグゴクンツ。

「ワタシにつて」

何故そこだけハッキリと言う必要があったのか。

恵美の思考は相変わらず謎だけど、亜矢子さんの行動も謎だ。

入院しているのはアタシであつて、つまり病院食を食うのはアタシなのだが、何故恵美に弁当を持ってくるのか？

恵美の子供時代を顧みるに、松山家に入ったから恵美がこうなつたわけではないことなど十分知っているけれど、松山家に入った事で増幅されたことは間違いないに違いない。

「ていうか、今夕方だし。こんな中途半端な時間に食つてどうすんの」

アタシが恵美の隣に腰掛けながらそう言つと、

「弁当は別腹だから」

「ああそう」

訊いたアタシがバカでした。

脱力していると、恵美が割り箸で突き刺した唐揚げを向けてくる。

「一日半何も食べてないアタシへの嫌がらせか、それは」

アタシはそう言つて右手を伸ばし、恵美の頬を容赦なく抓る。

ついでに左手も伸ばして、もう片方の頬も抓る。

恵美の柔らかさそうだが無駄な肉もなさそうな頬は、予想に反して良く伸びた。

「ひょんじょうでふえ」

「根性で食えるか。胃が油で爛れるわ」

リスのプクプクの頬程じゃないけれど、コレはコレで触り心地が良くなくもない。

恵美は頬を伸ばされているのにも拘わらず、里芋の煮転がしを口の中に放り込む。

モグモグモグモグモグモグモグモグ。

凄いな、こっだけ頬抓られてんに、気にもせず食っている。人間やってやれない事はない、って感じだけど。

やらない方が良い事もある。

すっかり形相の崩れた（てか崩してんだけど）恵美を見ながら、しみじみと思う。

「スミちゃん。もうそれくらいで勘弁してくれないかな？ 恵美子の顔が変形するから」

すっかり存在を忘れてた瞬市さんが、やんわりと、けれども有無を言わさぬ口調で言った。

「へへ、瞬市さんは、恵美の顔が変形したくらいで、恵美への愛情が減るんですか？」

「まさかっ。そんなわけがないだろう」

頭の良い瞬市さんの事だから挑発だとは分かっているとは思っけど、それでも引つかかっちゃうのが変態シスコンの悲しい性というヤツだ。

「恵美、瞬市さんは恵美の顔がお気に入りだから、恵美の顔に少しでも傷が付くとお気に入りじゃなくなるんだとさ」

「そうだとはいってないだろうっ」

「じゃあ、恵美の顔がどうなってもいいですよね？」

「良いわけがない！」

「ふん。じゃあ、この顔が好きですか？」

「それは勿論、物凄く好きに決まってる！」

うわあ。言い切っちゃったよ。分別ある（ハズの）大人なのに。瞬市さんも、言ってしまった後で気がついたんだろう。

ハツとして、愛しい義妹を恐る恐る伺い見る。

果たして彼の視界に映ったものは。

冷たい目をした義妹であった。

なんちゃって。

アタシが手を離すと、恵美は言った。

「瞬兄。今日はもう用事ないから、帰りなよ。てか、帰れ」

恵美は世にも麗しいその顔のせいで、イロイロと嫌な目に会ってきた。

勿論、得な事もあるだろう。てかあるんだけど。

嫌な思い出つてのは、心に残るもんなのだ。

というわけで、恵美はその顔を好きだと言われるのがとても嫌いだ。

それを十分承知している瞬市さんは、自分の失言に日頃の柔和さもぶつ飛ぶ程狼狽えてる。

「え、恵美子、これはその」

「バイバイ、オニイチャン」

恵美はそう言ったつきり、瞬市さんの方を見ようとしめない。

「スミ、もったいないな。亜矢子さんのこのローストビーフが食べないなんてさ」

「弁当にローストビーフ？ さつすが、お金持ちは違うねえ」

「くつ。スミちゃん、やってくれたなつ。いつかこの借りは返して貰うよっ」

瞬市さんは、どこの悪役だよとツツコミたくなる様な捨て台詞を吐いて出て行った。

アタシは瞬市さんの去って行ったドアが完全に閉まるのを確認してから、

「スマン」

恵美に言った。

恵美は、顎を思いつきり仰け反らせて、目一杯開いた口にローストビーフを落とし込もうとしているところだった。

「どうせ、瞬兄がスミの気に入らない事言ったんじゃないの？」

「まあ、そんなとこ」

アタシのハッキリしない言葉を恵美は特に追求する事もなく、デカイローストビーフをそれ程大きくもない（ハズの）口に見事収めきった。

うわあ、スゲえ。物理的に無理にしか見えなかったのに。

恵美だって、瞬市さんが恵美の顔だけを好きだなんて思っではない。

ただアタシの意図を察して乗ってくれたただけだ。

アタシと叔母さんの関係なんて隠す様なもんじゃないけど、その先にまで踏み込まれるのは正直言っていただけない。

だから、ま、牽制も兼ねてのちよつとした嫌がらせだ。

「じゃあさ、食いながらでいいから、状況説明してよ」

「瞬兄から聞いたんじゃないの？」

「聞いたよ。けどそつちじゃなくて、アタシの状況だよ」

「ああ、なるほど」

瞬市さんによると、恵美から電話があったのが昨日の午後。

たまたま非番だったので即刻駆けつけ、アタシの状態に異常を感じて知り合いの病院に運んだ。

諸々の検査の後異常がないということで、栄養点滴刺して寝かせてた、と。

まあ、寝てる間に終わった事を今更どうこう言っまい。

問題は。

「抓っても叩いても起きなかつたって？」

アタシがそう訊くと、恵美は片手を顔の前に立てて。

「かたじけない」

恵美なりに、アタシの顔がヒリつく程抓ったり叩いたりした事について謝ってるんだらうけど。

「それ、謝ってるのと違う」

「む。ゴメン被る」

「それも違う」

それは寧ろ拒絶の言葉だ。

「ひかえおろうっ」

「水戸黄門かつ！」

「いや、寧ろスケさん」

「え？ カクさんじゃなかったっけ？」

「違うよ。スケこましのスケさんだよ」

「ええ？ スケさんってそういう意味？ じゃあカクさんは」

「角刈りじゃね？ んで、スケさんはスキンヘッド」

「ちょんまげだよ。カクさんもスケさんもっ」

「そんなの分かんないじゃん。二人とも現実にはどうだったか誰も知らないんだからさ」

スケさんもカクさんも、ちゃんと「良いところの子」なんだから時代のスタンダードちょんまげだったと思うけど。

ぶつちやけ言って、スケさんカクさんがスキンヘッドだろうが角刈りだろうが縦巻きロールだろうが、どうでもいい事だ。

「まあ確かに、絶対そうじゃなかったとは言えないわな」

「……………」

恵美はアタシの言葉を聞いて絶句した。

アタシは恵美を見つめて絶句した。

恵美の綺麗に切れ上がった瞳に、またも涙が盛り上がる。

「うわあん！ スミのツツコミが甘い！ やっぱりどっか悪いんだ

！ ワタシが叩きすぎたせいだ！」

「……………」

恵美の中で、アタシは一体どんな人間なんだろう。

今更ながら疑問に思う。

アタシだってツツコミが甘い時だってあるんだよ。

だって人間なんだから。

とか言ってるべきだろうか？

しかし、そこまでする意味が全く分かん。

アタシはドツと疲れが押し寄せるのを感じて、ガックリと肩を落

とした。

「はあ」

ため息を吐くと幸せが逃げるって言うけど、ため息程度で逃げ出す幸せって本当に「幸せ」なんだろうか、とか思ったり。

「お疲れだねえ」

半分はアンタのせいだけだね。

とは言わずに。

「うん。疲れたよ、精神的に」

「んで、何があったわけ？」

恵美は再び弁当をつつきながら、どうしても良さそうに訊いてきた。

「何とさ」

アタシはソファーに背中を預けて、天井を見上げながら言った。

「アディーリアが出てきたんだよ」

「死んだんじゃないかっただけ？」

「死んでるよっ。思いつきり」

「じゃあ、幽霊とかってヤツ？」

「それとも微妙に違うらしい。本人が言うにはね」

アタシは夢の中であつたことを、順を追って説明した。

カエル間転送があつた事。カエルの現地時間が重複してた事。

無駄にイケメンな例の輩に出くわした段になると、恵美は前のめりで聞き入り、連中が何故か気絶した場面ではゲラゲラ笑って喜んだ。

「誰だよっ、『ご主人さま』って！」

そのツッコミは甘んじて受けよう。何せ自分でもどうかと思う発言だったし。

なんで連中がああ言葉に食いついたのかが、寧ろそちらの方が甚だしく謎だ。

「ええと、アタシじゃね？」

ケロタンはアタシ自身だけど、いわば「宮本澄香」の下位人格みたいなもんだし。





恵美はそう言いながら必死で顔を引き締めようとするけれど、自然と口が緩んで仕方がないといった感じだった。

暫くしてどうにか平静を保てる様になったのか、ふと思い出した様に恵美が言った。

「でもさ、なんで『寿限無』で気絶？」

「全然さっぱり。アディーリアは逆にそれで目が覚めたって言うだけだね」

すると恵美は難しい顔をして訊いてきた。

「スミ、前にお姫様の母ちゃんに会ったのは何時？」

「アディーとは、初めに会って以来だよ」

「それって事故ん時？」

「そう」

「その時も、昏睡状態だったんだよね？」

「うん。正確には、昏睡とはちょっと違うらしいんだけどさ」

「それってさ」

恵美はアタシの言葉を聞いているのかいないのか、独り言の様にポツリと言った。

「お姫様の母ちゃんが、昏睡の原因って事じゃねえの？」

### 第三五話 カエルは意外と毒性が強いです その4

その薄暗い空間には、アディーリアとアタシと何時まで経っても欠けない月と。

時々流れる星と。

アディーリアは相変わらず高飛車な事ばかり言っ

アタシもアタシで何時も殆ど同じ言葉を返して

たった三歳でお母さんが死んじゃったそのお姫様は、確かに可哀想かもしれないけど。食べる物にも着る物にも困らない。大切に育てられる事は間違いない。おまけに父親は生きている。世の中にはもつとずつと悲惨で可愛そうな子なんて沢山いる。アタシには、その子にだけ同情しなきゃいけない理由がない。

それから、また幾つか星が流れて。

不意にアディーリアが静かな声で言ったのだ。

「だって貴女、 でしょう？」

その言葉があんまりにも自然に、ストーンと心に落ちてきたから。

アタシはアディーリアと契約した。

アタシはビクリとなって目が覚めた。

見慣れない天井に一瞬ドキリとしたけれど、廊下の明かりが透け

るドアに病院だったと思い出す。

夢を見た。

昔見た夢を夢で見るとのも妙な話だけど、見ちゃったモンは仕方がない。

アタシは気怠い体を起こして、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。

キュツとキャップを捻って、水を飲む。

「どした？」

不意に声が掛かって振り返ると、恵美が付き添い用の簡易ベッドからこちらを見ていた。

「眠れねえの？」

「いや、寝てただけで、目が覚めた」

「ふん」

恵美はそれだけ言って、またモゾモゾと布団の中に潜っていった。あれから恵美は一度悄気返る瞬市さんを連れて家に戻って、また病院にやって来た。

お泊まりセットを携えて。

遠藤医師の話では、夕べも泊まったらしい。

身内が側にいない分、こういう時の恵美の存在は心強いと思う。

瞬市さんにしたって、入院の手続きなんか全部やってくれたわけだし。

何かお礼しなくちゃな。

恵美には何か食い物奢る事にして、瞬市さんには、そうだなあ、恵美の隠し撮り写真でもやっつくか。

アタシは飲みかけのペットボトルを冷蔵庫にしまって、もう一度布団を被った。

正直言つて、最初は寝るのが怖かった。

また昏睡なんて騒ぎになったらどうしよう、ってのが心配だった。でも恵美の寝息を聞いていると、どうにかなるかもって思えてくるから不思議だ。

その恵美の言葉を思い出す。

よく考えてみなよ。アンタ、死人と交信してんだよ？

アタシの昏睡の原因がアデーリアじゃないのかと言った恵美は、更に続けてそう言った。

アタシは恐山のイタコか！

というアタシのツツコミは、残念ながら不発に終わった。

てか、電波？

アタシは余りのショックに絶句した。

そんなアタシに追い打ちを掛ける様に恵美は言った。

金星人と交信するときは、是非招待してくれタマエ。

いや、しないから。てかできないから。

じゃあ、アンドロメダ星人と…。

もっとできないから！

何度思い返しても、不毛な会話だ。

そもそも死人死人というけれど、全ては夢の話だ。

アタシは天井をジツと見た。

別にそこに何かがあるってワケじゃないけど。

ジツと見てたら、何かが見えてくるかもしれない。

なんてね。

九年前も、こんな風に夜中に天井を見上げていたと思い出す。

あの時、アタシは約二週間「昏睡」状態だった。

らしい。

というのも、アタシにはその自覚がないからだ。

現実には、指一本動かせず瞬き一つできなかったけど。

アタシにしてみれば、ちゃんと意識はあったし。

繰り返し訪れるアデーリアを、一体どうやって撃退しようかと頭を悩ませていた。

けれど、その実、アタシはアデーリアが来るのを待ってもいた。アデーリアがいないと、声が聞こえたから。

それが妄想だったのか、現実のものだったのかは分からないけど。

可哀想に、まだ小さいのに。

命に別状はありません。

どうして目覚めない？

大丈夫ですよ、きつと。

本当に、目は覚めるの？

誰が引き取るの？

覚悟しておいてください。

知ってる声と知らない声と。

やがて声は少なくなつて。

何時の頃からか、女の人にしては低めの声ばかりが聞こえるようになった。

ああ、本当に。

あれもこれも所詮は夢だ。

夢なんだから「何でもアリ」だ。

一生懸命考えるのは楽しいけれど、真剣に捉えるのはバカらしい。けれど多分、それじゃあもうダメなんだ。

こうして現実に支障が出てきてる以上、アタシは考えなきやいけないんだろつ。

アタシは目を閉じて、記憶の糸を手繰る。

アディーリアとの最初の出会いのその時を。

その時アタシは薄暗い空間にいた。

一体何時からそこにいるのか分からなかったけど。

頭上にはまん丸い月があつて、時々思い出したみたいに星が流れてた。

アタシはそれを夢だと思った。

夢を見ているという自覚がある夢を見たのは、その時が初めてだった。

そもそも、人は夢の中で夢を見ているという自覚はないものらしい。

夢を見ている間は、夢こそが現実なのだ。

けれど、アタシにはそこが夢の中だという確信があつた。

また幾つか星が流れて。

アタシは周囲を見回したけど、相変わらず何もなく。

ポツンと佇むアタシの足下には、影すらもなかった。

どれくらいそうしていたのか。

流れる星を数えるのにも飽きた頃。

ふと気がついたら、目の前に紫の髪をした絶世の美女が立っていた。

紫の髪って、アニメかよっ。

なんて、内心で自分にツッコんだことは言わずもがなだ。

アタシだって子供らしくアニメは好きだった。

けれど、不思議な髪色のキャラクターに特に惹かれるって事はなかった。

美容院に行って染めて貰うとき、何て言って染めて貰うんだろう？

とか。

あの髪の量じゃあ、時間掛かりそうだな。

とか。

考える事はあつたけど。

というのもウチの母親が、そういう事を言う人間だったのだ。

あのコスチュームはお手製だから、ヒロインになりたきや裁縫習

え。

なんて事も言つてた様な気がする。

料理は好きだけど裁縫は嫌いだったアタシは、早々にヒロインになることを諦めた。

てことでもなかったけれど。

アタシは自分が性格的にヒロインには向いていないという事は、随分早くから気がついていた。

何の羞恥心もなくあんなポーズができるヒロインは勇者だと。

アタシと母親の一致した意見だった。

因みに父親は、何の羞恥心もなく仮面ラダーの変身ポーズができる人間だった。

けれど娘と妻の理解と尊敬は、得られなかった。

そんなことをボクッツと美女を見ながら思い出したら。

「漸く見つけたわよ！」

美女はアタシをビシツと指差して言った。

てか、さっきから目の前に居ましたが？

と言う前に、美女は言った。

「神妙にアタシの願いを叶えなさい！」

「意味分かんないから」

アタシはパチリと目を空けた。

ホント、ロクな出会いじゃないな。

しみじみと思う。

王女で王妃で美女で聖者なんだから、まあ、高飛車にもなるんだろうけど。

必死だったってことを差し引いても、アデーリアのそれは、人にものを頼む態度じゃなかった。

アタシはゴロリと寝返りを打って、恵美の方を向いた。

恵美は、真夏だって言うのに頭までスツポリ布団を被ってる。

まあ空調が効いてるから、暑いってこともないけれど。

収まりきらない長い髪がシーツの上をうねってるのが、ちょっと怖い。

高感度のカメラがあれば撮って、瞬市さんにあげたいくらいだ。

けれど、瞬市さんの事だから、ひよっとしたらこの手の写真なんかは既に持っているかもしれない。

恐るべし、変態<sup>システム</sup>。

なんて事を思いつつ、アタシの思考は記憶の海を漂い出す。

あんまりにも暇だから、そしてあんまりにもしつこいから。

話くらいは聞いてやっても良いと言っと。

アデーリアは早速話し始めた。

愛しい国王との出会いから。

「あれは花の咲き乱れるイーリアスの月の事だったわ。私が愛しいあの方との運命の出会いをしたのは」



「ちょっと待て。アンタの子供の話じゃないの？」

「あの子は、私とあの方との愛の結晶ですもの。その生命の根源を辿るのは重要じゃなくって？」

「それはいい」

「何故？」

アデーリアは片眉を上げて言った。

その仕草が物凄く不機嫌そうだったので、面倒臭い事になりそうだからと、

「興味ないから」

と正直には言わずに、

「後からゆっくり聞くから」

とお茶を濁した。

アデーリアは少し考えてから、

「まあいいわ」

と肩を竦めて言った。

「よく考えれば、何処の馬の骨とも分からない様な子供に、軽々しく話して聞かせていい話じゃないものね」

「その何処の馬の骨とも分からないガキに、大切な愛の結晶の事を頼もつとしてんのは何処の誰だよ」

「仕方がないわ。今私の目の前には貴女しかいないんだもの」

「もう、アンタさっさと死ねば」

「おバかさんね！ 私ならもう死んでるわ！ オッホッホッホッホッ！」

「ジョーブツしろって言うてんの」

「まあっ。思いやりのない子ね！ 私を可哀想だと思わないの!？」

「可哀想なのはアタシの方っ。変な女に絡まれてさっ」

「ふんっ、良い事？ 貴女が私の話を聞き入れない限りは、何が何でも離さなくってよっ」

「呪いかっ」

なんちゅう会話だ。

自分がアレをやったんだと思うと、何だか悲しくなってくる。

その後も、奇妙なカエルのぬいぐるみを見せられた時や、それが五体もあるなんて事を聞かされた時には、やっぱり不毛な言い合いをした。

なんでカエルなわけ??

カエルは出産の象徴じゃない。

向こうでは、産婆さんの家には目印としてカエルの看板が掛かっているらしい。

もう産んじやってるじゃんつ。

そうだけど。でもでも、可愛いからいいじゃないつ。

本当の理由はそっちか!

どうやらアディーリアは熱烈なカエル愛好家だったらしい。

じゃあなんで五つもあんの??

うーん、五人捕まえようと思ったから?

じゃあ、今何人目?

貴女が最初で、多分最後ね。

全然足りないじゃん!

そうなのよね。だから貴女が、一人五役?

もっとちゃんと計画的に死になよ!

計画したわよっ! けど世の中思い通りにならない事だってあるのよー!

そ、そりゃそうだけど…。

私は死んで、つくづくとその事を知ったのよ。

死んでからかよ！

アディーリアは長患いで亡くなったと言っけれど、そんなことも感じさせないくらい彼女は夢の中で生き生きと威張り散らしていた。アディーリアの言う事は、正直人としてどうかと思う事も多いけど、彼女の生命力には惹かれずにはいられなかった。

だから多分、アタシはアディーリアの言葉に頷いたのだ。

だって貴女、

生きたいでしょう？



### 第三六話 カエルには舌がない場合もあります

ゆっくりと視界が明るくなって、アタシは世界を認識する。

フランス窓 この世界ではランフル様式窓というらしいと、繊細な陰を落とすレースのカーテンと、そこから降り注ぐ月光と。

大きく見える月が、まだ夜が浅い事を物語っている。

この世界の月は四十日周期で満ち欠けし、それを九度繰り返すと一年となる。

一年が九ヶ月しかないわけだけど、日数換算で三六十日なので、元の世界より若干短いくらいだ。但し、一日は十八時間<sup>ジナス</sup>、一時間は九十分<sup>ジナス</sup>となっていて、分換算するとこちらの方が長くなる。尤も、こちらでの一秒の基準が分からないから地球時間と同じ様に考えて良いかどうかは不明だ。

んで三年か四年に一度閏年があつて、その年だけは一年が十ヶ月になる。

三年か四年つて辺りに大雑把感が否めないけど、現実世界の暦だつて昔はそんなものだった。

で、この十番目の月つてのが物凄く重要で、それが何時来るのかを決めているのが、アヌハーン神教つてワケである。逆に言えば、暦の計算方法を神教が独占してるつて事なのだ。

考えれば考える程、敵には回したくない相手である。けれど。

だからと言って。

みすみすりズを利用させるつもりはない。

そりゃ、ある程度利用されるのは仕方がないと思う。

それでアヌハーン神教という強大な後ろ盾が得られるのなら。でも。

神人なんてワケのわかんないものに祭り上げられるのはお断りの

コンコンチキってヤツである。

ところで、コンコンチキって何だろう??

なんてことを考えながら、アタシは天蓋のレースのカーテンを捲り上げる。

するとそこには、嘆美系アニメの世界から抜け出したような美少女が！

見よ！

この愛らしさ！

世のプリンセス趣向のオトメ達よ！

リズの前に平伏すが良い！

アタシはベッドに乗り上げて、スヤスヤと安らかな寝息を立てて眠るリズをそっと覗き込む。

けれど残念ながらリズの可愛い寝顔は見られなかった。

リズが横向きにクルリと丸くなった姿勢で、緑のカエルの腹に思いつき顔を押しつけていたからだ。

四号のあり得ない捻れ具合は今更だけど、リズ、息苦しくないんだろうか？

羨ましいぐらいの高さの鼻は、ビビッドなオレンジ色の布に埋もれて今は影も形も見えていない。

さて、どうしよう。

リズが起きないのなら、地下迷宮へと潜って調べ物したいところだけれど。

アタシは水かきの付いた青い掌でリズの髪を撫でる。

そう。

今宵のアタシはケロタン二号。

二号がリズに会うのは、行方不明になった夜以来。

リズにしてみたらイロイロ言いたい事もあるはずだ。

二号には、それを受け止める義務がある。

それに万が一、リズが目覚めた時に二号がいなかったら??

ここの所不安定なリズには、堪えるのに違いない。

けれど調べたい事は山のようにあるのも確かだ。

あの地下迷宮には、公にできない様な情報が山の様に眠ってる。  
特にイスマイルの建国史。

この間の夜突然降って湧いた様に頭に浮かんだ考えに、もし根拠が得られたら。

それは、宰相達との重要な取引材料になるはずだ。

上手くいけば、神殿側への牽制にもなる。  
と思う。

そんな風にウンウン思い悩んでいると。

「ん……」

気配を察知したのか、リズが僅かにむずがった。

四号のオレンジ色の腹から顔を離し、眠たそうに目を擦る。

やがてゆっくりと長い睫毛が上がり、この世界で最も高貴な色を  
湛えた瞳が現れる。

「……………クリス？」

ちよっと寝ぼけ声でそう呟くりズは、どうかと思うくらい愛らし  
い。

「やあ、子リスちゃん。良い子にしていたかい？」

アタシはそう言つて、水掻きのついた手でリズの髪を一房取ると、  
チュツと口づけを落とす。

口づけったつて、単に顔面を擦り付けてるだけだけど。

それでも、鳥肌ものの気障な仕草だ。でもそれをするのが二号で  
ある。

「クリス！」

リズはガバリと起きあがると、二号に飛びかかった、じゃなくて  
抱きついた。

まあ、それくらい勢いがあつたつて事で。

その反動で、四号の体がベッドの端に飛ばされる。

あり得ない方向に曲がった手足が、何とも哀愁をそそる。

二号は二号で、リズの胸に顔面を思いっきり押し付けられて、生

身だつたら間違ひなく窒息死しそうだ。

ケロタンだからいいものの、人間の男相手には絶対こんなことしちゃいけません、とか注意しておくべきだろうか？

まだ十二歳のリズには早すぎる様な気もするけれど、日本人のアタシからすれば発育の良すぎる胸にちよつと、いやかなり心配になる。

この際、アタシのそれよりデカいかどうかは置いて。

「子リスちゃん、溢れんばかりの君の愛で僕の息は今にも止まりそうだよ」

「大丈夫！ クリスは呼吸してないもん！」

そりゃ確かにそうなんだけど。

眞実が正しいとは限らない。

と、教えるべきだろうか？

いやいや、そういう哲学的な事は五号の仕事だ。

「勿論、僕は呼吸も心臓も止まらない。そもそもどちらもないからね」

「うん！ クリス達は、だから絶対死なないの！」

リズの明るい声音に、一瞬身につまされる。

死は誰の心にも陰を落とす。幼いリズには尚更だ。

けれどここですんみりしてはいけない。

「ふふ。少なくとも、世のあらゆる女性という女性と愛を語り尽くすまで、僕は死んだりしない」

「蜂とも？」

「蜂とも」

「蟻とも？」

「蟻とも」

「ミジンコとも？」

「ミジンコともさー！」

「じゃあ、まだまだ死なないわね」

リズは二号の体を離して、にっこりと笑って言った。



それにアタシは、気障ったらしく顎を指で挟みながら答えた。

「そうだねえ。彼女達は一日に何万と増えているからねえ。僕の愛の遍歴はこの世の終わりまで終わりそうにないよ」

バカみたいな会話だ。

幾らリズが子供だからって、それくらいのことは理解している事だろう。

けれどこれくらいバカバカしい会話じゃないと、リズの心に色濃く落ちる影は払えない。

特に未だ父親の死を消化しきれないリズには、死なないケロタン  
の存在は心の支えだ。

「ところで子リスちゃん。僕に言いたい事があるんじゃないかい？  
アタシがそう尋ねると、リズはキリツと眉毛を上げた。

「勿論！ 沢山あるわ！ 私、物凄く心配したんだから！」  
よつぽど鬱積してたのか、怒りでリズの頬が赤くなる。

ああ、そんなに可愛い顔で怒られても、全然怖くないから。  
アタシは内心でやに下がりながら、精一杯神妙な声で言う。

「うん、そうだね。悪かった。そして、心配してくれてありがとう  
そつと宥める様にリズの両手を取ると、リズはギュッと握り返し  
てくる。

その力の強さが、リズの不安の大きさだと思い知る。  
いや、マジで反省してます。

リズの怒った顔は怖くはないけど、傷つけるのは怖い。

「私だけじゃないわ！ みんな心配してたんだから」

「うん。みんなにもよく謝っておくよ」

「コンスタンスやセルリアンだって、いっぱいいっぱい探したの  
よ！」

「彼女たちには、また改めて謝罪するよ。他に迷惑掛けた人はいる  
かな？」

二号の問いかけに、リズは小首を傾げて僅かの間考える。

「昨日、娘子軍の人達が来たわ」

「シエル・アマリーアとシエル・イザベルだね？ 二人は何て？」  
アタシはナイスバディな隊長さんと華やかな美貌の副隊長さんを  
思い浮かべた。

「ええと、よく分かんないけど。クリスにお世話になったとか何と  
かで、会いたいわって言ってたわ」

なるほど。

神殿はそっちの方面から接触してきたか。

「ねえ、クリス。どうして二人の事知ってるの？」

リズの不思議そうな問いかけに、アタシは自慢の白い歯をキラめ  
かせて言った。

「何、彼女達とは、愛の逃避行をした仲なのさ。一緒に居たのはほ  
んの束の間だったけど、どうやら彼女達もすっかり僕の魅力に参っ  
てしまったみたいだね」

娘子軍の二人が聞けば間違いなく憤慨するだろう。

けれど幾ら二枚舌と罵られようと、アタシには痛くも痒くも全く  
ない。

だって、布製品のケロタンには舌なんかないんだもん。  
なんちゃって。

因みに、リアルなカエルにもピパという舌がない種類のものがい  
る。

何でも獲物を捕るのに舌が必要ないためらしい。

ケロタンも獲物を捕るのに舌は必要ない。というか食事をしない。  
だったら歯もいらさないんじゃないかと思うけど、そこら辺のこだ  
わりは王妃にしか分からない。

「とうひこう？ 逃げてたの？」

リズが心配そうな顔をする。

それにアタシは何でもないとばかりに肩をすくめて、

「そう。邪悪な魔物達からね」

この世界で言う魔物ってのは、邪悪な魔法使いの成れの果てで、  
その汚れた魂は生まれ変わる事ができないらしい。輪廻転生が普通

に信じられているこちらでは、生まれ変われないってのは神罰なんだとか。要するに、魔物ってのは神に見放された人間って事だ。

「魔物！？ 大丈夫なの！？」

途端に、リズの顔がサツと青くなる。

う、そこまで真つ正面から反応されると、心が痛む。

「勿論平気さ」

内心の葛藤を押さえ込んで、明るい声で言う。

「女性を庇って肩に少しばかり傷を負ったけど、大した事はなかったよ。名誉の負傷というヤツさ」

「傷……。そういえば、クリスの肩が少し綻んでたから、繕って貰ったわ」

何時も通りに軽い口調で言ったのに、リズの様子は曇ったままだ。ありやりや、ちょっと効果があり過ぎたか。

アタシが内心でオロオロしてると、

「ねえ、クリス？」

リズが心の奥底まで覗き込む様な目をして言った。

「何か、私に隠していない？」

「……………どうして、そう思うんだい？」

「昨日ね」

「うん？」

「朝起きたらミリーの足が汚れていたの」  
「しまった。」

あの夜、五号に入ったアディーリアに行くわしたお陰で、四号の足を洗えなかったんだった。

いや、どちらにしろタイミン的に洗う時間はなかっただろう。

「他のみんなは時々そういうことがあったけど、ミリーは今までなかったわ」

「……………そうだね」

やっぱり、四号で出かけるべきじゃなかったか。

けれど、あの夜は既に一号が出ていたし。

てか、一号と鉢合わせしない様にするこしか考えられなかったし。

「それだけじゃないわ。ディーがセルリアンナと話したがったり。みんな宛に手紙が来たり…。みんなの事は、私とかあさまとだけの秘密だったのに」

何て言えばリズは納得してくれるのか。

軽くパニックったアタシには、全く考えが浮かばない。

「ねえ、クリス。正直に言って」

リズの思い詰めた様な眼差しに、アタシはますます追い込まれる。その時だった。

視界の端で、緑の陰がゆらりと動いたのは。

そして。

「その事に関しては、私から言っわ」

「ミリー!？」

リズが振り返って、声の主を呼んだ。

アタシはその声の主と目が合った瞬間、何故か分かった。

うわゝ、うわゝうわわわゝゝゝ!

もう一人のアタシだよ!!

第三七話 カエルには舌がない場合もあります その2

相当驚いているのだろう。

リズの視線が、アタシと四号の間を忙しなく行き交っている。

大きな瞳は、見開きすぎて今にも零れそうさ。

そりゃそうだろう。

この九年間、ケロタン達が鉢合わせる事なんてなかったんだから、アタシだって相当驚いている。

アタシ自身に、自分と対峙する度胸があるって事に。

だって考えてみて欲しい。

リズがいる以上、二号のアタシも四号のアタシも、ケロタン仮面を被っていないきゃあならないのだ。

つまり、自分自身の目の前で演技を披露するって事である。

鏡の前で一人芝居やるようなもんだ。

うわあ。

何考えてんだ、コイツ。

てか、アタシか！

所詮はツッコまれるのもツッコむのも自分なので、空しさばかりがデカくなる。

けれどやはりツッコまずにはいられない。

アタシは、ゴクリと唾液もないのに生唾を嚙下した。

さあ。

四号に何と声を掛けるべきだろう。

やあ、ミリー。今日もおめでたいくらいに大きな花がよく似合ってるね？

おい、バカにしてんのか。

やあ、ミリー。その毒々しい程色鮮やかなお腹が、今日は一段と輝いてるね？

なんだそりゃ。

いかん。どうやっても一人ボケツツコミになっちゃおう。

ていうか、目の前の四号が間違はなくアタシなら、てかアタシなだけで、こんな葛藤も「いつか来た道」なんじゃないだろうか。

ここはもうレディーファーストで、四号の出方を待つべきだろう。てか、四号のアタシ、早く喋れ！

そんなアタシの心の叫びが聞こえたのか、徐に四号の口が開く。

「リス、驚いてるわね」

「だって！」

「そうね。驚くのも無理はないわ。今まで私達が並ぶ事はなかったものね」

四号の言葉にリスがコクリと頷いた。

「なのに、何故？」

リスの問いかけに、四号は困った様に小さく笑った。  
んだと思う。

改めて言うまでもないけれど、ケロタンに表情筋はない。

開閉する口と微妙な角度で、表情を作っているのだ。

物凄く良く言えば、能面の要領だ。

夢でこちらに来る様になってから、一年程経った頃だろうか。

リスが寝入った真夜中に鏡の前で特訓した。

ふと我に返って、恥ずかしさの余り壁に頭を打ち付けた事も一度や二度じゃない。

そんな血の滲む様な鍛錬の結果、アタシは能役者の如き演技力を身につけたのだ！

はずだったのに。

こうして改めて見ると、ぶっちゃけ言って不気味だ。

伝統芸能とはほど遠い。

しかも、口の動きと声とが合っていないから、物凄く作りが雑な人形劇を見てみたいだ。

ま、適当に口を開閉させてるだけだから仕方がないんだろうけど。リスは良くこんなのと九年間も付き合ってたなあ、今更な

がら感心する。

多分、リズにしてみれば物心つく前からケロタンの存在は当たり前になっていて、不気味に思う暇もなかったんだろうけど。

ハッ！

ひよつとしてリズが小さい頃よく泣いてたのは、ケロタンの不気味さ故か！？

「ねえ、聞いているの？ クリス？」

アタシが自分の思考に埋没している間に、幾らか話が進んだらしい。

勿論、思いつきり聞いてない。

それを誤魔化すために、ついつい二号が出てしまった。

「ああ、済まないね、シエラータ。二人が並んでいる様が余りに美しくて見とれていたよ」

言った側から、羞恥心が込み上げてくる。

シエラータってのは、「シエル」の複数形で「レディ達」って意味である。

二号の台詞としては控えめな方だけど、自分に言っていると思うとどうにも居たたまれない。

「つまり、聞いてなかったのね…」

ため息混じりにそう言う四号は、ダメな子を見る様な眼差しでこちらを見た。

「アンドリユーならともかく、貴方が女性の話を聞かないなんて…。それ程までに気がかりなのね」

何が？

とは訊けなかった。

雰囲気的に。

「ねえ、リズ。これで分かったでしょう？」

言い含める様な四号の問いかけに、リズがコクリと頷いた。

そんなリズに四号はいい子だとばかりに、チュツと頬にキスをする。

いや、顔面押しつけてるだけだけどさ。  
何て言うか。

四号のアタシには、演技に躊躇いがない。

一体何処にどうやって、この羞恥心を捨ててきたんだろう。

二号から四号に移る間に、一体アタシに何が！？

「だからクリス」

「は、はいい？」

またしても自分の思考に埋没しそうになっていたアタシは、突然呼ばれて思わず声の上擦ってしまった。

それにリズが一瞬目を見開いて、クスクスと笑い出す。

「やだ。クリス。ミリーに叱られてるみたい」

リズの鈴を転がす様な笑い声に、アタシは己を取り戻す。

てか、二号のキャラを、なんだけど。

そっだ。

アタシの相手は自分じゃない。

あくまでもリズなのだ。

リズの前で、キャラを崩すなんて言語道断だ！

アタシはリズの顎にそつと指を添えて、クイツと顔を上げさせる。

「そうじゃないよ、子リスちゃん。男というものは、何時だって女性には弱いものさ」

リズが見てない事をいい事に、視界の端で四号が、四号にあるまじき砂でも吐き出しそうな顔をする。

舌があつたら、確実にデロンと出してることだろう。

ふふん。気持ち悪かろう。アタシはもつと気持ち悪い！

「それにね。僕は女性に叱られる事が嫌いじゃない」

「叱られるのはイヤだわ」

「ふふ。子リスちゃん。君はまだネンネだから分かるまいがね。女性が男を叱るのは、そこに愛があるからさ」

アタシはそう言って、リズの顔を四号に向ける。

そりゃ勿論、四号のアタシを素の状態で見られなくするための。



さあ！ アタシよ！ 四号として振る舞え！

「そうなの？ ミリー？」

「……………そうね。クリスは弟みたいなものだから、とても大切に思っているわ」

ちっ。

兄弟愛に逃げやがったか。

「弟だから大切なの？」

あ、いっか〜ん！

リズには異母兄弟達との面識は皆無に近い。

唯一会った事があるのが、現国王の長兄だけだ。

そんなリズには、兄弟愛がピンと来ないに違いない。

「いいえ。そうじゃないわ。大切だから弟みたいに思うのよ」

「恋人じゃなく？」

「ふふ。クリスとの恋愛は、私には無理よ」

そりゃそうだ。

自分自身と恋愛するのは重度のナルシストしかありえない。

くっそう。

四号は設定がまともな分、言葉のミスチョイスさえ、まっとうな言葉で逃げられるのか！

というか、四号を困らせたところで、結局困るのは未来のアタシだ。

その事に気がついて、アタシはがっくりと肩を落とした。

「あら、どうしたの？ クリス」

四号の気遣う様な声に、全部分かってんだろっがああ！ と叫びたいのを押さえ込みつつアタシは言った。

「酷いよ、ミリー。僕の愛は兄弟愛だとか家族愛だとか、そんな風に分類できるものじゃない。もっと大きなものなんだ」

「それは何？ いいえ、言わなくてもいいわ」

「いいや！ 言わせてくれ！ 僕の愛はね！ 世界愛さー！」

正直に言おう。

アタシはこのとき自棄になっていた。  
後に、四号となったアタシは、甚だしい後悔に苛まれるわけだけ  
ど。

この時のアタシには、それと気がついていても、ザマーミロとし  
か思わなかったに違いない。

我ながら、その愚かさに辟易する。

けれどそれもこれも、後の祭りってヤツである。

「けれど僕は懺悔しなければならぬ！」

「懺悔？」

「ああ、子リスちゃん。何故なら僕は世界を愛すると言いながら、  
その実三分の二しか愛せないのだから」

「三分の二？」

「そう。僕は女性しか愛せないからさ」

「三分の二が女の子なの？」

「数えた事はないけど。多分そのくらいだ」

一般的に雌雄の比率は一対一と言われているけど、は虫類なんか  
だと卵の時の温度差で雌雄が決まるし、蟻や蜂に関しては比べるま  
でもなく雌が断然多い。

「何せ生物の基本は女性だからね。ま、僕としては僕以外の雄は死  
滅しても一向に支障はないけど。でもそれだと比較対象がないから、  
僕の素晴らしさが十分に理解されないかもしれない。いいかい、子  
リスちゃん。物事の価値というのは、相対的なものなんだよ」

アタシの長台詞を、リスはキョトン顔で聞いていた。

四号はアタシを生温い目で見ていたけれど、堅く握った拳がプル  
プルと震えてた。

きっと身悶えたいのを我慢しているのに違いない。

何せアタシだ。気持ちちは分かる。

つまりそれは、間もなくアタシが経験するってことである。

……… やっぱり止せばよかったか。

アタシの反省は、けれど、長くは続かなかった。

「それじゃあ、英霊が、女性である事を祈るわ」

四号は突き放す様にそう言って、何かを手渡してきた。

英霊つて、なんじゃそりゃ。

と聞く前に、渡されたそれに目を見張る。

受け取ったのは、水時計だった。

形も使い方も砂時計と殆ど同じだけど、中には砂じゃなくて水が入っている。

正確には水じゃなくて、粘度の高い液体だ。

水時計自体は一般的な物だけど、渡されたそれは中の液体が、一体何で着色してるのか濃い紫色をしている。飲めば確実に死にそうな色だけど、聖者しか持てない代物だ。

更には土台の部分が銀で出来ていて、ごく丁寧にも宝石までくっついている。

宝石には詳しくないから定かじゃないけど、紫とピンクの石は、アメジストとローズクォーツじゃないかと思う。

宝石には精霊が宿ると信じられているから、お守り的な意味合いがあるんだろう。

はつきり言って綺麗である。けれど。

しがない庶民は思うのだ。

きつちり一時間ジナス(地球時間で九十分)しか計れない、ぶっちゃけキッチンタイマーよりも使えない代物に、何てことをしてくれてんだ。

これは所謂アレだろうか。

無駄こそが贅沢というブルジョワジ的な何か。

きつと無くした日じゃあ、エライ騒ぎになるだろう。

なんじゃこりゃあ！ テメエどういう見でこんなもん渡してんだよお！

アタシは心の叫びを二号の言葉に変換した。

「こんな大事な物、幾ら僕への愛故であっても、貰えやしないよ」

すると四号は、ニッコリと笑って言った。

「あげる訳じゃないわ。預けるだけよ。これはいわばお守りね。この前みたいに、フラフラと遊びに行かないようにね」

「遊びに行ってたわけじゃない。愛の逃避行さ」

アタシはキラリンツと歯を輝かせるけど、当然ながら四号相手には通じない。

「あらそう。それは凄いい冒険ねえ」

か、軽くあしらわれた！

自分自身に！

シヨックを受けていると、あれよあれよという間にポイツとウオークイングシューズスクローゼットに放り込まれた。

「水が二度落ち切る前に、必ず帰ってるのよ」

その言葉に振り返ると、四号が四号にあるまじき鬼の様な形相をしていた。

「ヒッ！」

四号はアタシの悲鳴にニヤリと笑うと、パタリと扉を閉めた。

自分自身を威嚇してどうする…。

我ながら余りの恐ろしさに気を取られて、部屋の片隅で五号がのっそりと身じろぎした事に、アタシは全く気がつかなかった。

### 第三八話 カエルには舌がない場合もあります その3

水時計をネックレスのように首から下げて、アタシは奥へと進んだ。

ウォークインシューズクロゼットは、「ウォークイン」と言うだけあって、結構な広さがある。そこら辺のワンルームマンションよりも確実に広い。

そこに整然と並ぶ棚は、当然ながら靴だらけだ。

その数は、どこぞの元大統領夫人程じゃないけれど、相当なものである。

それもそのはずで、リズが生まれて以来あつらえてきた全ての靴があるからだ。

隠し扉の仕掛けがある一番奥の棚には、大体三、四歳頃のもものが並んでる。

色とりどりの刺繍や宝石なんかを縫い付けられた靴は柔らかい布製で、ケロタンの掌には余るけど、それでも十分小さいものだ。

それらを目にすると、自然と出会った頃を思い出す。

幼児というものは、ただそれだけで可愛らしい。

それがすこぶる付きの美少女とくれば、その可愛らしさは尋常じゃない。

だけど、世話をするのは大変だ。

何せ、幼児つてのは容赦を知らない。

夜なんだから寝てりゃいいのに、なんで深夜に目を覚まして、尚かつそんなにハイテンションなのか？ そりゃまあ頭突きかまされても噛みつかれても、全然痛くはないけどさ。コレは愛情だけじゃあやってけないよ。世の母親と言う母親を、尊敬するね。

なんてことを、ヨダレまみれになった体で思ったものだ。

アタシは小さな靴を眺めては、暫し思い出を噛みしめる。

そんなアタシを注意するかのように、水時計が煌めいた。

おおっと、いかん。

思い出にふけってる場合じゃなかった。

アタシは直ぐ側の壁にくっついていてレバーを握った。

普通に右に回るそれを、普通に右に回せば、柵がスライドして奥の柵が現れる。

そこには更に小さな頃のリスの靴があるんだけど。

アタシはレバーの下の辺りを撫でて、微妙に出っ張ってる場所を探り当てる。

そこをグツと押しながら、レバーを左に回すと。

ズズズツという鈍い音と共に、柵全体が弧を描きながら開いていく。

この隠し扉は他の二つと違って、アディーリアの記憶になかったものだ。

それを探し当てたのは、ほんの偶然からだった。

この靴部屋を含むウォークインクローゼットの直ぐ隣には、隠し通路が通っている。

そこを通っている時、微妙な違和感を感じてただけで、それが何かは分からなかった。

ところが、高校に入ったばかりの頃、とある推理小説に出くわした。

その中に、外観から推測される部屋の大きさより、実際の部屋の大きさが小さかった事から、隠し部屋を探し当ててるってのがあってアタシはその時、もしかやと思ってクローゼットの奥行きと隠し通路の距離を比べてみたのだ。

すると壁の厚さを差し引いても、一メートル以上は隠し通路が長かった。

そこでイロイロ弄って、漸くこの仕掛けを見つけたのだ。

ケロタンが通れそうな程の隙間が空くと、アタシはレバーを回す手を止めた。

そこへ体を滑り込ませて、地下への階段を下りて行く。

アタシの記憶に間違いがなければ、目的のシロモノは「闘牛部屋」にあったはずだ。

「闘牛部屋」ってのは、壁といい家具といい全てが深紅で統一されていて、如何にも牛が闘志を燃やしそうな部屋の事だ。

ま、牛は色じゃなくて動きに反応してるって話だから、実際に牛を入れても暴れたりはいしないだろうけど。

その「闘牛部屋」へは、ちょっと複雑な手順が必要だ。

何せ隠し部屋の隠し部屋の更にまた隠し部屋を通らなければ、入れないからだ。

ここを見つけたのは、確か大学一年の冬だったと思う。

この念入りな隠し方からして、余程の物が隠されているのに違いない！ と見つけた当初は思ったものだ。確かに調度品そのものは高そうだったけど、めぼしい物と言えば数冊の本と、何時の時代の物がよく分からない地図と、随分古ぼけた『アヌハーン聖典』くらいで、後は書き散らしたメモの様な物しかなかった。

とは言え、本そのものは面白かった。

何せ正史とは異なる建国史が、書かれていたからだ。

イスマイル王国正史によれば、イスマイルの建国は今から八三六年前に遡る。

イスマイル王家の血筋そのものは、『名の秘された皇国』の第五三代イザレス帝まで遡る。

イザレス帝の第二王子が臣籍降下しイスマイル大公となったのがその始まりである。

ついでに言えば、アヌハーン神殿の定める血筋ランキングでは、一位を皇統「エス・エイシアン」、二位を皇統の分家筋の「庶王」とし、三位を臣籍降下した皇族の内「大公家」の称号を頂く家柄と定めている。

さて。

今から九七三年前、『名の秘された皇国』最後の皇帝が亡くなった時、彼には後を継ぐべき子供がいなかった。何をトチ狂ったのか、

皇帝自身が殺しちゃったからだ。

そこから皇国の滅びが始まる。

まあ、そういうのは得てしてきつかけでしかないんだけど。

皇位を争って庶王が戦いを始めちゃったワケ。

大規模な内乱はそれまでもあつただけ。

今度のは、収拾が付かなかった。まあ、ウソかホントか知らないけれど、三千年も大陸を牛耳ってたって話だから、あちこち腐って壊死しちゃってたんだろう。

ところがイスマイル大公家は、戦乱には参加せず静観を決め込んだ。

攻められれば火の粉を払う程度の戦いはあつたものの、自分達からは仕掛けなかった。

なぜならば、大公家には「聖地」を守るという重要な任務があつたからだ。

そもそも各大公家は、「聖地」を守るために作られた家柄なのだ。戦乱は最初の五十年で全ての庶王が滅び、あとの五十年は混乱を極めた。

国が興つたと思えばたちまち潰え、人々は支えとなるものを失い疲弊していった。

そこで、一人の神官がイスマイル大公に進言した。

どうか、人々の心の支えとなるために、国を興してくださいと。

大公は言った。

しかし、それでは我らが主家皇国の再興を諦めるという事となる。

大公の皇国を思ってお気持ちお察ししますが、ここはどうか人々の安寧のために。

いやいや、そうは言っても、我が大公家が「王」を名乗るのは云々…。

まあまあそう言わずに、神殿も助力を惜しみませんから、ここは一つ…。



てな感じで綺麗事ぶった薄ら寒い会話が、実際にされたかどうかは定かじゃないんだけど。

要するにアヌハーン神教の要請を受けて、皇国暦三二五八年  
皇後暦元年、イスマイル王国は建国された。  
らしい。

アタシに言わせれば、なんちゅう嘘くさい話だつてなモンだけど。  
コレを国民の皆さんは信じちゃってんだらうか？

ぶっちゃけ言つて。

大公閣下、皇国も滅んじまったことだし、ここは一つ思い切  
つて国作つちまいませんか？

しかし資金繰りがのう…。

そこはそれ、蛇の道は蛇と申します。

大神官、そちも悪よのう…。

てな会話があつたつて言われた方が、よっぽど納得できるんだけ  
ど。

なんて事を思いつつ、アタシは一冊の分厚い本を手にとつた。

印刷技術そのものは皇国時代に既にあつたつて話だけれど、この  
本は手書きで、装丁こそされてるものの本というよりはノートに近  
い。

最後のページには、日付と著者の名前が記してある。

皇後暦四七三年ヨグナ・トの月二十日。

ニルセード・アウレリウス・ロエル・イスマイル・アウラ・サリ  
ダ・ハジエク・イス・イスマイル。

まあ、何時もながらもつたいたいぶつた名前だけれど、三六十年前の  
王位継承権を持つ人間が書いたらしいつて事は分かる。

で、問題の内容だけ。

正史を真つ向から否定するようなものなのだ。

しかも神教を痛烈に批判している。

読んだ時思つた。

コレじゃ幽閉されるわな。

王位に近い人間がそんな事書いたとなりやあ、そりやもう大問題だろう。

けれどその問題の本が、今回の作戦の要なのだ。さて。

この分厚い本を今は読んで暇はないから、持って帰るとして。他に何か持って帰るべき物がなにか探してみる。

メモの類は、癖のある字が読みづらくて、直ぐには解読できそうにないシロモノだし。

残るめぼしい物と言えば、地図ぐらいだ。

一緒に置かれてあるんだから、何らかの関連があるんだとは思っただけだ。

羊皮紙に描かれたそれを、アタシは注意深く広げる。

羊皮紙は紙に比べれば丈夫だけど、何せ随分古そうだし、破きでもしたら大変だ。

史学を専攻する人間としては、古文書の扱いは慎重に、慎重に……むん。

地図にはイスマイルはあるけれど、現在の大国ゴシエ、ナデイシス、エラハルドの名は見当たらない。三つの大国の内一番古いのがエラハルドで建国約三百年だ。てことで、少なくともこの地図は、三百年以上前の物だ。て事は分かってるんだけど……。

「んん??」

アタシはある事に気がついて、マジマジと地図を見た。

リズは去年から地理の勉強を始めた。

勿論地図を使ってる。

地図って言っても、山とか川とかがあって、大街道と国境が描かれている程度のもんだ。

今の世界状況は安定しているとは言え、小競り合いは相変わらず続いている。

そのため軍事的な理由から、どの国でも自国の詳細な地図は門外不出となっている。

だからまあ、それだけ書かれていれば、上等な部類に入るんだけど。

そのリズが教材に使っている地図とこの地図とでは、イスマイルの位置が違うのだ。

今よりちよつとばかり東にある。

大昔の地図だから、測量の精度の問題って思つかも知れないけれど。

まあ確かに、精度っていう点では怪しいとは思っけど。

この場合、地図の精度は問題じゃない。

何故なら、イスマイルがあるはずのゲマイシエル高地が、この地図ではイスマイルより西にあるからだ。

ていうか、今気がついたんだけど。

イスマイルが「王国」レクラードじゃなくて「大公」ラグレードになっている!?

ガバリと身を乗り出して、何度も何度も確かめる。

けれどやっぱり。

そこにあるのは「大公領」の文字で。

もしかしてもしかすると、コレ、皇国時代の地図??

いやいや、まさかまさかまさかまさか。

正史によれば、イスマイル王家は皇国時代から現在の領土である「聖地」を守護してたって事になっている。

それが、イスマイル王国建国の何より強い正当性なのだ。

そして件の本は、それを否定している。

ひよつとして、この地図が、その論拠になるんじゃないの???

### 第三九話 カエルには舌がない場合もあります その4

そもそも「聖地」ってのは何なのか。

簡単に言えば、「英霊に守護されている地」って事らしい。英霊ってのは、精霊の中でも特に位が高いヤツなんだとか。

まあ、現代風に言えば、パワースポットってトコだろう。

イスマイルみたく、標高高いから育つ作物は限られてるわ、耕地狭いから量も穫れないわ、おまけに大した鉱物資源もないってな国じゃあ、「聖地」という観光資源は命綱みたいなもんだ。

なモンだから、イスマイルは国を挙げて「聖地」を大々的にアピールしてる。

その甲斐あって、毎年何十万人もの巡礼者がイスマイルを訪れる。世界三大「聖地」として、「一生に一度は行きたい聖地ランキング」や「巡礼者に訊いたもう一度行きたい聖地ランキング」で数百年堂々首位を守り続けているらしい。

誰がとったアンケートだよってツツコミは、この際置いといて。アタシだったら、高山病と闘いながらの観光なってお断りだけ。それが信仰の力ってヤツなんだろうか。

そりゃ、苦労した分、達成感は大きいとは思っけど。

それって単にクライマーズハイなんじゃ…？

と思っちゃうのは、アタシだけじゃないはずだ。

ま、要するに、イスマイルは観光立国として外貨をガツポガツポと稼いでるって事である。世界を越えても宗教ってのは金になるものらしい。

アタシは地図を元の通りに丸めた。

この地図が本物なら、この本の信憑性は増してくる。

こっちに古文書の真贋を判別する技術ってあるんだろうか？

あったとしても、本も地図も偽物だと言われたら、どうしようもない。

全大陸的圧力団体アヌハーン神教と、しがない布製カエルじゃ勝負にならない。

というか、布製カエルの話を真剣に聞く人間がいるだろうか？  
アタシなら、先ずその存在を無視するねっ。

その事を考えれば、ケロタンの存在をまともに受け止めてるこっちの人間は、なんて奇特なんだろうと思う。

文化の違い、っていうか世界の違い？？

「……………」

ふとアタシは気がついた。

そう。

改めて言うまでもないけれど、こちらの人間は、ケロタンを無視しない。

てか、「奇跡」認定すらしようとしている。

まあ、いろいろ思惑はあるんだろうけど。

でももし、ケロタンが「奇跡」認定されれば。

寧ろアタシの方が立場が上じゃね？？

「奇跡」ってのは、神様の眷属たる精霊がもたらすモノだ。

宗教法人よりも、地位は高いに違いない。

ああ、でもそうしたら、リズは確実に「神人」じゃんっ。

リズを「神人」にせずに「奇跡」認定を受ける方法。

もしくは、リズが「神人」になっても神教の思い通りにならずに  
すむ方法ってのがあればなあ。

う……………ん。

考えど考えど、猶我に知恵は浮かばざるなり。

じつと手を見る。

ま、手え見たって何の知恵も浮かばないわな。

水かきの付いた小さな青い掌は、ホコリのせいでちょっと汚れて  
た。

アタシはそれをパンパンと打ち払う。

胸元の水時計に視線を移すと、いつの間にか水が落ちきっていた。

ありや。

急いでひっくり返して、どれくらいロスしたのか考える。  
ううん、大幅にロスしてたとしたら、叱られるかな？

探し物に手間取ったとか、部屋を間違えたとか、何か適当な言い訳を…。

誰につて、そりゃ四号に。

つて、自分だよっ！

くっそう、考えて損した。

早く四号になって、二号の自分を噛みたい。

…… 我ながら、物凄く不毛だ。

本はともかく、地図を持ち帰るのには無理がある。

何せ教材用の掛図並みにデカいのだ。

持ち運ぶのにはかさばるし、隠す場所にも困る。

第一、見つかりでもしたらヤバだろう。

何せ、レゼル宮は神殿の息が掛かった人間ばかりなのだ。

セルリアンさんやコンスタンスさんが、どうかという問題じゃなく。

立ち位置が違っつていうのは、そういうことだ。

仕方がないので地図は置いて行く事にして、例の本ともう一冊、同じ作者が書いたもので皇国に関する本を持って帰る事にした。

アタシは三つの隠し部屋を通って通路沿いの部屋に出た。

ここもちょっとどうかと思うくらい、ステキな部屋だ。

何せズラッと髑髏ばかりが並んでる。

この部屋も、もうちょっと奥まったところに配置すべきじゃないかと思うけど。

アタシは出口に向かう途中で、ふと思いついて、もう一カ所、寄る事にした。

それは通路沿いにある二間続きの部屋で、アタシはその部屋を「プリプリ部屋」と呼んでいる。

そこへ入るのは、台所の黒い悪魔の標本が壁一面にビッシリ展示

されている「バイオハザード部屋」の次の次くらいに勇気が必要だ。何せ、精神衛生上の危機を感じるくらい、物凄い少女趣味の部屋である。

惜しげもなく使ったフリッツフリのレースと、精巧な造花と、ピンクのグラデーション。

世のプリンセス趣向の女の子の想像を遙かに超えたプリンセスぶりだ。

だから命名「プリンセス×プリンセス部屋」、略して「プリプリ部屋」だ。

断っておくけれど、某不条理ギャグ漫画家の県民漫画とは関係ない。

アタシは意を決して、「プリプリ部屋」の扉を開けた。

「うっ」

思わずうめき声を上げてしまう。

目が潰れそうな錯覚に、自律神経が磨り減りそうだ。

埃を被っていてもこの威力。

部屋の主が生きていた当時は、一体どれ程の破壊力があつたのか…。

アタシは恐る恐る足を踏み入れる。

今にも花柄クッションの影から、妖精さんが出てきそうな勢いだ。

そんなモノに出会ったら、アタシは間違いなく自分の正気を疑うねっ。

ところがこの部屋。

そんな少女趣味なのに、置いてある本と言えば魔術関連の物ばかり。

おおっと、そこのお嬢さん。

魔術と聞いて「プリプリ部屋」にはピッタリじゃん、などと思うなかれ。

こちらで魔法と言えば、もれなく邪法。「目指せ！呪殺！」をモットーに、常に「生け贄募集中」なドロッド口の黒魔術の事なの

だ。

なもんだから、リボンを可憐にあしらった小箱を開けてみれば、ビッシリと全身余すトコなく針の突き刺さった人形が……。なんてのは、まだ可愛い方なのだ。

この部屋も、やっぱりこんな通路沿いじゃなく、もつと奥に置くべきだと思う。

てか、そもそも地下にあるモノで公にしているものなんかないんだけれど。

アタシは余計なモノには触らない様に気をつけながら、本棚に向かった。

本棚に並んでいるのは、どれも装丁がメルヘンタッチなものばかり。

なのに背表紙には、『正しい人の呪い方』とか『チョー簡単呪殺術』だとか書いてある。

所謂呪殺のHOW TO本ってヤツらしい。

他には『手作り猛毒スイーツ』だとか『余り物呪殺レシピ』とかいう、絶対口にしたくない様な料理の本だったり。

『呪殺の仮面』だとか『呪殺探偵』だとか、小説と思わしきものもあつたりする。

けれど、『呪殺兄弟』だとか『聖・呪殺さん』とかになると、もう意味すら分からない。

断っておくけれど、アタシは呪殺に興味はない。取り敢えず。今のトコロは。

じゃあこんな部屋に何の用事があつて来たのかというと。

魔術つてのは、精霊が必要だ。

精霊を罫に掛け、無理矢理捕まえて使役するらしい。

なもんだから、精霊に関する本も多い。

精霊の生態やら精霊の良く出るスポットだとかの実用書(?)から、果ては精霊の星座別精霊相性占いだとか今日の精霊捕獲運勢だとかのオトメな本までヨリドリミドリつてなもんである。



アタシはその中から精霊の生態に関する何冊か取り出した。パラパラと捲って目次を見る。

精霊とは何か、から始まって、精霊の属性、精霊の性質、精霊界のヒエラルキー、神々との関係性等々、どれも似たり寄ったりの内容だ。

それにしても、いるかどうかも分かんない存在の生態なんて、どうやって調べたんだろう？

てか、全部空想、もしくは妄想じゃねえの？とか思ったりするんだけど。

全部イタイイタイ程本気である。

しかも更にイタイ事に、コレこそがアタシの必要としているモノなのだ。

トホホホだよ、全く。

けれど、今後リズ以外の人間とつき合っていかなけりゃあならぬのなら、これまでうやむやにしていたケロタンの立ち位置について、設定つてのを、ちゃんとしとかなけりゃいけないと思う。

特にあの、無駄にイケメンな宰相連中。

略してムダメン達は、ちょっとやそつとの設定じゃあ納得しないだろう。

だから、ケロタンの「奇跡」への動きがあるのなら 受けるか受けないかは別にして、それに乗っかるうと思うのだ。

ケロタンは精霊さんの関係者、いや、関係物か。

その方が、神教からのフォローも望めそうだし。

多分。

と言うわけで、先ずは精霊についてちゃんと勉強しようと思ったわけだ。

いるかどうかもわかんない存在について「ちゃんと勉強」つても、妙な話だけど。

アタシは数ある精霊関連の本の中から、二冊ばかり選り出した。

皇国関連と精霊関連の本を二冊づつ、合計四冊。

どれも分厚くてデカいので、結構な重さになるけれど、ケロタンの腕力なら問題ない。

ひよっとしたら、肩の辺りが加重でちょっとほつれちゃったりはするかもだけど。

アタシは水時計をもう一度確認した。

水は三分の一程落ちている。

荷物があって走れないけど、今から戻れば十分間に合うだろう。

アタシはそう考えて、本を積み上げ、ヨッコイシヨと持ち上げる。足下が全く見えないけれど、足場が悪いワケじゃないので特に問題はない。

漸く階段を登り切り、一旦本を置いてレバーを回す。

こちら側のレバーは、特に仕掛けもなく、普通に回せば扉が開くようになっている。

若干広めに開けたそこに、体を滑り込ませれば。

水時計の水は、まだ三分の一は残ってる。

うん、楽勝楽勝。

これなら四号には叱られまい。

夜明けまでまだ時間があるから、それまで持って帰った本を読もう。

なんて思った矢先。

ドンッ！！

突き上げるような衝撃があった。

アタシは本ごとつんのめる様に倒れ込んだ。

バラバラバラツと靴が降ってきて、ゆらゆらと部屋中が揺れた。

地震！？

途端に、ベッドで眠っているリズの姿が脳裏を過ぎる。

「リズ！！」

そう叫んだ時には、アタシの意識は二号から離されていた。

## 当作品の一時休止のお知らせ

当作品の一时的な連載休止をお知らせいたします。

昨日午後発生した東北地方太平洋沖地震の被害状況が続々とニュースでもたらされています。

現在も余震が続き、被害は更に拡大しているといった状況です。東北に住む友人は現在いませんが、関東に住む友人には連絡を取り幸い無事を確認することができました。現地の方或いは現地にご家族やお知り合いのおられる方はさぞかし心痛の事とお察しいたします。

また、痛ましい事に、先月二二日に起こったニュージーランド地震でも、お亡くなりになられた中に日本人の方々もおられるという事が順次判明してきました。

ところで、全くの偶然ですが、現在当作品は地震の場面に差し掛かっております。

当作品自体はコメディイですが、地震被害について何ら揶揄したり嘲弄したりするものではなく、またこの場面はストーリー上重要かつ欠く事のできないものとなっております。

従いまして、以下の様な熟考の結果、その場面を外す事はせず、一时的に連載を休止する事とさせていただきます。

私自身は関西圏の人間で、阪神淡路大震災の記憶は未だに強く残っております。被災こそしませんが、被災した親戚や身内を亡くした友人もおります。

阪神淡路大震災の際の私自身や周囲の状況及び心情と照らし合わせ、東北地方太平洋沖地震及びニュージーランド地震で被災された方、或いは亡くなられた方やそのご遺族方のお心を鑑みるに、拙作を楽しみにご足労いただいた方々には大変申し訳ありませんが、状況が落ち着くまで一时的に当作品の連載を休止するべきではないか

という考えに至った次第です。

連載再開は今のところ未定とさせていただきますが、状況が許せば4月にでも再開したいと思います。

休止は、私の自己満足に過ぎない行為かもしれませんが、どうぞ皆様におかれましてはご理解の程よろしくお願い致します。

最後になりましたが、被災された方々のご無事と亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

2011.03.12 Romewo

第四十話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です（前書き）

東日本大震災でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、被災されて今尚困難な状況におかれている方々のご無事とご健康をお祈り申し上げます。また行方不明の方々が、一刻でも早くご家族の元に戻られますように。

#### 第四十話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です

瞳孔が開いた様に光が拡散して、視界からは色が薄れ輪郭がぼやけていく。

全てが曖昧になる、薄暗がりの薄暮の世界。

たそかれは。

かはたれか。

落下してるのかも上昇してるのかも判然としない浮遊感が、アタシの輪郭を希薄にし、「今」と「ここ」が曖昧になる。

アタシからアタシがゆっくりと滲み出す。

滲み出た「アタシ」が、「今」でも「ここ」でもない何処かへと漂ってゆく。

「スミ」

呼び声に振り返ると、恵美がいた。

「退院手続き終わった？」

「うん」

「じゃあ、葉兄が来てるから、帰ろうぜ」

恵美に付き添って貰って、昼前に病院を出た。

送ってくれるのは瞬市さんじゃなく、弟の葉爾さんらしい。

葉爾さんは、IT会社に勤めてて、プログラマーをやってる。

プログラマーという何となくオタク臭いイメージがあるけれど、葉爾さんにはオタク臭さは欠片もない。但し、甚だしく胡散臭い。

癖毛だという髪を明るい茶色に染めて、何時もちよつとどうかと思う柄のシャツを着て、何時もそれもどうかと思う色のメガネを掛けている。

「さ、乗って」

と紳士的にドアを開けて貰って乗り込んだ黒のゴルフは、特注だというサイケデリックなシートの子で殆ど異次元と化していた。ディーラーの人が見たら、多分、いや確実に泣くだろう。

車が動き出すと、恵美が言った。

「あのさあ、来週辺り、バイトしない？」

「バイト？」

「うん」

「何故にいきなり？」

「祖父さんがさあ、去年の年末死んだじゃん？」

「ああ」

亡くなったのは、確か元華族だとか言う実の父方の祖父に当たる人だった。

何でも大学の教授で、言語学者だったとか。

「祖母さんがさ、祖父さんの蔵書をどっかに寄付するらしいんだけど。それを整理して欲しいって言ってさ。んで、相当な量があるし、一人じゃ無理だから、友達に手伝って貰って良いかって言ったら良いつて言ってたから」

「なるほど。何日くらい」

「とりあえず3日？ ざっと仕分けして、後は専門家に見てもらおうって話だから。衣食住は祖母さんが保証するってさ」

「分かった。まあ、こっちにしても臨時収入は助かるからね」

バイトは時々単発でしているだけだから、今回みたいに臨時出費があつた時のバイトの話は助かる。

高校生の時、ファミレスでバイトをしたら、何処からか聞きつけてきた親戚に叔母さんが責められた。

子供を働かせるなんて、不自由させてるんじゃないの？ やっぱり血の繋がりが無いから…。

それ以来、長期的なバイトはしない。

叔母さんが責められるくらいなら、学生の間は奨学金貰って、社会人になってから借金返す方がほっぽどマシだと思つたからだ。

大体、学費も光熱費も全部叔母さん持ちだし、家賃も要らない。

本は図書館で借りて、教科書は中古で安く買う。服はファストファッションで、食事は学食で摂ればいい。



贅沢しないで時々遊ぶ程度なら、それで十分やってけるのだ。

「そういうやあ、恵美のお祖母さん家って、どんなトコ？」

この前チラツと聞いた事がある様な気もするけれど。

「すげえ田舎。山と田んぼと畑ばかりで、後はカエルだらけ」

恵美の言い方だと、生き物はカエルしかいないみたいに聞こえるけれど、勿論そんな事はないだろう。ちゃんと人間だっているはずだ。

「何？ スミちゃん、カエル好きなの？」

葉爾さんがアタシ達の会話に割り込んできた。どうやらカエルに反応したらしい。

「嫌いじゃないですが、特に好きでもありません」

「でもスミちゃん、カエルに似てるよね？」

「はい？」

「目とかさ」

「は??？」

カエルに似ているというのは、どういう事だろう。

しかも「目」って、何でそんなピンポイントなんだ??

葉爾さんにどう訊ねるべきか思案していると、恵美がニヤニヤしながら言った。

「そりゃそうだよ。だって、スミはカエルの『ご主人さま』だからね」

「恵美！」

「え？ 何何？ ソレ？ ご主人さまって??」

あからさまに好奇心を示してくる葉爾さんに、アタシは撥ね付ける様に言った。

「何でもないですっ」

この人の好奇心は放っておくと際限がない。

けれどきつちりシャットアウトしとけば、それ以上は突っ込んでこない。

そこら辺は、どんなに目が痛くなる様な服装をしていても、ちゃ

んと「大人」の人なのだ。

「それじゃあさ、スミちゃん、知ってる？」

赤信号で止まると、葉爾さんが笑顔で振り返りながら言った。

「カエルの瞳孔ってさ、縦だったり横だったり三角だったりするんだよね。」

その葉爾さんの笑顔が、炭酸飲料の細かい泡で塗りつぶされる様に急速に滲んでいく。

泡はアタシの細胞膜までも溶かして、そこからまたアタシが零れていく。

「今」が「何時」なのか、「ここ」が「何処」なのか、時間と空間の感覚が薄れていく。

不意にまた視界に色が戻って、いつの間にかアタシはスツールに座ってた。

淡い黄色のカーテンが視界の端で靡いて、柔らかい風が頬を撫でていく。

そこは病室で、全体的に柔らかい色合いでコーディネートされた個室だった。

ベッドには真っ白い髪をしたやせた老女が、枕を背もたれ代わりに座ってた。

桜の花びらが一片、アタシの手の甲に落ちて、また風に掠われていった。

「お祖母ちゃん」

アタシは彼女に呼びかけた。

お祖母ちゃんとは呼んだが、実際には曾祖母に当たる人だ。

父は祖父母とは折り合いが悪く、曾祖母に懐いていたらしい。

父の兄と言う人が言うには、大らかな父と生真面目な祖父母とは、考え方があまりに違った、という事らしい。

「良く来てくれたわね、澄香ちゃん。今日はね、とても気分がいいのよ。」

曾祖母は、アタシの顔をみて嬉しそうに笑って言った。

「敦也は、お祖父ちゃんの影響で落語が好きでねえ」

お祖父ちゃんというのは、正確には曾祖父の事だ。

「ねえ、澄香、覚えているかしら？ あなたがまだとっても小さかった頃、お父さんと落語を演やってくれたのよ。時そば、藪入り、饅頭恐い、寿限無…」

アタシ自身は演った覚えはなかったけれど、父親が演った時に側にいた様には思う。

父親はロボットアニメオタクの落語マニアで、ドライブのBGMはアニソンと落語と決まっていた。

但しアニメはリアルタイムのものじゃなく、学校で歌ったら誰も知らないという悲劇に見舞われた。

その日、彼女は沢山喋った。

曾祖母が亡くなったのはその半月後で、アタシは小学校六年生になっていた。

「澄香ちゃん。今度は　と一緒に来てね」

末期癌で、ふさふさの白髪は鬘だったのだと、後になって知った。曾祖母の何かを振り切ったような晴れやかな笑顔が、泡の中へと消えて行く。

幾つもの断片的な記憶が、現れては消え、消えてはまた別の記憶が現れる。

記憶の欠片が万華鏡の様にクルクルと様相を変えていく。

「お父さん、もうアニソンはいいよ」。お腹いっぱい、口からアニソンが出てきそう」

「澄香は凄いな〜！　もうそんな特技を持っているのか！！」  
「持ってねえわっ！！」

「ツッコミもますます鋭くなって。けどお父さん、できたら澄香にはお笑いじゃなくて落語家になって欲しいな〜」

「どっちもならねえし！」

「しかしその才能を潰すのは惜しい気も…」

「アナタ、何時までも頭の悪い事を言っていないの」

お父さんは子供みたいにはしゃいでて、お母さんは口調は冷めたけど機嫌良かった。

アタシはお父さんにバツカじゃないのと、心の中でも外でもツッコみをいれつつ、楽しんでいた。

「冷たいなあ、お母さんは。分かった、愛しい家族のために、今度はラップにでもするよ！」

「そんな事言つて。アニソンラップじゃないの？」

「いんや。落語ラップ」

「いらんわ！」

風景が音もなく、ガラスが割れる様に飛び散った。

破片が皮膚に突き刺さって、拡散したアタシが痛みで急速に収束する。

アタシが再構成されて、アタシはアタシを取り戻す。

ふと気がつくと、暗闇の中で漂っていた。

時間の感覚は尚も曖昧で、一体何時から漂っていたのか、或いはもうずっとこの状態だったのかもしれないと、まるで他人事の様にぼんやりと思う。

自分の手すら見えない闇の中、このまま漂い続けるのに何ら支障はない様にも思われた。

けれど遠くの方に、鈍く輝く光を見つけた。

それは春の滲んだ月にも似て、淡く幽かそけく今にも消え入りそうな程頼りなかった。

何故だか懐かしい様な気がして、誘蛾灯に誘われる羽虫の如く光に向かって闇を掻く。

早くあの光に触れたいと思うのに、闇が全身に纏わり付いて中々思う様に進めない。

漸く辿り着いてみると、それは膜に包まれた何かだった。どうやら膜が発光しているらしい。

膜には弾力性があるのか表面が小刻みに波打っている。

膜の中は何かの液体が満ちているらしく、その中で海草の様に何

かが揺れていた。

目を凝らしてみると、それは紫色をしていた。

馴染み深いその色の正体を見定めようと、用心深く膜に顔を近づけた時。

アタシの気配を察したかの様に、それは振り返った。

金の瞳と視線が重なる。

アディーリアー!!

アタシを視界に捉えたアディーリアが、微笑みながら手を伸ばす。  
アタシも釣られた様に、手を伸ばす。

アタシの指が柔らかい膜に触れて、互いの指が重なる寸前。  
突然、暴力的としか言い様のない力で後ろへ引っ張られた。

見る見る内に、膜が、アデーリアが遠のいていく。

離されまいと藻掻くアタシの頭の中に、誰かの記憶が浸食する。

「おめでとうございます。ご懐妊です」

ベッドの脇に立つ神官が厳かにそう言った。

彼女は私の教育係でもあり、主治医でもあった。

彼女の後ろで、乳母のノリーシェを初めとする女官や侍女達が、感極まった様に打ち震えていた。中にはまだ若いコンスタンスの姿もあった。

彼女たちは「おめでとうございます」と口々に言う。

愛する人との子供。身の内に宿ったこの命が、愛おしい。

この子は私の家族。ずっと欲しかった家族。

何より愛おしい。

ああでも、もし生まれ子供が だとしたら！

何故！？

いいえ、そんなはずはない。

愛おしいのよ！ 何よりも！

なのに何故！

同じくらい、厭わしい！！

何故そんな目で見るの！？ 何もかも上手くいくとでも言い

たげな目で！！

私は道具じゃないわ！ ただ愛しただけよ！

誰か助けて！ 心が引き裂かれそうよ！！

産みの苦しみが、強烈に脳天を突き抜ける。

全身が痙攣して、体中が引き裂かれそうな痛みに悲鳴を上げる。

誰かが叫んでいる。獣の様に。咆吼している。嘆く様に。呪う様に。

ああ、貴女も、な哭ないているのね。愛しい子。

人が生まれてきて最初に哭くのは、生きる事の辛さをもう知っているからね。

愛しているのよ。愛しい子。誰よりも何よりも、世界よりも、

私自身よりも。

嵐の様な感情がアタシに入って、過ぎ去っていく。  
膜の中のアディーリアの姿が、脳裏に浮かぶ。

アディーリアは、お腹を守る様に手を添えていた。  
そうか。

アディーリアは、腹に子供を宿しているのだ。

#### 第四十話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です（後書き）

連載再開一話目です。あんまり明るくないですが、拙作を楽しんでいただくことで、少しでも明るい気分になっていただければ幸いです。

今後地震に関する描写がある場合は、前書きに注意文を書かせていただく事といたします。

また、余りネタバレするのはどうかと思うのですが、時期が時期なだけに敢えてここで予告しておきたいと思います。

作中の地震で、死者はでません。

元々その予定ではあったんですが（基本コメディですから割りに最近暗い？）。今後そうかなと思われる場面が散見されますので…。

その点については、どうぞ安心して読んでいただけたと思います。

では、これからも拙作をよろしくお願い申し上げますm（）（）m。



第四一話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その2（前書き）

東日本大震災から明日で丁度一ヶ月です。

被害の全容は未だ見えず、まだまだ避難生活を強いられている方々も沢山いらっしゃいます。

復興への道のりは緒々に就いたばかりですが、皆さん頑張りまじょう！

第四一話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その2

ふと気がつくと、アタシは仰向けになって横たわっていた。ぽっかりと浮かんだ赤い月が、アタシを所在なさげに見下ろしていた。

「アディー」

アタシの吐息の様な呟きが、薄暗い空間にトロリと溶けて消えてゆく。

アディーリアに届かなかった手を月に向かって伸ばしてみれば、指は空しく宙を掴んだだけだった。

さっきのは何だったんだろう。

万華鏡の様に次々と変わる風景。アタシの記憶と、アタシのじゃない記憶。

それから、膜の中の、子供を宿しているアディーリア。

あれは「アディーリアであってアディーリアでないアディーリア」だ。

大きく膨れたお腹に、手を添えていたアディーリア。

時間がない。

この前しきりにそう言っていたのは、子供が生まれるって事じゃないだろうか？

何となくだけど、そんな気がした。

でも。

誰が生まれるんだ？？

普通に考えれば「アディーリアの子供」だけけれど。

この前真つ平らだった腹が、さっきはもう生まれそうな程大きくなっていた。

どう考えても普通じゃない。

犬猫だって、生まれるのに二ヶ月はかかる。

アタシが「昏睡」から目覚めたのが、一昨日の夕方だから。

三日？

カエルだって孵化するのに、もうちょっと掛かるだろうに。

無性に誰かを問い詰めたいけど、誰を問い詰めれば良いのか分からない。

アディーリアであってアディーリアではないアディーリアか？

そりゃそうだ。「母親」なんだから、誰を産むのかくらいは分かっているだろう。

でもどうやってアディーリアであってアディーリアでないアディーリアを呼びだしやいいんだ？

そついやこの前「寿限無」を聞いて目が覚めたとかって言ったな。

アディーリアを呼び出すために、「寿限無」唱えろってか？？

けれど、したらまた昏睡騒ぎになるかもしれない。

昨日退院したばかりで、それは流石に避けたい事態だ。

あの時ばかりは、目覚ましにも、恵美の「殺気」にも反応しなかった。

じゃあ一体どうやって目覚めたのかって話になるけど。

恵美が言う様にアディーリアが昏睡の原因なら、まあそれはそれで説明はつく。

恵美曰く。

死者と交信してんだから、スミも殆ど死んでたつてことじゃね？  
ということらしい。

そう言われた時は、そうかも知れないとも思ったけど。  
よく考えたら、この前会ったアデーリアは「死者」じゃない。  
記憶だ。

アデーリアという女性の記憶　特に二十歳前の　を収めた  
媒体みたいなもんだ。

「二号行方不明事件」からこっち、アタシはアタシの周りで起こ  
っている事を見定めようとしてきた。

でも、ひよつとして、本当は。

見定めるべきは、アタシの周囲に起きている事なんかじゃなくて、  
アタシ自身に起きている事なんじゃないだろうか。

でも一体、アタシに何が起きてるんだろう???

そこまで考えて、アタシはゆっくりと体を起こした。

少し体が気怠いけれど、確実に気のせいだ。

なんせここには「身体」はない。

ため息を一つ吐きだして、辺りを見回せば。

何時もは頼みもしないのにいる極彩色のカエル共は、今回に限っ  
て一匹たりとも見えなかった。

どんなに目を凝らしても、アタシ以外の存在はなく、アタシの影  
すらもない。

天と地の境すらない茫洋とした空間で、ただ赤い月だけが何かの  
目印のようにぽっかりと浮かんでいる。

アタシは自分がどうしようもないくらい寄りかない存在に思えて、  
酷く心細くなった。

月を見上げていると、九年前の事を思い出す。

あの時も、こんな風に月を眺めていたなあ。

………んんんんん?

月???

月って、この手の空間で何時も出てたっけ???

いや、出てなかった。

カエルはいたけど、月はなかった。  
月を見たのは、九年前以来だ。

あの時の月は、青かったけど。

今の月は赤くて、何だかイヤな感じだ。

ひよっとしてアタシ、またまたヤバい状況にあるんじゃない？？

マジで一体何が起こってんの！？

アタシはサ　　ツと血の気が引いていくのを感じた。

うん、勿論それも気のせいだけど。

ああ、もう、頭の中がグダグダだ。

くそう。

無性に癒されたい。リズに会いたい。

そう思っつてハツとなる。

あああああ！！！！

いかん！！　こんな所で足止め食らってる場合じゃねえじゃん！！

地震が起きたんだよ！

リズが危険だ！！

早くリズの元に戻らなくっちゃ！

棚の靴が落ちてきたから、震度五はあつただろう。

イスマイルは地震が殆どない国だ。

建築技術がどれくらい発達してんのかは分かんないけど、耐震工

法なんてのがあるとも思えない。

日本でなら震度五で倒壊する建物はないだろうけど、外国の地震

の例を見ると、どうやってても安心できそうにない。

当然リズは地震なんか遭った事もないだろう。

怯えてるかも！

泣いているかも！

怪我してるかもっ！？

あ~~~~~~~~っ、もう！

取り敢えず、カエルだよっ。

カエル取っ捕まえて、リズの所に戻ろうっ！

「カエル！ カエル！？」

大声で呼んでみるけど、出てこない。

チツ。

何時もは無駄にいるくせに。

アタシは立ち上がると、パンツと両頬を叩いて気合いを入れる。

少しだけ冷静になったアタシは、考えた。

アタシはこの後、四号に入るはずだ。てか、入る。

四号のアタシに会ったんだから、間違いない。

つまりそれは、地震の前に戻れるって事だ。

そうなれば、勿論リズに地震の事を知らせられるし、避難させることだってできる。

あの頑丈そうなベッドの下に潜れば。

いや待て、レゼル宮は石造りだけど、石造りは耐震性に弱い。

日本に石造建築が定着しなかったのは、単純に建築に適した石材が手に入りにくかったって事もあるだろうけど、耐震性にも原因があったに違いない。地震大国日本じゃあ、耐震性の低さは致命的だ。てことは、中途半端にベッドの下に隠れるよりも、宮殿から出た方がいいかもしれない。

幸いにして、後宮にはバカみたいに広い庭園がある。まあ、正妃同士が鉢合わせしないようにしてあるんだろうけど、この際それを利用しよう。

勿論、侍女さん達も一緒に避難する。

それにはセルリアンナさんの協力が必要だけど、その辺は四号で説得するしかない。

でも何て言えば、信じてくれる？

地震の滅多に起こらない国で、大きな地震が起こるとかって言っても、先ず人は信じない。明日も今日と変わらない日常が来ると、無意識的にかつ殆どパラノイアに近い頑固さで、そう信じているからだ。

そんなものは、ある日突然ビツクリする程あっけなくガラリと崩れ去ってしまうのに……………。

考えるべき事は山の様にある。

アディーリアであってアディーリアでないアディーリアの事も、そのお腹の中の子供の事も、月が出てる事も。

いきなりカエル間転送し始めた事、夜明けでもないのにカエルから離脱した理由。

それから「寿限無」の謎、昏睡の原因。

リズを神人にしない方法、リズがリズの望む様に生きられる方法。おまけに、無駄にイケメンな連中への報復方法。

うわっ、マジで考える事多いな。

でも今はそれら全部を置いて、カエルを見つける事、それから地震対策。この二つに絞り込もう。

でなければ、アタシの大してない容量の脳みそがパンクしてしまう。

アタシは取り敢えず歩き出した。  
闇雲に。

だって特に目印があるわけじゃなし、どっちに行けばいいのかも分からない。

けれども、四号に入る事は確定している。

だったら今はただ、カエルに行き当たる事を願うだけだ。

願え！

アタシー！

ここはアタシの夢だ。

アタシの思いが、この空間に影響する。！

と思う、多分。

テクテクテク。

テクテクテク。

テクテクテク。

「……………」

たまに方向変えたりして。

また歩く。

テクテクテク。

テクテクテク。

「……………」

また方向変えて。

テクテクテク。

テクテクテク。

テクテクテク。

「…………… 実際問題、地震の規模ってどれくらいなんだろう」

イスマイルは高山地帯の国だ。

高山と地震の組み合わせで思い浮かぶのは、世界の屋根ヒマラヤくらいだ。

アタシは頑張つて、般教で取った地学の授業を思い出す。

ヒマラヤ山脈は、インド亜大陸が乗ってるプレートとユーラシア大陸が乗ってるプレートとが衝突して出来たものだ。つまりあの地域での地震は大抵、二つのプレートのせめぎ合いが原因だ。

今でも毎年数センチ高くなってちゆうんだから、プレート間にはギシギシなんだろう

だからまあ大抵、地震の規模がデカイ。

プレート間地震の頻度は数十年から数百年だったはず。

けれどイスマイルには地震が殆どないから、原因がプレートとは考えにくい。

少なくとも、リズが習っている「イスマイル国史」には地震の事なんて一つも書いてない。幾ら何でも、デカイのがありゃ流石に歴史で習うだろう。

てことは断層型地震なのかもしれない。

断層型地震は、断層によって周期が数百年から数十万年とまちまちだ。

つまり周期が長いものと、「この前起きた地震」ってのが先史



の更に前って事だって十分あり得るワケだ。

アタシは歩いた。

頭の中では目まぐるしく考えを巡らせながら、黙々と。

テクテクテク…。

テクテクテク…。

テクテクテク…。

「ダア！！ やってられっか！！ ウオラア！ 責任者、出てこい  
やああ！！」

アタシ月に向かって拳を突き上げ怒鳴り散らした。

焦る気持ち、アタシの口を三割増しに悪くする。

「舐めてんじゃねえぞ！ おんどりゃあ！！ 鼻の穴に割り箸突っ込んで、奥歯ガタガタいわしたっぞっつっ！！」

月の鼻の穴が何処にあるのかは知らないけれど、気合いだけは十分だった。

「あ！ 流れ星！！」

不意に星が流れたのを見つけて、アタシは慌てて願いを言った。

「リズリズリズ！！」

本来ならば「リズが無事でありますように」と言いたいところだけれど、流れ星はそんなに悠長に待ってはくれないから仕方がない。取り敢えず三回言う事には成功した。

一体どんな願いが星に届いたのかは謎だけれど、心意気だけは伝わったに違いない。

多分。

アタシは星の流れた先へと目を懲らす。

ん？

「星…？」

この手の空間で星が流れる事なんて…。

あの時以来だ。

アディーリアと初めて会った、あの時。

月と。

星と。

後は死者の魂が現れれば完璧な再現だ。

いや待て。

それはない。

ないないないっ。ないないないないないっ。

勘弁してっ。

もうこれ以上誰かの願いのために動く余裕はないしっ。

イヤな予感がヒシヒシと迫ってくる。

それを追い払おうと躍起になって考えた。

冷静になれ、アタシ。

そうだ。

今のアタシには、誰かと契約しなくちゃならない理由がないっ。

そう。

だから。

カエル以外の誰かにぶち当たったら、速攻逃げよう！

全速力で。

よしっ。

アタシは決意を込めて固く拳を握りしめた。

その時だった。

ボンッ。

てな効果音でも聞こえそうな勢いで、二つの人影が現れたのは。

先ず目に入ったのは、真っ直ぐな金の髪と少し癖のある茶髪。そ

れから黒い近衛の制服。

そいつらはアタシを見つけた途端ギョツとして、その次の瞬間に

は背中を向けて走り去っていた。

ダダダダダダダダ

！！

物凄い速さで小さくなっていく背中に、アタシは怒声を浴びせかけた。

「うおい！ ゴラア！ テメエら待ちやがれ！！」

逃たら追っ。

それって、人類普遍の力学的法則だと思うのだ。

第四二話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その3 (前書き)

ニュースで立ち上がろうとしている被災者の方々の姿に、勇気づけられます。そこに希望が見えます。日本の力を信じています。てか、信じなきゃいけないんだと思います。

## 第四二話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その3

アタシは走った。

全速力で。

ヤツらの背中を追いかけた。

「このクソガキヤア！ テメエら、逃げるってどうゆう了見だっ！  
」

そりゃ、キツチリ制服着込んでるアンタらと違って、アタシは所詮パジャマ兼用の部屋着だよ？

ちよつとゴムが伸びてて、ちよつと毛玉が浮いてて、胸元にワンポイントでハミガキコがくつついてるかもしれないけどね。

このスカル柄のパーカーとショートパンツは、アタシのお気に入りなんだよ？

それを何？

まるで。

見ではいけないモノでも見てしまった！

みたいな勢いで逃げ出すって！？

二号を見ても逃げるところか追いかけてきたくせにいいいいいいいいいい！！

シユタタタタタタタッ！

多分、この時アタシは、百メートル十秒以下で走ってたと思う。

夢の中ってスバラシイッ。

息切れしないし、乳酸出ないし。

ドーピングなしで人類最速だっ。

アタシは自分でもちよつとどうかと思うくらいの速さで、ヤツらの背中にグングンと迫ってく。

目標補足。

ターゲットは、え〜とえ〜と、聞いたけど名前忘れた！

もういいかつ、直情金髪とジャイアンでっ。

とにかく。

ターゲット・ロックオン！

シュータタタタタタッ！

「うわっ」

アタシの気配を察したジャイアンが、肩越しに振り返って目をひんむいた。

「振り返るな！ 追いつかれるぞ！！」

直情金髪がそう叫んで更に速度を上げていく。

ジャイアンもそれに倣って、少しヤツらとの距離が開く。

ムダメンでも軍人。キツチリと鍛えてあるってか？

けどさ。

連中は、ここがどういう所なのか知らない。

まあ、アタシだって知ってるわけじゃないけどさ。

でも九年間肉体のないところで活動してきたアタシとじゃあ、経験値が違う。

連中は、肉体の感覚を捨てられない。

だから疲れる。苦しくなる。手足の動きが乱れてくる。

「ふへへへへへ」

「わ、笑ってやがるっ」

「無視しろっ！！」

無視だとうっ？

無視つてのはなあ、最低な行為なんだぞ？

そいつの人間性を丸ごと否定するって事なんだぞ？？

「とうっ！！ てんちゅう~~~~っ！！」

アタシは跳んだ。

ドゴッ！！

アタシの華麗なドロップキックが、直情金髪の背中に炸裂する。

「ぐがっ！！」

直情金髪は派手に倒れ、ゴロンゴロンと転げて行った。

おおお！ 慣性の法則のままに何処までも転げて行きそっだ。

「オール！」

転げて行く直情金髪を、ジャイアンが慌てて止めようとする。その背中に向かって、アタシは駆け寄りジャンプした。

空中でアタシの身体がドリルの様に回転する。

ドガッ！

「うあっ！！」

ああ！ 身体がないってホント凄いつ。

スピニングアタックができるとはっ！

お父さん！ あなたの娘は今、仮面ライダーになりましたっ！

変身ポーズはしないけどっ。

ていうか、ジャイアンの身体も、ゴロンゴロン転がっていくんですけど。

ここの地面、摩擦係数が小さいのかね？

二人の身体はゴロンゴロン転がってゆき、アタシはそれを為す術もなく見送ったのであった。

てな事もなく、二人の身体はぶつかって無事（？）回転は止まった。

目が回ったのか、ぶつかった時の打ち所が悪かったのか、二人は地面に伸びたままピクリとも動かない。

え〜と。

アタシはふと我に返って考えた。

アタシ、なんでコイツら追いかけてたんだっけ？

む〜ん、逃げたから追いかけただけであって、特に理由はないな。うん。

てか寧ろ追いかけてなかった方がよかつたんじゃないだろうか？

今更になってそう思う。

だつてさ〜、流れる的に言つてさ〜。

アタシは空に浮かぶ赤い月を見上げた。

星が一筋、そしてまた一筋、流れた。

視線を地上に戻してみると、ムダメン二人はまだ伸びたままだ。

何でアタシ見て逃げたのか問い質したいトコだけど、コイツらと契約なんてハメになるのはお断りだ。

だからさ。

ここはそつと立ち去るべきだとは思うんだよね。

コイツらが伸びてる間に。

でもさ。

コイツらつてさ。

もしかして、もしかすると、もしかしなくても。

もう、死んじゃってると思うんだよね。

イロイロ思い通りに行かなくてもさ、やっぱり、ここはアタシの夢なんだよ。

んでさ、他人の夢に入り込んじゃうなんてさ、死んだ人間じゃなきゃできない芸当だと思おうワケよ。

だからさ。

願い事とか聞く耳なんかサラッサラのマッサラサラにないんだけど。

話聞くくらいなら、とかさ。

別にコイツらの事とか、ホントどうでもいいんだけど。

好きじゃないし、寧ろ敵だし。

だからって、死んでくれてラッキーだとは思わない。

だってさ、死んじゃったらお終いだもん。

全部お終い。

ぜんぶ、ぜんぶ、なくなっちゃう。

なもんだから、ふと湧き上がったっちゃうワケよ。

ホトケゴコロでヤツがさ。

アタシだって鬼じゃないんだし。

まあ、流れてイロイロ吐いて貰うかもしれないけどね。

でもさ、何て言うの？ イロイロ吐き出して、スッキリした方が、成仏もしやすいと思うんだよね。

人よ、こんなアタシを人非人と呼ぶなかれ。人には誰しも、絶対



に譲れないものつてのがあるモンだ。

アタシは、用心深く近づいた。

でも近づきすぎるともヤバそうなので、二メートルくらいの所で立ち止まる。

「う…、う…」

「くっ…」

うん、呻いてるな。

そんな二人に、とりあえず訊いてみた。

「何で、逃げたわけ？」

うん。やっぱり、これを訊いとかなきや、話が進めらんないよね。アタシの声に二人はピクリと身じろぎするけど、何も答えない。身体が反応したから、聞こえてないはずはない。

「ね、何で逃げたのかって訊いてんだけど」

「……………」

やっぱり何も言わない。

アタシの方に視線を向けようとせせず、全身で拒絶してるって感じだ。

いい年した大人が、何だそりゃ。

反抗期か？

思春期か？

更年期障害か??

「あのさ。人様に会ったら、先ず挨拶でしょ？ 基本中の基本だよな？ 習わなかったわけ？ それなのに逃げ出すって、何様？ おバカ様？」

わざとバカにした口調で言ってみる。

普通の感性を持つ人間なら、先ず間違いなく怒るだろう。

何か言い返して来るのに違いない。

と思っただのに。

ヤツらはピクピクと顔を引きつらせながら、あくまでも無言だ。どうやら無視を決め込んでいるらしい。

おつやくん。二号や四号への反応の良さは何処へやった？

「せめて名前くらいさ〜」

と言ってみたものの、よく考えたら覚えられないんだった。

「あ、やっぱり名前はいいわ。ど〜でもいいし」

なんて言いつつ、チラリと横目で見てみるけれど。

「……………」

やっぱり、無反応。

全身に緊張を漲らせ、めっちゃめっちゃアタシの事を意識しているくせに。

無視。

だんまり。

何だ？ この頑なさ。

駄々っ子か??

そんな二人を眺めながら、思索する。

ところで、コイツら、何で死んじやっただ？

この前会ったときはピンピンしてたのに。

いやまあ、最後は気絶してたけど。

持病か？ 持病のシャクか？ シャクが死因か？

なわけねえか。

やっぱり、アレだろうな。

地震。

コイツら近衛だから、お城に住んでると思うんだよね。

お城でさ〜、人死にがあったとなりやさ〜、それって相当な被害

じゃね？

幾ら石造が地震に弱いたって、お城だよ？ それなりに頑丈に作

ってると思うんだよね。

ひよつとして、思ってる以上に地震の規模がデカいとか？

アタシは勝手に震度五くらいと思ってたけど、本当は六とか七な

のかもしれない。

アタシはゾツとなって身震いした。

こりゃいかんっ、ますますリズを避難させなきゃ！  
ううん、リズだけじゃない。

レゼル宮のみんなも、後宮にも、お城にも、町にも……。  
アタシは別に博愛主義で言ってるわけじゃない。博愛主義とかチヤンチャラ可笑しくって、蹴っ飛ばして簀巻きにして五トンの錘付けて海に投げ落としてもいいくらいだ。

でも、リズは違う。

「余計な」と言いたくなる程の質の高い教育のお陰で、王女としての責任感も聖者としての使命感も、着実に育ってる。

そんなリズが、もし自分一人だけが無事なんて事になったら、心に大きな傷が残るだろう。

あのアディーリアだって。

王女でありながら、国を捨てて生き延びた事に、深い罪悪感を持っていた。

アディーリアは幼くてどうしようもない事だったのに、それでもその事實は、生涯彼女を苛み続けた。

リズはまだ十二だけど、もう十二だ。

アディーリアの時よりも、更に深い傷となるだろう。  
でもさ。

現実的に考えて、全ての人を救うなんて無理な話だ。

第一、どうやって、地震の事を知らせる？

知らせたところで、信じて貰えないだろう。

じゃあ、どうするんだって話だけど。

そんなの分かるワケがない。

「あゝ、もうっ、イライラするっ」

ままならない何もかもに。

アタシが腹立ち紛れにそう叫ぶと、直情金髪とジャイアンの身体がビクリと跳ねた。

ひよっとして怯えてる？

このアタシに？

まさか。

理由がない。

動く布製品にだって果敢にいちやもん付けてきた二人だよ？

アタシは、未だにこちらを一生懸命無視しようとしている二人を改めて見る。

コイツら、ムダメン二人。

地震の時の事、覚えているだろうか？

覚えてるんだとしたら、詳しい状況が聞き出せるかも。

「あのさ、ちよつとつかぬ事を聞くけどさ」

けれど内容が内容だから、どうやって聞き出すかは考えどころだ。  
「アタシとしてもさ、訊き難いんだけど。うゝん、何て言えばいいのかな」

直接的な言葉は憚られるし、かといって遠回しになり過ぎて伝わらないんじゃない意味がない。

「えゝゝゝと」

死因？ 死因を訊けばいいのか？ けど、「死因」の遠回しな言い方って、何???

この時アタシは、二人に集中しすぎていた。

だから背後に別の影が近づいてきている事に気がつかなかった。

不意に背後に気配を感じたときには。

「あのさ、アンタ達のしいん、んん？」

既に、手遅れだった。

背後から回された長い腕が、アタシを固く拘束する。

「捕まえた」

頭上から降り注いだ美低音に、ゾゾゾゾッと怖気が走る。

一瞬硬直したアタシの身体はクルリと向きを変えられて、濃紺色のベールの中に閉じ込められた。

ハッと我に返った時には、やたらと綺麗な男の顔がドアップで迫っていた。

奇跡的な素早さで、ピタンッと相手のおでこ顎に手を掛ける。

「ぎゃあ~~~~~!!! 近い近いっ!!!」

両腕を突っぱねて必死で引き離そうとするけれど、背中に腕を回されたままでは限界があった。

その腕を引っぺがしたいけれど、肝心の両手は今戦いの真っ最中だ。

その間も、男の顔はグイグイと迫ろうとする。

うつすらと閉じた瞼、半開きの唇、ちよつと傾いだ首。

その意図は経験値の低いアタシにだって明白だった。

「ぎゃあつ。変態！ バカ！ 離せ！」

変態！

そつだ！

変態の対処法は、恵美に散々習ったじゃないか!!!

目は抉れ！ 歯は全部抜け！

躊躇うな！ 容赦するな！

一撃で仕留めろ!!!

ドガッ！

「ぐっ」

アタシの足は、ヤツの急所にクリーンヒットした。

ヤツの身体がズルリと地面に崩れ落ちる。

その急所が何処かとかは、年頃のオトメとして明言は控えさせていただきたい。

ただ一言、視界の端で、直情金髪とジヤイアンが青ざめていたとだけ言っておく。

「はあ、はあ、はあ」

さつき走った時には全く乱れなかった息づかいが、荒々しく跳ねる。

くそう。アタシもまだまだ修行が足りないって事か。

しかし、一体全体何だつてキスしようとしてたんだ!?

この鉄面皮はよっ!!!

第四二話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その3 (後書き)

当作品は、恋愛モノにあらず、デスよ？

#### 第四三話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その4

その後の騒ぎは、出来の悪いコントみたいだった。

「だ、大丈夫か!? クラリス!?」

「生きてるか!?!」

直情金髪とジャイアンが口々に叫びながら鉄面皮に駆け寄るものの、ヤツはおキレイな顔をいつそう歪めるだけで返事をする余裕がない。

実際は「身体」がないわけだから、「痛み」もないはずなんだけど。

まあそれを言ったら、殴ったり蹴ったりつてのも本当は出来ないワケだから、そこら辺には目を瞑ろう。ぶっちゃけ言つて、痛がつてくれないと蹴った甲斐もないし。

要するに、大切なのは「気持ち」つて事だよね。

心がそれを望むのなら、痛みもアリなんだろう。ま、所詮夢だし。

二人は鉄面皮の惨状に既に青かった顔色をますます青くさせた。

「な、何と非道な...!」

「てめえ! こいつが一体何をした!?!」

青ざめた顔のままムダメン二人が、ギリリと睨み付けてくる。

したじゃん。

オトメの唇を奪おうと。

アタシは鉄面皮のうつつすらと開いた唇を思い出す。

アレは絶対、ベロチューかます気だった!!

アタシは背筋に寒気が走るのを感じた。

キスが初めてとは言わないけれど、いきなりベロチューつて!! ないないないないない!

未遂だったとはいえ、何て危険な男なんだ!

あのヤロー、美形は何でも許されるとかって、考えてるのに違くない。

ケツ。

だからアタシは言ってやった。

「はあ？ 変態を成敗して何が悪いわけえ？」

因みにアタシはずっと日本語で喋っている。

九年間の修練のお陰で、ケロタンに入れば殆ど自動的に向こうの言葉になるんだけど、

流石に「宮本澄香」本人のままじゃあ、言語スイッチはそう簡単には切り替わらないらしい。

まあネイティブ並に上達したとはいえ、アレだけの罵詈雑言は難しいって事もある。

なんてったってさ、アディーリアの記憶がベースなもんだからさ、あんまり汚い言葉ってボキャブラリーにないんだよね。

ま、ご都合主義的自動翻訳機能のお陰で会話に不自由はないので、そのまま日本語で通してるってワケである。

「変態！？ クラリスが変態？？」

アタシの言葉に、あからさまに動揺したのは直情金髪の方だった。

「そりゃそうでしょう。だってさ、アンタらだって見たでしょう。」

コイツがいきなり襲いかかってきたのをさ。」

アタシは未だに倒れている濃紺鉄面皮を指差して言った。

すると直情金髪はハツとした顔になり、

「た、確かにっ。先程のクラリスの行動は常軌を逸してはいたが…。デイン！ クラリスは変態だったのか！？」

助けを求める様にジャイアンを見た。

「落ち着け！ オール！ クラリスは変人だが変態じゃねえっ！」

ジャイアン…。

それ、微妙にっというか、全くフォローになってないから。

ジャイアンてば、「天然ボケ」<sup>ジャイアン</sup>の異名は伊達じゃないってか？

「いやいや、初対面でいきなりキスしようとしたんだから、十分変態だよ」

アタシがせせら笑いながらそう言うと、直情金髪はますます混乱



したらしい。

「そ、そうだ！ クラリスは、い、いきなりせせ精霊にせせせ接吻を！？」

ぶはっ。

アタシは思わず吹き出した。

せっぷんてっ。

今時、その言い方ってどうなの？

いや「今時」も何もないか。そもそも世界が違うんだし。ていうか。

今アタシ、物凄く重要な事を聞いたんじゃないだろうか？？

精霊がどうとか…。

んんんんん？？

アタシの疑念を余所に、二人の会話は続いて行く。

「落ち着け！ オール！ クラリスの事だ。何か深い訳があるに違いない！」

「深い訳！？ 何だそれは！？」

「分からん！ だがしかし、俺たちを動揺させるのがヤツの狙いだ！」

「精霊が、そんな汚い手を！？ それではまるで悪霊ではないのか！？」

「間違えるな、オール。余程の事でもない限り、精霊は聖者以外には冷たいものだっ」

「ハッ。そうかつ」

「そうだ。ヤツは我々の動揺を誘って、言葉を引き出そうとしているんだ！」

「うっむ。強制的に冥導の秘蹟を受けさせようというのか！」

「そうだ！ だから、オール！ ヤツの言葉には答えるな！」

互に見つめ合い、大きく頷き合う直情金髪とジヤイアン。

何て言うか。

二人ともツッコミキャラだと思ってたら、実はボケキャラだった

とは。

となれば、ここはもう、アタシがツツコムしかないんじゃない？

「二人とも、さっきからアタシと散々会話してるよね??」

アタシがそう言い終わるや否や。

直情金髪とジャイアンは、ムンクの叫びの様な表情になり。

そのままピキリと固まってしまった。

「かくして、薄暗い茫漠たる空間に再び静寂が訪れたのであった。  
めでたしめでたし」

アタシは赤い月を見上げながら、感慨深く呟いた。

そこへすかさず入る賛同の声。

「い、一体何の事を言っているんだ??」

「はあ? これの何処がめでたいって言うんだよっ」

「うっさいなあ。脳内でちょっとした回想シーンが繰り広げられていたんだよっ」

直情金髪とジャイアンを見下ろしながら、アタシは言った。

二人は不満そうな顔つきで、膝を抱えて座っている。

所謂体育座りってヤツである。

勿論アタシがさせた。

本当は正座させたかったんだけど、ヤツらは正座ができなかったのだ。

コレだから、椅子文化の連中はよっ。

てことで、仕方なく体育座りをさせてるってワケなんだけど。

意外な事に、こちらの方がトホホホ感が強い様な気がするから、まあいいかとも思う。

「何故このような姿勢で話を聞かねばならんのだっ」

「これなら直立不動の方が、まだマシだっ」

往生際悪くブツクサ言ってるのが、また余計に情けない。

「うっせえな。『正しい座り方』ができねえ teme エらが悪いんだろ  
うが」

ケツと吐き捨てる様にそう言ってやると、途端に二人は言葉に詰まって黙りこくる。

「正しい座り方」ってのは、言わずもがなの正座の事だ。

向こうの世界には「正座」の様な座り方がない。

なもんだから、ご都合主義的自動翻訳機能は「正しい座り方」と訳してしまった。

まあ、あながち間違った翻訳ではないんだけど。

それを二人は「精霊に相對する際の正しい作法」として解釈したらしい。

何故かは分からないけど、連中はアタシの事を精霊と思い込んでる。

だから不満タラタラながらも、大人しく座っているんだろう。

不満気なあたり、精霊に対する尊敬の念が足りない様な気もするけど。

精霊でも何でもないアタシは、そこら辺には目を瞑ってやってい

る。

因みに濃紺鉄面皮は、ちょっと離れた所でピョンピョン飛び跳ねている。

身体がない以上、その行為に治療効果があるとも思えないけど。というか、ぶつちやけ必要ないと思うんだけど。

すんごいイケメンが真剣な顔で跳ねている姿が余りにも可笑しかったので、心の広いアタシは好きだけ跳ばせてやることにした。

「クソツ、一体何故こんなことにつ」

「我らが一体何をしたと言うのだっ……」

それでもってこっちはこっちで、体育座りのまま己の悲劇に浸っている。

間抜けだ。間抜け過ぎる。

死人じゃなかったら、容赦なくツツコむトコロなだけど。

流石にそこまで鬼じゃない。

でも、説明責任はキツチリと果たしてもらおうけどねっ。

勿論その上で、地震の事もちゃんと訊く。

さて何から説明してもらおうか。

何てアタシが思案してると。

「夜影殿！」

直情金髪が唐突に叫んだ。

何事かと思っただけでみると、直情金髪は思い詰めた表情でこちらを真っ直ぐに見つめていた。

てことはつまり。

夜影って、ひょっとしてアタシの事か??

アタシが疑問を発する前に、直情金髪の言葉が続く。

「我らはまだ死ぬわけにはいかぬのだ！」

「夜影！」

続いてジャイアンも言い募る。

「いや、夜影殿！俺たちには使命がある！何とか生き返る手立てはねえのか!?!」

二人は、必死の形相で追いつがる様にアタシを見つめる。  
まあ、気持ちは分かるよ。

誰だって、死にたくはないもんね。

でもさ。

そもそもアタシ、「夜影」じゃないしっ。

夜影ってのは、夜の精霊の事だ。

向こうの世界では、神々の世界は夢の向こうに、あの世は夜の向こうにあるって事になっている。

そして夜影ってのは、死者の魂をあの上への送る役割を持っている。という事になっている。

要するに、現実世界で言うところの死神みたいなもんだ。

向こうの世界はそれが一般常識で、アタシだってそれくらいは知っている。

だけどさ。

何でアタシが、その死神になつてんの??

アタシの疑問は当然だと思う。

だからアタシは訊いてみた。

「あのさ。何でアタシを夜影だと思つワケ?」

けれど直情金髪とジャイアンは、アタシの疑問が疑問らしい。

「何故と言われても…。夜影殿は『夜の姿に髑髏で己を飾る』とか聞き及んでおりますが…?」

「幾ら俺たちが精霊に疎いからといって、それくらいは知っている」「それとも、我らの無知を試しておられるのか?」

え〜と。

夜の姿に髑髏で己を飾る?

何じゃそりゃ。

「夜の姿」ってのはちょっと良く分かんないけど。

取り敢えず、「しゃれこつべ」の意味は分かる。

白骨化した頭部。

要するに、頭蓋骨の事だ。

そこでアタシはふと、自分の着ているパジャマ兼部屋着を見つめた。

それはアタシのお気に入り、水色の地に黒のスカル柄。全面にランダムに並ぶスカルは、たまにウインクしたり目がバツテンだったりするのが、お茶目だったりするんだけど。

スカルは英語。日本語に訳すと頭蓋骨。

「……………」

つまりアタシの服には、髑髏がビッシリ？

アタシはパーカーの裾を引っ張ってマジマジと見た。

「こ」

「こ」？

「こ」

「こ！？」

「これか

！！」

アタシの雄叫びが、薄暗い茫洋たる世界に響き渡った。

#### 第四四話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その5

納得した！

うん！ 納得した！

拳大のスカルは、遠目にもハッキリと髑髏だと分かっただろう。

そりゃ、一目見て逃げるだろうし、怯えもするよ！！  
でもさ。

「じゃあ何で、アレは逆に襲いかかってきたワケ？」

そう言っつて、アタシは未だにピョンピョン跳ねてる鉄面皮を指差した。

つもりだったけど。

鉄面皮は、もう跳ねてはいなかった。

代わりに、ジツと虚空を見つめてる。

相当な美形だから、それだけでも風情があると言えはるんだけど。

いい年した大人が、ぼんやりと突っ立ってる様に見えなくもない。

「何アレ？」

アタシがそう尋ねると、ジャイアンが肩を竦めて答えた。

「さあ。何か、考え事してるんだろ」

「ああ、クラリスは、考え事をしている時、よくあんな風に何も無い所を見つめているな」

続く直情金髪言葉に、アタシは軽い頭痛を覚える。

猫か！

アタシがそう心の中でツッコむと、丁度いいタイミングで鉄面皮がクイツと小首を傾げてみせた。

うわっ、ますます猫っぽい。

「あんなので、ホントに宰相なんて、やってけんの??」

侍女さん達の噂によれば、新しい宰相は「美形で寡黙なデキる男」ならしいんだけど。

顔だけで判断したんじゃないだろうか？ と今の姿を見てると思っっちゃうのは仕方がないと思う。

今にも目には見えない蝶々を追っかけてどっか行きそうで。イスマイルの将来を思うと目頭が熱く…、なったりは、まあ、しないけどさ。

リスをさつさと後宮から神殿に移した方がいいかもしれない、なんて思ってしまう。

「何と！ 我々の素性までご存じとは…」

「ハッ。俺たちの事なんぞ、すっかりお見通しってか？」

ん？

コイツら、アタシの言葉を何か違う方向で取っていないか？

「こうなってはじたばたしても仕方がない。覚悟を決めるしか…」

「いや！ まだ何か手があるハズだ！！ 諦めるな！ オール！」

「む。そうだな。我らには使命がある。何としても、生きて戻らねばならん」

「そうだ！ あんな最期！ 俺は絶対受け入れない！」

「無論、私もだ！」

しかも何か、盛り上がったるし？

ああ！ そうか！ そういやあ、アタシ「死神」だもんね！

いやいや、忘れる所だった。はっはっはっはっは。

「ていうか、アレの行動の説明をして欲しいんだけど」

「だからそれは、考え事をしてるだけだと」

「ああそうだ。時々、見えない何かを追いかける様に、フラッとどっか行ったりもするけどな」

つまり、日常的にああなのか？

そしてマジで、見えない蝶々を追いかけてるんだな？？

それは幾ら何でも、関係ないアタシでさえ、イスマイルの将来が心配になってくるぞ？

「いや、そっちじゃなくて。襲いかかってきた理由だよ」

アタシが様々な疑問を飲み込みつつ改めてそう尋ねると、直情金



髪とジャイアンは、顔を見合わせて深いため息をついた。

「多分、アレだろうな」

「ああ、アレだろう」

ジャイアンと直情金髪が、大きく頷きながら言う。

「アレって??」

アタシの問いに答えたのは、直情金髪だった。

「恐らく、ディレイン・ロウの伝説に倣おうとしたのかと」

「何それ？」

「知らねえのか？」

ジャイアンが逆に訊き返す。

「ぜえんぜん知らない」

「夜影殿がご存じないとは。やはり、ただの子供騙しの絵空事という事だな」

「そんなの分かりきった事だろう。本気に取るのは、子供かクラリスくらいだ」

「だからその、何とかかんとかの伝説って何？」

「………特別複雑な名でもないのに、何故一文字も覚えてないんだ？」

「………何かを彷彿とさせるな」

訝しそうに考え込む直情金髪と、何かを見定めようとするかの様に見つめてくるジャイアン。

「ミリーに名前覚えて貰えなかった事を、まだ根に持ってんだらうか??」

あれからもう二日も経ってるのに。

何て執念深いんだ。

「名前とか、どうでもいいじゃんっ。さっさと教えなよっ」

誤魔化す意図もあって声を荒げてそう言つと、二人は仕方がないとばかりに語り始めた。

それを要約すると、こういう事らしい。

昔々、神代の昔、何とかっていうすんごい美形がいたそうなの。

あ、「神代」ってのは「創世記」の後から「皇国時代」のまでの時代の事で、まだ国というものがなくて、神サマが気軽に人間に干渉してたっていう時代の事だ。

で、そのすごい美形、当然ながらモテモテだった。老若男女問わず、モテモテだった。

ところがコイツ、来る者は拒まず去る者は追わず、貰うモンは貰うけど相手には何も与えない、という巫山戯たヤツだった。

んなもんだから、ある日痴情のもつれで死んじゃったワケ。

可愛さ余って憎さ百倍というけれど、五千倍くらいの勢いで惨い殺され方をしたらしい。

でも、魂は美形のままだった。

黄泉路を下っている途中その事に気づいた美形は、あ、俺まだイケてんじゃない！ と全く反省しなかった。そしてあの世に連れて行くこうと迎えにきた夜影を誘惑して、見事成功した。そして美形にメロメロになった夜影は、その口車に乗って美形を生き返らせてしまいました。めでたくもありがたくもありませんでした。

「……………つまり、アレは何とかっていう美形のマネをして、アタシを落とそうとしてたワケか」

「恐らく」

「間違いねえだろうな」

そう同意する二人の表情は、諦めとやるせなさが入り交じっていた。

「……………あのさ」

「皆まで言ってくれるな、承知している」

「無理矢理キスって…」

「俺たちだって、分かっているっ」

苦悶の表情を隠そうとしてか、俯いて拳を握りしめる直情金髪とジャイアン。

相変わらず体育座りのままなので、「小学生が駈けっこで一番をとれなかったの図」みたいな事になっているけど、二人の心情を慮

って敢えて指摘しないでおう。

アタシは二人の旋毛を見比べながら、心の中でだけ慰めた。そうか。分かっているのか。そりゃまあ、多少の常識があれば分かるよね。苦勞してんだね、見かけによらず。

けれど敢えて言わせて貰おう。

「マジでただの変だ…」

そう言いかけた時、不意に背筋に悪寒を感じて咄嗟に飛び退く。

「ちっ。失敗したか」

不機嫌な声に振り返って見れば、いつの間にそこにいたのか、濃紺鉄面皮が掌をワキワキさせながら立っていた。

あつつつつつぶねえええええ。

色んな意味で、コイツ、マジで危なくないか？

だって、無表情でワキワキだよ？ ワキワキ！

しかも。

明らかに。

酷い目に遭ったにも関わらず、同じ過ちを繰り返そうとしてるよね！

「ク、クラリス!？」

「お前！ ちょっとは懲りろよ！」

直情金髪とジャイアンが声を大にして諫めるけれど、鉄面皮は仲間の声に耳を貸すつもりはないらしい。

「俺は、一度や二度の失敗で、諦めるような男ではない」

その不屈の意志は天晴れだけどね！

使い道間違ってるよ！ 絶対！！

「ちよっと！ アンタらどうにかしなよ！ このド変態！」

ジリジリと間合いを詰めようとする鉄面皮を警戒しながら、アタシはヤツらに怒鳴り散らした。

それに応えて、二人が叫ぶ。

「止める！ クラリス！ 無理矢理は犯罪だぞ！」

「どうどう！ クラリス！ どうどう！」

直情金髪の台詞はともかく、ジャイアン、何で馬を宥める時の掛け声なワケ??

しかも何故二人とも、立ち上がりらん!?

そんなに体育座りが気に入ったのかああ!?

「大丈夫だ。必ず同意になる」

こちらに腕を伸ばしながら、鉄面皮が言った。

それを間一髪で避けながら、アタシは返した。

「何をだ!!!」

「はつきり言つて欲しいのか?」

「欲しくねえわっ」

「照れているのだな」

「何でそうなるっ」

ヤツが又ツと手を出せば、アタシはスルリと避け、ヤツがズイッと足を踏み出せば、アタシはビヨンと飛び退いた。

腰を落とし、互いの間合いを計りながらの攻防だ。

脳内で無神経な小人さん達が「カバディカバディカバディ」ってな掛け声を連呼していたけれど、アタシはそれを聞こえていない事にした。

「クラリス! よく見る! 夜影殿は小さい! 恐らくまだ未分化だ!」

直情金髪が声を張り上げて鉄面皮に語りかける。

「子供だぞ! クラリス! 子供に手を出すと、もうただの変人では済まなくなるぞ! 正真正銘変態だぞ!」

誰が子供だ!

アタシが小さいんじゃないやなくて、テメエらがデカ過ぎんだらうがっ。

それともアレか!? 胸か!? 胸の事を言ってるのか!?

そう言い返したいのは山々だけど、鉄面皮から意識をそらすワケにもいかないので、心の中でだけ反論する。

「どうどう! クラリス! どうどう! 鎮まれ! 鎮まれ! 家<sup>ホーリヤ</sup>

「ジャイアン！ だから何でテメエは馬扱いなんだよっ！ しかも最後は犬扱いかつ！」

「てかさ！ 二人とも立ち上がって、実力行使でコイツを止めるよ！！」

「ツッコみたいのにツッコめないストレスが、アタシの苛立ちを更に煽る。」

「何度目かに伸びてきた鉄面皮の腕を、アタシは強か叩き払った。」

「何故拒む？」

「鉄面皮は心底不思議そうに言った。」

「拒むわ、ボケエツ！」

「女に今まで拒絶された事はないぞ？」

「平然とそんな事を言ってるのける鉄面皮に、心底怒りが込み上げてくる。」

「クツソ~~~~ツッ！ これだから美形はよっ！」

「クラリス！ 未分化の精霊に性別はないぞ！」

「むっ。そうだったか？」

「自分の事を子供（体型）だと認めるのは業腹だけど、背に腹は代えられない。」

「そうだよっ。このド変態！！ きつしよいんじゃ、ボケ、こなクソ、おんどりゃあっ、ドタマがち割って脳みそ吸い出すぞっ！！」

「自分でもイマイチ何言ってるのか分かんないけど、兎にも角にも威嚇する。」

「……………ならば大人なればいい」

「ブワッて！ ブワッて！ 今もの凄い鳥肌立った！」

「い~~~~や~~~~っ！」

「無表情のまま色気垂れ流して！ 何なの！？ コイツ！！」

「余りの気持ち悪さに一瞬動きの止まったアタシの隙を、鉄面皮は見逃さなかった。」

「ガシリツと手首を取られる。」

「ぎゃ~~~~！！ は~~~~な~~~~せ~~~~！！！！」

転ぶのを覚悟で思いつき身体を後ろに倒したけど、鉄面皮の手は外れない。

「大丈夫、怖くない」

ヤツの手を引き剥がそうとして、逆にその手を取られる。

「怖ええわ！ テメエの思考が心底怖ええ！」

ならばと蹴りをかまそうとして、その足もまた取られる。

お陰で腕は一本自由になったけど、二人の身体の間で突っ張って更に迫ろうとしてくる鉄面皮を防ぐのに精一杯だ。これじゃあ、反撃には使えない。

うわあ。アタシ、マジで貞操の危機！？

「直ぐに慣れる」

「慣れるかあああ！」

アタシは渾身の力を振り絞ってブンブンと腕を振る。

なのに鉄面皮の腕は離れない。

アタシの夢なのに！ アタシの夢なのに！ アタシの心が！ アタシの意志が！ コイツより弱いハズがない！！

バキイイイイッ！

不意に物凄い音がして、拘束から解放される。

視界の端で、鉄面皮の身体が横薙ぎに吹っ飛んでいく。

片足が浮いたままだったのでバランスを保てず、後ろに身体が傾いでいく。

背中から倒れると内臓にクる。

バック宙の練習で散々経験したアタシは、痛みを覚悟してギョッと目を瞑った。

けれど予想したような衝撃は来ず、ふわりと背後から何かに支えられる。

ドサアアアッ！

派手な音にそちらを向くと、鉄面皮が地面に倒れていた。

「クラリス！」

直情金髪とジャイアンが、腰を浮かせる。

鉄面皮の着地した位置からすると、明らかに二メートル近く吹っ飛ばされた計算になる。

完全に意識を失っているらしく、ピクリとも動かない。

そしてその直ぐそばには、何故かイスマイルの伝統的な部屋履きが落ちていた。

ええと。

一体何が起こったのか。

状況がイマイチ掴めず、アタシは呆然とした。

そんなアタシの肩を、気遣うように誰かが撫でる。

その優しい感触に一瞬緊張を緩めようとしたけれど。

「よりもよつて、夜影様に不埒なマネをするとは。クラリス、覚悟はいいですね」

背中から伝わってきた穏やかだけど確実に黒い声に、ピシリと固まった。

まさか…？

「ナジャ!？」

「ナジャか!？」

アタシの背後に向かって口々に呼びかける直情金髪とジャイアンの声に、アタシはますます振り返る勇気を失っていくのだった。

第四四話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その5（後書き）

宰相クラリスは、最初の設定では、無口でクールな美形でした。

何故にこのような事態に…??

世の中って、何がどうなるのか分からないものですね。

カバディはインドの国技です。



第四五話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その6

「す、すまん！ 悪かった！ 別にそういうつもりではあああああああああああ！」

「話せば分かる！ な！ な！ な！ ナジャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「……………死ぬ。ゴフツ」

茫洋たる空間に阿鼻叫喚が轟き渡る。

それに相對するは、何処までも何処までも静かな声。

「つまり二人は我が身可愛さに、見るからに幼気な夜影様をお救いしなかつた、と？」

「それは！ ナジャがああ攻撃の威力を知らんからだあああああ！」

「そくだ！ ああ的確かつ容赦の欠片もない一撃！ ナジャも見れば分かるうううう！」

「クラリスは何十分も飛び跳ねていたんだぞおおおおお！」

「二の舞はご免だああああああ！」  
なるほど。

だから直情金髪とジャイアンは、変態鉄面皮の魔の手から、アタシを助けようとはしなかつた。

「クラリス」

その声音は、何処までも穏やかなのに、ヒヤリと肝が凍える程にドス黒い。

「貴方は余程自分の容姿に自信があると見える。確かに貴方のそれは、美スライタイエの女神の恋人と呼ばれるに相応しい容姿でしょう。しかし美の女神と夜の双性神とは、格が違うのですよ」

ブンツ。

物凄い高速で、鉄面皮の身体が目の前を横切って行く。

「っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

鉄面皮は何かを言おうとしているだけけれど、余りにも高速で振り回



そろそろ止めるべきだろうか？

このままじゃあ、ゲロの雨が降るのも時間の問題だろう。

アタシは、その光景を思い浮かべてゾツとした。

うわっ。それだけは、勘弁してっ！

「ナジャ」

アタシは腹黒黒髪の名を呼んだ。

コイツの名前は覚えたくて覚えたくわけじゃない。

けれどアレだけ連呼されてりゃあ、嫌でも覚えてしまっ。

「如何致しましたか？ 夜影様」

腹黒黒髪改め腹黒ナジャは穏やかに微笑んでるけど、やっぱり黒い。

その黒々さに一瞬口を挟むのを躊躇ったけど、それでもゲロまみれになる自分を想像して、思い切って言う事にする

「ええと。もう、離してあげたら？ その、ゲロ撒かれるのも迷惑だし？」

「夜影様が、そうおっしゃるのであれば」

恭しくそう答えた腹黒ナジャは、ほんの僅かにだけど、纏う空気が緩んだような気がした。

それでアタシは気がついた。

ああ、なるほど。

過剰ともいえる振り回しっぷりは、「夜影」へのパフォーマンスか。

もし精霊に疎まれれば「悪霊憑き」になる。

ナジャはその額の入れ墨が示す様に「異教徒」だけど、確かその辺の解釈はどの宗教も変わらなかったと思う。

悪霊憑きは生まれ変わっても悪霊憑きで、永遠に魂が呪われる。

だからこの腹黒は、連中が「夜影」から罰せられる前に、自ら仲間を罰を与えたってトコロだろう。

ふっん、こりゃまた厚い友情だねえ。

「夜影様の寛容さに、あの者達も感激にむせび泣く事でしょう」

ナジャがそう言うと、黒い触手は三人を解放した。  
空中で。

連中の身体が、地面に叩き付けられる。

「ぐがっ」

「げへっ」

「ぐぶっ」

連中はピクピクと痙攣して、パタリと動かなくなった。

ええと。

うん。

凍傷しそくないくらい熱い友情だね！

という事にしておこう。

そしてアタシは再び、ヤツらの前に立っている。

鉄面皮、直情金髪、ジャイアンの三人は、座るのがやっとばかりにグッタリしてる。

その中で腹黒黒髪だけは、「ああ、いい汗かいた」みたいなスッキリ顔だ。

例の黒い触手は、背中に収納されてる。どういう造りになってんだって思うけど、そこら辺は決して深くツッコむまい。

四人とも体育座りなので、かなりハードな体育の授業の後に見えなくもない。

しかも、あんまり体育が得意そうじゃないクラスの副委員長が実はスポーツ万能だった、みたいな感じ。

因みに委員長は鉄面皮で、直情金髪とジャイアンは悪ガキその一その二ってトコだろう。

ジツと見上げてくる四対の目に、何だか体育教師にでもなった気分になる。

思わず、頭の中で連中に赤白帽と体操着を着せてしまったアタシは、

「ぶほっ」

盛大に吹き出してしまった。

「なっ！ 何故笑われるのか!？」

「巫山戯てんのか!？」

「夜影様!？」

「あ、いや、ゴメン、ゴメン。ちょっとイロイロ思うことがあったさ」

アタシは必死で笑いを堪えながら、誤魔化す様に言った。

そんなアタシに、腹黒ナジャが決然とした顔で言う。

「夜影様」

「はい、ナジャ君」

アタシは、思わず教師口調で指名した。

それはご都合主義的自動翻訳で「ザデイ・ナジャ」となった。

「ザデイ」は幼い男の子に呼びかける時に使う言葉で、大人に使うと「ケツの青い坊や」という小バカにした意味合いになる。

断っておくけど、あくまでも不可抗力だ。

一瞬不味いかな？ と思っただけど、ナジャは僅かに慥然とした顔をしたものの、それに関しては何も言っただけだった。

「『冥道の審判』の前に、確かめておきたい事があります」

メイドウノシンパン。

て何じゃ？

と思つたけど、何だか訊ける雰囲気じゃなかったの、敢えて訊くのは止めておく。

「いいけど。その確かめたいことって？」

アタシの問いに、ナジヤは神妙な顔で答えた。

「我々は、真に死んでしまったのかという事です」

こりやまた、根本的なトコロを突いてきたな。

「うん。本当に死んでるかどうかが疑問なワケね？」

「はい」

「なんで？」

「それは勿論、納得がいかないからです」

まあ、これだけ若いんだから、そりや当然だろうけど。

「大抵はそうだよ。納得して死んでいく人間なんて、そうそういない」

『死』なんてものは、どんな形であろうと納得出来ないモンだ。事故だろうが病気だろうが天災だろうが。

例えそれが寿命だろうが。

逝く者にも、残される者にも。

「何時でも何処でも誰にでも、『死』は理不尽なもんだ」

「それはそうかもしれないが……」

ナジヤは何かを言い募ろうとして、けれど言葉が見つからないらしい。

それでもナジヤの瞳には、断固たる意志が宿っていた。

アタシは四人の顔を順繰りに見た。

どの顔にも生きたいという切実な願いと、納得できない事への怒り、それから「死」を受け入れまいとする意地が、ありありと浮かんでいる。

ふと、アディーリアはどうだっただろうと記憶を辿る。

幼いリズを残して逝く事が、どれほど心残りだっただろう。

青い月の下で、アディーリアはたくさんリズの事を喋った。

たくさんたくさん喋った。

その膨大な言葉の数も及ばない程、リズの事を愛していた。アデーリアには、自分が死ぬことが分かっていたし、死んだ後の準備をする事だってできた。

けれど、誰よりも何よりも、アデーリアこそが一番納得していなかったに違いない。

「あのさ。『納得できる死』なんか、きつとないんだよ。どんな理由も、どんな意味も、納得する材料にはならないんだよ」

我ながら何の力もない、虚しい言葉だと思う。

けれど死にゆく人に、一体どんな慰めがあるだろう。

「ただ受け入れるしかないという事でしようか」

力ないナジャの言葉に、他の三人がピクリと身体を揺らす。

固く目を閉じる者、爪が食い込む程に拳を握る者、虚空を睨み付ける者。

彼らはそれぞれに、自分に降りかかった理不尽な死を受け入れようとしているのだろう。

と思いきや。

「断る！！」

突然鉄面皮が、言い放った。

「そうだ！ 納得できるか！ あんな死に方！」

続いてジャイアンが、拳を振り上げながら訴える。

それに直情金髪が同調する。

「そうだ！ 絶対お断りだ！ あの様な死、末代までの恥だ！」

何なの！？ この唐突なテンションは！？

しかも地震が末代までの恥って。

いや待てよ、地震が起こったのは深夜だから。

人には言えないような事をしている最中だったとか…？

「そうですね。私も、断固として受け入れません」

ナジャが毅然としてそう言うと、彼らは更に盛り上がった。

「俺達は死ぬかもしれん。だがしかし、それを受け入れる事はない





第四五話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その6（後書き）

アヌハーン神教では『冥導の秘跡』ですが、ヨグナ教では『冥道の審判』となっております。

第四六話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その7

地震は!?

地震で死んじやったんじやないの??

一体何がどうなってるの!?

ミリーって??

呪いの言葉って!??

まさか。

まさか。

まさか。

じゅげむつうつうつうつうつうつうつうつうつうつうつ!??

「寿命無」で死んじやった!?

んなバカな!

いやいや、それ以前に。

ミリーでコイツらに会ったのは、現地時間で二日前、一昨日の夜

じゃんか!

「我々は、断固として闘うぞ!」「**コ** **!**」「**コ** **!**」「**コ** **!**」

「俺達には、その権利があるはずだ!」「**コ** **!**」「**コ** **!**」「**コ** **!**」

と、賃上げ闘争に盛り上がる労働団体 座ったまま拳を振り上

げているので余計にそう見える みたいな事になってる連中に、

アタシはがり立てた。

「ちよつと、アンタ達!」

「どうした?」

「如何したのだ? 夜影殿」

「何か用か?」

「まさか、夜影様、我々の行動を阻止しようと...?」

ナジヤの背中からニユルリと触手、じゃなくてオーラが伸びる。

怖っ。

テメエ、ヨグナ教だろうっ。「夜影様」を威嚇してどうすんだ!??

アタシは心の中で悪態をつきながら、逸る気持ちのままを口に  
した。

「『今日』は何日!？」

「は？」

「日付がどうかしたか？」

「いいから、言っつてっ！」

そう言っつて詰め寄ると、直情金髪が気圧される様に答えた。

「……………カレーズの月二十日だが？」

「いや、深夜は過ぎていただろう？ もう二一日になっているんじやないか？」

「む。今宵は望月だったな。ここに月はないが」

「仕方がありません、死出の道は月も星もない夜道と決まっつていま  
す」

今日は二二日だしっ！ 月ならあるし！ 星だつてガンガン流れ  
てるし！ そんな決まり事知らねえし！

どっからツツコめばいいんだか！ ああっ。もう、分からんっ。

「じゃあ！ 地震は!？」

アタシは勢い込んで問い詰める。

けれど返つてきたのは、的外れなものばかり。

「地震つて何だ？」

「大地が揺れるアレだろう」

「ああ、『地神の寝返』りか」

「地震がどうかしましたか？」

地震があつた事を知らない!？ 結構、デカかつたよね?？ 靴

落ちてきたしっ。

てことはコイツらマジで、今日のコイツらじゃなくて一昨日の  
コイツらか!？

単に記憶が飛んでるつてワケじゃなく???

強い衝撃で記憶が飛ぶことがある。事実、アタシには事故の時の  
記憶がない。

でもさ、コイツらハッキリ言ったよね？

ミリーに呪い殺されたって。

じゃあ、マジで「寿限無」で死んだワケ？

アタシ、殺人犯??

いやいやいやいや。

冷静になれ、アタシ。

「夜影様？」

「如何した？」

「地震がどうとかって、俺達と何の関係があるんだ？」

「……………」

頻りに訝しがる連中に、アタシは確信を得る。

考えてみれば、アレだけ引きずり回されて顔に傷作ってんのに、気がつかなかったのがそもそもおかしな話なのだ。アレは単に気絶してたんじゃない、昏睡状態だったんだ。

それってさ、現実世界のアタシと同じじゃね？

恵美に顔がヒリつくまで叩かれても目を覚まさなかったアタシと、ひよっとして、アタシの昏睡の原因は、アディーリアじゃなくて

「寿限無」？

でもコイツらは死んでいて、アタシは生きている。

いや。

待てよ。

もし、国の要職に就いてる人間が四人も同時に死んじゃったら、今頃物凄い大騒ぎになってるハズだ。多分葬式だって、国葬級だろうしさ。

幾ら後宮が閉鎖されていても、そんな騒ぎがあれば伝わってくるだろう。侍女ネットワークの情報伝達速度は半端なく速い。何と言ってもコイツらは、女子に人気の優良物件だしね。

けど、リズはそれらしいことは何も言っていなかったし、レゼル宮も何時もと代わらない雰囲気だった。

勿論、優秀な侍女さん達が、細心の注意を払ってリズの耳に入れ

ないようにしてるって可能性もあるけれど。

でも、昨日訪ねて来たって言う娘子軍の二人が、ケロタンに何のメッセージも残してないってのはあり得ないんじゃないだろうか？  
それにセルリアンナさん。

神殿の動向を教えてくれた彼女なら、コイツらの事も教えてくれて良さそうなモンじゃね？

てことは。

多分。

てか、絶対に。

「はああああああああああああああああああ」

アタシはガツクリと頂垂れて、大きな溜め息を吐いた。

いや別に、死んで欲しかったワケじゃないよ？

けどさ。

コイツらに寄せた同情とか気遣いとか遠慮とかさ。

ああ、もつたいない。

後に悔いると書いて「後悔」とはよく言ったモンだ。

「夜影様？」

「何か随分落ち込んでるぞ？」

「如何したのだ？」

「……………腹痛か？」

気遣ってんだか気遣ってないんだか分かんない微妙な言葉を掛けてくる連中の、やたらと整った顔がこれまたやたらと腹立たしい。

いつそのまま何も言わずに、勝手に煩悶するがいい！とか思わなくもないんだけどさ。

アタシは頭をポリポリと搔く。

流石にそれは、余りにもフェアじゃない。まあ、フェアに行こうとは思ってはないけどね。連中だってそうだろう。

けどこの問題は、次元が違いすぎる。

「アンタらさ」

アタシは一つため息を挟んでから言った。

「死んでねえわ」

「は？」

「死んでない」

「いや、しかしっ」

「死んでないんだよ」

「はあ？ 下手な慰め言うんじゃないやねえっ。返って質悪いぞ？」  
む。

なんだそりや。せつかく人が親切で本当の事教えてやったのに。

「そんなに死んでいたいなら、今ここで死んじゃう??」

と脅してやったら、漸く得心したらしい。

「真か!？」

「マジか!？」

「本当ですか!？」

「嘘か？」

嘘じゃねえし。アタシは余計な事ばかり口走る鉄面皮の頭を軽く叩くと、呆れ口調で言っちゃった。

「大体さ。何で自分の事死んでるとか思ったわけ？」

自分の事だろ？ 気がつけよ。

「そっちこそ、案内人のくせに死者と生者の区別がつかないのか？」

「精霊だって万能じゃないんだし。間違いだってするし、勘違いだつてするよ。ていうかさ。もう、アンタらに用事はないから、さっさと帰れば？」

アタシは体の向きを変え、シッシと追い払う様に手を振った。

背後で、連中がブチブチと文句を言いながら立ち上がる気配がある。

あゝ、全くの時間のロスだよ。

尤も、一昨日のコイツらと出くわす辺り、ここに時間があるのかどうかも疑わしい。

けれどまあ、精神的な意味でもロスだった。

地震の情報は手に入らないし。

こうなりゃ、さっさとカエル探してリズントコに戻らなきゃ。  
チエツ。

と、大きく舌打ちした瞬間、閃いた。

いや待てよ。

コイツらの時間座標は一昨日だ。

てことは、地震の事を知らせれば、前もって対策ができるんじゃないかね???

おおお！ ナイスアイデア！

アタシ天才???

と思っただけど、その気持ちは一気に萎んだ。

だつてさ。夢って、目が覚めたら覚えてないよね？

いやまあ、アタシはしっかり覚えてるけれどさ。

それはまあ、いわば契約の副作用みたいなもんだし。

けど、何もしないよりはまだマシか。

ひょっとしたら、運良く覚えてるのか、思い出したりするかもしれないし。

「あのさ、一つアンタらに情報があるんだけど」

自分のグッドアイデアに少しばかり気分を上らせながら振り返ると。

ムダメン共が物凄い勢いで食いついて来た。

「それは、元に戻る方法か!？」

「マジか!?? どうすれば、体に戻る!？」

「夜影様! どうぞお知恵をお授けください!」

「教えなければ…」

ドアップで上から迫ってくるムダメン共を、手当たり次第に打ち払う。

「わ~~~~っ。近い近い近いっ! 近いわっ!」

タダでさえデカくて威圧感があるのに、そんなに間近に迫られたら、怖いわっ!

「てか死んでないなら、その内自然に元に戻るから。多分」

「多分って何だ!?!」

「そんないい加減な!」

「夜影様! お慈悲を!」

「ならばやはりここは…」

「うぜえわっ!」

アタシは怒鳴りながら、ムダにデカい体を次々と突き飛ばす。

ついでに蹴りと肘も入れて、よろめいたところを思いっきりどついでやた。

ここまでされて、尚も懲りずに掌をワキワキさせてる鉄面皮に、プチリとアタシの中の何かがキレた。

「生きたかったら、生きたいって願えっ。何が何でも生きるんだって思え! 何を犠牲にしてもっ、どんな代償を払ってでもっ、生きたいって望め!」

ゼイゼイと肩で息をしながら、ヤツらを睨み付ける。

あの時、青い月をぼんやりと見上げながら、アタシはただ生きたかった。

ただ、生きたかった。

生きたいと願っていた。

魂の根源から湧き上がってくる様な、余りにも自分本位な本能に、怖じ気づきながらも、それを捨てられなかった。

アタシは固く目を瞑り、大きく息を吐く。

次に目を開くと、見つめるムダメン達が呆然とこちらを見ていた。その顔を見てたら、何だか可笑しくなってきた。

ただの小娘があんな事言っただって、コイツらは歯牙にも掛けないだろう。

けれど今のアタシは「夜影」、精霊なのだ。

だったらそれを、利用しないって手はないんじゃないかね?

「アンタらに、一つ予言を授けてあげる。確実に起こる予言だから、心して聞く様に」



アタシはそこで一呼吸置いて、出来るだけ厳かに聞こえる様になった。

「カレーズの月二二日の深夜、イスマイルで地震が起こる」

ナジャと直情金髪は驚きに瞠目し、ジャイアンと鉄面皮は疑わしげに顔を顰める。

連中の反応に無関心なふりをして、アタシは言葉を続けた。

「地震の殆どないイスマイルは、地震への耐性が低い。震源地に近ければ、家屋の倒壊は免れない。対策を誤れば、間違いなく国全体が混乱する」

多少大袈裟かもしれないけれど、地震対策つてのはしすぎという事はない。

これは一つの賭だ。

アタシには、イスマイル国民全てを救う事はできない。

アタシの腕は、リズ一人を抱きしめるので精一杯だから。

連中は、少しの間真偽を見定め様とするかのように、アタシを睨み付けていた。

アタシはそのキツイ視線を、キリキリと胃の痛む様な思いをしながら耐えた。

「それが真実という保証は？」

「アタシは何も保証しない」

鉄面皮の問いかけを、アタシはにべもなく撥ね除ける。

「なっ！」

「巫山戯んな！」

「何のつもりだ!？」

「知りたいのなら、生きて、自分の目で確かめれば？」

アタシの嘲る様な声に、連中がハツとなる。

次の瞬間には、連中のムダにイケてる顔に強い決意が漲っていた。不意に、スウツと連中の姿が薄くなっていく。

自分達でもその事に気がついたんだろう。驚いたちょっと間抜けな顔をして、そのまま消えてしまった。

「目が覚めた時に、覚えておいてくれるといいんだけどね」

連中が先程まで立っていた場所を見つめながら、ため息混じりに呟いた。

「なかなか、見事な扇動であつたな」

唐突な声にギョツとして振り返ると、そこには十五、六歳くらいの少年が立っていた。

少年は、その年には似つかわしくない鷹揚な笑みを浮かべながら言った。

「今宵は一段と、赤い月が美しい。そう思わぬか？」

その言葉で、何故かアタシは気がついた。

コイツがアタシの、新たな「契約者」だって事に。

第四六話 カエルの瞳孔は縦・横・三角です その7 (後書き)

次回は挿話になります。

**挿話 振り向けばヤツがいる(前書き)**

普段の1・5倍盛っております。

## 挿話 振り向けばヤツがいる

ナジャ・エリアーデ・アウラ・カデイスが王宮で与えられている自室に戻ったのは、その夜も日付が変わってからだだった。

王佐という仕事は、その名の通り国王を補佐するものだ。

殆ど常に国王と行動を共にし、国王の毎日の予定を立て、謁見者の選別、公式行事の采配などを行う。その一方で、国王直属の頭脳集団〈枢密院〉の長として、国王の政治理念を体现するために、情報を集め政策を練り、根回しをし、時には暗躍する事も厭わない、政治の暗部をも担う仕事である。

その様な重要な地位 特にイスマイルの様な伝統も格式もあり、アヌハーン神教の聖地すら抱えるような国の くに、異教徒が就任するという事は、様々な物議を呼んだ。頭の固い貴族達からは、その地位を返上すべきだという声もある。

それらを押さえつけるには、今はまだ自分だけの力では適わない事を、ナジャは十分知っていた。

身元保証人が「聖者」シャルルトでなければ、或いは先代国王の推薦がなければ、とつくの昔に排斥されていただろう。

二人には、感謝している。だが、二人が己のためを思っていた事かと問われれば、否とはつきりと断言できる自信がナジャにはあった。

それはただの気まぐれであり、或いは一つの余興でしかなかった。だがそれでもと、その手を取ったのは、己の意志だった。

ナジャは着替えを済ませると、ベッドの側にヨクナエデイス跪き、夜の双性神へと祈りを捧げるために目を瞑った。

ナジャの瞼に、夜の砂漠が蘇る。

月明かりに照らされる砂の海。

ナジャの一族は、元々砂漠の民だった。

砂漠の民は、国を持たず、風のように放浪する。

日中は強すぎる日差しに晒され、夜は凍える程の寒さに耐え忍ぶ。水は貴重で、砂嵐に遭えば命さえ落としかねない。

砂漠では死は常に側にあり、だからこそ死者を導く夜の双性神に祈るのだ。

異教徒である事で、今でも謂われのない差別や蔑みを受ける事もあるが、信頼できる友人も心から忠誠を誓う主もできた。

今の暮らしは幼い頃に比べれば、豊かになった。

それでも時折、両親や一族の者だけで小さなキャラバンを組み、僅かな食料と水を分け合って砂漠を渡っていた頃の事を懐かしく思う。

ナジャは口元に僅かな笑みを掃く。

昔の事を思うのは疲れている証拠だった。

忙しさという点においては、普段と比べても変わりのない一日だった。

だが、本当に疲れたのだ。  
精神的に。

ナジャはそつと溜め息を吐く。

忙しさにかまけていれば感じないが、気を抜くと感じてしまう、顔中に広がる傷の痛み。

子供の頃ですら、こんな派手な擦り傷を作った事はなかった。

ヒソヒソと侍女や部下達が何事かと囁くのを、無視し続けるのは骨が折れた。

一度だけ、「笑いたければ笑うがいい」と思って睨み付ければ、相手は凍り付きその後仕事にならなくなってしまった。

つまりナジャは、仕事を円滑に進めるために、ヒソヒソ声やチラチラと頬に刺さる視線を無視するしかなく、恐らくそれが精神的な負担となってしまったのだろう。

外国からの使者を相手に腹の探り合いをしている方が余程マシだと、ナジャは幾度となく考えた。

しかし逆に、反動でその背中をから生じる黒いオーラが普段の三

倍増しに垂れ流し状態になり、これならいつそ間諜の嫌疑で捕まって拷問される方がマシだと、部下達が思っていた事を、ナジャは知らない。

あんのアマガエルツ！

デインゼアでなくとも口にしてしまいたくなる悪態に、ナジャはギョツと奥歯を噛みしめる。

何時もなら心が屈いでいく祈りの時間だというのに、今夜ばかりはなかなか平安が訪れない。

「夜の双性神よ。夜影よ。どうか私の心をお鎮めください」

アヌハーン神教では、夜の精霊は死を運ぶものとして、不吉の象徴とされている。

しかしヨグナ教では、夜影は単なる案内人ではなく、審判者とされている。

人は生前の行いによって、冥府の行く先が決まる。

来世までを安らかに過ごすか、或いは生前の行状を償うためにもどのような刑に服するか。

こうした考え方はアヌハーン神教にはなく、神教では死は善人にも悪人にも等しく訪れるものとされている。

神は人を罰しない。

それがアヌハーン神教の教えだ。

何故なら神は人に無関心だからだ。

だがそれは、ナジャにしてみれば、神殿の腐敗を許す言い訳にしか思えなかった。

罰の有無によって行動を決めるのではなく、己の良心に従って行動を律する事ができれば一番良いとは思うが、人というものはそんなに強い生き物ではない。

人は容易く墮落し、安易に罪を犯す。

だがまた同時に、とナジャは自嘲する。

それを利用して今の地位を得たのも、また事実だからだ。

「……………寝るか」

思った様な安らぎは得られなかったが、随分と落ち着く事は出来た。

明日もまた早い。

ナジヤはランプを消して、明日の予定を頭の中で整理しつつ、シートツの間に身体を滑り込ませた。

月明かりが丸い高窓から降り注ぎ、毛足の長い絨毯の上に地上の月を描く。

まな裏に浮かぶのは、日中の日差しを避けて歩いた夜の砂漠。

月影の下、砂紋が刻々と移り変わり、二度と同じ風景に出会う事はない。

今はもう大国の支配下に置かれてしまったあの砂の海を、歩く事は二度とないだろう。

今でも思い出す。

月も星もない夜には…。

「ん？」

ふと思い返して、ナジヤは回想を中断する。

月も星もない夜など、ありえない。

月がなくとも、星がある。新月の夜は、寧ろ星々の瞬きが増す事はあっても、星が見えなくなるという事はない。

月も星も見えないのは、雲の厚い夜くらいだが、滅多に雨の降らない砂漠で、そんなに厚い雨雲に出くわす事はない。例え出くわしても、そんな天気不安定な夜に、砂漠を渡る事はない。

それはまるで、言い伝えに聞く死出の道ではないか。

バカバカしい。

そんな夜空、見た事がない。

ナジヤは、己の思いつきを鼻で笑った。

カッ！！

目から光線でも出しそうな勢いで、ナジヤは目を見開いた。

ガバリツと勢いよく上体を起こして、ベッドから飛び降りた。



バタバタバタッ。

ガチャン！

バタン！！

バタバタバタバタバタ

！！

クラリス＝レヴイド・エルド・ノーザラン・ハジエク・ソルダークが王宮で与えられている自室に戻ったのは、その夜も日付が変わってからだった。

宰相という仕事は、全ての大臣の上に立ち、国王御前会議の議長を勤める要職中の要職だ。まだ年若い彼がその職に就く事は決定済みだったとは言え、前国王の急逝によりかなり前倒しになった感はない。

前国王は病に倒れてから、ひと月と保たなかったのだ。

余りにも急な死に、毒殺ではないかという噂もあった程だ。

しかし、前国王が暗殺される理由は殆ど見当たらなかった。彼は為政者としては凡庸だったが、それを自覚していたため、議会に対して特に異議を申し立てる事がなかったという。その一方で、その高貴な血筋を最大限に利用して、巧みな政略婚で勢力関係を偏らせないという強かさも持ち合わせていた。

クラリス自身、皇太子に付き従って何度か前国王とまみえたが、全く為人の伺えない人物だった。

覚えているのは、実の息子である皇太子を前にして、何とも無感動な表情をしていた事だ。

義父であるノーザラン侯爵でさえ、前国王に比べれば随分気に掛けてくれている様に思う。

その義父が一度だけ前国王について口にした事があった。

一体何がしたいのだ、あの男は…。

前国王が国王の絶対権限を使ったのは、生涯で一度きり、第四正妃を迎えると突如言い出した時だけだったらしい。

平民出身者を正妃に迎える事に、当然のごとく議会は反対した。

一方で、それを利用した貴族もいた。

クラリスの義父、ノーザラン侯爵だ。

義父は、第一王子の立太子を条件に、国王のために働いた。

第一王子の聖母はナデイシス王国の王女だが、義父にとっては従姉妹に当たる。

その伝手を最大限に使い、皇太子の元へ、義理の息子である自己や、派閥の貴族の子弟を送り込み、地盤を固めた。

ところが、蓋を開けてみれば、現れたのはヴィセリウス大神官を後見人に持つ「聖者」であった。

前もって「聖者」であると、ヴィセリウス大神官が後見人だと分かっていたら、平民出身などという事は些末な事実にしかならず、議会から反対を受ける事もなかっただろう。

何を考えているのか分からないと言われても仕方がない様な行動だ。

第三王女に関してもそうだ。他の王子や王女に対する冷淡さからすれば常軌を逸していると思えない過保護ぶりだった。

「ウツ」

クラリスは痛みを感じて小さく呻いた。

シャツを脱ぐ時に、傷を強く擦ってしまったのだ。

傷そのものは浅いが、細かい石がめり込んでいたせい、何時までもジンジンと痛む。

触ってみると、僅かだが熱がある。

こんな擦り傷、子供の頃ですら作った事はなかった。

「そういえば、親父はよく作っていたな」

クラリスはそう言っ、髪の色を除いて自分にうり二つだった父親の事を思い浮かべた。

尤も父親が付けていたのは、専ら女性の爪によるミミズ腫れだったが。

蝶々の様な男で、次から次へと愛人を作る不実な夫だった。しかし妻に対して愛情がなかったという訳ではない。寧ろ、浮気相手に妻との惚気を聞かせるという、奇妙な男だった。

イリュジュナが好きすぎて自分の愛で押しつぶされそうだななどという事も言っていた様な気もする。

イリュジュナというのは、クラリスの生母で、現ノーザラン侯爵夫人である。

平民出身で、顔立ちはどう鼻屑目に見ても平凡な女性である。

どつという訳か父親の方がベタボレで、何度も泣いて頼み込んで結婚してもらったのだと、自慢気に言っていた。

なのに浮気が止まらないというのは、病気としか思えない。

よく周囲からは何時か女達から刺されるなどと言われていたが、その度に父親が持ち出していたのは「デイレイン・ロウの伝説」だった。

僕は精霊をも誑かす美形さ！！

と、恥ずかし気もなく言っていた。

だが、その父も、流石に精霊を誑かす事はできなかったらしい。

恐らく、精霊相手に妻との惚気話でもしたのだろう。

「フツ。俺は決して失敗しない」

クラリスはそう呟いて、ベッドに潜り込もうとした。

その瞬間。

クラリスは落雷を受けた様な衝撃を覚えた。

ピキリとシーツを捲る手が固まった。

やがてクラリスの秀麗な顔立ちが、徐々に驚愕の表情へと変わってゆく。

バサッ。

バタバタバタバタッ！

ガチャッ！

バタンッ！

バタバタバタバタ

！

「クラリス！？」

「ナジャか！！」

二人は廊下で鉢合わせた。

深夜の王宮に、声が響く。

ナジャとクラリスは何も言わずにただ頷きあった。

「オーランドとディンゼアにも確かめましょう」

「よし」

二人は脇目も振らず近衛の宿舎に向かった。

「内庭を横切りましょう！」

「近道だっ！」

途中見回りの騎士とすれ違ったが、挨拶も交わさなかった。

ガタンッ！

内庭へと通じるドアの門を空け、見張りの騎士が驚くのも構わず庭へ出た。

その時、二人を呼ぶ声がした。

「ナジャー!!」

「クラリス!!」

二人が前方へと目を凝らしてみると、目当ての人物が向こうから駆けてくる。

「オーランド!?」

「デインゼア!」

内庭の中央で、四人は顔を突き合わせた。

「お前らも、思い出したのか!?」

勢い込んで訊いてくるデインゼアに、ナジャが力強く頷き返す。

「はい! あなた方も?」

「ああ!!」

「一応確認しますが、どんな夢でした?」

ナジャはそう言つて、努めて冷静になるうとするが、自分でも声が震えているのが分かった。

その問いに、オーランドとデインゼアは同時に答える。

「ナジャの背中からイカ足が生えていた!!」

「ナジャの背中からタコ足が生えていた!!」

言い終えると同時に、オーランドはデインゼアの言葉を、デインゼアはオーランドのそれを否定する。

「デイン! アレはイカの足だろう!!」

「いいや、違うぞオール! 寧ろタコだろうがっ!!」

「……………ほっ?」

ナジャの声音が冷ややかに変わった事にも気づかず、二人の近衛は譲らない。

「あの弾力はタコだ!」

「いいやつ。あのしなる様な動きはイカだ!」

イカの足とタコの足の違いってなんだ?

さあ。色と食感じゃないのか?

え、目隠しされて食ったら、分かんねえ自信あるわ、オレ。

あ、オレも。

四人の尋常ではない様子に後を付いてきた騎士達が、物陰に隠れながらヒソヒソとそんな事を囁きあう。

でもさ、王佐の背中から生えてきてるって話だよな？

タコ足が？

イカ足が？

ええ〜。そんな可愛いモン、生えんだろ。あの背中からは。

あ〜、確かに。生えるとしたら、赤や白じゃなくてさ。

真っ黒じゃね？

言えてる！！

彼らは決して声が漏れない様口元を押さえながら、肩をふるわせて笑った。

しかし彼らがどんなに努力しようとも、それらの会話は全て王佐に筒抜けだった。

当然の如く、後に彼らは筆舌に尽くしがたい目に遭うハメになるのだが、それはまた別の話である。

「デイン！ お前、タコとイカの違いを知っているか？ タコの吸盤は柔らかいが、イカの吸盤は固いんだぞ！」

「そんな事あ、知ってるぜ！ イカの吸盤の内側にはギザギザがあるけど、タコにはない。何故だか分かるか！？」

「ああ！ タコの吸盤は吸い付かせるのが目的だが、イカの吸盤はギザギザを爪の様に使って引っかけるためだ！」

最早タコ足かイカ足かの問題ではなく、タコとイカの雑学問答と化している言い争いは、見物している騎士達に全く役に立たない知識を植え付けながら、熱くなっていく。

それに反比例して、ナジヤの周囲の気温は下がってゆき、今や体感温度は氷点下を超えていた。

さ、寒い！

今は夏だったのに。凍えるようだ！

騎士達が物陰でガタガタと身体を震わせる。

「アレはタコの足だ！」

「いいや、イカだ!!！」

既に二人は議論の主旨を、というよりも己を完全に見失っていた。何故そこまで拘るのか、一体何が彼らを駆り立てるのか？

正直誰も興味はなかったが、誰もが思った。

夜中だぞ!？

勿論夜中にベッドから飛び出してすべき会話ではなかったが、それ以前にいい年した大人の会話ですらなかった。

そんな二人を見かねたのか、クラリスが身体を割り込ませて止めに入る。

「いい加減にしろ!!！」

滅多に聞かないクラリスの怒声に、オーランドとディンゼアが瞬く間に我に返る。

「あ…、すまん…！」

「悪い」

気が抜けた様な謝罪に、クラリスはしかし、厳しい眼差しを和らげようとはしなかった。

「貴様ら、どうかしているぞ？」

オーランドとディンゼアは、素直に謝罪する。

「ああ、そうだな」

「全くだ…！」

心から反省しているらしい二人に、クラリスは厳かに言った。

「そもそもアレは、タコ足でもイカ足でもない」

「そうか…！」

「そうだよな…！」

二人とも己を恥じて頂垂れる。  
が。

続くクラリスの言葉に。

「よく思いだぜ。アレには吸盤がなかったらどう？」

ん？

となつた。

「えっと、クラリス？」

「何が言いたい？」

二人の戸惑い顔に、クラリスはフツと鼻で笑つて言った。

「アレはどう見ても、クラゲの足だろうが」

バキイイッ！！

その瞬間、クラリスの身体が跳んだ。

クラリスの身体が、ゆっくりと弧を描いて地面に落ちる。

ドサアアアア！

「あ！！！！」

オーランドとディンゼアは、同時に叫んだ。

それは正しく、夢で見た光景だったからだ。

「やはりただの夢ではなかったか…」

「ああ。夢じゃねえな…」

二人は心の底から願った。

今こそが夢であつて欲しい！！

と。

精霊に祈りながら、背後から迫り来る凍える様な冷気をヒシヒシと感じていた。

余談ではあるが、見物していた騎士達は、幸か不幸か既に仮死状態となつており、最悪の厄災からは逃れる事ができたのであった。



挿話 振り向けばヤツがいる（後書き）

お疲れ様でした。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

削ろうと思ったんですが、削れなかったので…。

副題の元ネタは昔のフジテレビ系のドラマですが、見てないので、話の内容はイマイチ分かりません（＾　＾；）＞。ホラーじゃないのは知っていますが。



入る。

そこからはもうウォーターライダーですらなくて、  
ウォーターチューブ。

要するに配水管だ。

ゴボゴボゴボゴボツ。

ケロタンの中の体内に辛うじて残っていた空気が、水圧で押し出される。

ケロタンが息してなくてよかった!!

マジで！

どのくらい流されたのか、進行方向に光が見えた。

ドドドドドドドドド。

大量の水が何処かへへ落ちる音が、近づいてくる。

ケロタンの身体は怒濤の勢いで、光の中へと吸い込まれていった。

ザッパ

ン!!

「キヤ

!!」

無数の金切り声が響く中、ケロタンの身体が空中で弧を描く。

幾百もの蝋燭の明かりに、水飛沫がキラキラ光る。

ベツチョン!!

ケロタンの身体は、たつぷりと水を含んだ頭部から無残にも床にたたきつけられた。

シン。

張り詰めた沈黙が支配する中、アタシは床に両手をついて身体を起こす。

ボタボタボタ。

鏡みたいにツルツルに磨き上げられた床に、水滴がしたたり落ちる。

そこに映り込むのは、黒いカエルのぬいぐるみ。

解像度の悪い鏡像だけど、パツと見た感じでは目立つほころびはない。

目とかもげちゃってたらどうしようかと思ってたけど。

大丈夫、黄緑色の目は二つともある。  
ホツとしつつ顔を上げれば。

正面の壁に垂れ下がる茨の蔓に囲まれたく尾のない獣の青い旗。  
デカいな。確実にウチのリビングよりはデカい。  
どうやら、目的地には着いたらしい。

確かにあの少年、いやあの男は、嘘は言わなかった。  
言わなかったけど。

ジョボジョボジョボジョボ。

スーパー銭湯なんかでよくある「打たせ湯」にそっくりの注ぎ口  
から、絶え間なく流れ落ちる水。

そして半裸の巫女さん達。

ポロリもあるよ

どころじゃないよ！

ここってどう見ても、シャワールームなんだけど！？

アタシはなるべく視線をぼかしながら立ち上がると、ケロタンの  
両腕を絡ませて、どうにか水気を絞り出す。

ジャ。

痛い。

イヤ別に、身体が痛いんじゃない。

固まったままコチラを凝視している彼女たちの視線が、物凄く痛  
いのだ。

「……………イシユ・メリグリニアに取り次ぎを」

ジャ ツと身体を絞りながら、アタシは漸くそれだけの言葉を  
絞り出した。

あの男、絶対この事を知っていたのに違いない。

さて。

どこから遡って話せばいいんだろう。

話すつたって、一体誰に話してんだよって話だけれどもさ。

敢えて言えば、アタシだ。

アタシはアタシに話してるのだ。

多分。

ムダメンどもが消え去った後、突如現れた謎の少年。

いや本当は、「少年」じゃなかったんだけど。

今はまあ、謎の「少年」にしておこう。

んでもって、少年は言った。

「余の名は」

何とかかんとか・ロルド・イスマイル・何だかんだ・イス・イス  
マイル。

ぶっちゃけ言っつて、覚えられたのはそれだけだ。

相変わらずムダに長い名前である。

テストの時に名前書くスペースに、絶対入りきらないだろうな。

それともアレだろうか？ 向こうの世界のテストは、名前書くスペースはデカいんだらうか？ というか書いてるだけで、ムダに時間を浪費しそうだ。

だけど向こうの人間に言わせれば、大変合理的な名前らしい。

名前を聞けば、父方の血筋と母方の血筋と、家門が分かるから。

血筋だけでいいんじゃない？ とかつて思うけど、養子縁組と違って場合もあるから、家門もちゃんと必要らしい。

それを「面倒くせ〜」とか思うアタシは、だから多分向こうの人間の名前を覚えきれないんだらう。

それでもまあ、合理的つてのは認めてもいい。

たったコレだけでも、分かる事があるからだ。

まず「イス・イスマイル」。

「イス・イスマイル」は、イスマイル国王の嫡出子つて事。

つまり国王と正妃との間にできた子供の事だ。

妾妃との間に出来た子供は当てはまらないので「イス・イスマイル」とは名乗れない。

それはすなわち、王位継承権を持ってないつて事になる。

庶子は王の許可があれば「イスマイル」を名乗る事ができる。

けど、それじゃあ王統でも「王の子供」じゃない嫡出子、例えば

王弟の子なんかと差別化ができないので、「家名」の前に来る修辭詞で区別する。

当主つまり国王は「ロルド」、女王なら「ロルカ」。皇太子は「ロシエス」で、皇太子が女子なら「ロシエーヌ」となる。それ以外なら男子は「ロエル」、女子なら「ロラン」。

それが「庶子」の場合は、何もつかない。

下手したら、家名も名乗らせてくれないらしい。

名前一つでその人の立場が分かる、ある意味残酷な制度だ。

だからアタシは、合理的だとは思っけど、同時に「ムダ」だとも思う。

だってさ、血筋や家名で人間性は分かんないじゃん？



湧き上がる。

アタシはこの少年の、いやこの男の名前を耳にした事はない。  
いやまあ、さっき聞いたけど。

覚えてないから、ノーカウントだ。

けれどアタシの中にすっかり馴染んだ、アタシのじゃない記憶が、  
男の名前を紡ぎ出す。

ナイアルドゥクルスト・ロルド・イスマイル・アウラ・エナ・エ  
ラハルド・ハジエク・イス・イスマイル。

前イスマイル国王にして、アディーリアの夫、そしてリズの父親。  
男はアディーリアの記憶の中で、キラキラと輝いていた。二昔前  
の少女漫画みたいに。キラキラと、そりやもうキラキラと。修正液  
をぶちまけたいくらいにキラキラと。

そのキラキラ男には、もう一つ名前があった。

セラーデイス・アヴィスレーダ・クルスト。

玉の聖者クルスト。

アディーリアは男の事をたまに巫山戯て、「私の瞳マナ・アヴィスレーダ」と呼んでい  
た。

その呼び名を浮かべると同時に、全く別の記憶が蘇る。

蠟燭の頼りない灯火の中、「お義父様」と「師母様」が何かを囁  
きあっている。

「エス・エイシアン」王統に漸く生まれた聖者、我が「彩の  
聖者」と「掛け合わせる」のに相応しい。

何これ!?

こんな記憶知らない!



今まで見た事がない！

男の葬儀は、イスマイル王国とユージェニア大神殿とが共同で主催し、それはそれは盛大なものとなったという。

半年も前の事だ。

そう、半年前。

アタシは、この瞳の主に言った。

アディーリアからの手向けの言葉を。

「何で…！？」

アタシの声は、殆ど叫び声に近かった。

何で今更！？ てか！ なに若返ってんの！？ アンタ四十半ば

のオッサンじゃん！！

アタシの頭の中で、色んな疑問がグルグルと高速で旋回する。

一体こここの時間はどうなってるんだ？

何時からおかしくなったのか？

最初からおかしかったのか？？

そもそも「今」は「何時」なのか？？

二日前？ 半年前？

アタシが時間を移動してんの？

それとも連中の方が移動してんの？？

何かよく分からない心のゲージがグングンと上がっていく。

その時だった。

「……………ッコ」

咳き込む様な鳴き声に、アタシはハッと顔を上げ。

ソレを見つけた。

金色の頭の上にちょこんと乗ってる黒いソレ。

若草色の目が、ギョロリとアタシを見つめてる。

「カエル

…！！」

アタシは。

心細くて。

懐かしくて。

思いつきり跳びかかった。  
じゃなくて抱きついた。

結果的に、少年姿の男を突き飛ばしてしまった事は、不可抗力だったと言っておこう。

## 第四八話 カエルの擬態にハンパはありません その2

「とりあえず、質問は三つある。何故そなたからアデーリアの気配がするのか？ カウゼルの側近達とそなたの関係はどのようなものなのか？ イスマイルに地震が起こるといふのは本当なのか？」

少年 イスマイル王国第三八代国王ナイアルド「以下略は、むつつりと不機嫌を隠さずにそう言った。

別に怪我したわけでもないんだから、そんなに怒る事ないのに。

なんて思いつつ、アタシも言っちゃった。

「アタシも質問がある。アンタ、何で若返ってんの？ 何で素直にあの世に行ってないの？ 言っておくけど、アンタは生き返らないからね？」

「最後のは質問ではあるまい」

「疑問形にしたじゃん」

「語尾を上げたただけだろうがっ」

まさか地下水道が大神殿に通じてるなんて、思ってもみなかった。ベチヨン。

あんな隠し仕掛けがあるなんてさ。

グシャン。

やっぱり国王ともなると、そこら辺の情報はハンパないんだな。  
ベシャン、バシャン。

けどさ、だったら絶対知ってたはずだ。

グチャン。

女子用シャワールームに通じてるってっ。

ドシャン、バチャン。

アタシは今、ツルツルに磨かれた階段を上っている。

先程から響いている、やたらと水気の多い効果音は、五号の足音だ。

なんせびっしょびしょに濡れたままなので、まあ謂わばこれも不可抗力だ。

そんな風になんか心の中で言い訳しながら来た道を振り返れば、B級ホラーに出てきそうな濡れた足跡が続いている。

流石にこれはマズいか？

なんて思っていると、

「あの……」

案内役の神官さんがおずおずと声を掛けてきた。

「如何した？」

向き直って問い返すと、神官さんは視線をふらふらと泳がせながら言った。

「その、お絞りしましょうか？」

何を？

とは敢えて聞かないけど。

そりゃまあ、これだけ綺麗に磨き上げた廊下やら階段やらを汚されるのは嫌だろうし、アタシだって気が引ける。

けどさ。

今ココで絞って貰うわけにはいかないよね??

だからってまさかまたあのシャワールームに戻るとなると…。

ガラongoンガシャ　　ン！

金属製のパイプがあちこちで弾け飛ぶ音と。

トトトトトトトトトトトト。

「水が流れ落ちる音」と言うには威勢がよすぎる流水音。

床にはほとんど水が貯まっていつて。

パニックになって叫び出す巫女さん達。

きゃ〜ん！　何これ！　かわいい！！

動いてる！　すご〜い！

なんで？　どうして？　触らせて〜！

あたしも、あたしも！

いや〜ん、ブツサイク！　チヨ〜可愛い！！

……………女の子って……………。

いやまあ、それはともかく。

アタシはどうやら、シャワー室の給水管を壊してしまったらしいのだ。

言い訳をするつもりじゃないけど、正確に言えば壊したのは、水だ。

通常の数倍の水量に、給水管が耐えられなかったのだろう。

通常の数倍の水量にしたのは、まあ、アタシなんだけどさ。

どンドン水かさが増していくのを見て、ちょっとヤバいかな？

とは思ったけどね。

騒ぎを聞きつけてやってきた神官さんがどうにか給水バルブを閉じた時には、水は広いシャワールームからあふれ出していた。

マンションだったら、確実に弁償モノだ。

……………どうしよう。修理代の請求書がリスに回されたら。

つまりアタシは、その事をとても恐れているのだ。

小市民だと笑いたくば笑え。所詮アタシは、夢の中でカエルに憑依できるだけの、しがない一般ピーポーなのだ。

「……………構うな」

アタシは言葉少なにそれだけ言うと、神官さんに先を急ぐ様促した。

とてもじゃないけど、あの惨状を再び見る勇氣はないし、あの可愛らしくも姦しい巫女さん達にもみくちやにされる勇氣もない。

それに確かに急いでるのだ。

「……………畏まりました」

神官さんは僅かに不満そうな顔をしながらも、再び前を向いて歩き出す。

聞き分けの言い神官さんでよかったよ。

それからまた暫く階段を上がって、次に長い廊下を歩いた。

「こちらでございます」

そう示された扉の両脇には、神聖騎士が守るべく立っている。

神聖騎士は、神殿騎士団の中でも超がつくエリートにしか与えられない称号だ。

髪の結び方で他の神殿騎士とは区別されてるらしい。

確かに二人の神聖騎士の髪型は、どうなってるのか分からない程複雑だ。これを毎朝するとなると、かなりの手間に違いない。

キャバ嬢の支度時間とどっちが長いだろう？

二人の神聖騎士は五号を見て一瞬ギョツとしたけど、直ぐに無表情に徹した。

おおっ、流石エリート。

巫女さん達と違って、訓練が行き届いてらっしゃる。

でもまあ仕方がないだろう。

アヌハーン神教で言う巫女さんってのは、ファンタジーなんかでよくある様な「神サマの依り代」とかそんな大それたモンじゃなくて、どちらかと言うと神社でお土産売ってる「巫女さん」に近い。

巡礼者の参拝受付とか案内とか、神殿食 名前だけ聞くと精進料

理っばいけど、そもそも神教には食に関する制限がないので、単なる「粗食」にしか見えないらしい　　を出す食堂のウェイトレスなんかが主な仕事だ。

神官や神殿騎士になるには修行やら勉強やらが必要だけど、巫女さんになるには年齢制限が多少あるくらいで、採用面接に受かればいいだけだ。

つまり、彼女達は普通の女の子なんだよね。

そんな彼女達に免じて、ギョツと齒を食いしぼる余りプルプルと唇や肩が震えているのは、見逃してやろう。吹き出したいのか、叫びたいのかは、最早問うまい。

「お連れしました」

「入っていただきなさい」

扉越しの短いやりとりの後、神聖騎士が両開きの扉を押し開く。招き入れられた部屋の如何にも高そうな絨毯に、アタシは一瞬怯んだ。

この絨毯を汚すのは、処女雪を汚す様な倒錯的な罪悪感を。

まあ、感じたりはしないけどさ。

グチャリ。

アタシは容赦なく、濡れた足で踏みしめた。

グチョン、ベチャン、グシャン。

部屋の奥には、メリグリニアさんが穏やかな微笑みを浮かべて立っている。

全く内心を読ませない不可思議な笑み。

パタン、と背後で扉が閉まる。

そして部屋には、アタシとメリグリニアさんの二人だけ。

「あやつらが幸運にも、ここでの事を思い出したとしても、そうお  
おっぴらに動く事はできまい」

「なんで？ 軍隊とか動かせばいいじゃん」

「どのような名目で？」

「専制君主制なんだから、国王の鶴の一声でできるんじゃないの？」

「その国王をどうやって説得する？ 夢で予言を受けたのだと？」

「そんな事を口にすれば、余計に国王は軍を動かせなくなるぞ？」

「なんで!？」

「歴史上、予言を授かった人間は二人しかいない。始祖皇太后と始  
祖皇帝のみだ。一王国の側近如きが予言を授かったなどということ  
は、あつてはならんのだ」

「だからって！ 実際に地震が起こるのに!？」

「だからこそだ。万が一神殿に漏れたら如何する？ 間違いなくあ

の四人は粛正されるだろう」

「誰に??」

「神教にだ。確実に暗殺される。連中もその事は分かっているだろ  
う」

「じゃあ何？ あの四人に教えても意味がなかったって事？」

「そうとは限らん。地震が起こるといふ名目では動けんが。ヤツら  
の事だ。何某かの対策はするだろう」

「でも大々的に避難させることはできない？」

「それは寧ろ、大神殿にさせた方がいいだろう。神殿騎士団を動か  
すのだ」

「どうやって？」

「神殿騎士団に影響力のある人間に訴えればいい」



「誰?? ヴイセリウス大神官?」  
「いや。メリグリニア神官長だ」

「お初にお目にかかり、恐悦至極に存じます。これなるは、テレザリア・グルシエニカ・クラン・メリグリニア・アウラ・キズワース・ハジエク・メファスと申す者。しがなき神の僕でございます」  
メリグリニアさんは腕を胸の前で組んで両膝をつくど、厳かな口調で言った。

そのポーズは、神官の最上級の礼だ。

神官はどんな大国の王だろうとも、膝をつかない。彼らが膝をつくのは神だけだ。

二号に会った時には、しなかつた礼。

それが意味する事は、アタシにだって分かる。

ケロタンを「奇跡」認定する事が、神教内で公式決定したって事だろう。

その事に、アタシはゾクリと身震いしそうになった。

ケロタンが地震の予言をしたとなれば、リズの神人認定は、ますます免れなくなる。

だから、迷った。

本当に、迷ったのだ。

大神殿に来る事を。  
地震で犠牲者がでると分かっているても。

「どうかしたか？」

「ケロタンが大神殿に行ったら、『奇跡』認定は避けられないんじゃないかと思つてさ？」

「リズナターシユが神人になるのが嫌か」

「ただの神人ならいいよ。聖者とそんなに扱いはかわないだろうし」

「では言い方を変えよう。『名の秘された皇国』再興の旗頭にされるのは嫌か？」

「何で知つてんの？ いや、知つてて当然か…」

「リズナターシユが『聖者』として生まれた瞬間から、『神人』になる事は決まっている。……ヤツらは用意周到だ。逃れる事より、利用する事を選ぶ方が賢明だ」

「そつだとは思つ。けど…」

「自信がないか？」

「あるわけない。アタシはただの学生だし。絶対に経験値が不足してる」

「ならば余を利用するが良い」

「アンタもう死んでんじゃん」

「  
」  
アタシは迷う。  
アタシは惑う。  
そしてアタシは、決意する。

第四九話 カエルの擬態にハンパはありません その3 (前書き)

お久しぶりです。私事でお休みしてしまいましたが、またよろしく  
お願い致しますm( )m。

#### 第四九話 カエルの擬態にハンパはありません その3

世界に七つしかない大神殿の一つ、ユージエニア大神殿には、現在五人の神官長がいる。

その中で高齢となったヴィセリウス大神官の後継と見なされているのは、何とかっていう神官と、これまた何とかっていう神官の二人。名前はこの際どうでもいい。何故覚ええない？ とかっていうツッコミは今更だ。答えはズバリ、興味がないからだ。

もつともその二人、特別抜きん出て優秀っていうより、「後継をアグレッシブなまでに狙っている」という意味においてのみ、後継候補なんだとか。

何だか悲しい運命が待ち受けていそうな人物評である。

そんな中メリグリニアさんの表だつての評判はといえば。

控えめで職務に忠実な中道穏健派。平たく言えば現実路線の平和主義者つて事だ。

けれど実際は、知る人ぞ知るヴィセリウス大神官の懐刀、らしい。

余の印象を率直に申せば。

と、リズ父は前置きしてこう言った。

洞察力に富み、先見の明がある。同時に計算高く冷徹な人物でもある。

ああ、うん、そんな感じはするよ。

と思つたけど、続く言葉に途方に暮れた。

腹の底を読み取るうとしても、さっぱりしつぽを掴みません。

得体が知れないと言つてもいい。

その言葉を、アタシは今、シミジミと噛みしめている。

穏やかな微笑みを浮かべながら、何一つ心の中を見せない銀色の瞳と対峙しながら。

「黒のケロタウロス様の行啓、我ら神官一同望外の喜びではありませんが、お呼びいただければ喜んで参上つかまつりましたものを……」

メリグリニアさんは相変わらず両膝を床についたままの、神官  
最上級礼の姿勢のままだ。

ええと、翻訳すると。

突然あんなとっから現れるんじゃないかねえ、こちらイロイロ探られ  
たくない腹があんだよ、用事があるならそっちに行くって言ってん  
だろ、バーカ。

てトコか？

それとも、そう聞こえちゃうアタシの耳に問題があるんだろうか？  
銀色の眼差しは、強くもないのに心の奥底を見透かされそうな得  
体の知れなさがあった。

それは王府で会った時とは格段の差で、ひよっとしたらあの時は  
そういったモノをセーブしてたんじゃないかと思う。

今は何て言うか、だだ漏れって感じ？

こうして二人つきりで向かい合うと、嫌と言うほど実感する。

マジで格が違い過ぎマス。ゴメンナサイ。

けれどアタシは、リズのために、引くつもりは毛頭ないっ。

ああ、思い出す！ リズがケロタン達の名前を初めて呼んだ時の、  
あの感激をっ！

いやまあ、リズは初日に全部覚えてただけだね。何せリズは、と  
つてもとっても賢いからねっ。言っておくけど、身贔屓じゃないよ  
!?

なんて心の中でちよっぴり現実逃避しつつ、

「我はサウザード・ネルス・ケロタウロス。我が主の養い子、リズ  
ナターシユの守護者である」

あの男に入れ知恵して貰った通りの台詞を抑揚のない声で言うと、  
メリグリニアさんは口元にこれまた何とも意味深な笑みを掃いた。  
だからさあ、その笑顔の意味は何なんだよっ。

と問い質したところで答えてくれる相手じゃなし、今はそんな事  
に拘っている場合じゃない。

ここに来るまでに確実に半時間<sup>シナス</sup>はかかってる。

王都から大神殿まで馬で二時間<sup>ジナス</sup>つてトコらしいから、十分上出来  
なんだけど。

地震が起こるまで、あと一時間<sup>ジナス</sup>半つてトコだろう。  
地球時間に換算すれば二時間強。

うわ、そんなんで、一体何ができるんだよって話だけど。

大神殿周辺は巡礼者が沢山宿泊してるだろうし、そもそも大神殿  
内の人口だって相当なもんだ。神殿騎士団が上手く誘導して彼らが  
パニック起こさなきゃ、どうにかなるかもしれない。うん。希望は  
持てる。多分。

「火急の事にて、要件のみを言う」

アタシは口調が速くならない様に、気をつけながら言った。

「今宵、大地が揺れる」

たったそれだけの言葉だったけど、メリグリニアさんはちゃんと  
理解してくれたらしい。

「地神の寝返り、ですか？」

アタシはその言葉のに無言で頷く。

地震は、こちらの世界では「地神の寝返り」と呼ばれている。

その災害規模を考えると、なんだかなあってネーミングだけど。

そこには何の意図もないってのを表すには、よく出来た言葉だと思  
う。

アヌハーン神教では、神は人を罰したりしない。

だからつまり、天災は「天罰」じゃない。

台風は風神のくしゃみで、津波は海神のでんぐり返り、噴火に至  
っては山神のゲロだ。

ぶっちゃけどうかと思う設定だけど、そもそも海神は何故前転

するのか？ 運動好きとかいう設定なのか？、そこには悪意も

善意もない。

謂わば不可抗力ってヤツだ。甚だしく迷惑な、ある意味理不尽の  
極みだと思っけど、アタシはそういう神教の考え方は嫌いじゃない。

てのも、「天罰」だって言えば幾らでも人々の不安を煽ることが

できる。不安に煽られた人達に寄進させて私服肥やすとか、幾らでもしようと思えばできる。それを敢えてするつもりはないって事だからね。

神サマは人間に無関心だなんて、一体何だってそんな教義を採用したんだかは全く謎だけど、その点に関してだけは評価している。まあアタシの評価なんかいらないだろうけど。

大体さ、天災にもし誰かの意図があるなら、被災者として選ばれた理由と選ばれなかった理由を、生き残った人達は考えるよね。でもさ、納得出来る理由なんか絶対見つからないだろうし、拳げ句の果てに罪悪感の無限ループに陥って精神を病む何てことになっちゃうんじゃないだろうか。

「時間はもうあまりない。しかるべき時に向けて備えるがいい」

メリグリニアさんは、ヴィセリウス大神官じゃなくて、敢えてメリグリニアさんを指名した意図を分かってくれるだろうか？

大々的に神殿騎士団を動かすには大神官の承認が必要だけど、メリグリニアさんなら「後から」でも承認を取り付けられるはずだ。

大神官に会うにはイロイロと手間が必要だし、そもそもヴィセリウス大神官は神殿騎士団を掌握し切れていない。メリグリニアさんが大神官に付いているから、神殿騎士団は従っているだけらしいのだ。メリグリニアさんは数瞬何かを思案して、銀の瞳でまっすぐに見据えてきた。

「何故とお伺いしても？」

曖昧な言い方は態とだろうか？

何故この英霊に守られた聖地で地震が起こるのか？

何故地震が起こることをわざわざ知らせに来たのか？

どちらとも取れる問いを、アタシは敢えて後者の方に捉えた。

「リスナターシュが悲しむ故に」

アタシがそれだけ言うと、メリグリニアさんは口元に弧を描いた。

頭のいいメリグリニアさんなら、何故リスが悲しむ事になるの



か分かったはずだ。

なのになんで今そんな笑みが出てくるのか。

アタシには分からない。

まるで猫が獲物を見つけたみたいなの、不穏な微笑み。

アタシはゾワゾワとした嫌な予感が足下から這い上ってくる様な気がした。

ああ、ケロタンに入っててよかったよ。

でなきや、怖じ気づいてるのが丸わかりだ。

メリグリニーアさんは、笑みを掃いたまま深々と頭を垂れた。

「このメリグリニーア、ラナヤーデイス・イデイスレーダ・リスナ  
ターシュに心よりお仕え申し上げます」

リスの聖者としての称号は「玉の聖者」セラードイス・クレメンセータだ。

けどこの騒動が終わった後、神人となる。けれど、ただの神人  
じゃなくて、「神の最愛人」ラナヤーデイス・イデイスレーダになるって事だろう。

それは即ち『名の秘された皇国』初代皇帝以来の、称号だ。

これで、嫌になるくらい、皇国復興の条件は揃ってしまった。

「余が何故この様な姿をしているのか？ 知れたこと。死したる  
魂は生前最も幸福を感じた時の姿になるからだ」

男が当然だとばかりの顔でそんな事を言うから、アタシは猛然と  
抗議した。

「何それ、ちょっと待ってよ。それじゃあアデーリアと過ごした時間は幸せじゃなかったって事？ リズが生まれて嬉しくなかったみたいじゃんっ！」

アデーリアの魂は、死んだ時のままだった。

いやまあ死んだ時は病気でやせ細っていたから、アレは病気になる前の姿なんだろうけど。極端に若かったり何て事はなかった。言動はどうかと思うけど、少なくとも見た目は、二十代半ばの大人の女性だ。

アデーリアにとって幸福だと言えたのは、この男とリズとと共にあつた時間だ。

なのにこの男は、思春期真っ盛りみたいな姿をしている。

疑うべくもなくアデーリア側の人間としては、当然の疑問だろう。

すると男は、そうではないと首をゆるく振った。

「この姿は、アデーリアと初めて会った頃のものだ。まだあの頃は、この美しい少女を娶ることが出来ると、ただ無邪気に喜ぶ事ができたのだ。無論、アデーリアを妻としてからも幸福ではあつたが、その頃の余は、アデーリアの事だけを考えているわけにはいかず、寧ろアデーリアを苦しめた事を思えば、諸手を挙げて幸福だつたとは言い難いのだ。ああ、今でも昨日のこの様に思い出す。初めて会った時の、アデーリアのあの愛らしさ」

「ちよちよちよちよ、ちよと待て！」

遠い目をしてそのまま回想に入ろうとした男を、アタシは慌てて止めた。

「アデーリアとアンタって、十歳以上離れてるよね？ 今のアンタってどう見ても十代前半じゃんっ。それって、アデーリアが幾つの時よ??」

「三歳になるかならぬかの頃だろう。クリシアが滅びる前であつたな」

「三歳児にときめいたのか!??」

それって完全にロリじゃんか!!

「三歳児であろうとも、アディーリアは美しかったぞ?」

「そりゃ綺麗な子だっただろうよ!」

リズの母親なんだからっ。

三歳のリズに出会った時の衝撃は、今でも忘れられないくらいだ。けどさ、だからって、ときめいちゃいかんよ、君!

何て思いながらアタシがワタワタしていると、男は不遜げに笑って言った。

「恋をするのに、年齢は関係ないだろう?」

「それは恋をする方の話であって、される方の年齢は考慮しようよっ」

「別に何かしたわけでもあるまい。それ程騒ぐことでもなからう」  
それはそうかもしれないけど。

「じゃあちよつと聞くけど、三歳のリズにどっかの男が懸想したらどうすんのさ」

「勿論殺す!! いや、殺すだけでは飽き足りん! 生きたまま内臓をえぐり、四肢を裂いてやろうぞ!」

ああ、うん。その意見には大いに賛成するよ!

でもちゃんと自分にも当てはめようね!!

もう既に、その頃にはリズの運命は決まっていたんだろう。

リズの人生が、リズ以外の意図で決められている。

それはリズの生まれを思うとある程度は仕方がないかもしれないけれど、あの男の言葉にアタシは心底ゾツとした。

「リズナターシユばかりではないぞ。神教は、リズナターシユを娶せるための皇統の男子を用意しているはずだ」

だからアタシは「奇跡」になる。

神教が、手出し出来ない本物の「奇跡」に。

## 第五十話 カエルの擬態にハンパはありません その4

それから後の展開は予想以上に速かった。

メリグリニアさんは神殿騎士団に驚くほど適切な指示を出し、彼らは彼女の命令に疑問を挟むことなく行動した。

その殆ど迷いのない指示に、メリグリニアさんは地震に遭ったことがあるのかもしれないと思った。

どうやら彼らは、大神殿前の広場に人々を集めるつもりらしい。

何でも、大神殿前の広場は、王城前の広場よりもずっと広いんだとか。

大神官就任式には、そりゃもう普段の何倍もの巡礼者が訪れるので、それに備えて相当広く作られているのだそうだ。

「黒のケロタウロス様。避難の際に特に気をつけるべき事はございますか？」

「どうやって編み込んでんだろう？ と訊きたい様な訊きたくない様な複雑な髪型の神聖騎士を前に、メリグリニアさんが訊いてきた。」

神聖騎士はあたかも神官長からの指示を待っているかの様に目を伏せているけど、実際は五号の姿を直視したくないだけなんじゃないだろうか？

だってさ。

カエルだよ？ 布製の。

しかも珍妙としか言いようのない。

ソレが神官長サマの上座に座ってさ、しかも神官長サマがソレにお伺い立ててんだもん。

世に名だたる誉れ高き神聖騎士だって、見なかった事にしたくなるってもんだらう。

分かるよ。その気持ちは分かる。

けどさ、これから先のことを考えるとさ、どんなに受け入れがた

い事だろうと現実として受け止めてもわらなきゃあいかんワケよ。

「クツシヨンを持って」

アタシは五号のキャラを守って、言葉少なに言った。

それをメリグリニアさんが、エスパーか！？ と問い質したくなる様な正確さで補足する。

「ああ、そうでした。落下物から頭部を守るものが必要なのですね？」

「うむ」

てか、分かってんなら訊くなって話なんだけどさ。

多分、メリグリニアさんとアタシの意図は、一致している。

それは、神殿内へのケロタンの周知だ。

だからメリグリニアさんは、自分でも分かることをわざわざ五号に訊いてくるんだろう。

そしてだからアタシも、この場に留まっている。

ま、帰りようがないってのもあるんだけどね。

だって帰り道、分かんないし。

ホラ、アタシってば、殆ど後宮から出たことのない、箱入りじゃん???

まあ箱入りというには、地下迷宮で「見てはいけないモノ」を散々目にしてるんだけれどさ。

ところでその後宮は、今頃どうなってんだろう。

多分四号が何かやってるんだとは思っけどさ。

しっかりしている様に見るあの四号も所詮アタシだからな。

アタシが五号に入ったのは、二号が地下迷宮に降りると殆ど入れ替わりだった。

覚醒した途端、「ヒッ！」という二号の短い悲鳴を聞いて思った。気の毒に。

いやまあ、悲鳴を上げてるのも上げさせてるのも、アタシだけれどさっ。

のど元過ぎれば何とやら、結局過ぎてしまえば全ては思い出となり体験は記憶の海に沈むのだ。  
なんてね。

ウオークインシューズクロゼットに二号のアタシを放り込んだ四号のアタシは、五号のアタシに向かって頷いた。

ややこしいなっ。  
ともかく、四号の後に続いて、アタシは天蓋のカーテンをくぐった。

「サウザ!？」

四号に引き続いて五号まで現れた事にリズは驚いて、希有な紫色の瞳をこぼれ落ちそうなくらいに見開いた。

思わず、落ちてきた眼球を受け取るうと手を差し出しそうになったくらいだ。

けれどそれは直ぐに神妙な表情に取って代わり、

「サウザも、英霊の元へ行くの?」

英霊? 英霊って、なんじゃそりゃ?

いやまあ、英霊自体は知ってるけどさ。

ああ、そっぴゃあ、二号のアタシに四号が何か言ってたな。

英霊が、女性である事を祈るわ。

あの時、四号のアタシはリズに何て言ってたんだっけ? 二号のアタシはほんやりしてて聞いてなかった。

だからこの場で適切な台詞を言える自信が全くない。

どう答えるべきか考えてると、四号のアタシが言った。

「いいえ。サウザには別の使命があるわ。でも、それをなす前に、リズに伝えなければならぬ事があるの」

四号のアタシはそう言つて、五号のアタシを促す様に頷いた。

その言葉につられてか、リズがアタシを見つめてくる。

あのさ〜。

そりゃ、アンタには「何時か来た道」なワケだからさ〜、全部分かってんだろうけどさ〜、それはムチャぶりってやつじゃね??

との思いを込めて、アタシは四号を睨み付けた。

そんなアタシの心情など当然お見通しなんだろう。未来のアタシは、早く言えこんのボンクラッ！ とばかりにギツと歯を剥いてきた。

すつとぼけた表情のカエルのぬいぐるみが、顔の中心に皺を寄せ歯を剥き出しにしている姿は、正直言つて不気味だ。

怖いわ！ ボケー！

と思つたけど、五号のキャラでは反論できない。

くっそう。それも分かつて全部やってるのかと思うと、我ながら、何てたちの悪い女なんだ。

けれど、四号の言う通り、アタシはリズに言うべき事があるのも事実だった。

「リズ」

「サウザ？」

戸惑う様に、けれども疑いのない目で真っ直ぐに見つめ返してくるリズに、アタシは覚悟を決めて言う。

「リズナターシュ」

アタシはその柔らかな頬を撫でながら、リズの名前を口にすると、声に、目一杯の愛おしさを乗せて。

アタシは時々思う。

アタシのリズへの思いは、アディーリアから写し取ったもんじゃないだろうか。



だって、それくらいリズが愛おしい。

九年間見守っていたって言っても四六時中じゃないし、ひと月近く会わない時だってある。

けれどアタシには、アデーリアのリズを生んだ時の記憶があつて、リズを初めて抱いた時の記憶があつて、リズを残して逝つてしまった記憶がある。

アデーリアの記憶は映画を見ている様なもんだけど、徹底的に語り手視点の映像は、語り手の感情を追体験させる。

だからと言って、この気持ちが紛い物だとは思わない。

リズが愛しい。

だから、守りたいと思う。

なのに、アタシはリズに、「神人なりたくないか」とは訊けない。アタシは無力でちっぽけすぎて、それを阻止する力がないから。

「そなたは何時か、我らを憎む日が来るかも知れん」

アタシの言葉をリズは直ぐさま否定する。

「そんな事、あるわけないわ！」

アタシはそれを肯定も否定もしない。

ケロタンがいなかったとしても、リズは神教によって神人に仕立て上げられるだろう。

皇国再興の魁に相応しい「奇跡」を、神教は用意していた事だろう。

でも。

ケロタンさえいなければ。

リズがそう考える様になっても仕方がないと思う。

だって、アタシでさえ思うんだもん。

ひよっとしたらって。

決して訪れない未来には、「もしも」の願望が強く映し出される。

アタシはその事を、よく知っている。

「未来の事は誰にも分からん」

「でもっ！」

アタシはリズの唇に指先を当てた。

何のためについてんのか分かんない五号の柔らかい布製の爪は、リズの唇を傷つけることなく、プニユツとへこませるだけだ。

その感触が余りにも愛おしくて、プニユプニユと何度も押ししてしまった。

「サウザ…」

呆れかえった四号の声に、ハッと我に返る。

いかん、和んでる場合じゃなかった。

これからの事を思うと現実逃避したくなるけど、リズの唇に逃げちゃいかん。

………なんか卑猥な表現になっちゃったな。

くれぐれも断っておくけれど、アタシにその手の趣味はないっ。

「サウザ？」

五号の不審な行動に小首を傾げるリズに、アタシは苦笑する。

「寧ろ憎んでくれてもいいのだ。その資格がそなたにはある」

神人になることは、今まで以上のプレッシャーがのし掛かるって事だ。

常に期待され、常に人の模範である事を求められ、常に公正でらねばならない。

神人は神にも等しい人だから、誰かをひいきしちゃいけないし、誰かを嫌ってもいけない。

そこにあるのは、孤高という名の孤独だ。

でも人じゃないケロタンなら、リズは嫌っても憎んでもいいのだ。本当は嫌われるのも憎まれるのも嫌だけど、だってアタシは決めたのだ。

リズを「神人にさせられる」んじゃないくて、アタシがリズを「神人にする」って事を。

自分から責任を被るくらいの勢いがなきゃ、多分この先やってけない。

この先何があっても自分が選んだ道なら仕方がないって思えるけ

ど、流された先の道なら誰かに責任転嫁してしまい、決してリズの支えにはなれないだろう。

ぶっちゃけ言って、覚悟はない。

アタシは弱い。

けれど、これだけは信じて欲しい。

「我らのそなたを愛おしいと思う気持ちだけは、疑ってくれな  
もしリズが信じてくれるなら、アタシは多分なんだってできる。  
何を犠牲にしてもいいし、誰を犠牲にしてもいい。

迷うだろうし、怖じ気づくだろう。けれど後悔だけは絶対しない。

「意味、分かんない……」

困惑気味に俯くリズに、四号のアタシが言う。

「今は分からなくてもいいの。普段私たち相手にすら殆ど喋らない  
コレの言うことを、どうか覚えていてちょうだい」

五号のアタシは、言葉もなく頷きもしないリズの頭をゆっくりと撫でる。

それを黙って受け取るリズに、聡い子だからこれから起こることの全ては知らなくても、重大さを理解しているのかもしれないと思う。

そんなリズを、アタシは支えられるだろうか？

うつん、そうじゃない。支えてみせる。

「もう時間がないわ」

四号の言葉を合図に、アタシはベッドから飛び降りた。

「サウザー！」

「黒のケロタウロス様」

アタシを呼ぶ柔らかい声に、ハッと我に返る。

「そろそろ我々も……」

メリグリニーアさんの言葉に、どうやら大神殿内の避難は殆ど完了したらしいと悟る。

リズ、不安がってないかな？

リズの五号を呼ぶ声が鼓膜に蘇る。

あの時リズに言った言葉は、謂わばアタシの覚悟だ。

これから起こる出来事に、今までみたいに漫然とただ流されるだけじゃなく、ちゃんと責任を負うっていう覚悟。成り行き任せじゃなくて、自分から行動するって覚悟。

「うむ」

アタシの言葉に、

「失礼します」

と行って、凜々しげな神聖騎士が五号の身体を抱き上げる。

まだ強か濡れてる五号の身体から水が染み出て、見る見る内に神聖騎士の白い制服にシミを作った。

小心者のアタシとしては、申し訳ない気持ちになるけど。

五号のアタシは、気にもしてないフリをする。

自分で歩けるけど。

しかも全力で走れば、確実にこの神聖騎士より速いけど。

てか、ここが何階か知らないけど、ぶっちゃけ窓から放り投げられても、全然平気なんだけど。

とは言わずに、

「行け。時間はもうない」

アタシはこの時、すっかり失念していた。

ヴィセリウス大神官がどうなってるのかって事を。

後から考えたら、直ぐに分かった事なのに。

リズの後見人である大神官が、リズの「奇跡」であるケロタンに、挨拶に来なかった事を。

アタシの思惑とは関係なく、何かが蠢いていた。

## 第五一話 カエルの首は回りません

「つ、疲れた…」

アタシは色のない地面に手をつけて、吐息と共に呟いた。

そう言葉にしてみると、確かに疲れているのだと自覚する。

いやだつてさ。

本当に疲れたんだよね。

精神的に。

何て言うの？

腹に一物、どころか百も二百も隠し持ってそんな人間を相手にするのは、ホント気疲れするんだよ。

しかも、一応協力関係にあるわけだから、下手な事も言えないし。

これがさ、あのムダメン共だったらさ、適当に八つ当たりしつつ殴る蹴るの憂さ晴ら…ゲフンゲフン。

まあともかく、何をどう思われても大して支障がない連中よりは、余程気を張らなくちゃいけないワケで。

顔を上げると、天と地との境のない茫洋たる空間で。

殺風景な事極まりないにも関わらずホッと和んじやうのって、人としてどうよソレ？

なんて思わず微妙な気持ちに陥っていると、

「キュルル〜」

どこからともなく腹の虫が…。

え？ アタシ、腹減ってんの？

身体ないのに???

戸惑うアタシを余所に、再び腹の虫。

「キュルルルルル〜」

それは右の方から聞こえてきた。

音源はどうやらアタシの腹じゃない。

音源を辿って振り向くと、白いカエルがチヨコンと座っていた。

何故かパチパチと、音が出そうな勢いで瞬いている。

敢えて控えめに言えば頻りに何かを訴えているみたいな、ぶつちやけ言えばアゲ嬢が力モに何かをねだっているみたいなの仕草にしか見えないんだけど…。

え？ 何？？ 次は三号なワケ？ 四号は？ 何時になったら四号に入れるワケ？？

今度は一体何をさせられるのかと戦々恐々としながら白いカエルを見つめていると。

「ゲコ」

今度は別の方向からカエルの鳴き声。

誰だ？？

と思つて振り返ると。

青いカエル。

え？ 二号なの？ 二号は今頃靴部屋で靴に埋もれてるじゃん！

「オゲエ、オゲゲゲエ」

ハッ！ このゲロ吐いてる様な鳴き声は？

声の方向に視線を向ければ、予想通りに赤いカエルが。

てことは、一号？

ええええ？ どれ！？

どれに入れつつゆうの？？

対外的にはもうできることはやったと思つていたアタシは、あと何すればいいっちゃうねん！？ というのが正直なところだった。

冷静に考えればやるべき事は幾らでもあるんだけど、早くリズの元へ行きたくて気持ち之急いでいた。

てかこの気疲れを癒したい。癒されたい。リズを抱きしめて頼ずりして、リズ的笑顔で和みたいっ。

で、その肝心の緑は何処よ？ 緑のカエルは一体何処にいやがんだ？？

アタシがブンブンと首を回して目当てのカエルを探していると、「何をキョロキョロとしておる？」

良く言えば鷹揚、ぶつちやけ言ってるつきり他人事ってな感じの余裕ぶつた声に、むかつ腹が立った。

「見てわかんねえのかよつ。さつさと四号出せ！ 出しやがれ！」

「く、苦しいつ。離さんかつ、余を誰と心得る」

「貴様なんぞ、ロリコン変態じゃあ、こんのクソボケエ！」

「う、うぐぐつ……」

向こうの連中ってのは背が高い。

中身は中年親父、見かけは十代半ばのリズ父は、一五八センチのアタシより十分でかい。

けれどまあここは夢の中なので、アタシは片手でリズ父を吊し上げる事ができた。

身長差のせいで相手の足はキツチリ地面とくっついてるけど。

まあ、そこら辺はご愛敬。

ああ、夢ってスバラシイ！！

なんて高らかに叫びたくなるほど、アタシってば荒んじやってたんだよね。

数時間、神官や神殿騎士や巫女さん達の、見たいんだけど正面から見る勇気はないんだけど、一体何なのアレ！？ 的な視線に晒されたストレス？

それを思う存分リズ父に八つ当たりして悦に入っていると、

「ケロ、ケロケロケロツ」

どこからどう聞いても蛙の鳴き声なのに、なにやら諭す様な響きのあるこの鳴き声は！？

「四号！」

アタシはリズ父をポイツと放り投げると、若干逃げ腰に見える緑のカエルを素早く掌に掬い取った。

「探してたんだよ。も、変態とかロリコンとか若作りとかに絡まれてさ」

「ケロケロ、ケロケロ、ケロツ」

「え？ 変態もロリコンも若作りも同じヤツじゃないかって？ ま



あそりやそうなんだけどさ」

「ケロケロ、ケロロケロケロ、ケロツケロツケロロ」

「あ、そんなに心配しなくても大丈夫。変態はキツチリ葬る予定だから！」

「……………見事に会話がかみ合っておらん」

「大事なのは気持ちだから。大丈夫大丈夫」

「ケロロケロロケロツ」

「ほら、カエルも大丈夫だった」

「……………確実に、言っではおらん」

むづ。

アタシとカエルの仲に水を差そうってか？

性格悪いなあ。

まあ、専制君主なんて性格悪くなけりやあできない職業だとは思  
うけどね。

てか、アディーリアに次いでコイツもカエル語が分かるのか？

それでいて何でアタシには分かんないんだ？

カエルとの意思の疎通なんて、アタシにこそ必要だと思っただけ  
ど。

アディーリアとこの若作り変態にあつて、アタシにないもの。

もしくは、アディーリアとこのロリコン中年とに共通してて、ア  
タシには共通しないモノ。

うゝん。

二人が王族だから？

なわけねえか。んじゃ、聖者だから？

目や髪が紫つてだけで？　なんだそりや。遺伝子レベルの差別か？

いや、そもそもここじゃあ肉体がないんだから、遺伝子の問題じ  
やないんじゃないだろうか？

あとは、うゝん、あの二人とアタシの違いなんて、死んでるか生  
きてるかくらいしか思いつかない。

そう思いつくと、なんだか本当にそんな様な気がしてくる。

死んじやうと、種の壁なんか関係なくなるとか？

アタシが思案に耽っていると、カエル達が口々に鳴き出した。

「オゲエ、オゲゲ、オゲエゲエエエ」

「ケロロロ、ケロケロロ、ケロケロケロ」

「キュル、キュルルルル、キュル、キュルル」

「ゲコーゲコ、ゲコゲコゲコゲコ、ゲコ」

「……………ッ」

若干一匹鳴けてないけど。

ていうか、いたのか黒いの。気がつかなかったよ。

黒いカエルは鳴嚢に問題があるのか、殆ど鳴かない。

なので仕方なく、前回（五号に入る前ね）意思の疎通を図るべく、イロイロと打ち合わせしたんだけど。

ハイなら右手、イイエなら左手を、挙げるって。

「頷く」と「首を振る」でもよかつたんだけど、何せカエルには首を横に振る機能がない。頸椎が一つしかないので、頷くことは出来るけど首を回すことは出来ないのだ。

というワケで、手を挙げるって事で落ち着いたんだけど。

え？ 何でカエルの意見が必要なのかって？

イロイロ入れ知恵してくるリス父の言葉を、鵜呑みにする様な事はしたくなかつたから、まあ要するに、第三者的冷静な意見が欲しかったワケだ。

カエルに意見を求めた時点で、人としてどうなのって気もするけど。

結論から言えば、上手くいかなかった。

何て言うか。

アタシ自身、世の中イエスとノーのどちらかに振り分けられる事は、実際問題余りないって事を失念していたというか。

何か問いかける度に、「どちらとも言えない」という事を表現するためだろう、両手を挙げようとして、その度にコテンと転んじやうカエルが不憫で不憫で。

思わず涙で視界が滲んだよ。うん。

決して腹抱えて笑ったとか、笑い過ぎて涙出たとか、そういう事ではないからね。

「ところで、首尾は如何であった？」

思案深げなりズ父の言葉に、アタシはむうんと考えた。

「上手くいったよ、多分」

「多分、とは？」

「大神殿周辺にいる人間の避難はほぼ出来たとは思っただけだよ。アタシは大神殿の大門から広場に出た途端視界に入った人々の群れを思い出す。

逆にアレだけ沢山いたら危ないんじゃないかと思うけど、神殿騎士団に促されて殆ど全員座ってたから、まあドミノ倒しの被害が出ることはないだろう。

ただ。

「被害状況が分かんないんだよね。揺れた、と思った途端ここにいたからさ」

正確に言えば、五号から離脱してここで目覚めるまでの間には、タイムラグがあるんじゃないかと思う。

あの、自分自身の境界が希薄になるような真っ暗な空間。

多分、アタシはまたあの場所を通過している。

脳裏に残る一瞬の閃きの様な映像が、アタシにそうだと告げている。

けれどそれをこの男に言うのは憚られた。

だってさあ、アンタの奥さんが死後妊娠してるなんて話、どう話しゃいいんだって話だよ。

「なるほど。しかしそなたは出来ることはやったのだ。後は、神の御心のままだ」

「……………」

この男の言うことは、確かにそうかもしれないけれど。

二一世紀の日本人としては、いるんだかいらないんだか分からない

神サマとやらに、何もかもを預けきるなんてのは無理だ。

天災が起こるのは、仕方がない。

アタシ達人間は、ううん、全ての生物は、それを受け入れるしかないワケだし。

でもさ、もしこれが日本の出来事で、何らかの手段で正確な地震予知ができたなら？

その事で警鐘を鳴らさなかったら？ 避難勧告をしなかったら？

それは間違いなく人災だ。

知らせなかった人間は、紛れもない加害者だ。

その時の後悔を考えると、とてもじゃないけど耐えられそうにない。

ふと思う。

結局の所、リズのためだとか言っつて、アタシはアタシ自身が加害者になるのがイヤだっただけかもしれない。

でもそれで結果として、リズの将来を決定づけてしまった。

リズはケロタンがいなくても、確かに「神人」になっただろう。

だからと言っつてアタシの責任がなくなるワケじゃない。

自分から能動的に関わることで、アタシ自身がその責任から逃げないようにしたつもりだけど。或いは顔も知らない不特定多数の責任よりも、リズ一人に対する責任を背負う方がまだマシだと計算しただけかもしれない。

とか思い悩んだところで、もう後戻りはできないし、するつもりもないんだけどね。

「で？」

ロリコン変態若作り中年ヘイカが、不意に声音を変えて問うてきた。

「で？」「つて？」

アタシは顔を上げて、希有な紫の瞳を見つめ返す。

リズの瞳が何処までも透き通る様な、けれども濃い紫なのに対し、この男の瞳の色はもう少し淡くうつすらと白みがかっている感

じだ。

「余と契約する決心は付いたか？」

男の質問に、思案する。

決心、ねえ。

アタシはアディーリアと契約した時の事を思った。

あの時、アタシには「契約」が必要だった。

何故なら、もしアディーリアと契約しなかったら、アタシはそのまま死んでいたから。

アタシは生きたかった。

生きたかった。

目眩がするほど、生きたいと願っていた。

もう誰も、家族はいないと分かっていたても。

何故という疑問をどんなにぶつけても、生きいという思いしか残らなかった。

アタシのその思いがアディーリアを引き寄せたんだと思う。

ま、多少の悪あがきはご愛敬ってトコで。

だってさ、誰だって自分のエゴを正面から突きつけられるのはイヤじゃねえ？

でもさ。

今回は、アタシの何が、この男を呼び寄せたんだろう。

だからこの男との「契約」を先延ばしにするのは、ある種の警戒からだ。

「アタシこそ、アンタの覚悟を聞きたいね」

「ほう？」

「アンタさ」

「何だ？」



第五二話 カエルの首は回りません その2（前書き）

7時頃に投稿したんですが、何故か投稿できてませんでした。活動報告を見て来られた方には、ご迷惑をおかけしましたm（| |）m。

## 第五二話 カエルの首は回りません その2

どうして貴女が、こんなところで途方に暮れていなければいけないのか、分かる？

貴女は確かに死んでいない。けれど、生きてもない。

生きるには、足りていないのよ。

魂が。

欠けて、傷ついて、だから肉体に戻れない。

ならば私の魂を食べて、貴女は生きればいい。

「朝起きたらミリーの足が汚れていたの」

なんだか妙な方向に曲がった身体に微妙な違和感を感じながら、アタシはリズの声聞いた。

なるほど、このタイミングで四号に入ったのか。

と二号の時の記憶を手繰りながら、感慨に耽る。

やっと四号だよっ！

長かった！

イヤ、マジで長かった！

これまでの道のりを思うと、涙で視界が滲みそつだ。

ま、ケロタンは泣かないけど。布製だからっ。



「他のみんなは時々そういうことがあったけど、ミリーは今までなかったわ」

「……………そうだね」

沈んだリズの声に、沈んだ声で答える二号。

とはいえ、二号の声は、優男に相應しい一ミリグラムの重さもない軽やかな声なので、浮き輪を無理矢理水に沈めようとしてるかのような不自然さがあった。

こうして客観的に聞いてみると、二号の声って、「バカにする」のにはとても向いているけど、「心配する」のには向いていない。

二号に対して金髪直情がやたらと腹を立てていた理由が、何だか分かった様な気がした。

次にムダメン共と二号で遭う事があれば、思いっきりバカにしてやるう、うん。

「それだけじゃないわ。ディーがセルリアンナと話したがったり。みんな宛に手紙が来たり…。みんなの事は、私とかあさまとだけの秘密だったのに」

悲しげなりズの声に、記憶を辿る。

この時二号のアタシは、しくじったな、とは思ってても後悔はしていなかった。と思う。

ただリズの不安を取り除ける適当な理由を思い浮かばなくて、軽くパニックってはいいたけれど。

ハッ！ いかん！

パニックたあたしが余計なことを言う前に止めなきゃ！

アタシはガバリと身体を起こして言った。

「その事に関しては、私から言うわ」

「ミリー！？」

突然動き出した四号に、リズが振り返って紫の瞳をまん丸に見開いた。

リズの視線が四号と二号の間をせわしなく行き来する。

ついでに言えば、二号の視線はピタリとアタシを睨んだままだ。

戸惑いと気まずさと、貴様どうすんだっ！　ゴリア！　とでも言いたげな視線。

そんな二号の視線を受け止めながら。

ケツ、まだまだ青いな。

なんて思う。

実際に青い色だとか、そういう事はおいといて。

二号の時に、何か覚悟を決めたかのように見えた四号、即ち今のアタシは、確かに覚悟を決めたのだ。

実際の時間にして僅か数分間のタイムラグは、アタシはあり得ないくらいの経験をもたらしした。

ムダメン共を蹴飛ばした過去も、今は遠く、いい思い出だ。

その経験値の差が、テメエとアタシの差なんだよっ。

っつて、自分で自分に言うのも虚しいわっ。

「リズ、驚いてるわね」

アタシが宥める様にそつと言うと、リズは顔を挙げて健気な眼差しで訴えてきた。

「だって！」

くほっつ。

可愛いつ。可愛いぞ！　リズ！！

アタシは心の中で身悶えながらもそれをおくびにも出さず、ゆっくりと落ち着いた口調で言った。

「そうね。驚くのも無理はないわ。今まで私達が並ぶ事はなかったものね」

アタシの言葉にリズがコクリと頷いた。

「なのに、何故？」

可愛らしく小首を傾げて尋ねてくるリズに、アタシは抱きしめた衝動を抑えるのに苦心した。

いやまあ、抱きしめることに支障はないんだけどさ。

三号だったら、時も所も弁えずに、心のままに振る舞うんだだけじゃ。

四号は、TPOを弁えた立派な淑女なのだ。

「リズ、良く聞きなさい」

アタシはリズを真つ直ぐに見つめながら言った。

視界の隅で、二号が自分の思考に没頭して話を聞いていないのを確かめる。

二号のアタシは、リズと四号の会話を覚えていない。

逆に言えば、聞かせちゃいけないって事なんだと思う。

今から言うことは、アタシにとっては徹頭徹尾デタラメだ。

けれどこの世界の常識からすれば、何一つ齟齬はない、はずだ。

その点の検証は、リズ父で試したから大丈夫だろう。

たださ、自分が信じてもない説明で人を納得させるのって、無理があると思うんだよね。

だから二号のアタシに余計な茶々は入れられたくないというか……。だったら、デタラメなんか言わずに本当のことを言えばいいのにつて思うだろうけど。

リズを中心として腹黒な権謀術策が渦巻いています。

なんて、言えるかよっ。

なんたつてリズは、今夜を境に神人への道を邁進させられるのだ。それだけでも十分なプレッシャーなのに、周囲の人間が信頼できないなんて、どんだけストレスかけるんだつて話だよ。

「ねえ、リズ。『地神の寝返り』を知っているわね？」

突然降つて湧いた様な話題に戸惑いながらも、リズは律儀に答えてくれた。

「えっと……。大地が揺れること、だつたよね？」

その答えに頷きながら、よくできましたとばかりに撫でる。

「寝返りというのはね、人も獣も神々も、寝ていれば必ずするものよ。しなければならぬと言つてもいいわね」

「しなくちゃいけないの？」

「そうよ。しなれば、そうね、人であれば血の流れが滞つて、そこから身体が腐ってくるの」

「腐るの!？」

驚くりズに、アタシは深く頷いた。

寝たきりの病人が床ずれを起こして、そこから体組織が壊死していくつてのは、良く聞く話だ。

それを神サマに当てはめようつてのもどつかと思うけど、神サマだつてナマモノなワケだし、腐ることもあるだろう。

「地の神の身体が腐るということは、大地が腐るということ。腐つた大地には作物も育たない。花も咲かず、実もならず、動物達も棲めなくなるわ」

「だから地の神は寝返りするのね…」

理解の言葉を呟くりズは、けれど直ぐに疑問を口にした。

「イスマイルに余り作物が育たないのは、地の神が寝返りをしていなかったから? イスマイルの食料自給率が低いのは、大地が腐っているからなの?」

おおつと、そうきたかつ。

流石アタシのリズ。僅か十二歳にして、そんな疑問が浮かぶとはアタシが十二の時つて言つたら、日本の食糧自給率が低いなんて知りもしなかつた。

「そういうことではないでしょう」

アタシは少し思案してから、首を振つてそう言つた。

かのインカ帝国の首都クスコは標高三千メートルを超えている。

インカ帝国といえば、トウモロコシやジャガイモなどの栽培が盛んだつたつてイメージがある。

要するに高地に適した作物を見つけて育てたわけだ。

ところでイスマイルの食文化つてのは、簡単に言えば主食は小麦製品で、主なタンパク源は牛だ。当然ながら、小麦も牛もこの高地では育たない。

観光客、じゃなくて巡礼者は言つ、イスマイルでは食生活で困らない。

大陸でスタンダードな食文化と変わらないつてことらしいけど。

それってつまり。

「ただ単に、この土地に向いていない作物を作っているからよ」  
アタシの脳裏に、チラリと例の古地図が浮かぶ。

ゲシュマイル高地よりも西にある「イスマイル大公領」。

ひよっとしたら、平野部での食文化をそのまま高地に持ち込んだのかもしれない、なんて考えがふと過ぎる。

「それにね、イスマイルにだって『地神の寝返り』はあったわ。ただ他の地よりも少なくすんだのには、理由があるの」

「もしかして、英霊様が守っているから？」

リズの模範的な答えに、アタシは微笑みながら頷いた。

イスマイルに災害が少ないのは、英霊の守護があるからだと言われている。

とは言っても、そもそもイスマイルには火山はねえし、大河もない、高地だから当然海もない、四季こそあるけど基本季候は安定してる。要するに、地理的条件として天災の類が起こり難いんじゃないかと思う。まあ、雪崩や土砂崩れってのはあるみたいだけれど。周囲の山々は基本国王直轄地だから、許可がないと入れない。つまりは大規模な災害には繋がりにくいんだよね。

なんて現実的な思考を片隅に置きつつ、アタシは憂いを含んだ声音で言った。

「そうよ。けれどね、今その英霊の力が、とても弱くなっているの」

「え？ 何故？」

「それが分からないの」

アタシの言葉に、リズは思案する様に眉を潜めた。それから、スツと視線を伏せると、

「……………英霊様のことと、ミリー達のことと、どんな関係があるの？」

まあ、その疑問は当然だわな。

さて、ここからが大切だ。リズ父と何度もシミュレーションして、矛盾はなくしたつもりだけれど、上手くいくだろうか？

「私たちはね、主の命を受けて、英霊の力が弱まっている原因を突き止めるために、英霊の磐境エヌマシユリを探しているの」

「エヌマシユリ?」

「精霊の棲家の事よ。英霊は現界に降りて、磐境に棲んでいるの」

「じゃあ、ミリー達は、英霊に会うために、磐境を探しているの?」

「そうよ。ただ問題はね、私たちが探せる場所は知れているということよ」

「何故?」

「私たちは、ある一定の距離以上は、あなたから離れられないの」

「え?」

「私たちはあなたのために、あなたのためだけに存在しているの。」

だから、あなたから余り離れてしまつては、私たちの存在意義が失われ、私たちは現界に留まれないのよ」

この設定も、頑張つて考えた。

まあ、もしそうだとしても、大神殿まで行けたんだから相当な距離だとは思うけど。

「そうなの…」

リズは小さくそう呟くと、途端にハツとなった。

どうやら賢いリズは、アタシが言うより先に答えを見つけてくれたらしい。

「じゃあ、もしかして、お兄様や娘子軍に、探すのを手伝ってもらっているの?」

「そうよ」

アタシが頷いて見せると、リズが漸く納得した表情を浮かべた。

そのリズの信頼しきつた表情に、多少良心をうずかせながら、アタシは言った。

「そして多分、見つけたわ」

「本当?」

「そうよ、ねえ、クリス?」

ここで漸く、ボンヤリしている二号に向かって声を掛けた。

けれど二号は返事しない。

聞いていやがらなかったな、コイツ！

いやまあ、聞いてないのは知ってたし、聞いてないと思って喋ってただけどつ。

ここまで聞かれてないと、自分ながらに腹立つなつ。いや、自分だから余計腹が立つんだろっか？

「ねえ、聞いているの？ クリス？」

アタシが強めの口調で言うと、二号はハツとして顔を上げた。

「ああ、済まないね、シエラータ。二人が並んでいる様子が余りに美しくて見とれていたよ」

悩ましげな溜め息を吐きながら、二号が言った。

ギャ~~~~ッ！

言ってた時も寒かったけど、言われた方が遙かに寒いつ！！

リズの前で殴らなかつたアタシの理性を、誰か褒めてくれないだろっか？

## 第五二話 カエルの首は回りません その2（後書き）

磐境いわさかというのは、祭壇とされる磐座を含んだ儀式用の施設のこととされていますが、詳細は分かっています。その解釈があっているのかも、考古学的には不明です。というわけで、敢えてその言葉を使ってみました。



### 第五三話 カエルの首は回りません その3

グダグダと頭の悪い事を喋り続ける二号を、ちゃっちゃとウォー  
クインシューズクローゼットに放り込んでやった。

二号の時、何で四号のアタシは二号のアタシを威嚇しやがんだ？  
と疑問だったけど。

四号になって初めて、アタシは四号のアタシの気持ちがあった。  
当たり前といやあ当たり前だけ。

仕方がないとはいえ、あの危機感のなさが苛立たしい。

過去の自分を殴りたい。

なんて言う台詞は良く聞くけれど。

アタシは今、それが出来る状況にいる。

やって何が悪いんだ！？

と思ったけど、鬼の形相で威嚇するだけにとどめて置いた。

だって今のアタシは四号。

リズの手本となるべき淑女なのだ。

なんて事を思いながら、のっそりと起き上がった五号を見た。

五号のアタシは事情も殆ど分かってるから、きつと二号みたいに  
腹立つこともないだろう。

無言で頷きあって、二人（二匹？）でリズの待つベッドに戻る。

「サウザ！？」

リズは五号を見て驚いた。

そりゃそうだ。これで三匹目だもんね。

「サウザも、英霊の元へ行くの？」

リズはケロタン達が英霊を探し回っていると思ってる。

だからまあ、その疑問は当然なんだけど。

一瞬、そうだと言おうかと思ったけど、どうせ五号が大神殿に行  
った事なんか後から聞くだろうから、それは止めておく。

けれど同時に、詳細を説明してる時間はない。

「いいえ。サウザには別の使命があるわ。でも、それをなす前に、リズに伝えなければならぬ事があるの」

そう言った後で、確かに四号はそう言ってたな、と思い出す。

過去に自分が聞いた台詞を、今の自分が口にしてるのって、何か不思議な感覚だ。

五号をチラリと横目で見てみると、ぼうつとリズを見つめてる。

おおいつ！

時間がないんだからさっさと喋りやがれ！！

と、まさか四号が言うワケにも行かないので。

リズが五号に集中しているのを良いことに、アタシは五号に向けて歯を剥いた。

微かにだけどビクリツと五号の体が揺れたので、四号のこともキツチリ視界に入っているらしい。

あ。

確かに五号のアタシは、四号のアタシに威嚇されてたな。なるほど。

だから威嚇してたのか。

ゴメンよ。未来　てかもう「今」か　のアタシ。心の中で罵倒して。

「リズ」

アタシに促されて（脅されて？）五号は漸く口を開いた。

「サウザ？」

リズは真っ直ぐ五号を見つめる。

けれどよく見ると、リズのバツバサの長い睫毛が、僅かにだけど震えてる。

「リズナターシュ」

五号のアタシはリズの頬を撫でながら、愛称じゃなく神聖名を口にする。

リズナターシュは、古い言葉で「真実を見通す瞳或いは夢幻に掛かる虹もしくは虚無の吐息」を意味するらしい。

因みに「真実を見通す瞳」或いは「夢幻に掛かる虹」もしくは「虚無の吐息」ではなくて、「真実を見通す瞳或いは夢幻に掛かる虹もしくは虚無の吐息」で一括りらしい。

どこをどうやれば「リズナターシュ」がそんな長い意味になるのかは全く不明だけれど、古語には古語のよく分からない法則があるんだろう。ついでに言えば神聖名にもランクがあつて、「リズナターシュ」は血筋ランキング三位以上じゃないと、付けちゃいけない名前である。更に言えば、歴史上「リズナターシュ」の名を最初に持ったのは、『名の秘された皇国』初代皇帝の母親だ。

「そんな事、あるわけないわ!」

アタシの思考はリズの切羽詰まった声に途切れた。

「未来の事は誰にも分からん」

「でもっ!」

言い募ろうとするリズの唇を、五号はそつと指で押さえる。

押さえるのはいいんだけど、この緊張した場面でプニユプニユするのはどうかと思うよ、五号。

我ながら、というか我だからこそ、情けない。

「サウザ…」

呆れた声で五号を呼ぶと、五号は自分で自分にビックリしたみたいにハツとなった。

別の意味でも自分（五号）で自分（四号）にビックリはしてんだけれど。

五号に入っている時は、結構冷静なつもりだったんだけど。

こうしてみると、殆どと言って良いほど余裕がない。

まあ、今だって余裕なんてないんだけど。

ただ覚悟は決まった。

二号の時は全く覚悟なんてなかったし、まだどうやってリズを神人にしないですむかとか考えてた。

けれど、あの男と会って、それは無理だと諦めた。

だから攻勢にでることにしたんだけど。

五号に入ったばかりの時点では、まだ覚悟と言える程のものは持  
ってなかった。

五号は言う。

「我らのそなたを愛おしいと思う気持ちだけは、疑ってくれるな」  
ああ。

何て自分勝手な言葉だろう。

これじゃあ単なる自己満足だ。

「意味、分かんない…」

そう呟くリズの瞳が不安に揺れる。

こんな事も分らないくらい、五号のアタシはテンパってたんだ  
なあと、今更ながら余裕のなさにウンザリする。

自分を追い込む事で、覚悟を決めようとしてただけだ。

今までみたいに受動的じゃなくて、能動的に動くことを。

自分から動くことで、少しでもリズに有利な方へ向かわせようと。  
そんな決意をリズに誓うつもりで、言ったつもりだったんだけど。  
なんじゃこりゃ。

いっばいいいっばいなのは仕方がないとして。

何せアタシだ。

そこまで器はデカくない。

だからって。

リズを追い込んでどうすんだ!?

今のリズに、こんなこと言っても、ワケ分かんないだけだからっ。

アタシはもうこれ以上五号に喋らせたくなくて、けれどやっぱり

五号の言葉も否定できなくて。

そうだ。

リズが信じてくれるなら、アタシは何だってできるだろう。

そう確信してるから。

「今は分からなくてもいいの。普段私たち相手にすら殆ど喋らない  
コレの言うことを、どうか覚えていてちょうだい」

リズにそれだけ言って、五号にさっさと行く様促した。

「もう時間がないわ」

五号は思いを振り切る様に颯爽とベッドから飛び出した。

「サウザー！」

五号はリズの声の背に聞きながら、地下水道へと下りていった。

実際には、五号の去り際は「颯爽」とはほど遠かった。

何せ地下水道へ行くためには隠し扉を作動させなきゃいけなかったし。

ちよつとでも時間短縮したいから、タペストリーの裏側の直通路使ったし。

要するに、えっちらおっちらイスを運んで、壁に掛けてる絵画を回して、これが時限式なもんだからイスを仕舞う間もなくワタタタとタペストリーの裏へ駆け込む、と言った具合だ。

颯爽とベッドから飛び降りたもんだから、余計にもたついている感があつて、間抜けさマックスだった。

よく考えたら、絵画を回すのはアタシがやった方がよかつたんだけど。

不安がるリズの方が大切だったし、第一五号の時、確かに四号は手伝ってくれなかつたので、逆に手伝わない方がいいだろうと思つたからだ。

ほら、タイムパラドックスとかが何処でどう作用するかも分かん

ないし。

だからつまり、別に五号であるアタシに腹を立ててたからってワケじゃない。

「ミリー」

心細そうに四号の名を呼ぶリズの頭を、アタシはふんわりと抱きしめた。

「大丈夫よ、リズ」

リズは不安を紛らわせる様に、四号の体を抱きしめ返す。本当はもう暫くそうしてあげたいけれど、時間が無い。何せやるべき事は山盛りなのだ。

「リズ、良く聞いて」

「……………」

リズは答えない。

代わりに四号を抱きしめる力を強くした。

多分、今四号のウエストは厚さ二センチくらいになってんじやないかと思う。

内臓があつたら、確実に破裂してるね！

目とか口とか鼻から、色んなモンが出ていたよ！

良かったよ！ 布製品で！

そんな事を思いつつ、アタシはリズの艶やかな髪を撫でた。うっとりとするほど滑らかな手触りは、侍女さん達が毎日手入れをしてくれるから。

侍女さんたちは、裏にどんな思惑があれ、確かにリズを大切にしてくれている。

愛情を注いでくれている。

それはリズにとって、大切でかけがえのないものだ。

だからアタシは、彼女達を守りたい。

これから先リズを支えて貰うためにも。

いつか、アタシがいなくなった後も。

「リズ」

もう一度名前を呼ぶと、リズがゆつくりと顔を上げた。

僅かに潤んだ瞳に、緑色の珍妙な布製力エルが映し出される。実際は、紫と緑が合わさって、何か物凄い色になってるけど。

まあ、そこら辺は敢えて目を瞑ろう。

ああ。

なんて可愛らしいんだろう、アタシのお姫様は。

「もうすぐ地神の寝返りが、この地であるわ」

ゆつくりとかみ砕く様に言う。

その意味を瞬時に理解したリズは、これ以上ないほど目を見開いた。

「え！？ 何時？」

「もうあと何時間もないの」

「……………地神の寝返りが、大地が揺れると、どうなるの？」

恐る恐る尋ねてくるリズに、アタシは隠さずに言った。

「揺れるだけじゃないかも知れない。地面はひび割れ、建物は壊れ、そうになると人々には為す術もないでしょう」

「そんなんっ」

リズのバラ色の頬がサツと青くなる。

「英霊様の力が、弱まっているから？」

「そうよ」

「英霊が力を取り戻せば、地神の寝返りを止められる？」

「そうね。でも今からでは遅いわ」

「じゃあ、どうするの！？」

「避難するのよ」

「避難？」

「そのために、サウザには大神殿に行ってもらったの」

「サウザ、大神殿に行ったの？ 師父様に会うために？」

「会うのは誰でも良いのよ。神殿騎士団を動かせれば」

「神殿騎士団……」

「恐らくイシユ・メリグリニアが見事な采配をふるうでしょう」

恐らくつていうか、確実に、なんだけど。

「私……。私は何をすればいいの？」

縋る様な表情でそう言うリズは確かにまだ十二歳の子供だけれど、瞳に宿る力強さは紛れもなく「王女」のものだった。

「リズ……」

「みんなが頑張ってるのに、私に出来ることはないの？」

「リズ。あなたはただ、いてくれればいいの」

「でも！」

愛しい愛しいリズ。

アデーリアは、本当にリズを愛していた。

ただ一瞬の罪悪感に押しつぶされそうになりながら。ただリズの幸せだけを願っていた。

「いいのよ、それで。今はまだ」

運命に立ち向かう準備は、これからしていけばいい。

甘やかしてるだろうか？

甘やかしてるんだろ？

けれど、甘やかして何が悪い！？

ケツ。

子供を千尋から突き落とす獅子なんぞに、なつてたまるかつ。

アタシは、カエルだ！！ ほ乳類じゃねえ！ 両生類だっ！

アタシは意を決して、ベッドの横の紐を引っ張った。

リンゴーン。

遠くから聞こえる様だけど、鳴っているのは隣の部屋だ。

当直の侍女さんと侍従武官が控えているはずだ。

侍従武官は、できればセルリアンさんがいいけれど、この際贅

沢は言ってもらえない。

トントントンというノックの音に、アタシは答えた。

「お入りなさい」

二号と五号の時に思ったんだけど、四号の声は女性にしてはちょっと低めだ。



けれど澄んでいて、良く通る。

ゆっくりと優しくしゃべれば、優しく聞こえる、けれど。

カチャリと扉が開いて、現れたのはセルリアンナさんだった。

普段なら先ず侍女さんが現れるはずなんだけど。

まるで何かを予感してたかのようなタイミングの良さだ。

セルリアンナさんは、アタシを目にした途端、直ぐにドアを閉めてツカツカと近づいてきた。

ベッドの脇まで来るとスツと滑らかな動作で片膝を付く。

「如何なさいましたか？」

アタシは言った。

「セルリアンナ、お前に命じます。今すぐ宮殿の者を全て集めなさい」

命令口調で話すと、物凄く高圧的に聞こえる声で。

地震まで、残り一時間半。

#### 第五四話 カエルの首は回りません その4

「あと一時間程で、地神の寝返りが起きます。建物の中には危険です。今から庭園に避難します」

舞踏会でも開けそうな玄関ホールを階段上から見下ろしながら、アタシは言った。

ホールには、レゼル宮で働く女性達が勢揃いしている。大体百二、三十人てとこだろうか。

その手にそれぞれ毛布を持っているのは、そうするように指示したからだ。

頭部を守るため防空頭巾代わりにするためと、今は夏場とはいえ、標高が高いイスマイルでは夜は冷えるからだ。

ほら、女性は冷やしちゃいけないって言っし。その彼女達はいえ、ポカンと口を開けて見上げている。

まあ、夜中に叩き起こされて、訳の分からないまま毛布持って慌てて駆けつけたら、布製カエルが偉そうにしゃべってんだもん。誰だって大口開けたくなるわな。

ある意味壮観といえは壮観なんだけど。時間があるなら、それを心ゆくまで眺めるのも一興だろう。

けれど何せ今は余裕もへったくれもありゃしない。

「一切の質問は受け付けません。私の言葉を疑うのなら、構わずこの場に残り、そして死になさい」

物凄い言い分だけど、悠長に質疑応答とかしてる場合じゃないワケで。

これまた物凄く物騒な話だけれど、四号の言葉に従わなかった人間は、多分、この先二度と会うことはないだろう。「奇跡」に従わなかった人間を、神殿は許容するまい。そして彼女達は、恐らくその事を十分に承知している。

だからまあ、こういう言い方をすれば、疑問があっても避難して

くれるだろうと思うのだ。少なくとも、レゼル宮の人間は。

レゼル宮の人間には誰にも死んで欲しくないから、死ねと脅すというのもおかしい話だけれど。

「セルリアーナはリズを抱いて行ってちょうだい。それから他の誰かにアンドリユーとエウリディケ、といっても分からないでしょうから、カウチに寝転んでる赤いのと白いのを連れていかせてちょうだい」

「畏まりました」

セルリアーナさんは近くにいた侍女さん二人に指示を出すと、

「王女殿下、失礼いたします」

そう言ってリズを抱き上げた。

リズはまだ十二だけど、日本人とでは成長速度が違う。だから十歳だからと言って軽々と抱き上げられる大きさではない。けれど、成長結果も違うので、こちらの人であれば軽々と抱き上げられる。ケロタンがリズを抱き上げられてたのなんて、最初の一、二年だけだった。

「力」という点では、ひよっとしたら今でもいけるんじゃないかとは思っただけど、何せ地面までの距離が、ねえ…。

こんな時だけど、何となくセルリアーナさんが羨ましい。

なんて思っていると、侍女さん二人が戻ってきた。

一人はもうすぐ結婚してやめちゃうって言ってたエリーザで、もう一人は確かヘンリエッタだったかな。

アタシの後ろにリズを抱いたセルリアーナさん、その後ろにエリーザとヘンリエッタ、更にその後ろに女官長のベアトリーチェさん。そしてアタシの前には、侍従武官のグイネヴィアさん。

「畏れながら先導させていただきます」

グイネヴィアさんの言葉に、アタシは二号の体が靴部屋の中で無事なことを祈りつつ、

「行きましょう」

アタシが進むと、侍女さん達の群れが二つに割れる。

うわあ、モーゼの出エジプトみたい。

なんてちよつと感動しつつ、宮殿を後にした。

アタシ達の後を女官さんや侍女さん達がぞろぞろと続く。

寝間着姿に毛布被ってる女性達の行列。

冷静に考えれば不気味だけれど、ここは後宮、要するに女性しかないなので、まあいいだろう。

因みにリズにはキツチリと精緻な刺繍が施されたガウン着せて、更に繊細なレースのショールを頭から被せてる。

どんな時でも、王女様たるもの美しくなくてはならないのだよ。

さて、アタシ達が向かっているのは後宮の中央にある何とかって物凄く有名な建築家が設計したっていう庭園だ。何やら長い名前があるんだけど、面倒くさいのでアタシは「公園」って読んでいる。後宮に「公園」ってのも変な話だけれど、「どの宮殿にも属さない庭園」なので、意味的には合っている。

後宮って所は、物凄く面倒な場所だ。

主に人間関係が。

四つの宮殿に住む正妃達とその子供達。

彼らの仲が良好とイケないのは、まあ仕方ないことだ。

だから万が一が起こらないため、彼らをむやみやたらと接触させないように宮殿と宮殿の間には必要以上に広い庭がある。

そこが「公園」ってワケである。

因みにそこでは宴会、じゃなくてパーティーが催されたりもする。パーティーは正妃が主催するもので、後宮内だけの小規模なものだったり、女性限定だけど外部からお客を招待したりする大規模なものまでイロイロだ。そして勿論、蠢く思惑もイロイロだ。正妃及びその背後にいる人々の、見栄と野望と駆け引きがパンパンに詰まった腹黒いパーティーは、毎回そりゃもうドエライことになるらしい。

リズは未成年だから主催したことないけど、アディーリアは何度かやった。

アデーリアは、元来があの性格だから当然他の正妃連中に引けを取るワケじゃないんだけれど、それを敢えて「儂げで控えめな美人」という特注のデカい猫を被ってた。

ちよつとでも嫌みくさい事を言われようものなら、あの絶世としか言い様のない顔を青くさせてフラツと蹠踉めくのだ。

するとお付きの侍女さんやら神官さんやらが。

「ああ、聖者様！ お勞しい！ やはり俗世の汚れは尊き御身には酷でありますれば、大神殿に疾くお戻りをば！！」

とかなんとか騒ぎ出す。

当然だけど、彼女達もグルだ。

そこで賢い女性だと直ぐに謝るとかするんだけれど。中にはどうしようもない甘ちゃんな御姫様がいたりして。というか、寧ろそういうお姫様をターゲットにしてるんだけれど。

まあそりゃ面白いくらいの大騒ぎになる。

けれど相手は聖者で、そのバツクは大神殿だ。

そしてアデーリアは、虎の威を借る狐じゃなくて、虎をけしかける九尾の狐なのだ。

慌てた親兄弟が平謝りに詫びてきて、アデーリアには豪華な「お詫び」の品が、大神殿には多大な寄付金が入ってくる。

どう考えても、質の悪い詐欺だよね。ヤカラの仕業だよね。

でも実は、アデーリアのそういうトコも嫌いじゃない。

それにアデーリアは豪華な「お詫び」の品を換金して、孤児院とかに寄付してたしね。

そもそもアデーリアは子供の頃から普通に贅沢してたので、そんじょそこらの贅沢品なんて貰ってもイチイチ有り難がったりはしない。要するに「単なる贅沢品」なんかで詫び入れようってのが甘いつてコトらしい。まあ甘いからつけ込まれるんだけれどもさ。

アデーリアが掛け値なしに喜んだのは。

あの男に、リズの父親に、小さな花を手にプロポーズされた時だけだった。

それはまあともかく、「公園」では大規模な野外パーティーが開けるくらいに広い。つまり避難場所にも適しているって事である。アタシ達ももうすぐ「公園」に着こうって時に、前から二人の女性がやってきた。

「殿下！」

「ケロタウロス様！」

リズ付きの侍従武官は、全部で四人。

内二人はアタシの後ろにいるセルリアンさんとグイネヴィアさん。そして残る二人が目の前の女性、ハーネルマイアーさんとエセルヴィーナさん。

この二人には、先に娘子軍にお使いに行つて貰っていたのだ。

後宮の警備は神殿娘子軍が引き受けている。

だから他の宮殿にいる人達の避難は、彼女達に任せることにしたワケだ。

アタシは片膝をついた二人に声をかけた。

「首尾はどう？」

「各宮殿の避難は、それぞれ担当する中隊があたっています」

ハーネルマイアーさんがそう言うと、エセルヴィーナさんが続けて言った。

「レゼル宮付き中隊は、ララナイナ・ハルフェルサファル・エフェルゼーダ庭園にて控えております」

ああ「公園」ってそんな名前だったんだ。

庭園一つに、なんちゆう面倒くさい名前をつけやがるんだか。

なんて呆れつつ、アタシはもう一つ頼んでいた事について尋ねた。

「カウゼル四世の元へは？」

「娘子軍隊長アマリーアが」

ハーネルマイアーさんの言葉に、アタシは頷いた。

実は娘子軍には、ヘイカの所へも知らせに行つて貰うことにしたのだ。

あのムダメンどもがアタシの予言を覚えているかどうかも分かん

ないし、覚えていたとしても表向き「地震の予言を知らない」彼らが避難することはありえない。

というあの男の助言があったので。

一応知らせておく事にしたのだ。

娘子軍に行つて貰つたのは、その方が会いやすいと思つたからだ。娘子軍はあくまでも神殿所属で、イスマイルからすれば「客分」だ。

一介の侍従武官が夜中に国王に会うなんてのは無理だろうけど、娘子軍なら会えるだろうと。

ただまあ、時間が時間だから会えないかもしれないけど、その場合はとりあえずメモでも何でもいいから「知らせた」証拠は残す様にと指示をした。

アタシが責任持てるのは「知らせる」までで、だからその後のことは自分達で決断するといひ。

「奇跡」のもたらした「予言」に従うか、従わないか。結果がどうあれ、それが彼らの運命なのだ。

ハーネルマイアーさんとエセルヴィーナさんと合流して、アタシ達は不必要に長い名前の「公園」に入った。

「公園」には松明をもつた娘子軍の人達が、何故か地面に杭を打っている。

「アレは何をしているのかしら？」

アタシがそう尋ねると、エセルヴィーナさんが答えてくれた。

「杭と杭の間に縄を張つて、他の宮殿と人員が入り乱れない様にするのだそうです」

命が掛かつてるかもしれないのに、そんな事にまで気が回る娘子軍を、褒めればいいのか哀れめばいいのか分からなかった。

それにしても、地震が来るつつうのに火を焚いてるとは。

ここは庭だぞ？ 燃えるものなんか山盛りあるぞ？

「今すぐ火を消させなさい」

怒気の籠もつた声でそう言うと、ハーネルマイアーさんが「はっ」

と短く答えて駈けだして行った。

けれど直ぐに娘子軍を伴って帰ってきた。  
やって来たのは副隊長のイザベルさんだ。

「翠のケロタウロス殿」

「イザベルですね。クリスから貴女のことは聞いています」

イザベルさんは相変わらず華やかな美人さんだけど、今は美人具合を鑑賞してる場合じゃない。

「今すぐ松明を消しなさい。周囲にこれほど燃えるものがあるというのに。我が養い子に火傷を負わせるつもりですか？」

「しかし、明かりがなくては人々は不安に陥ります」

イザベルさんは軍人らしい口調で、きっぱりと言った。  
なるほど。

集団行動中に何が怖いって、集団でパニックに陥ることだ。

そして、人は本能的に暗闇を怖がるものだ。

地震を知らない人間なら、そちらの方を危惧するのも分からないでもない。

けれど、アタシは火の方がもつと怖い。

なもんだから。

「面倒ねえ。気絶でもしてくれないかしら」

つついっいそんな言葉が口を出た。

「それは…、素晴らしい妙案でございます！」

イザベルさんはポンスと手を叩いてそう言つと、嬉々として部下に何やら命じ始めた。

え？ 何々？ 何時もの即効性睡眠薬入りの菓子を持ってこい？

……………アタシが言い出しっぺだけれどさ。

それでいいのか？ 神に仕える娘子軍。

というか、何でそんなに大量の睡眠薬入りの菓子を常備しているんだらうか？？

地震まで、残り半時間<sup>ジナス</sup>。



第五四話 カエルの首は回りません その4（後書き）

今回は地震のシーンに突入です。

この地震はリズの人生を決定づけますが、澄香にも多大な心理的変化のきっかけにもなります。この両方を同時に成立させるために、

「地震」という自然現象を用いることにしました。

未だ東日本大震災の記憶も新しく、避難生活を余儀なくされている方々もいらっしやいます。その爪痕が癒えるにはまだまだ時間が掛かると思います。皆さんのお心を傷つけること無く書ければいいのですが、拙い筆ですのでそう上手くいくかどうかも分かりませんが、拙いながらも努力しようと思えます。

どうぞおつきあいくださいと、幸いです。 m ( ) ( ) m

## 第五五話 カエルの世界は四原色です（前書き）

PC無事復旧できました。

ご心配をおかけして、申し訳ありませんでした。

今後同様のトラブルに対処するため、ドキュメントをブートディスクと別のHDDに移しました。これで速やかにセカンドPCからアクセスできます。んで、バックアップを自動時限式（爆発はしません）にしました。

これからもよろしくお願いいたしますm（　　）m。

なお今回は、地震の描写があります。

できるだけ少なくてすむように、構成を考えました。

あと、直接的な被害を書かなくて済むように、「公園」に移動しましたが、

それでもやはりお辛く感じられる方もおいでになるのではないかと思います。

その部分だけ背景と同じ色とかにできればいいのですが、「なろう」ではそういうのが出来ないの…。

傷つけるつもりはなかった、という言い訳は、当然言い訳しかありません。

もしあなた様につらい思いをさせてしまったのなら、申し訳ありませんとしか言い様がなく…。

ただ、ワタシに何かをおっしゃる事で気が晴れるなら、甘んじてお受けします。

それでは、長々と前置きをしてしまいました。本文へどうぞ。

## 第五五話 カエルの世界は四原色です

満月よりほんの少しだけ欠けた月が、夜空にぽっかりと浮かんでいる。

月明かりに浮かび上がる庭園は、何時もより影が濃く、闇が深い。それを畏れるかのように、人々は地面にしゃがみ込み、息を潜め、ひっそりとその時を待っている。

何時もなら聞こえる虫の音もカエルの声も、まるつきり聞こえない。

木々さえも、風に応えるのを止めたかのように静まりかえっている。

吐息が、衣擦れの音が、やけに響く夜だった。

夜も更けているせいか、中にはうつらうつらしてる人もいる。

まあ一部の人間、というかこの場にいる半数以上の人間は、強制的に爆睡中だけだ。

どうぞ。心を鎮める薬草入りのお菓子です。ちょっと眠たくなりますが、害はありませんからね。

と、にこやかな笑顔を浮かべている娘子軍の皆さんに、焼き菓子を渡された侍女さん達が、次々と気絶したみたいに眠っていく様子は、色んな意味で微妙だった。

隣の女の子が食べて一分としないうちに気絶するように眠っているのを目の当たりにしながら、それでも彼女達は食べた。

そういう躰でもされてるんだらうか？

出されたモノは残しちゃいけません的な。

いやまあ、そういう躰はされていて、理由はそうじゃないんだらう。

あくまでも憶測なんだけど、娘子軍が何か言ったんじゃないかと思っただよね。

そもそもさ、レゼル宮の人間ならいざしらず、他の宮殿の人間が

夜中に叩き起こされて文句も言わずに「公園」に集合なんてありえない。

なのに、三人の正妃を初め、全員「公園」に来た。

しかも王族達まで、文句を言わずに菓子を食べた。

邪推したくなるってもんじゃね？

尤も、三人の正妃は食べてはいない。

といつても、第二正妃と第三正妃は、お菓子を食べる必要が無いほどに、深い眠りの中にいたからなんだけどね。

何故なら二人は、慢性的な不眠症のため毎晩「よく眠れるハーブティー」を飲んでいるからだ。そのため、ちよつとやそつとじゃ起きないらしい。

実際二人は、娘子軍に担架で運ばれてきた。

それって明らかに…。

とまあ、そこら辺は皆まで言うまい。

二人が不眠症に陥ったのは、ケロタンによる「報復」がきっかけであることを考えれば、少しは心が痛む、ワケもないんだけど。

けつ。不眠症にでもなんでもなりやがれつ。リズを泣かせた報いは、何時までも終わらんのだよつ。

ふはははははは。

いや、ワタシ、悪役じゃないツスよ？ 正義の味方ツスよ？？

正義なんてものは、人によって違つてだけの話ツスよ？

ところでさ、レゼル宮の人達は誰も娘子軍御用達即効性睡眠薬入り菓子を食べてないんだよね。

単純に疑問に思つて訊いてみた。

「貴女たちは食べなくてもいいの？」

すると童顔 日本人的には年相応 にナイスバディなエリー

ザが、ニツコリと笑いながら答えてくれた。

「中には習慣性のあるものもありますから」

ええ？ それって、中毒つてことじゃねえの！？

害ありまくりじゃん！！

とは言わなかったさ、アタシはね。

だって何だか怖かったんだもん！

「そう、それは懸命ね」

とりあえずアタシは、それだけを言った。

マニア垂涎（？）のカワイ子ちゃんであろうとも、やはりレゼル宮の侍女さんだ。

きつちり神殿から教育を受けているのに違うない。

そついやあエリーザも、分厚い板を真つ二つに割ってたな…。

このプリンプリンのボディの何処に、そんな力があるんだろう？

因みに娘子軍の人達が、自ら配っている焼き菓子を食べたかどうかなんてのは言わずもがなだ。

神がバツクについてる人は、色んな意味でやることに躊躇がないなあ。

アタシはちよつとヤサグレた気分になって、月を見上げた。

こちらの月は、現実の月と変わらない。

複数あるワケでもないし、奇抜な色をしているワケでもない。

敢えて違いを言えば、こちらの月の方が大きく見える事くらいだろうか。

とりあえず「見える」ってだけで、実際どうなのかは分からない。よく三原色と言っけれど、それは人の目が三色しか見えなだけで、カエルの目には、赤、青、緑に加えて紫の四つの色見えるらしい。

人類が両生類と袂を分かって約三億六千万年。その間に人間は色んなモノを失ってきたのに違うない。なんちゃって。

ま、そもそもケロタンは網膜では見てないんだだけどさ。

「クリスは」

不意に、隣で月を見ていたリズがポツリ言った。

「ん？ クリスがどうかした？」

膝を抱えこんでる腕に、そつと触れながら問いかけた。

「えつと、英霊様に会えたかなって」

ふっと視線を地上に落として心配そうに言うリズに、アタシは言  
った。

「女性さえ絡まなければ、アレで出来る子だから」

リズはひよっとしたら、英霊がどうにかして地震を止めてくれる  
と思っているのかもしれない。

けれど、どんなに願っても、地震は起こる。

だからアタシは、期待を持たせるような事は言わない。

「英霊様が、女の人だったら、どうなるの」

「とりあえず、口説くのじゃないかしら」

「でも、英霊様は力が弱っているのよね？ 病気とかだったら…」

「そうねえ。でもクリスは、女性を口説くのに時も場所も相手の都  
合も考えないから」

それって最低じゃんっ。

と思いつつ、けれどそれが二号のキャラなのだから仕方がない。

表情を曇らせるリズに、アタシは一応フォローを入れてみる。

「大丈夫よ。無理強いはいしないから」

その前に、ところ構わず口説くのヤメ口って話なんだけどさ。

「きつとクリスならこう言うでしょう。『僕が女性を口説かないな  
んで、世界が終わってもあり得ないよ』ってね」

アタシが二号の口マネ てかアタシ自身の口マネになるのか。

それって口マネか？ でそう言うのと、リズは二号の姿を思い浮か  
べたのかクスリと笑った。

「うん。クリスなら、きつとそう言うね」

そう言って、再びリズは月を見上げた。

「月が、綺麗ね」

リズの呟く声に、けれどアタシは月を見上げなかった。

月明かりだけしかなくても、ケロタンの目には色鮮やかにリズの  
姿が映し出される。

まだ幼さの残るまろい頬に、青い影を落とす長い睫毛。

この世界で最も神聖な紫の瞳に、少し欠けた月が映り込む。

ああ、綺麗だな。

心の底からそう思った。

ただ単純にそう思った。

十二でこれだけ完成されてんだもん。大人になったら、どれだけ綺麗になつてることだろう。

けれどアタシが、その姿を見ることはない。

リズが十六歳になるまで。

あと四年。

たったの四年。

リズにその事は言っていない。

最初は、まだまだ時間があると思って、その内話すきっかけが掴めなくて。

ずっと一緒だと。

ケロタンは死なないから、置いていたりはしないのだと。

そう嬉しそうに語るリズに、アタシはそうだとしか言えずに過こしてきた。

期間限定の愛情と知らせたところで、リズを傷つけるだけだと。

自分に言い訳して。

本当は、怖かった。

ただ怖かった。

リズに嫌われるとか、リズに拒否されるとか。

或いは、エゴの塊だと知られることとか。

言い訳なら沢山出てくるけれど、そのどれもであり、どれでもない様な気もする。

ただ、言おうとする度に、足下から崩れそうになる喪失感に怖じ気づいてただけかもしれない。

その曖昧さを曖昧なままにしてきたのは、アタシだ。

けれどアタシは決心した。

だから。

言おう。

「ねえ、リズ」

「なあに？」

首を傾げた拍子に零れた髪が、ふわりと靡く。

「地神の寝返りを乗り越えたら……」

話したいことがある。

そう言いかけた時。

グラリと揺れる視界に、咄嗟にリズを抱きしめる。

「ミリー！？」

リズが四号の名前を呼ぶのと殆ど同時だった。

ドレンシー！



下から突き上げる様な衝撃に、リズを離すまいと抱きしめる腕に力を込める。

あちらこちらで悲鳴が上がる。

地面がうねり、次々と衝撃が襲いかかる。

ミシミシと木々が軋み、梢がざわめき、遠くで鳥たちが一斉に羽ばたく音がした。

地震大国日本に生まれただけで、流石にこれほどの揺れを感じたことはなかった。

震度三や四じゃない。

それぐらいなら、経験したことがあるっ。

「くっ」

ケロタンの体は小さくて、必死に抱きしめてもリズの体を庇いきれない。

それでもアタシはリズを抱きしめる。

グラグラと揺れる地面に、リズから離されまいと力を込める。

「大丈夫よ！ 大丈夫！ 大丈夫だから！」

腕の中のリズを少しでも安心させたくて、叫び続ける。

不意に、背後で温もりを感じた。

ピタリと重なるそれは、どうやらアタシごとリズを抱きしめたらしい。

ギユウギユウと抱きしめてくる腕は力強く、頼もしかった。

なのに。

アタシは何故だか混乱した。

それを鎮めようと、懸命に同じ言葉を繰り返す。

「大丈夫、大丈夫よ」

自分の声に、誰かの声が重なった。

大丈夫、大丈夫、大丈夫。

何時だったか、誰かが言った。

大丈夫。

その言葉が誰に対してなのか何に対してなのか、記憶にない。

大丈夫。

自分でそう言葉にする度に、誰かも同じ言葉を言った。そして同じ分だけ、胸をかきむしるような不安が募る。どうしようもない程の喪失感が、全ての感情を塗りつぶしていく。そんなはずもないのに、背中に覆い被さる体温が、ゾツとするほど冷たく感じた。

誰か！

を助けて！

殆ど衝動としか言い様のない拒絶が、全身を駆け巡る。  
見たくない！  
見たいじゃない！

逃げなければ！

何処へ？

何処でも良い。

「ここ」じゃなければ！

そう念じた瞬間、突然視界に別の光景が重なった。

パニックを起こした人々が悲鳴を上げながら逃げ惑う。

落ち着け！ という怒声と、祈りの声が入り交じる中。

靴、靴、靴。

色とりどりの小さな靴が降り注ぐ。

空には月。

壮麗な白い神殿。

それを隠す様に、小さな靴が落ちてくる。

リズの震える睫毛。

固く閉じられた瞳。

月影に浮かぶ金と薄紫のアラベスク。

リズの紫色の髪が、神殿のアラベスクに絡みつく。

三重の光景がアタシの「今」と「ここ」を見失わせる。

「よし。じゃあ次は、落語といくか。澄香は『寿限無寿限無』、  
覚えてるか」

「ここ」じゃない。

「ここ」は違う。

「ここ」はもうない。

だってアタシが、消してしまったから!!

唐突に、全ての風景が視界から消えて  
気がつけば。

アタシは暗闇の中にいた。

周囲を見回しても、誰もいない。

誰の気配も、何の気配もない。

唯一人。

アタシだけ。

この闇は、あの闇だ。

二号で地震にあった後、落とし込まれた闇。

けれどあの時と違うのは、探すまでもなく、目の前に柔らかく発光する膜がある事。

そつと顔を近づけて目を凝らす。

薄い膜の中にいるのは、まるで水の中に浮かんでいるかのように髪を揺らめかせているアディーリア。

金色の瞳と視線が重なる。

形の良い唇が、ゆっくりと開く。

寂しそくに、悲しそくに、或いは諭す様に、彼女は言った。

再び視界が明るさを取り戻す。

視界に映るのは、一号と三号をそれぞれに抱きしめて、必死で耐えているエリーザとヘンリエッタ。

そして腕の中には、リズナターシュ。

どうやら、無事四号に戻ったらしい。

揺れは殆ど止んでいて、けれどもショックの余り誰も動けずにいるようだった。

相変わらず、月だけが何事もなかったように浮かんでいる。

そうか。

アディーリアの腹にいるのは  
アタシの記憶だ。

アタシは、唐突にその事に気がついた。

## 第五六話 カエルの世界は四原色です その2

貴女は『アディーリア』という器、つまりこの私ね。それを作って、そこに『有害』な記憶を封印し意識の奥底に沈めたのよ。

アディーリアであってアディーリアでないアディーリアは、あの時確かにそう言った。

有害な記憶。

あの時は、アディーリアの二十歳より前の記憶のことだと思ったけど。

それだけじゃなかった。

チャラチャチャチャララ、チャララララララ、チャラチャチャチャラチャチャチャチャチャチャチャチャチャ。

長い長い夢からの目覚めは、じつとりと汗ばむ暑さと国民的アニメの主題歌によってもたらされた。

青い猫型ロボットが無制限に願いを叶えるという、どう考えても子供の情操教育によるしくない内容の歌だけど、子供達は誰もが「彼」に夢中だった。



ぶつちやけ言って、「彼」は人類の夢というよりも欲望の権化な  
んだけれどもさ。

「……………恵美か」

携帯の画面を見ながら、全く入れた覚えすらない着メロに、もう  
悪友としか言いようのない和風美人の清楚な笑顔を思い浮かべる。

一体何時の間にアタシの携帯に入れたのか？　そして何時設定し  
たのか？

最早訊くまい。

世にも清楚な笑顔の裏で、世にも悪辣な事を考えている恵美にし  
てみれば、他人様の携帯を勝手に弄る事など些末な事に違いない。

問いただしたところで、返ってくる答えなど分かりきっている。

何故他人様の携帯を勝手に弄るのか？　何故ならそこに他人様の  
携帯があるからだ。

弄られるのがイヤならロックしろって話だけれど、そこまで害が  
あるわけじゃなし。

結局のトコロ、罪のない愉快犯なのだ。　　松山恵美子という女は。

多分。

などとツラツラと考えつつ、アタシは受話ボタンを押した。

「はい？」

『はい？』じゃねえよっ』

電話の向こうで、恵美は怒っているらしかった。

『今何時だと思ってるの？』

恵美の言葉に、アタシは時計を探した。

何時も枕元に於いてある目覚ましは、何故か見当たらなかつたか  
らだ。

確か夕べは夜の十一時過ぎに寝て、目覚ましは九時に掛けておい  
てはずだけど。

「何時って訊く前に、言うべき事がある様な気がするのはアタシの  
気のせい…？」

うだうだと言葉を紡いで場を持たせつつ、何かの拍子に落ちたの

だろうとベッドの脇を覗き込む。

案の定、目覚まし時計は床の上に落ちていた。それを拾って時間を確かめる。

六時七分。

で、止まっていた。

動かない秒針を見て、落とした拍子に壊れたか、若しくは電池切れか？ と考えながらも取り敢えず言ってみる。

「ええと、六時七分？」

『その時計、壊れてる』

「みたいだね」

『……………』

「……………」

しばしの沈黙の後、電話の向こうで深いため息の音が聞こえた。

『今度から携帯の方でも目覚まし掛けた方がいいんじゃない？』

「そだね」

この時計も、小学校の頃から使ってるからもう十年にはなる。

ピピピピピという耳になじんだ電子音は軽快だけど、何となく昔よりポリリウムが小さくなった様な気がする。

そろそろ買い換え時だろうか。

と何度も思っ、結局今まで使ってきた。

愛着があるというより、捨てる理由が見当たらないから使ってきたと言った方がいい。

形が古かるうが、インテリアにミスマッチだろうが、時計としての機能に問題はない。

そしてアタシは、自分の部屋をおしゃれ空間にしたいと思う程インテリアに興味があるわけじゃない。

「で、結局、今何時なわけ？」

『十一時過ぎ』

てことは、十二時間寝たわけか。

普段の睡眠時間が七、八時間だから、ケロタン三体を渡り歩いた

割には、ちよつと寝過ぎた程度で済んでいる。

一体どういう仕組みなんだか。

と考えて、最近も同じような事を考えたなどの既視感を覚える。

まさかまた日を跨いだか??

ケロタン三体渡り歩いて、その間にムダメンどもに訓戒垂れて、リズ父と計画練って、そんでもってワケの分からない暗闇に飛ばされて。

十分すぎる程波瀾万丈だった一連の出来事が、たったの一晩だけで済むとは思えない。

そう言えば、やたらと腹が減ってる様な気がする。

この腹の減り方は尋常じゃないっ。と思う。

つい先日昏睡未遂をやらかしてしまっただけに、暑さのせいだけじゃない汗が吹き出してくる。

慌ててカレンダーを見るけれど、当然ながら紙製のカレンダーには「今日」が何日かを教えてくれる様な便利機能はついてない。

「あのさ」

「何??」

「つかぬ事を訊くけどさ」

「だから何??」

「今日、何日??」

八月五日であつてくれ!

そう願いつつ問いかける。

「はあ? ボケてんの?」

そもそも恵美は、なんで電話掛けてきたんだ?

約束があつたんじゃないのか?

確かばーちゃん家に、亡くなったじいさんの蔵書の整理しに行くって言つてたな。

来週の話じゃなかったか?

てか、八月五日って何曜日???

再びカレンダーを見てみると、八月五日は木曜日。月曜日までは

四日もあるぞ？

まさか五日も寝てたのか？

ヒツとムンクの叫びの様に表情を歪ませる。

イヤイヤイヤ！

それは流石にナイナイナイ！

「いいから、何日！？」

焦るアタシに、恵美は訝しみながらも答えてくれた。

『五日だけど？』

恵美の言葉にホツとする。

と同時に、疑問が湧き上がる。

「ええ？　じゃあ、なんで電話掛けてきたの??」

思わず口をついて出た言葉に、恵美の声のトーンが下がる。

『……………用事がないと、電話かけちゃいけないの?』

拗ねた様なその台詞に、「え？　アタシ達付き合ってたっけ??」

とつい思ってしまったのは内緒だ。

結論から言うと、用事はあった。

恵美には恵美の計画があり、そこにアタシは勝手に組み込まれてしまっていたという意味に於いて。

恵美はアタシが休みの日なら大抵九時に目覚ましを掛けていると知ってるから、九時にアタシに電話を掛けて、予定を告げて　決

して約束を取り付ける、ではない、十一時には落ち合ってる、  
というつもりだったらしい。

それならせめて前の日にメールでも出しときゃいいのに、と言う  
と、朝起きて思いついたから仕方がない、との事だった。

本来「仕方がない」という言葉は、もっと不可抗力的というか、  
自分の意志ではどうにもならない状況にこそ使われるべきだと思う  
んだけど。

ただそれを告げるべき相手としては、恵美はこの世で最も不適切  
な人間の一人に違いない。

だからアタシはそうとは告げず、もしアタシに予定があったらど  
うすんの？ と訊いてみると、それはそれで構わないとの事だった。  
「ワタシは、失敗を恐れないオンナだ」  
そうか。

としか言いようのない一言に、アタシはもう何も言うまいと誓っ  
た。

「もし」と仮定したように実際何の予定もなかったから、アタシ  
は恵美の計画に乗る事にした。

まあ、計画と言ったところで、単に大学の図書館にレポートのた  
めの資料を探しに行くだけの話なんだけれどもさ。

恵美の名誉のために言うておくけど、恵美は別段一人で行動でき  
ない人間ではない。

寧ろあらゆる意味に於いて、独断で行動できる人間だ。というか、  
大抵の人間がついていけないので、単独行動をする羽目になるのだ  
が。

あれは小学生の六年生の時だった。

学校をあげての卒業記念のハイキングを、何を思ってたかホッピン  
グマシンに乗ってやり切ろうとしたのだ。

先生に泣いて止められなければ、そしてその先生が女性でなけれ  
ば、きつと敢行したのに違いない。

そんなオンナに、ついて行ける人間はほばいまい。

アタシは軽く過去を回想しつつ、待ち合わせの時間と場所を決めた。

待ち合わせたところで、法学部の恵美と文学部のアタシでは、探すべき資料のジャンルが違いすぎるので、結局は別行動になるんだけれど。

実は本題はその後で、どうやら恵美は瞬市さん辺りからまんまと小遣いをせしめたらしく、晩ご飯を奢ると言ってきたのだ。

一応先日お世話になったばかりなので遠慮してみただけど、恵美に言わせれば「迷惑料」らしいのでありがたく受け取る事にしたのだ。何の迷惑料なのかは、敢えて深く訊かない事にした。

瞬市さんは変態なみのシスコンだけど、その一方で常識ある大人でもある。何故にその相反する属性が両立可能なのかは、不明だけれど。そもそも人間という生き物が矛盾した存在なのだから、そうした矛盾もまた人間故の性なのだろう。なんちゃって。

ま、瞬市さんが納得して出したってのなら、遠慮せず受け取る事にしよう。

恵美は既に大学に向かっているというので、冷たい野菜ジュースを流し込むと、アタシは出来るだけ急いで家を出た。

二十を過ぎて二十分で支度できてしまう自分に、オンナとしての疑問を抱かないわけでもなかったが。

マンションから大学までは、自転車なら十五分程の距離だけど、バスなら三十分以上掛かる。

都会と違って鉄道網が発達していないので、自然と公共の足はバスになる。

そのバスの方が時間が倍近く掛かるのは、バス会社の設定した路線に問題があるからだ。いやまあ、アタシからすりゃ問題だけど、一般的には妥当なんだろう。真っ直ぐに大学に向かってくれりゃいいのに、何故その道を回るのか？ と問えば、何故ならそこに数少ない駅があるからだ、バス会社は答えるだろう。大衆の利益の前にはアタシ個人の都合など塵にも等しいのだ。

と、意味もなくヤサグレしてみる。

要するに、蝉の声が五月蠅いのも、空が真っ青なのも雲が真っ白なのも、この炎天下で汗だくになりながら自転車を漕がなければならぬのも、世界がアタシのために存在してないからだ。

ああ、太陽が眩しすぎて思考が焼き切れそうだ。

こんな時にこそ、どこもドアがあればと切に願う。

そうすれば何処にだって行けるのに。

アタシも心から叫んでみたい。

ドラ も〜ん、た〜すけて〜〜〜！

勿論、実際に叫んだところで青い猫型ロボットは助けに来てくれないはしない。

来るとすれば、通報を受けたお巡りさんだろう。

結局のトコロ、アタシの問題は、アタシ自身が処理しなけりゃいけないのだ。

それがどんなに「有害」であろうとも。

## 第五七話 カエルの世界は四原色です その3

大学の図書館は夏休みという事で閑散としている、と思いきや、  
以外と人が多かった。

多分図書館がお盆休みを兼ねた長期休館に入る前に、本を借りて  
おこうという連中が押し寄せているのだらう。無論、アタシもその  
一人だ。

大学図書館は専門書が充実しているけれど、学生の人数からすれば  
数は少ない。ゼミの課題なら先ず被る事はないけれど、レポート  
となれば被る事はまあある。つまり参考文献は早い者勝ちになる。

そしてアタシは図書館の端末を見て、自分が出遅れた事を知った。  
「うわちゃ〜」

と頭を抱えたところでどうにもならないので別の参考文献を探す  
ものの、軒並み借りられてしまっている。

借りられているからといって、その本が読めないという事じゃない。  
い。

大学の図書館には、専門書の場合同じモノが「貸出禁止」として  
置いてあるからだ。

けれどそれだと何日も図書館に籠もる事になる。

別にバイトもしてないから特に支障はないんだけど。

ぶつちやけ言って面倒くさい。

いつそテーマを変えるか？

なんて思いつつ、端末を操作する。

レポートの課題なんてのは大雑把に出されているだけで、幾ら  
でも融通は利くんだけけど、誰だっけ書きやすいテーマを選びたい。

或いは、卒論の礎となるようなテーマ。

大学の最初の三年間なんて、卒論のためにあるようなもんだ。

三回生になった時点で、大概卒論のテーマまでは決まってるなくて  
も方向性は決まってる。



史学の場合なら、何時の時代をやるのか、政治史なのか文化史なのか、どの社会的階層にスポットをあてるのか。アタシだって、そのくらいはもう決まってる。

アタシが卒論で書こうとしてるのは、ズバリ政治と宗教の關係に關してだ。

何時の時代も政治は宗教と切っても切れない關係だ。

今の日本は政教分離を唱えてるけど、それだって一つの關係だ。

アタシは、今の日本の宗教に対する無關心と表裏一体の無節操さが好きだ。

外国人からすればそりゃもう奇妙極まりないんだろうけど、宗教に頼らなくても今の日本人は十分道德的だし、勿論犯罪者がいなくなるなんてことはないけど、天災などの大きな災難に見舞われた時に規律的に行動し暴動を起こさないのは誇るべき国民性だと思う。

逆に外国人に問いたいくらいだ。暴動を起こしたところで、更に首を絞められるのは自分たちなのに、なんでああいう事するんだろう？ ってさ。

憂さを晴らせば一時的にスッキリするだろうけど。

後で余計に困るだけの話じゃね？

なんて思いつつ、夢の世界ではあの後どうなってるだろうと考える。

地震が収まった後も、暫くは身動きが取れなかった。何度か地震の経験があるアタシでさえそうなんだから、他の人間は尚更だった。

一体どれくらい息を潜める様に蹲っていただろう。

「ミリー」

リズが怯えた声で四号の名を呼び、細い腕がギュツと抱きしめてきた。

アタシはそんなリズを安心させたくて、強く抱きしめ返す。

「大丈夫よ」

そうリズに囁きながら、自分に言い聞かせる。

大丈夫。

今は、まだ。

何がどうなのか分からないまま、そう思う。

「大丈夫」

何時か誰かがアタシに言った。

その時アタシは安心できたんだろうか？

覚えていない。

リズはアタシの言葉なんかで安心できるだろうか？

それでも言おう。

「大丈夫」

リズの事は、リズだけは守るから。

その思いが強ければ強い程、アタシという不安定な存在が確かなものなっけ行く様な気がした。

あの後、余震を警戒してまんじりもしない夜を明かした。  
ま、アタシは夜が明ける前に離脱しちゃったけど。

あれからリズ達はどうしているだろう？

避難していたお陰で後宮に怪我人は出なかったけど、建物がどうなっただかは分からない。

死傷者の有無や被害の範囲と規模。

早くリズの下へ戻って状況を確かめたいけど、こればかりは夜まで待たなくちゃならない。といっても、今夜向こうに行けるかどうかは分からない。

どうしようもない状況に、気持ち焦れる。

状況が落ち着いたら、リズは間違いなく「神人」になる。

しかもただの「神人」じゃなく、「神の最愛人」だ。

歴史上「予言」を与えられた三人目の人間として。

アタシがそう仕向けた。

アタシがいなけりや、ただの「神人」で済んだかもしれないのに、いやが上にも神教内での皇国再興の気運は高まるだろう。

それが向こうの世界の政治情勢にどんな影響をもたらすのか、アタシには全く予想もつかない事だ。

強さが欲しい。

心の底から思う。

リズを支えられる強さが。

そのためには、アタシ自身の問題を解決しなけりやいけないんだと思う。

スツポリと欠けた記憶。

事故の時の記憶がないなんて、良く聞く話だ。

今までその事を気にした事はなかったけど、アタシがそう思ってるだけで、実際は気にしない様になっていたかもしれない。

無意識のうちに考えない様にしていたんじゃないだろうか…。

「アタシは思考に没頭する余り、現実を忘れてしまっていたらしい。使わないのなら、変わってくれねえ？」

不意に掛けられた声に、驚いた。

「ぐぎっ」

自分でもどうかと思う奇声に、慌てて周囲の様子を伺った。

クスクスという忍び笑いは、うん、聞かなかった事にしよう。

ていうか、何割り込もうとしてやがんだ、コイツはよっ。

アタシがそう思って睨み付けると、声の主は悪びれもせず言っ  
のけた。

「そう睨むなよ、宮本。もう十分はスクリーンセーバー睨み付けて  
るじゃないか」

「うるさいな、小杉祐輔。他に空いてる端末あたりな」

アタシは、元カレを睨み付けてそう言った。

小杉祐輔と付き合ったのは、大学一回生の時の二ヶ月だか三ヶ月  
だかの短い期間だった。

梅雨時から付き合い始めて、その年の夏休みが明ける頃には別れ  
ていたと思う。

正直二年も前の話なので、よく覚えていない。

アタシから申し込んで、ヤツに別れを告げられた。

アタシはその間に十分ヤツから学ぶべきものは学んでいたから、別れる事に異論はなかった。

当然ながら、未練はない。

未練になるほど気持ちがあつたワケじゃないし。

手っ取り早い二号のモデルとして小杉祐輔を選んだだけであつて、身近で観察する手段として付き合う事にしたのだ。

ただ、アタシはヤツの好みから完全に外れてるため、断られる事は覚悟していたけど。

今日だつてヤツが連れていたのは、このくそ暑いのにご苦労だなあと労いたくなる程完璧にメイクしたキレイ系の女子だ。

その女子力の高さは賞賛に値する。

Tシャツとジーンズにスッピンで出歩けるアタシとは、人種が違つとしか言いようがない。

そんな男が、なんでアタシと付き合おうと思つたのか？

今でも謎だ。

多分気の迷いとか言うヤツだろう。

ひよつとしたら、ヤツは少し遅れた五月病だったのかもしれない。付き合っている間は、何やら情緒不安定だったから。

些細な事で泣いたり狼狽えたりしてたような…。

そのくせ薄ら寒い台詞は垂れ流しで…。

泣きながら夜空を見上げて星がどうとか言われた時は、滑稽といふよりは気の毒になつたもんだ。

ま、それもあんまり覚えてないんだけどもさ。

それもこれも所詮は二年前の記憶だ。  
で。

その互いに納得づくで別れた男女が、なんで今更顔をつきあわせなけりゃならんのか？

というか、どうしてコイツは彼女が変わる度にアタシに会わせに来るんだ？

紹介してくれるワケでもないから、推定でしかないんだけど。

ただ会う度に連れてきている女が違うから、そう思うだけだ。  
どっちにしろ、別れた後も友達づきあいしてるってんならともか  
く、普段のアタシとヤツの間には殆ど何の接点もない。

今更会って、一体何の話があるのか？

それともコイツは元カノ全員にイチイチ今カノを紹介して回って  
んのか？

尽きる事のない疑問は、けれども答えが欲しいワケじゃない。  
興味が無いし。寧ろ関わってくれるなと思う程だ。  
はあ。

恵美はどこにいるんだろう？

周囲を見回してみても、恵美らしき影はない。  
そりゃそうだ。

文学部関係の本は三階にあるけど、法学部関係の本は四階だ。  
そっぴやあコイツ、何学部だったかな？

経済だったか、理工だったか。  
どっちでもいいけど。

少なくとも文学部と法学部じゃない事は確かだ。

「ちよつと……」

小杉祐輔が何事かを今カノに囁いた。

すると今カノは、アタシを数瞬睨み付けた後何処かへ行ってしま  
った。

一体何なんだ？ 感じ悪いなあ。

というか、何で小杉祐輔は残ってたんだ？

「……………」  
「……………」

何か話があるならさっさと話しゃいいのに、ヤツが話し始める気  
配はない。

「あかさ」

「な、なんだ？」

「アタシ調べ物があるからさ」

何処か行つてくれ、と暗に言つたつもりだけど、ヤツには伝わらなかつたらしい。

「レポートか？」

「今この時期にそれ以外で図書館に来てる学生がいると思う？」  
勿論いるだろう。涼みにとか涼みにとか涼みにとかさ。

「それも、そうか」

小杉祐輔は齒切れ悪くそう言うものの、立ち去る気配はない。

「……………」

……………ウザい。

ぶつちやけなくても、非常にウザい。

これだけ空気が読めなくて、どうしてコイツはモテるのか？

顔はまあいいと思うし、どっかのボンボンだとかで金回りもいいらしい。そのくせマメで、記念日とかは忘れない。尤も、「初めて手をつないでから十日目記念」とか、アタシには謎の記念日だったけど。

ただ、付き合つて楽しい相手だという事くらい、アタシにも分かつた。

コイツと付き合っている間に、所謂恋愛がらみの幸せは感じた事がなかつたけれど、ある意味面白かつた。何度笑いをこらえすぎて腹が痛くなつた事か。

本人が意図していないという事は別にして。

けれどこれだけ空気が読めないと、何かを強請るにしても直接話法で話さなきゃ通じないんじゃないかと思う。

そして大概の女子というものは、様式美とでも言うべき方法論で直接的な言葉で強請らない。「これ超可愛い〜、すごいキレイ〜。ねえねえ、アタシに似合うと思わない？」と、あからさまながらも間接的に強請るのだ。

果たしてコイツにそれが汲み取れるだろうか？

コイツの交際サイクルが短いのは、きっとその辺りが原因に違い

ない。

などと思いながら、アタシもまた直接話法に踏み切る事にした。

「端末使いたいんならさ」

別のをあたつてくれ。

そう言おうとして、ヤツの言葉に遮られた。

「澄香。これ」

突然差し出された全国チェーンの古本屋のビニール袋に、意味が分からなくて目が点になる。

「この間、たまたま行った古本屋で見つけたからさ」

無理矢理受け取らされた袋は、薄くて固かった。

その手触りから、多分CDとは思っただけ。

アタシにはそんなモノを受け取る心当たりはなかった。

「意味が分かんないんだけど？」

アタシの言葉に、ヤツは何故か「仕方がないなあ」とでも言いたげな生暖かい眼差しを向けてきた。

「随分前の話だから、澄香が覚えてないのも仕方がないな」

キモッ。

「だから一体何？」

アタシは苛立ちを隠さずに問いかけたけど、ヤツには相も変わらず通じない。

「いいから、開けてみろって」

だから一体何だつてえの！

そう思いつつも、ヤツの表情があんまりにも不気味だったので、仕方なく袋を開けた。

「……………」

コイツは、何を思ってアタシに落語のCDを寄越してきたのか？

戸惑うアタシに、小杉祐輔は何処か自慢げに言った。

「ほら、澄香、前に言ってただろ？ 中学校の頃『寿限無』が流行ってた、周りがみんな言えたのに、自分は覚えられなかったのが何か悔しかったってさ。負けず嫌いの澄香らしいと思つてさ、別に気



にかけてたわけじゃなく、不意にそれ見て思い出したっていうかさ。ま、これで覚えていつか俺の前で披露してくれよ、なんてな、ハハハハハハ」

後半の言葉は、殆ど耳に入ってこなかった。そうだ。

アタシ、「寿限無を忘れてた」んだった。

子供の頃は、確かに言えたのに。

一体何時、思い出したんだろう？

第五七話 カエルの世界は四原色です その3 (後書き)

二年前の事を覚えていることすぎん。報われないなあ…。

第五八話 カエルの世界は四原色です その4 (前書き)

遅くなって申し訳ありませんでした! m ( ) ( ) m

第五八話 カエルの世界は四原色です その4

寿限無寿限無五劫の擦り切れ海砂利水魚の水行末雲采末風采末食  
う寝る処に住む処やぶら小路の藪柑子パイポパイポ パイポのシユ  
ーリンガンシユーリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポコ  
ピーのポンポコナーの長久命の長助よ。

その日の夕食は高級和食だった。

所謂会席とか言うヤツである。

目立った看板もなく、一見普通の家じゃねえの？ と訊きたくな  
るような佇まいの店だった。いやまあ、普通の家と言うには相当デ  
カいんだけど。

当然ながら全席が個室で、庭を眺めながら食べるといふ優雅さだ。  
通された部屋は茶室っぽくて、ふすまの向こう側に枕二つ並べた  
布団が敷かれてんじゃないかと疑いたくなる程の豪勢さはないけれ  
ど、何とも言えない とうか、どう言ってもいいのかわからない  
風情があった。

「うわ。一体どんなアコギな手を使ったわけ？」

賤の行き届いた仲居さんが一旦退出すると、アタシは開口一番に  
そう言った。

「別にいい。たまたまココを瞬兄が予約してたんだよ。カノジョとしゃべりするために。けど瞬兄が都合でいけなくなっちゃったって言うからさ。それを貰い受けただけ。謂わばリサイクルだよ。ほら、ワタシって地球に優しいじゃん？」

恵美は肩に掛かる美しい黒髪をサラリと流しながら、優雅に微笑んで言った。

確かに恵美は地球には優しい。WWFの会員になってるくらいだから。

しかしそれと同じくらい、人には優しくくない。

恵美は「貰い受けた」と言ったけど、きつと無理矢理奪い取ったに違いない。

まあ、そんな義妹を溺愛する瞬市さんなら、デートだろうと恵美のためにドタキャンするのも厭わないんだろう。

ていうか、彼女いたんだ…。

気の毒に。

アタシは心の中でまだ見ぬ　そもそも会う予定もないけれど　彼女に手を合わせた。

ついでに目の前に並べられた高級食材にも手を合わせる。

凝った器に上品に盛られた料理は、先付けというらしい。

仲居さんが何やら解説をしてくれたけど、分かったことは「ウニとアワビは夏が旬」ということだけだった。

ウニはともかく、アワビなんて二十一年間生きてきて食べた事なんかあっただろうか？

瞬市さん、ありがとう！　アナタが変態で本当によかったよ！！

「いったただきま〜す」

アタシは決して値段の事は考えまいと、箸をのばした。

「八モつてもつと生臭いんだと思ってた」

「伊勢エビだって！　伊勢エビだって！」

「なんだこりゃ。天然鮎つて、こんなに美味しいもんなの？」

「何このトマト！　甘っっ」

「出汁はあご？ 顎？？ 何の顎？」

「白桃のソルベ？ ソルベって何？ シャーベットじゃねえの？」  
正直に告白しよう。

アタシ達はバカ丸出しだった。

というかぶつちゃけ、頭が悪いヒトだった。

いいや！ 美味しいモノを前にすると、人は誰しも阿呆と化するのに  
違いない！

良く賤けられた仲居さんは、最期まで吹き出しもせずアタシ達に  
つきあってくれた。

最期に出てきたこれまた上品なお菓子と抹茶で、やっと一息つく。

「おそるべし、会席。肉出てねえのに、この満足感」

満足した猫の様に目を細めながら、まるで何かの標語の様にそう  
言う恵美に、アタシは頷きながら言った。

「アンタ、肉スキーだもんね」

恵美はこのお上品な顔に似合わず肉が好きだ。牛も豚も鶏も、羊  
もイノシシも鹿も食う。

ついでに言えばへビもカエルも食うらしい。

「で？」

茶をすすりながらそう問いかけてきた恵美に、アタシはオウム返  
しに問い返す。

「でって??？」

「何かあった？ てか何があった？」

唐突にそう言い出した恵美に、どうせ殆ど野生じみた勘で言っ  
てるんだろうと思いつつ、一応根拠を訊いてみる。

「なんでそう思うワケ？」

「顔が変？」

「なんだそりゃ」

速攻で返ってきた答えに、これまた速攻でツッコんでみる。

そりゃ確かに、アンタの顔と比較すりゃあ、大概の人間は「変」  
の部類に入るだろうけど。

微妙に疑問形なのは、アタシへの気遣いだと信じたい。

「~~~~~ん」

恵美の問いに、何と答えたもんかと考える。

言いたくないワケじゃなく、何をどう言えばいいのか分からない。端的に言っつてしまえば、「何もなかった」ワケだし。

「現実」には何もない。

この世界では、何も起こっていない。

全てはアタシの夢の中の出来事だ。

ま、今更の話だけど。

「……あのさ、中学校の時なんでか『寿限無』って流行ってたじゃん？」

だからアタシは夢の話じゃなくて現実の話をすることにした。

「……ああ、一年の時だったっけ？　なんでかやたらと流行ったね」

恵美は訝りながらも話に乗ってくれる。

「確か、幼稚園に行ってる誰かの妹だか弟が『寿限無』が言えるんだとかなんとか、そういうのがきっかけだったと思うけど」

「確か小松崎だったよ。小松崎の妹だか弟がやたらと年離れてて。

幼稚園児ができるんだから、中学生ができないはずはないとかさ」

「なんでワタシら幼稚園児と張り合おうとしたのかね？」

恵美の今更なツッコミに、アタシは和菓子にぶっとい楊枝みたいなのを突き刺しながら答えた。

「それが所謂チュウニビョウウってヤツじゃね？」

「中一だし」

「じゃあ中一病」

「なんじゃそりゃ」

あの頃は、子供って脳みそ柔らかいから、とかなんとか言っつてできない事の言い訳をしてたけど、今思えば中学生も十分、てか思いつきり子供だ。

私服だった小学生から制服のある中学生になって、やたらと大人

になった様な気がしたんだろうな。

リズも年からすれば来年中学生って事になる。

リズの教育は完全家庭教師制だけど、そういう子にもチュウニビヨウってあるんだろうか？

リズがチュウニビヨウ。

それはそれで微笑ましい様な気がする。

なんて内心でニヤけていると、恵美が行儀悪くも太楊枝でアタシを指しながら訊いてきた。

「で？ それがどした？」

アタシは恵美の問いには直接答えず、鞆の中から昼間元カレから殆ど無理矢理渡されたCDを取り出して見せた。

恵美はそれを手にとって、マジマジと裏と表を眺め見る。

「『更屋敷』『宇治の柴舟』『寿限無』？ どしたのコレ？」

「小杉祐輔に貰った」

アタシが口にした名前が一瞬誰の事が分からなかったのだろう、恵美はキョトンとした後、

「はあ？ なんでアイツが、今更？」

恵美の意見は尤もだと思う。

「分かんね。昼間さ、図書館でいきなり渡してきやがったんだよ」「だからなんで？」

「だから分かんないんだって。前にアタシが『寿限無』の事で何か言ったらしいんだけどさ。別れてからまともに話した記憶すらないのに。何年前の話って話でさ」

付き合ってる時でさえ意味不明だったのだ。

付き合いのなくなった今は、今更の尚更だ。

アタシがそう言うと、恵美が不思議そうな顔をする。

「ん？ ヤツのキモい行動が問題なんじゃねえの？」

アタシは恵美の言葉に、ひらひらと手を振った。

「小杉祐輔はただのきっかけであって、問題じゃないんだよ」  
てか、ヤツがアタシの中で今後問題になる事はないだろう。



「じゃあ、何が引つかかってんのさ」

恵美の当然の疑問に、アタシは大きく嘆息した。

「うん、それがさく、アタシ思い出したんだよね」

「何を？」

「アタシ、昔『寿限無』言えなかったんだよね」

「子供の頃の話？」

「てか、つい最近までの話。多分」

「『多分』て？」

「何時までだったのか定かじゃないから」

アタシの言葉に思うところがあつたらしい。

恵美が思案げな顔で訊いてくる。

「スミさ、この前、向こうの変質者共を『寿限無』唱えて気絶させ  
たつて言つてなかった？」

「そうなのだ。」

アタシは恵美の言葉に頷いた。

「言つてた」

「ええと、それつつまり。子供の時できなかった事が大人になつ  
て出来る様になった。という、報告？」

「なんじゃそりゃ。」

「なんでアタシがアンタにイチイチそんな事を報告しなきゃあなら  
んのよ」

「てか『寿限無』にどんだけ一生懸命なんだつて話だよ。」

「あたしや落語家かつ。」

「うーんと、自慢？」

「になるかつ」

幼稚園児が普通に『寿限無』を言えるらしい昨今、二十歳を過ぎ  
たアタシが言えたところで自慢になるはずもない。

バンコクの本当の名前を言える方が、余程凄い事だと思つ。

どちらも日常生活では必要ないだらうけど。

「じゃあ、何なのさ？」

恵美にはアタシの言いたい事が分からないらしい。  
そりゃそうだ。言ってるアタシにだって、よく分かってないんだ  
からさ。

アタシは。

小さい頃は言えた。

もっと小さい頃。

おとうさんと一緒に、ひいおばあちゃんの前で披露した。

なのに。

中学一年生の時は言えなかった。

読んでも読んでも、まるで言葉が上滑りする様に頭に入って来な  
くて。

その内頭がぼんやりとしてくる。

言えない子なんて沢山いた。

だからそういうモンなんだと思ってた。

なんであの時不思議に思わなかったんだろう。

前は言えたのにつて。

そして、この前なんて思わなかったんだろう。

前は言えなかったのにつて。

練習した覚えもないのに、何故あの時スラスラ言えたのか？  
まるで何かのスイッチが入ったみたい。

その直前のトランス状態とは、何か関係があるんだろうか？  
一歩進む度に何かの疑問が湧いてくる。

それがどうにもまどろっこしい。

アタシの記憶には齟齬がある。

記憶なんてモノは大概齟齬だらけなモンだけれどさ。

アタシの場合、メタ的な記憶にこそ齟齬がある。

「結局さ、『寿限無』が一体何だって言うわけ？」

いつまで経つても答ええないアタシに焦れて、恵美が問う。

そうなんだよ、恵美子君。

問題は、そこなんだけれどもさ。

「それが、アタシにも分かんないっちゅうか……」

「寿限無」で目覚めたと言っていたアディーリアであってアディーリアじゃないアディーリア。

アタシは肘をついて顎を支えながら、恵美の後ろの何やらもったいぶった文字の書かれた掛け軸を見る。

そついやあ古文書学のレポートも書かないとな。

と、飽和した思考に「現実」が割って入ってくる。

古文書読めつつあったてな。

課題として出された古文書のウネウネとした文字を思い出すとウンザリする。

まあ、課題に出される様なモノなんて、既に解読済みのモノなんだけれどもさ。

それを敢えて「自力で」解読しろってところがミソだ。

学生にそんな事ができるワケがない。

そして、答えは既にある。活字になって、この図書館にも入って

る。  
つまり、見事解読できてたら、それが逆に「不正解」って事になる。

正解が不正解で、不正解が正解。

そこでふと気がついた。

アデーリアが目覚めた一方で、ムダメン共は気絶した。でも意識を失くしたのはヤツらだけじゃない。

夢の中でのアタシは、意識があった。けれど。

現実のアタシは。

「You Got a mail!」

全く記憶にない着信音に、アタシの思考は中断された。

しかも、なんだこのスーパースーパーハイテンションな口調。

アメコミの悪役だってここまでハイテンションにならんだろうって感じの声だ。

疲れている時に聞いたら、確実にイラッとするに違いない。

こんなモノ、一体どっからゲットしてきやがったんだ??

目の前の確実に犯人である恵美を軽く睨んでから、アタシはメールをチエックする。

叔母さんからだ。

アタシはメールを開いて文面を読む。

「……………」

その内容に、多分微妙な表情をしていたのだろう、恵美が気遣わしげに訊いてくる。

「どした?」

「叔母さん、この日曜、帰国するんだって」

急に時間が空いたからって書いてあるけど、確実にこの前の「昏睡未遂事件」が影響してるに違いない。

さて、どう言い訳しよう。

## 第五九話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い

叔母さんが最寄りの駅に到着したのは、夜の七時近かった。

丁度日没の時間で、紫紺の帳が今まさに下りようとしている頃だった。

「澄香！」

駅まで迎えに行ったアタシに、叔母さんは開口一番名前を呼んでギユウウウウウ。

思いつきりアタシの両頬を抓った。

「痛痛痛っ！ 痛いって！ 何すんだ！」

叔母さんの手を払いのけながら抗議すると、叔母さんは当然とばかりに両手を腰に当てながら踏ん返り返って言った。

「だって、抓りたかつたんだもん！」

悪戯っぽい表情の奥に、微かな怒気が感じられた。

うむ。

ここは四十を過ぎて「もん」とか言うな、というツッコミは止しておこう。

「……………おかえり」

「ただいま」

口角を上げて叔母さんは微笑むけれど、目が笑っていない。

叔父さん、一体叔母さんに何て言ったんだか…。

一抹の不安を覚えながら、アタシは叔母さんの荷物を一つ持った。荷物と言っても、小さな目のスーツケースとポストンバッグだけだ。

海外と日本を行き来し慣れてるせい、叔母さんは大きな荷物で移動するという事はない。まあマンションにも服なんかはあるから、必要ないっちゃあ必要ないんだけどもさ。

「どうする？ 一応夕飯の支度はしてあるけど。何か食べたい物があつたら…」

叔母さんはアタシの言葉を最後まで言わせなかった。

「そうね。外で食べるより、うちでのんびりしたいわね。シャワーも浴びたいし。あと梅干し食べたい、味噌汁飲みたい。だし巻き食べたい」

なんだその庶民嗜好。せめて「寿司」とか言えんかね。

「向こうでだって日本食は食べれるじゃん」

今や日本食は世界的にメジャーなんだし。

田舎町ならともかく、叔母さんが住んでるのはシアトルだ。

ええと、シアトルって大都会だよな？

マイクロソフトがあるし、アマゾンあるし、スタバもあるし。

いやまあ、大企業が田舎に本社を構えないとは限らんけどさ。

「向こうでまともな日本食っていったら、高級店になるのよ。そういうんじゃないかって、澄香の作ったチープな庶民の味が食べたいの」

叔母さんはそう言って、飛行機と電車を乗り継いでの長旅とは思えないくらい完璧にセットされている髪を掻き上げた。

じゃあ自分で作ればいいじゃん、高給取りの叔母さんにならど高い食材だって買えるだろうし。

とはアタシは言わなかった。

何せ叔母さんの家事の腕前は、あの恵美すらも足下に及ばない程に壊滅的だ。

なんでも、圧力鍋でもないのに鍋を爆発させる事が出来るらしい。食材の飛び散ったキッチンを見て、叔父さんは思ったらしい。

彼女に料理をさせてはダメだ！！と。

アタシに言わせりゃ、料理だけじゃなく掃除も洗濯もさせてはいけない。

耐久力に優れたダイソンの掃除機を一瞬で壊し、全自動洗濯機に泡を吹かせる事が出来るのだ。この柏木凧子という女性は。

「……………言って置くけど、夕飯は素麺だから」

「じゃあ、具は錦糸卵とハムとキュウリね」

「冷やし中華か！」

とツツコむものの、その通りの具材を用意していたりもする。

冷やし中華の様な具材は叔母さんの実家のメニューで、叔母さんのところへ来て初めて料理をする様になったアタシは、そのため「叔母さんの家の味」は作れても「母親の味」は作れない。

「あ、あと揚げ出し豆腐食べたい」

「はいはい」

「焼きナスも」

「へえへえ」

二つとも想定内のメニューなので、アタシは唯々諾々と受け入れる。

「あとみたらし団子ね」

う。

それは想定外だ。

なんで団子？ てか作れってか？

アタシは数瞬の躊躇の後、どうにか結論を出した。

「……………コンビニで売ってるのでいい？」

「仕方がないわね、それでいいわ」

一体何処の女王様だ、とツツコミたかったけど。

女王様は、そもそもみたらし団子なんか食わないか。

と、思わずみたらし団子にかぶりつくアディーリアを思い浮かべて吹き出しそうになった。

タクシー乗り場に行くと、三台停まっていた。

できれば初乗り運賃の安い小型車に乗りたいたいところだけど、先頭に泊まっているのは大型の個人タクシーだ。

和をもって尊びとなす、をモットーとする日本人としては、前の二台を無視して三台目に乗るのは憚られる。

え？ 用法が違う？ まあいいじゃん。気にすんな！

運転手さんに叔母さんの荷物をトランクに積んで貰って、アタシ達は帰路についた。

「疲れた？」

「うん。流石に九時間エコノミーってのはキツイわね。機内食は不味いし、機内食は不味いし、機内食は不味いし」

「三回も繰り返すくらい不味かったのか。」

「或いは三回出て三回とも不味かったのか。」

「いや、九時間で三回も機内食が出る事はないよね。」

「どちらにしろ相当不味かったのだろう。」

尤も、グルメな叔母さんの口に合う機内食なんか、ファーストクラスでもなきや出ないとは思うけど。料理の腕は壊滅的だけど、口は肥えてるからな。」

「アタシは隣に座る叔母さんをチラリと見やった。」

皺一つ無い黒いパンツスーツに、足下は十センチはあるだろう磨き上げられた黒いヒール。

膝の上で組まれた指は手入れが行き届いて、仕事に支障がない程度のネイルが施されている。

「相変わらず身だしなみに隙がない。」

「それでも、渡米してから叔母さんは変わったと思う。」

「なんていうか。」

「派手になった。」

「ぶっちゃけ言えば、化粧が濃くなった。」

童顔の日本人は、化粧をきっちりしとかないと幼く見られて不利なんだって言うてたけど。」

「アイラインくつきり、アイシャドウもバツチリ、口紅は赤く、眉毛が怖い。」

「平たく言えば、日系三世って感じた。」

「別に、平たくもないか？」

「要するに、ナチュラルメイクが主流の日本では、ちょっと浮いている。」

「ああ、そうやってアメリカナイズされていくのね、とかなんとか感慨ぶってみる。」

「まあ、そんな事はどうでもいいんだけれど。」



その方がやりやすいなら、そうすればいいわけだし。  
いやそれもホント、どうでもいいんだけどさ。

……白状しよう。

木曜日にメールで帰国を告げられてから、アタシは散々考えた。  
様々な言い訳を。

けれど、全然全く良い案が思い浮かばなかった。

だから実は、内心で冷や冷やしてる。

単なる夏バテだとか。

睡眠不足だったんだとか。

叔父さんに言った言い訳が、通じるワケもない。

というか、通じなかったからわざわざ帰国してきたんだろうしさ。  
でもさ。

帰国する程のことでもないと思うんだよね。

心配してくれてるのは分かってるし本当にありがたいんだけど、  
あんまり迷惑かけたくないっていうかさ、ある意味無視してくれて  
もいいくらいなんだけど。

叔母さんには。

本当に感謝してる。

新しいお父さんも新しいお母さんも、アタシはいらない。

我ながら可愛くない口調でそう言ったアタシに、艶やかなフレン  
チネイルの指先を顎に当てながら、叔母さんは言った。

じゃあ母親不適格者な私のもとに来る？ 一切合切家事して  
くれるのなら、来てもいいわよ？ 言っておくけど、後から「お母  
さんになって」なんて言われてもなれないからね？

そう語る唇はピンクベージュで、まだあの頃の叔母さんはナチュ  
ラル路線だった。

数ヶ月前に離婚したばかりだった叔母さんは、自分は結婚して家  
庭を持って良い様な人間ではないとも言った。

子供は可愛いし、愛しいとも思うのよ？ なのに、何故かし  
らね。

そう言った叔母さんが寂しそうに微笑んだのを覚えている。

「母性本能」なんてのは単なる神話だとは思っけど、叔母さんには叔母さんの負い目みたいなものがあるんだろう。

多分そのせいで、叔母さんはゆかりちゃんと会おうとしない。

母性を求められても、応えられないのが辛いのかも知れない。

ま、カエルにだって、オスだけが育児してメスは産みっぱなしって種類もいる。

そもそもカエルは育児しないんじゃないのって話だけど、そうじゃない種類も沢山いる。メスだけがしたり、オスだけがしたり、両方でしたりと、バリエーションは様々だ。

因みに、『種の起源』の著者の名前を冠するそのカエルは、オスが卵を鳴嚢の中で孵化させた上に、子ガエルになるまで育てるんだとか。孵化したオタマジャクシは、鳴脳の中で父親の皮膚から栄養を摂取するらしい。

母親が子育てする種類だと、無精卵を産んでそれをオタマジャクシに喰わせたりとか。

カエルというのはアレでいて、なかなかハードな母性や父性を見せてくれるのだ。

キツとタクシーが止まったのに気づいて、アタシは顔を上げた。

車窓から見上げると、見慣れたマンションが聳えている。

叔母さんが買ったマンションだけど、叔母さんは殆ど住んだ事がない。

当時だってこんな地方都市に居るべき人じゃなかったけど、今では日本に帰ってくる事すら難しい。

それが予測できない人じゃないのに。

だってアメリカに永住する気はないもの。

叔母さんは笑顔でそう言って、三十年ローンで買った。

叔母さんは何時だってアタシを理由にしない、なんてご立派な人間じゃない。

渡米するのにアタシの高校卒業を待ったのだと、後からだけど八

ツキリと口にした。

嫌いな料理は不味いと言い、けれど失敗作は黙って食べる。

六年半、アタシ達はそんな風にして、本音半分綺麗事半分で結構上手くやっていた。

「で、こつちには何時までいられるの？」

部屋の鍵を開けながら、アタシは叔母さんに訊いた。

「それがね、明後日には発たなきやならないの。しかもニューヨークにね」

そのまま出張って事なんだろう。

相当ハードなスケジュールなハズなのに、叔母さんはとても生き生きとしてそう言った。

結局その夜は、叔母さんの疲れもあって、夕食の後殆ど話すことなく就寝した。

一体どんな小言を食らうのかと覚悟していたアタシは、拍子抜けしたと同時にホッとした。

だって言い訳なんか、全然思い浮かばないし。

まさか「本当の話」をするわけにもいかないし。

てか、「本当の話」もなにも、アタシだって何であんな事になったのか分かってないし。

「昏睡未遂の件なんだけど、どうやら『寿限無』と何か因果関係があるかもしれないんだよね」

なんて、まかり間違っても言えないし。

一体何のファンタジーだよ、って話だよ。

いやまあ、「夢の話」なんてファンタジーの極致みたいなもんだけれどさ。

そんな夢見がちな話を、まっとうな常識人である叔母さんに話した日にゃあ、一体何がどうなるのか想像もつかない。

ひよっとしてひよっとする、すっかりアメリカカナイズされた叔母さんなら、カウンセリングを受けなさい、なんて言い出すんじゃないだろうか？

なんて事を悶々と考えて、アタシは殆ど寝られなかった。

てワケでもなく、それなりに普通に眠った。

ま、そんなもんだよね、人間なんて。

次の朝、目覚ましの音で普通に目覚めた。

電池を入れ替えて普通に動く様になった目覚まし時計は、相も変わらずコツコツと時間を刻む。

叔母さんが来ている間くらい、夢の世界に行くのは避けたい。

と理性的に考える一方で、リズの元へ直ぐにでも行きたいと焦る自分もいる。

地震のあった夜以降、向こうの世界に行けてない。

勿論、今までだって何日も向こうに行かなかった事はあった。

下手すりゃ一ヶ月近く、なんてこともある。

けれどさ、状況が状況だけに、もう少し融通利かせてくれないんじゃないかと思う。誰が利かせる融通なんだって話だけれどもさ。

くっくっくっ！

リズの事が気になって、眠れない。

いや、寝てるけどっ。

てか寝なきや始まらないんだけれどっ。

アタシが煩悶を抱えながらリビングに入っていくと、叔母さんは既に起きていて、すっかり身支度を終えていた。

「お墓参りに行くわよ」

昨日と違って幾らかラフな格好となった叔母さんは、けれどもやっぱり化粧はアメリカンなままだった。

第五九話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い（後書き）

正確には、マイクロソフトはシアトルにはありません。ゲイツ君はシアトル在住ですけど。ものごっつい屋敷らしいです。

第六十話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い その2（前書き）

お客様からのご指摘により副題の誤り（父性と母性の順が逆）を訂正しました。ご指摘ありがとうございました m（ ） m

## 第六十話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い その2

日本は自由な国だ。

と、ここ何年か墓参りに来る度に思うようになった。

両親のお墓は「宮本家代々の墓」じゃなくて、お父さんが新しく作った墓だ。

祖父母と折り合いが悪いからそうしたのか、或いは「宮本家代々の墓」が遠方にあるからなのかは分からない。

お墓はお寺が管理しているただっ広い霊園にあつて、代々の檀家じゃない人のお墓も多いらしい。

多分そのせいだろうと思うのだ。

五、六年前から宮本家の墓の右隣にミーアキャットの群れ（恐らく家族と思われる）を模した墓石が立つようになり、一昨年からは左隣にTレックスの形した墓石が立つようになったのは。

恐らく職人さんは殆どやけっぱちで技巧の限りを尽くしたのだらう。

冷たいはずの御影石には、今にも動き出しそうな躍動感がある。ぶつちやけ言えば、Tレックスがミーアキャットを今にも喰い殺さんばかりである。

止めなかつたんだらうか、家族は。

いやきつと、止められなかつたんだらうな、誰も。

何かよく分からないけれど、職人さんの心意気だけは伝わってくる。

墓の主の心理は、全く伝わっては来ないけど。

なんて事を考えながら、お墓を清め、花を供える。

花は白い百合や菊じゃなくて、花屋さんで適当に見繕って貰った色とりどりの花束だ。

母親の好きだった花は供えた事がない。

アタシだってできればそうしたいけど、何せあの人、大型サボテ



ンが好きだったからな。

日本は自由の国かもしれないが、サボテンを供える度胸をアタシは持っていない。

空は真つ青で、太陽はかんかん照りで、入道雲はモクモクとわき出して、蝉の音がわんわんと辺りに鳴り響く。

世界は生命力に溢れ過ぎてて、線香の香りの中敵かに手を合わせるうにも、空々しい気分になってくる。

或いは。

それはアタシの心理がそうさせるのか。

死を悼もうにも、その時の記憶のないアタシには、いつまで経っても突然降って湧いた様な喪失感があるだけだ。

「叔母さん」

手を合わせ終えたアタシは、叔母さんの背中に呼びかけた。

「事故の話、聞かせてくれる？」

それは、アタシがこの九年間一度たりとも口にしなかった言葉だった。

大体の事は知っている。

態々訊かなくても、誰かが教えてくれるものなのだ。

そついう事は。

簡単に言えば、大型のトラックが直線道路であるにも関わらず中

中央線を越えて突っ込んできた。

ブレーキを踏んだ痕跡はなかった。

どうやらドライバーは事故の瞬間には、既に死んでいたらしい。何ヶ月もの超過勤務で疲労が積み重なり、心臓麻痺を起こしていたそうだ。

加害者も被害者だったという、なんともやりきれない事故だったとか。

運転席にいた父親はほぼ即死、後部座席にいた母親は外傷による失血死。

アタシが殆ど無傷で生きていたのは、母親が咄嗟に庇ってくれたから。

けれどアタシは、その日から二週間意識不明だった。

「MRIも脳波も異常なし。呼吸も心音も正常。医者が言うには、とても深く眠っているだけとしか言いようがない、という事だったわ」

アタシと叔母さんは木陰に移動して、冷たいペットボトルのお茶を飲んでいた。

お墓に自動販売機があるって便利だけど、どうなの？　と思わなくもない。しかもクジ付き。整然と墓石の並ぶ霊園に賑やかな電子音が鳴り響く様は、違和感ありありなどころじゃなく、真夜中には非肝試しのネタとして利用しろというメッセージにしか思えない。

「うん、そうらしいね」

予想していた事だけど、叔母さんから特に目新しい情報は得られなかった。

ああ、うん。目覚めたら一体何を最初に食べたがるだろうかと思案する余り、色んなモノをお取り寄せをしてお陰で太ってしまったとか、アタシの着替えのパジャマは芋虫柄にしようかゴーヤ柄にしようか物凄く迷ったとか、そんな話はもういいよ。

「じゃあ一体何が聞きたいの？」

端的に言えば、それは事故が起こった瞬間の事だ。

けれど叔母さんがそれを知ってるハズもない。  
叔母さんだけじゃく、誰も知らない。

当事者は、アタシしか生き残ってないんだし。

「アタシ、事故の時の記憶がないじゃん？」

記憶がないのは、「有害」だから。

アデーリアであってアデーリアじゃないアデーリアの、腹の中に封印した。

でもアタシの「記憶」は、今まさに生まれようとしている。

多分、きつと、次にアデーリアに会ったら。

アタシは、それを受け止めきれんのだろうか？

アタシはそれを何より怖れてる。

足下が崩れそうな不安に、途方に暮れる。

ひよっとしたら、そのせいでアタシは向こうの世界に行けないのかもしれない、なんて思う。

「何かを失くした事は分かってるのに、何を失くしたのかしたのかが分からないのって、最近ちょっとどうなのかな」と思ってさあ」

アタシは極力何でもないかのように言っただつもりだったけど、自分で思うより沈んでいたんだろう。

叔母さんがいつになく慰めるような口調で言った。

「強い衝撃で記憶が飛ぶ事なんか、良くある事よ。私なんか、学生の頃酔った勢いで記憶がなくなつた経験なんて山ほどあるわ」

微妙に、慰めになってないような気もするけれど。

叔母さんの言い方では、まるで「酔って何かの拍子に何処かで頭を打って記憶がなくなった」みたいに聞こえるけれど。

アタシが思うに「酔った勢い」と「記憶がなくなった」の間には、「頭を打った」だけでは済まない膨大な何かがあるのに違いない。

「酔った勢い」でやらかしたモロモロの出来事、つまり「記憶をなくす」ような衝撃的な出来事が。そして恐らく衝撃を受けたのは、

叔母さんよりも寧ろ周りの人間なのではないかと…。

叔母さんがアタシの前で醜態を晒した事はないけれど、酔うと才

ツサン化する事は知っている。しかも相当豪快だ。それでも古い友人達に言わせれば、随分と大人しくなったという話だから、学生の頃の叔母さんはそりやもうドエラい状態だったに違いない。

「あゝ、うゝん。そりやそうなんだけどさ。最近ちよっと、思い出したことがあつてさ」

空を見上げながら言ったアタシの言葉に、叔母さんは意外なくらい食いついて来た。

「何か思い出したの!？」

その勢いに気圧されながら、意味が分からないものの否定する。

「あ、いや、うゝん。具体的に何かつてんじゃなくてね。『忘れてた』事を『忘れてた事』に気がついたっていうか……」

すると叔母さんは難しい顔のまま、ゆっくりとした口調で訊いてきた。

「事故の事に関して何かを忘れていたということ自体を忘れていたという事かしら？」

「うゝん、事故の事じゃなくて。何て言えばいいのかな。事故の前はできた事が、事故の後には出来なくなっていた。アタシはその事について違和感を持ってなかった。最近になってまた出来る様になつたんだけど、その事にも違和感がなかった」

「つまり、できなくなつたっていう自覚も、またできるようになつたっていう自覚も無かつたという事？」

「そう」

「じゃあ何故その事、違和感がなかつた事について気がついたの?」  
う、そう来たか。

いやまあ、当然と言えば当然の疑問だけれどさ。

だからって、元彼がどうか言つて叔母さんの好奇心を無駄に煽ることはしたくない。

「つい最近さ、とある人間が突然昔話初めてさ」

「昔話？」

「二年くらい前の話らしいんだけど、どうやらあたしができなかつ

た頃の事をソイツに話してたらしいんだよね。それで、最近普通にできてたもんだから、何時からまたできる様になったんだろうつて」「疑問に思ったわけね。具体的に、『出来る様になった事』って何か訊いてもいいかしら?」

「ああ、うん、ゴメン。抽象的なままじゃあ、意味不明だよね」

「もし言いたくないのなら……」

「ううん、そういうワケじゃなくて。えっと、あのさ、落語なんだよね」

「落語?」

「そう、『寿限無』」

「『寿限無』って、子供に物凄く長い名前を付けるって言うアレ?」

「そう、ソレ」

「……そういえば、お義兄さん、落語好きだったわよね」

「うん」

「でもそれって、練習したからできるようになったのではないの?」「練習は、してない。子供の頃以外は。事故の後何でか「寿限無」を言えなくなってたんだけど、ついこの間、ヒョイツと言えちゃってね。それが何て言うか、まるで今まで切れてたスイッチがパツと入ったみたいな感じ?」

「……澄香は、『寿限無』ができなかった事と事故との間に、何らかの因果関係があると思っっているのね?」

叔母さんは静かな声で訊いてきた。

「それは、よく分かんない」

アタシは、我ながら甘えてんなと思いつつ、ちょっと拗ねた口調でそう言った。

「……」

「バカみたいな事言ってるとは思っただけど、さ」

「バカみたいだとは思わないわ。記憶というのは、忘れていても無くなったわけじゃなく、そこにアクセスできなくなったただけって言うじゃない?」

「うん」

「澄香はスイッチが入ったっていうけど、正しくその通りで、単純に器質的な意味で、アクセスできる様になっただけかもしれないわ」  
「多分ね」

「でも澄香は違つと感じている？」

「そう思いたがってるだけかもしれない」

頭上の梢から、蝉の音が降り注ぐ。

その力強さに、その命の重さに、押しつぶされそうな錯覚を覚える。

何年も地下で過ごして、やっと地上に出たと思つたら数週間で寿命が尽きる。

鳴き声の力強さに反する寿命の短さが、命の儚さを感じさせるけど。

よく考えたら、地下で何年も生きてるわけだから、蝉にしてみりゃ「何勝手に感傷に浸ってんだ、バーカ」って感じかもしれない。  
何年もつつたつて、人間みたいに八十年も生きるワケじゃないけど。

彼らは彼らでちゃんと生きてるわけだから、それこそ余計なお世話つてヤツだろう。

そう。

余計なお世話だった。

包み込む様な同情も、寄り添う様な感傷も、慈しむ様な哀れみも、それを差し出してくれた母方の親戚は引き取りたがり、それを差し出さなかつた父方の親戚は引き取りたがらなかつた。

そしてアタシはどちらにも行きたくなかつた。

古い記憶が、蝉の声のリズムに乗って蘇っては消えていく。

父方のじーさんの気難しげな顔、ばーあちゃんの悲しげな顔。

伯父さんのどこかホツとしたような顔や。

それから、叔父さんの痛ましそうな顔。

あの頃は、何もかもが磨りガラスの向こうの光景の様に、他人事

めいて見えた。

アタシと彼らを繋ぐモノはもうないのに、なんでこの人達はアタシの前にいるんだろう？

そんな疑問ばかりが頭を巡ってた。

「澄香が目覚めて直ぐ会ったわね？」

叔母さんが不意に口を開いた。

「目が覚めた時に側にいたのは、叔母さんだけだったよ」

アタシは頷きながら答えた。

「まあ、他に近くに住んでる人間がいなかったからね」

叔父さんは九州に転勤した後だった。そもそもその転勤が、離婚の切欠みたいなものだったらしい。

「今だから言うけど。あの時、私、思ったのよね」

「何を？」

「この子の目は、まるでぽっかりと空いた何も無い穴をジッと見つめているみたいだなんて」

「……………」

「澄香は、そろそろ穴を埋めたいと思ってるのかもしれないわね。」

或いは「

叔母さんはそこで言葉を切って、ペットボトルのお茶を飲み干す。

「或いは、そうね。澄香の深層心理が、もう思い出しても丈夫だと思っっているのかも知れないわ」

記憶の喪失には、精神的な負荷も原因となるらしい。

なるほど。

でもさ、そうなるとやっぱり「寿限無」の役割が分からない。

「寿限無」はただの落語だ。伝統芸能だ、

事故とは直接関係ない、はずなんだけど。

それだって、本当のトコロは分からない。

思い出す時期に来ている。

そうなのかも知れないし、そうじゃないのかもしれない。

けれど多分、思い出した先に何かがあるのだろう。

多分、きっと。

そしてそれは、アタシに必要な何かなのだろう。



第六一話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い その3

叔母さんは予定通り火曜日にニューヨークへと飛び立った。

結局説教らしい説教もせず、普通に墓参りに帰国しただけと思えなくもなかった。

澄香の事は澄香から直接聞きたいわ。

という一言がなければ。

アタシは、ゴメンと素直に謝った。

アタシが素直になるなんて事は、我ながら言うのも何だけどそう  
そうある事じゃない。

けれど、本当の事を言えない分素直になるくらいことは、しと  
かなきゃいけないんだと思う。

本当の事。

それって本当に「本当の事」なのか。

結局のトコロ、全てはアタシの夢にしか過ぎないかも知れないの  
だ。

リズムも、アディーリアも、セルリアンナさん達、ムダメンどもも  
いや、ムダメンどもは夢でも一向に構わないんだけれどさ。

うっん、それだけじゃない。

今だって、夢かもしれない。

叔母さんも、恵美も、アタシ自身も。

アタシは、事故に遭ったあの日から、長い長い夢を見ているだけ  
かも知れない。

「現実」と「夢」を混同する事はないけれど、全てが「夢」なら  
そんな認識も意味のない事だ。

この「世界」が夢ではない保証は、この世の何処にも存在しない。  
なんて何処かのエライ人が言ってたような言ってた様な…。

「スミ」

不意に、恵美に名前を呼ばれて顔を上げる。

「何？」

「目開けて寝てんの？」

「寝てないよ」

「手止まつてるよ？ ひよっとして、その本に何か恨みでもあんの？」

恵美に言われて、アタシは自分の持つてる本を見た。

Noam Chomsky『On Nature and Language』。

「って洋書じゃんつ。恨む以前に読めねえわつ」

「だろっね」

「だろっね、じゃねえわつ。ポケんのもいい加減にしさらせやつ」  
効きの悪いエアコンのせいでイラつきやすくなってるのだろっか。  
恵美の意味不明の言動なんか今更なのに、思わず一・八倍（当社比）  
くらいの激しさでツッコんでしまう。

ツッコミが激しくなるとエセ関西弁になるのは何故だろっ。

やっぱりツッコミの本場は関西だからだろっか？

「スミ、調子いいな。ツッコミのキレが違う」

いやそんな、白い歯を見せてニツカリと笑われても。

昼食に食べた焼きそばの青のりが付いていても、アタシは相も変わらず美人だぜ。

とでも言えればいいのか？

アタシはイロイロ考えたけど、ジットリと滲んでくる汗に思考を放棄した。

エアコンの利きが悪いにしても、今日は蒸し暑すぎる。

台風が近づいてきているせいだろっ。

曇った空はどんよりと重かった。

「アタシの祖父さん、なんなのよ」

アタシと恵美は、恵美の祖父母の家に来ている。

言語学者だったという恵美の祖父さんの蔵書を整理するためだ。  
それにしても「蔵書」と言うだけあって、その量も種類も半端な

い。

言語学関係の本が一番多いけど、他にも哲学書やら精神分析学やら認知心理学やら、ともかく学者らしい専門書がいっぱいだ。

小説も沢山ある。

文学からSFや時代小説と、ジャンルは様々だ。

無節操っぱいけど、何せ本が好きなのだらうという事はよく分かる。けれど、コレはないだらう。

「一体何を目指してたワケ？」

と思わず口に出してしまったのは、ピンク色の表紙にセーラー服姿の女の子が逆さづりになってウインクしてる文庫本を手に取った時だった。

所謂少女小説で、他に何冊もある。殆どが一昔前の代物で、何故か題名はシロウトのアタシですら文法的にどうなのと問いたくなるくらいの意味不明さだ。

この意味不明さが、研究対象なんだらうか？

学者の思考というのは、凡人でしかないアタシによく分からない。この蔵書の意味不明さが、学者だからなのか恵美の血筋だからなのかは、判断に困るトコだけれど。

なんて事を考えながら、せっせと本をジャンル分けしていると、

「恵美子も澄香ちゃんも、そろそろ休憩したら？」

そう言いながら、恵美のお祖母さんが顔を出してきた。

なんとまあ普段から着物を着ているというお祖母さんは、このクソ暑いのに汗一つかかず、その佇まいはどこまでも涼やかだ。

若い頃はさぞかし美人だっただろうとありありと分かる顔立ちは、今でも十分綺麗である。

なるほど、恵美の父親譲りの美貌はこのお祖母さんがルーツなのか。

彼女と初めて会った瞬間、そう思った。

そして、今思う。

上品なお祖母さんが上品に微笑みながら、スイカ半玉が乗った皿を両手に一つずつ持って楚々と歩いてくる様は、浮世離れはしてないがどこか人間離れしている。

なるほど、恵美の素っ頓狂さのルーツは、ココか！

「なんでアంతの祖母ちゃん、一人にスイカ半玉持ってきてんの？」

二人で半玉でも多くね？」

「あゝ、スミは小食だから。祖母ちゃん！ スミそんなに喰えねえつてさ！」

「あらあら。じゃあ、私と半分こする？」

お祖母さんは上品に笑ってそう言うけれど。

うゝん。

それでも四分の一玉だ。

いや、頑張れば、なんとかなるか？

てか、一体何のチャレンジだよっ。

大食いか？ 大食い大会なのか？

そついやあ昨日の夕食も凄かったな。

山菜料理やら川魚やら風情ある料理が所狭しと並んだ食卓は、何かの集会か？ と思う程大量だった。

ごめんなさいね、年のせいか余り沢山作れなくて。若い人には足りないかもしれないわね。

申し訳なさそうにそう言ったお祖母さんに、やっぱりアタシは思ってたね。

そうか！ 恵美の胃袋も、お祖母さんがルーツなのか！

早世してしまったお父さんはどうだったか知らないが、ともかく恵美はこのお祖母さんの遺伝子をとてても良く受け継いでいる。

味付けは、関西風なのか全体的に薄味で、出汁が利いていて美味しかった。

それでも量が半端なく、アタシは胃袋からの悲鳴を無視して食い続けなければならなかった。

出されたモノは食べる。

母親からそう躰けられていたからだ。

けれど最後にデザートと称する大量の草餅が出てきた時には、ゴメンナサイと謝った。

「あの、できれば八分の一でお願いします」

アタシはアタシの胃袋のために、決然とした口調でそう言った。

相変わらずアタシは、夢の世界に行けてない。

昨日で丸々一週間が経った。

何時もなら、行けるときや行けるし行けないときは行けない、なんて呑気に構えてんだけど、今回はかりはそうもいかない。

もしかしたらアタシ自身の問題のせいで行けないのかも、とか一度思っちゃったりしたもんだから、その考えが頭にこびり付いて気持ちは焦れる一方だ。

ココまで来ると流石に寝付きも悪くなる。

ま、昨日は旅の疲れで早々に寝ちゃったけど。

夢も見なかった。

いや、人間は眠る度に何かしら夢を見てるって言うから、単に覚えてないだけなんだろうけどさ。

「台風は今夜遅くに通り過ぎるらしいぜ」

騒がしく鳴る風鈴の向こうに曇天を眺めながら、アタシと恵美は

スイカを食った。

「台風の前つてき、妙にハイになんねえ？」

恵美がスイカの種をほじくりながら、ボソリとそんな事を言った。  
「ああ、そりゃ、プラスイオンが増えるかららしいよ。ホントかうソかは知らないけど」

意外な話だけれど、恵美はスイカの種をあらかじめ取っておくタイプである。

豪快に種を吹き出すか、いつそのこと種ごと食べてしまうタイプだと思っただけだ。

アタシがそう言つと、恵美は至極真面目な顔して言った。

「何言つてんのっ。種喰つたら、へそからスイカの芽が出るじゃんっ」

本気か？

と思つて恵美の顔をマジマジと見てみると、その向こうで恵美のお祖母さんがニマニマと笑っている。

一体どういう教育をすれば、二十歳を過ぎててもこんな事を真剣に言える人間に育つのか？ 是非ともお祖母さんにご教授願いたい！  
アタシは内心でわくわくしながら、リズに一体どんなトンデモ知識を仕込もうかと考えた。

でももう十二歳だからなく、流石にもう無理かな。

第一リズは賢いからなく、やっぱり無理かな。

いやまてよ、精霊関連のことなら、何とかなるんじゃない？

アヌハーン神教は、精霊の研究はしていない。

何故なら精霊は研究対象ではなく、祈りの対象だからだ。

人間には神も精霊も理解できない、何故なら彼らは人間より遙かに高度な存在だから。寧ろ「知る事が出来る」って考えそのものが傲慢なのだ。

それって明らかに思考停止じゃね？

と思うけど、神というものを世界を説明するシステムとして成立させるには、「神の名の下に」思考停止させるのが一番手っ取り早

いに違いない。

上手いことやってんな、アヌハーン神教。

それでも精霊を含めた魔術の研究が後を絶たないのは、人間の知りたいという欲望に際限がないからか。

けど「精霊に関するトンデモ知識」って何？ 　って話だよ。

そもそも「精霊に関するトンデモじゃない知識」なんてモノがあるのかよ。

こうなるともう、リズの子供に期待をかけるしかないか。

ふとそんな事が頭に浮かんで、奇妙な気持ちになる。

アタシは今まで、リズの事は考えていたけど、リズの将来について具体的に考えたことはなかった。

そりゃ、成人して、どっかの王侯貴族と政略結婚して、子供を産むんだろうな、なんて漠然と考えてはいたけれど。

アタシがリズを見守るのは、リズが成人するまでで。

だからこそ、そこには具体的なイメージは何もなかった。

アヌハーン神教の思惑通り、リズと皇統の血筋の聖者とが結婚したとして、その子供が聖者である確率ってどのくらいだろう？

紫の髪と瞳が劣性遺伝だと考えるなら、二人の間の子供はほぼ百パーセント聖者だ。

アタシはサーツと血の気が引いていく様な気がした。

これから先、何世代も、リズの血筋は神教に利用され続けるのだ。アデーリアが、その親が、そうだった様に。

この先、アヌハーン神教がある限り。

勿論そんな事は分かってたけど、突如その事が実感として差し迫ってくる。

アタシがリズの赤ちゃんを抱くことはないだろう。

けれど、その赤ちゃんの誕生にはアタシも関与することになるのだ。

赤ちゃん、というイメージがアタシの頭の中でスパークする。

抱くはずのない赤ん坊を抱いているイメージが思い浮かぶ。

そのイメージの中のアタシは、何故か十二頃のアタシだった。

その瞬間、訳の分からない焦燥感が迫り上がってきて、

「いかん！ 悠長にスイカ食ってる場合じゃねえ！！」

思わず勢いよく立ち上がりかけた。

「あ！ スミ！！ 危ないっ！！」

ガンツ。

恵美の叫びを聞くと同時に後頭部に物凄い衝撃を感じたアタシは、そのまま念願適って夢の世界の住人となった。

後から知った事だけど、その時アタシの後ろ頭に巨大な金だらいが襲いかかってきたらしい。

てか投げたって正直に言え！！

雨漏り受けに金だらいって、テメエらは昭和か！！



第六二話 カエルの母性と父性は、ちょっと恐い その4

ゆっくりと瞼を開けると、そこはもう馴染みになってしまっている薄暗い空間だった。

遙か頭上に青い月。

そして目の前には、紫の髪をした絶世の美女。

「アディーリア」

アタシは、強烈な既視感を覚えながら美女の名前を呼んだ。  
なんだろう。

クラクラする。

軽く酒が入っている様な酩酊感が、視線を惑わせる。  
ええと。

なんでアタシ、アディーリアを見上げてんの？

いや、勿論、アディーリアは多分百七十近くあったから、今のアタシでも十分見上げる身長差があるんだけどもさ。

それにしても、これはちょっと見上げすぎじゃね？

この前あった時は、もうちょっと目線が高かった様な…。

「ええと、アディーリア、ちょっと見ない間にデカくなった？」

アタシがそう言うと、アディーリアはコロコロと鈴の音の様に笑った。

「そんな訳ないでしょう。相変わらず妙なことを言う子ね」  
何故だろう。

アタシは突然気がついた。

これは、目の前にいるこの美女は「アディーリアであってアディーリアではないアディーリア」じゃないって事に。

う、ややこしいな。

「えっと、本物？」

「どういう意味？」

器用に片眉を上げてそう訊いてくるアディーリアに、アタシは何

と言つべきかと口ごもりながら言った。

「や、普通に、偽物じゃないなら本物なのかなって」

アタシの言葉を、アディーリアは顎を上げてフンと鼻で笑う。

「偽物の私がいるとでもいうの？ 私の偽物？ そんなのがあるなら、呼んでらっしゃい。唯一無二の私をどこまで真似られているのか、見物というものよ」

優しい顔立ちをして、なんて高慢な表情が似合うんだろう。

こうして見ると「アディーリアであってアディーリアでないアディーリア」は、確かに紛い物だ。

何がどう違うのかと聞かれてもハッキリとは答えられないけど、気品というか風格というか、迫力というか馬力というか…。

最後のは、何か違うような気もするけど。

けれどなんで、「本物」がいるわけ？

アディーリアはもういない。

だって。

アタシが、喰った。

あの時。

アタシが喰ったのだ。

生きるために。

「澄香」

アディーリアが、まるで当たり前のようにアタシの名を呼ぶ。

アタシは改めて、アディーリアを見上げる。

ああ、そうか。

これはあの時の記憶の再生だ。

なんでアタシの言葉に受け答えしちゃうてるのかは不明だけれど、記憶なんて幾らでも捏造できる。

そう。

アタシが「この記憶」を、そうしたように。

アディーリアがゆっくりとアタシに向かって腕を差し出す。

ほっそりとした腕は、高飛車な言動からは想像も付かないくらい

儂げで、悲しいくらい優しげだった。

「さあ、ソレを渡しなさい」

アディーリアが言った。

どこか諭す様な、どこか哀れむ様な、それでいて決然とした意志を込めて。

アタシはその言葉に反応して、腕の中のモノをギュッと固く抱きしめた。

そう。

アタシはずっと、抱きしめていた。

抱きしめていたのだ。

まるで縁よろぎの様に、ソレを。

抱きしめる力が強すぎたのか、或いはアタシの不安に反応してか、腕の中のモノが泣き出した。

火が点いた様な泣き声が、薄暗い空間を振るわせる。

ワンワンと鼓膜に反響して、その声の強さに圧倒される。

なのに、アディーリアの静かな声は不思議なくらいハッキリと聞こえた。

「ソレは今のあなたにとって『有害』でしかないわ」

小さな体から発せられる泣き声は、どこまでも力強く、どこまでも生命力に溢れていて。

だからアタシは、ひたすら体を固くすることしかできなかった。

アタシは知っている。

その先の事を。

アタシは何をどうするのか。

ううん。この時だって、アタシ自身知っていた。

結局のトコロ、アタシはソレを手放すのだと。

ああ。

お母さんの声が、  
耳の奥でこだまする。

澄香、  
アンタ、  
今度お姉さんになるのよ。

再び瞼を開けると、アタシは暗闇の中に立っていた。

上も下も右も左も分からない、自分の手足すら定かじやない暗闇で、唯一つの光源である薄い膜に対峙していた。

薄い膜の中には、お腹を守る様に丸くなっているアディーリア。

こちらを見返す金の瞳は、不安げに揺れている。

なるほど、これは確かに紛い物だ。

本物のアディーリアなら、こんな目はしないだろう。

アディーリアであってアディーリアではないアディーリア。

アタシはアタシとアディーリアとで作ったモノだ。

腹の中のモノの入れ物として。

「自分の有害な記憶」を「他者の有害な記憶」で包み込んで、意

識の奥底に沈めた。

二重三重に封印したソレは、九年かかって生まれるまでに育った。或いは、九年かかって封印が綻びたのか。

叔母さんが言ったように、アタシ自身がそうと望んでいるのか、アタシには分かない。

生きていく上で「有害な記憶」。

そんな風に言うべきじゃない。

そうと分かっているとしても、それでもあの時のアタシは、それを抱えたままでは生きていけなかったのだろう。

そして同時に。

ソレを捨ててまで生きたいと願った、自分本位さに。

絶望しながら、アタシは生きることを選んだのだ。

亡くなつた家族の分までしっかりと生きなさい。きつとご両

親が何より願っている事よ。

両親の分まで。

家族の分まで。

そんな事を言われずとも、そんな綺麗な理由を付けなくても。

アタシは生きることを選んだ。

寧ろ生きるために、捨てたのだ。

いや。

捨てきれなかった。

だから封印した。

その未練がましさに。

更にアタシは失望した。

他の誰にでもなく、アタシ自身に。

絶望しながら失望しながら、それでも自分を選ぶアタシ自身に、

アタシは強い不信を抱く。

アタシはアタシを信じられない。

人間不信。

誰かに何度かそう言われたけれど、確かにそうかもしれないと今

は思う。

多分アタシは、誰より何よりアタシ自身が信用できないのだ。それでも、ソレを取り戻したなら、或いは少しは信じられる様になるのだろうか？

「アディー」

アタシは名前を呼んで、膜にソツと手を触れた。

膜の中のアディーリアが、それに応える様に手を伸ばす。

ふと思う。

腹の中のモノを受け取ったら、このアディーリアはどうなるのだろうか？

役割を終えて消えるのだろうか？

そうになると、アディーリアの「有害な記憶」も抱え込む事になるんだろう。

前にチラチラと過ぎったアディーリアの記憶に、そこはかたない、どころじゃない不安を覚える。

アディーリアの性格は、ただ悪いだけじゃない。そりゃ優しいところもあるけれど。それ以前に、ぶっちゃけ言って歪んでいる。

蝶よ花よと育てられながら、人の手本であれと育てられながら、どこをどうすればあんな性格になるのか。

そりゃもうドエラい記憶が潜んでいるのに違いない。

……………大丈夫か？ アタシ。

この期に及んで怖じ気づく。

いや、勿論、受け取るよ。自分のモノは。受け取るけどさ。

「あ、ちよつと待つ」

まだ心の準備がっ。

と言おうとしたけど、間に合わなかった。

膜越しに指と指が触れた瞬間。

ニマリ。

と、アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアが嗤った。





グーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの。  
長久命の長助。

よ！

「ほくら、次は澄香だぞ！」

「また。十八回目だよ？ お父さん、『耐久八時間寿限無』とか、止めようよ」

「はっはっはっはっは。澄香！ そう、まだたったの十八回だからな。可愛い愛娘の願いでも、お父さんは聞かないぞ」

「お母さんも、何とか言つてよ」

「大丈夫よ、澄香、八時間もお父さんの集中力が持つわけないでしょう。第一、このドライブも八時間もは掛からないわ。あと一時間もしない内に、着くしね」

「そんなの分かってるよ。分かってるけどさ！ でももう、エンドレス寿限無はイヤ~~~~~！！」

「エンドレス寿限無！ 澄香はウマイこと言うな！！」

「これだったら、『哀愁カエルの歌』の方がマシじゃボケ~~~~！！」

「ボケとは何だ！ 酷いな澄香は！ 澄香が退屈しない様にお父さん、イロイロ頑張つてんのに！」

「お父さんが楽しいだけじゃん！」

「はっはっは。何を言うか、お父さんが楽しむだけなら、変身ヒーロー歌謡大会だぞ？」

「それはもつとイヤ~~~~~！！」

「澄香も、もうすぐお姉さんになるんだから、大人になりなさい。

諦めは大人への第一歩よ」

「お母さん！」

「ね、澄香。お父さんは、病気なの。心のね」

「澄香！ そうだぞう！ お父さんはビョーキだ！ だから澄香が寿限無を唱えるか、お父さんの変身ヒーローリサイタルを聞くか。

さあ！ どっち！？」

「ぎゃ~~~~！！ どっちもイヤじゃ~~~~ボケ~~~~ッ！」

「あなた！ 澄香！ 危ない！！」  
ガシャンッ！！

終わりはあつけないくらい突然で、全てはビックリするくらい簡単に失われた。

ごめんなさい。

お母さんが安定期に入ったからって、何処かに連れて行ってなんて言わなければ。

ごめんなさい。

誕生日だからって、遊園地に行きたいなんて言わなければ。  
ごめんなさい。

お母さんに、後部座席に一緒に乗ってって言わなければ。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

それでも生きたいと願って。

ごめんなさい。

そしてアタシは目を覚ます。

「デイー!？」

敏感に気配を察してアタシの名前を呼ぶのは、紫の髪と目をした、どこからどう見ても文句なしの美少女だ。

睫毛はバツサバサで、目は二重くつきりで、鼻は小ぶりながらもスツとしてて、唇はプルンプルンなラズベリーピンク。

その人間離れた余りの美少女っぷりは、モンゴロイドの遺伝子を一塩基たりとも受け継いでいないのは明らかだ。

「リス。リスナターシュ」

アタシは吸盤のついた白い手を伸ばし、紫の巻き毛に指を絡める。「ハイ、元気だった？ 泣いてなかった？ 誰かに泣かされたなら、言いなさい。このアタシが、恥ずかし過ぎて生きていけない目に遭わせてやるから」

「デイーッ」

幼さの残る腕が、白い体を抱きしめる。

ふふん、思う存分抱きしめなさい。

内臓が出る心配なんかないからね。

アタシは細い腕で抱きしめ返す。

ああ、可愛いリズ。

大切な大切な、アタシのリズ。

アタシの、生まれなかった妹。

一度も抱きしめられなかった妹。

リズと妹を、重ねたことは一度たりともないけれど。

アタシとアディーリアを結びつけたのは、間違いなく、同じ魂への  
同じ思い。

## 第六三話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません

もつと劇的なモンだと思ってた。

例えば、カエルがカエルのままで生まれてくるような。

オタマジャクシは！？　と思わず詰め寄りたくなる様な、そんな状況。

いやまあ、実際卵からカエルのまま生まれてくるカエルもいるけどさ。

そういう卵からカエルのな、じゃなくて目から鱗的な、新たなパラダイムを獲得してパーツと視野が広がる、とかさ？

でなけりゃあ、荒れ狂う記憶の嵐に翻弄される、とかさ？

そりゃまあ確かに、以前、そう、初めてアデーリアの記憶を受け継いだ時だつて、劇的なことは何もなかった。

受け継いだ記憶を時々フラッシュバックみたいに「思い出す」んだけど、それは「ああ、こんな映画を見たよね」て感じの思い出し方だった。それが徐々にアタシの中に馴染んでいって、言葉や文字や常識　但しアデーリアにとっての「常識」なので世間ではイマイチ「非常識」　が身についてくる。

それは映画や小説が、人生観に影響を与えるのに似ている。

けれど今回は、言ってみりゃあ「出産」なワケだから、流石にドエライ事態が待ってんじゃないかと思ってたんだよね。

ところがフタを開けてみれば、ただ単に記憶をしまつてある引き出しがどこの部屋にあるのか分かっただけ、みたいな感じで思った以上にあっけない。

しかも何だろう、気のせいかも知れないけれど、その部屋の扉にはバイオハザードのマーク的な注意書きが張つてあるようなないよな…。

何でそんな気になるのかは、やっぱりアレだろう。

アデーリアであつてアデーリアではないアデーリアの、あ

の微笑み。

ニマリ。

って！

何だその、明らかに悪巧みしてます的な嗤い方は！

問い質したいけど、問い質すべき相手は、もういない。

多分。

きつと。

願わくば。

「状況を説明してちょうだい」

アタシはリズの隣に踏ん返り返って、セルリアンナさん達にそう問いかけた。

冷ややかに、かつ徒っぽく。

それが出来るかどうかは不明だけれど、髪もないのになんてくつつけてんだってツツコミしたくなる程にデカいリボンの端を弄びながら、頭は左斜め四五度ややつむき加減で上目遣い、それでアタシとしてはコケティッシュさを懸命に醸し出そうとしているワケだ。

そんなアタシの前には、前列にセルリアンナさんとハーネルマイアーさん、後列にグイネヴィアさんとエセルヴィーナさんが礼儀正しく跪いている。

片膝を付き、左手を右胸にあて、右手は立てた膝の上。

本来の侍従武官の礼とは、左右が逆だ。

それは寧ろ神官とか神殿騎士とかの作法、のハズなんだけど。

よく見ると、てかよく見なくても、彼女達は侍従武官の制服を着ていない。

着ているのは、神殿騎士団の制服だ。

アヌハーン神教では、神官や神殿騎士になるのに男女の別はない。寧ろ巫女さんやら娘子軍やら、女性にしかねない職はあるけど、男にしかねない職はない。

つまり。

なるほど、そういうワケか。

彼女達が侍従武官の制服じゃなく、神殿騎士団の制服を着ているって事は。

この見慣れない、ちよつと疑わしい趣味のインテリアは、神殿管轄の屋敷って事なんだろう。

「地震のあった夜から、今夜で二晩目でございます」

そう話し始めたのはハーネルマイアーさんだった。

てことは、地震が起きたのは一昨日の夜って事になる。

現実世界じゃあ一週間が過ぎてるけど、こちらではまだたったの二日か。

タイムラグが逆方向に働いてる事に、内心で安堵する。

それだけ、リズを不安がらせる時間が短くて済んだって事だから。

「ここは何処？」

「王都の南、カディナ離宮です」

確かカディナ離宮ってのは、神教が結婚祝いとして「彩の聖者」アディーリアのために作った宮殿だ。

アディーリアが亡くなった今は大神殿が管理していて、リズが成人した暁にはリズに贈られることになっている。

「リズ、離宮の居心地はどう？」

アタシの問いに、リズはニッコリと笑顔を綻ばせながら言った。



「変なものが沢山あつて楽しいわ」  
そりゃ良かった。

壁中を所狭しと飾る、巨大なお面だとか謎の木像だとか　もの  
すくすくよく言えばフォークロア、ぶっちゃけ言えば胡散臭い土  
産物屋で買い集めたエセ民芸品　を眺めて思う。

このインテリアがアディーリアの趣味なのか、養父であるヴィセ  
リウス大神官の趣味なのかは定かじゃないけど。どっちにしる小学  
生の芋版並の紋章を後生大事に掲げている宗教の大幹部とその象徴  
だ。どちらもありな気がする。

アタシはリズが思いの外元氣そうでホツとしつつ、その艶やかな  
髪を撫でる。

ああ、癒されるっ。

「離宮に移動したと言うことは、レゼル宮の被害は酷いの？」

「いえ、ガラスが数枚割れた程度で宮殿自体の損害はさほどではな  
いのですが、調度類などが倒れ散乱しており、リズナターシュ聖下  
がお過ごしになられる場ではございません。従いまして急遽こちら  
の離宮を整えましてございます」

へへ、意外と頑丈だったんだな、レゼル宮。

それとも、思ったほど揺れなかったとか？

てかさ。

「急遽」って言うには、整えられすぎじゃね？　この離宮。

九年間使ってなかったとは思えないくらいピッカピカじゃん。

なんちゃってフォークロアには似合わないゴージャスなシャンデ  
リアを視界の端に納めながら、記憶を手繰る。

そついやあ、前にリズが言ってたな。

父親の喪が明けたら、神殿に来ないかって誘われたって。

その時から、或いはその前から、神殿はこの離宮を準備してたん  
だな。

それってさ、「誘い」と言っときながら殆ど決定事項になってん  
じゃんっ。

何か、ムカつくわ。

アタシは湧き上がる苛立ちを押さえながら、その他の被害状況を訊いてみる。

「『地神の寝返り』の影響は、どれほどだった？」

その質問に答えてくれたのはセルリアンさんだった。

「正確な被害状況の把握には未だ至っていませんが、王都では家屋の倒壊が著しく負傷者も続出した模様です。しかし幸いながら死者は出なかったと聞き及んでおります」

「あら、家が壊れたのに、死人はでなかったの？ ホントに随分と幸運なことねえ」

ムダメン共が何か対策を講じたって事なんだろうか？

けれど続くセルリアンさんの言葉の中に、ムダメン共の名前は出てこなかった。

「はい。白のケロタウロス様はご存じでしょうが、イスマイルでは民家は殆どが木造です。木造建築の密集地で恐ろしいのは、火災です。特に人口の多い王都では毎年火災による死者が出ています。そのためイスマイルでは、延焼によって大火災となるのを防ぐため、木造建築には倒壊できるような仕掛を作るようにと法律で定められております」

へへ、そうなんだ。そりゃ知らなかった。

それってさ、江戸時代に火消しが延焼を防ぐために家を倒してたみたいな「破壊消防」ってヤツだよな。なんでも当時の長屋なんかは、最初から燃えることを想定してほっそい柱の安普請だったって話だ。仕掛けてつても、それと同じ様なモンだろうか？

でもそうしたらさ、

「火事でもないのに勝手に誰かに壊されちゃったりしないの？」

だあってさ、壊せるって分かっているものが目の前に建ってるんだよ？

誰だつてチラッと「壊したらどうなるんだろ？」みたいな考えが過ぎるはず。

んで、何千人かに一人くらいは、実際にやってみたりなんかすると思うんだよね。

「人為的な倒壊は王都騎兵隊だけができると定められておりますが……」

ハーネルマイアーさんはそう言って言葉を濁すけど、それって肯定してるのも同じじゃね？ そう思っただけで視線を送ると、セルリアンナさんが至極真面目な顔で補足した。

「そのような場合にそなえて、倒壊に巻き込まれない箇所を作っておくものなんです。大抵は寝室などがその様な場所になっております」

結局のところ倒されるのが前提なのか…。

何だか微妙だな〜と考えて、同時に気づく。

「それってつまり、地震で簡単に家は壊れたけど、その仕掛けのお陰で倒壊には巻き込まれなかったって事？」

「はい。こう申し上げるのも何ですが、幸い大抵の住民は就寝中でしたので」

そりゃまあ深夜だから、大抵は寝てるよね。

木造だから心配したけど、この場合木造だったことがラッキーな方に働いたのか。

てことはつまり、大多数のイスマイル国民に関しては心配する必要がなかったって事になる。

イロイロ苦悩した分、何かちょっと損した気分だ。

あんのクソオヤジ、何でその事言わなかったんだ？？

まさか、知らなかったとか？

いやいやいやいや、幾ら何でも国王としてそりゃナイだろう。

くっそ〜。今度会ったら、絶対シメてやる。

そこでアタシは、更にイヤ〜なことに気がついた。

てことは、結局あのムダメンどもに与えた預言も、大した意味はなかったって事になるんじゃないか。

ただ単に、ヤツらの魂が肉体に戻るのを促した程度か。

む〜ん。それって何か、納得がいかない。

一方的にアタシがヤツらの役に立ったみたいで、腹が立つ。今のところ、何か地震対策したって話も聞かないし。

ひょっとして、預言の事、覚えてない??

あゝ、マジ使えねえ連中だなっ。

この国の男共はよっ。

アタシは苛立つ気持ちに拳に込めて、隣の一号の腹にぶち込んだ。ゴメンよ、一号。アンタで連中に会った時は、思う存分報復するからっ。

「デイー?」

アタシの思いがけない行動に、リズがおっかなびっくり訊いてくる。

そんなリズに、アタシはニッコリ笑って見せて、

「あら、ビックリさせちゃった? でもリズは何にも悪くないから、気にしなくて良いのよ。ただイロイロと大人の事情ってのがあってね」

「そうなの?」

「そうよ。でも、そうねえ。終わりよければ全てよしって言うし。死人がでなかったのだから、一先ず良しとしましょう」

三号は四号と違って、人間に好意的だ。

だから人が死んでいないことも、素直に喜べる。

但し好意的だからといって、友好的とは限らないってのがミソである。

ほんっと、ロクなキャラがいねえな、ケロタンズはよっ。

アタシはケロタン達の生みの親であるアディーリアに、心の中で悪態をつく。

こんなことだったらさ〜。

あんなムダメン連中、放っておくんだったとか。

もっと蹴倒しときゃよかったとか。

もっと脅しときゃよかったとか。

イロイロ思うところはあるけれど、どうにか頭を切り換える。

「そうそう。大神殿はどうなったの？」

「それは勿論皆無事でございます。黒のケロタウロス様のご尽力により、負傷者こそ出ましたが、『地神の寝返り』による死者はおりません」

アタシは地震が起きた直後に三重になった視界の中に見えた、逃げ惑う巡礼者達の姿を思い出す。

まあ相当な揺れだったから、パニックを起こすのも無理はないけど。

あれじゃあ確かに無傷ってワケにはいかないよね。

あ、ひょっとして、例の仕掛けがあるんなら、寝てた方が逆にケガしなくて済んだかも。

そう思いついて、そのまんま口にする。

するとグイネヴィアさんがゆるゆると首を振って否定した。

「宿屋は火災対策のために、一部或いは全てに石材を使うことが義務づけられているので、逆にそのような仕掛けはないんです。高級宿屋ともなれば、当然総石造りですし」

え、何ソレ。国民より外国人に対しての方が火災対策が厚いつて、どういう事？

多分、イスマイルの財源が観光だからだろうけどさ。そりゃ外貨欲しいだろうけどさ。

「で、その石造りの宿屋はどうなったの？」

イスマイルの国策に不満を感じつつ訊ねると、

「半壊、もしくは全壊だそうです。黒のケロタウロス殿のご指示がなければ、重い石材に押しつぶされ、多くの巡礼者達の命が失われた事でしょう」

グイネヴィアさんは神妙な顔でそう言った。

ありやりや。

こっち火災対策が仇になったってワケか。

でもまあ、五号が出向いた甲斐はあったってワケだ。

って、そついやあ五号の姿が見えないんだけど。

アタシの隣には一号、リズの逆隣には四号がいる。二号はレゼル宮の靴部屋にいて、肝心の五号はどした？

アタシがその事について訊ねると、

「黒のケロタウロス様は地震の直ぐ後にご帰還されたご様子で、お体の方はメリグリニア神官長が大切にお預かりさせていたかどうかの事です」

まるで当たり前のことのように言うセルリアンさんに、思わずツツコミそうになあつた。

いや、リズのところに戻しなよ。今すぐにもつ。

けれど、ふと気がついて思い止まる。

なんでメリグリニアさんが預かつてんの？

そりゃ、五号が会いに行ったのはメリグリニアさんだけだよ。

リズのものなら、ヴィセリウス大神官が預かるべきじゃねえの？

後見人なんだからさ。

アタシは物凄くイヤな予感に背中が震える様な気がした。

避難の最中はアタシも夢中だったし、イロイロと慌ただしかった。

だからヴィセリウス大神官と顔を合わさない事を不思議に思わなかったけど。

よくよく考えたら、「奇跡」認定の儀式って大神官しかできないワケだから、どさくさ紛れてでも何らかの接触があってもよかつたハズだ。

てかむしろ、するべきじゃね？

病氣つてのならともかく、そんな話は聞いていない。

「……………」

そついやあさあ。

さつき、この人達、何て言った？

確か、地神の寝返りによる死者はいなかったって言ったよね？

「地神の寝返りによる死者」だなんて、わざわざ言う？ この状況で。

「ヴィセリウス大神官は、どうしたの？」

アタシは恐る恐る、とは聞こえないよう、できるだけ何でもないことのように訊いてみた。するとセルリアンナさんもまた、どうってことないって感じの口調で言った。

「猊下は、ご祈祷の最中、夜の双性神の元へと召されました」

第六四話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません その2 (前書き)

更新が遅れてしまった事をお詫び申し上げます。

申し訳ありませんでしたm(\_\_\_\_\_)m。



第六四話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません その2

ヴィセリウス大神官が死んだらしい。

「地神の寝返り」に備えて皆が避難する中、英霊への祈祷を捧げると言い、一人大神殿に残ったんだとか。

「猯下のご祈祷により大神殿は大きな災禍を免れましたが、そのために我々は余りにも大きな代償を払わねばなりませんでした。大神官は神教の柱。猯下にはまだまだなしていただきたくありません。したものを、我らが至らぬばかりに……」

一体誰が知らせたのか、まあ訊くまでもないんだけど、夜中にも関わらずメリグリニアさんが駆けつけてきて、そう説明してくれました。

メリグリニアさんは、例のどうなっただか分からない複雑な髪型をした神聖騎士を二人お供として連れてきたけど、彼らは扉の向こうで待機している。

この待ち構えていたかのような素早さから言って、多分メリグリニアさんは離宮近くに滞在しているんだろう。

そうだとすれば、ヴィセリウス大神官が不在の今、誰が大神殿を取り仕切ってるんだろう？

大神官の後継者だとかっていうナントカって神官長だろうか？

若しくはカントカって神官長。相変わらず二人の名前は一文字も思いつかない。

てことは、メリグリニアさんは、大神官の地位には興味ないって事だろうか？

てか、大神官ってどうやってなるんだっけ？

確か審査とか投票とかがあったような気がするんだけど……。

アタシの様々な疑問は、メリグリニアさんの死者を悼む言葉に霧散する。

「猯下程ご立派なお志をお持ちの方は二人といらっしゃいませんで

したのに。猯下の気高いお志故の死は、崇高ですが残された我らには悲しみばかりが募ります」

本当に心の底からそう言っているように聞こえる事が、何故か逆に空々しかった。

空々しすぎて、ケロタンに毛穴があつたら縮んでいたに違いない。「英霊に何事かを願うという事は、ただ人にはそれ程までに過ぎた事なのでしよう」

「神官長、そうお心をお落とされませんよう。猯下も、お覚悟の上の事に違いありません」

神妙な面持ちでそう語る侍従武官改め神殿騎士も、本心から言ってるようしか見えないトコが、こりゃまたマジで嘘くさい。

あんたさ、さっき、どうってことないって感じて言っただよね、大神官が死んだってさ~~~~~っ！

と、ビシツと指差して指摘したいけど、そうするワケにもいかな

い。

あ、もうっ、一体何がどうなってるの？  
メリグリニアさんは、ヴィセリウス大神官の懐刀じゃなかったワケ???

それとも別に黒幕がいるってか??  
てかさっ。

ぶっっちゃけ言っただ殺した!?

ねえ、殺したの!?

とは、勿論聞けない。

いくらアタシが布製カエルでもさ。

悲しいかな、布製品にも限界はあるのだ。

でも何にも言わないのもなああああああ。

アデーリアやリズの事を思えば、大神官に思うところがないわけじゃないんだけどもさ。

同時に、大神官という盾があつたからこそ、イロイロと避けてこられたアレやコレやがあるワケで。

大神官は、そりや確かに、アディーリアもリズも利用する気満々だったみたいだけれど、二人を大切にしていたのも事実なんだよね。それが手駒としてなのか、彼なりに愛情があったのかは、直接会ったことのないアタシにはちよつとよく分かんないんだけど。

アタシはリズの様子を窺い見る。

アディーリアと違って、リズは大神官の元で育てられたワケじゃない。

季節の挨拶や、手紙や贈り物のやりとりはあったけど、後宮から出られないリズと、大神殿から滅多なことじゃあ出られない大神官とじゃあ、顔を合わせる機会は殆どない。

だからリズへの影響は、殆どないハズなんだけど。

リズは眉を顰めて何事かを考えているらしい。

「リズ？」

声を掛けてみると、リズは難しそうな顔で訊いてきた。

「ねえ、ディー？」

「なあに？」

アタシは平静を装いつつ、極力暢気な声で返事する。

「クリスは英霊様に会いに行ってるのよね？」

え？ 何の事??

つて一瞬思っただけど、そうだった。

リズにはクリスが地下迷宮に行く理由を、そう言ってたんだった。あの時何か考えがあつてクリスの行動を「地神の寝返り」と結びつけたワケじゃないんだけれど。

ただ単に、地震について説明するとかかりとして英霊云々を言っただけみたいなもんだっただし。けれど。

何だろう。

視界の端に映るメリグリニアさんやセルリアンナさん達の纏う空気が僅かに緊張感を帯びた事に、一つの予感を覚える。

アタシの答え如何で、流れが変わる様な気がする。

何の流れが良く分かんないけど。

時流っていうか趨勢っていうか運氣っていうか、風水っていうか最後の違いは違うか？

「……………そうよ」

アタシは話の流れが何処に向かうのか分からないまま、ゆっくりとそう言った。

「じゃあ、師父様のお祈りは、クリスにも聞こえたかしら？」

リズの紫の瞳が、アタシを真っ直ぐにみつめてくる。

アタシは、リズの瞳だけを、希有なその瞳だけを見つめて答える。「勿論、届いているわよう」

誰かが耳元で、そう言うべきだと囁いているような気がした。

それが、アタシの中に溶け込んだアディーリアなのか、或いは別の何かなのか、それとも単なる勘なのか、アタシにはサッパリだったけど。

「本当に祈っているのならねん。人の祈りは、何時でも届いているのよう。ただ精霊達は何時も無視しているだけの話だから」

三号独特の甘ったるい言葉遣いの中に、嘲りと悦楽を滲ませる。

三号は、人間が好きだ。

但し、嗜好品のように。

リズが安堵の表情を浮かべるのとは対照的に、セルリアンさん達の表情が凍る。

今まで、全く本心を読ませなかったメリグリニアさんまでもが、一瞬だけだけど表情を硬くした。

ほんの僅かな変化だけど、全方向視界のケロタンの目は確実にそれを捉える。

本当に祈っていれば。

アタシには、先ずそれが疑問だった。

勿論人々は神サマや精霊に祈る。大神官だって祈る。

でも祈ったから死ぬなんてのは、アタシには到底納得いかない。突然死んだと聞かされて思い浮かぶのは、心臓麻痺や脳卒中だ。

それならそれで、大神官の年齢からすれば不思議な事じゃない。けれどもし。

祈りのために残ったなんて話が嘘で、どさくさに紛れて殺されたんだとしたら？

一体誰が、何のために？

その答え如何によつては、リスを神教と引き離す必要がある。

その時リスと神教の間に立つのは、イスマイルだ。

イスマイルの盾に神教を、神教の盾にイスマイルを。

そんな事が、タダの小娘でしかないアタシなんか可能だろうか？

次から次へと湧いてくる難題を、今は考えないようにして、

「クリスが帰ってきたら、どうだったか聞いてみればいいわ」

アタシはただリスだけを見つめて言った。

「英霊様の話も聞けるかな」

「聞けるわよ。今回、英霊が守護しているにも関わらず『地神の寝返り』がおきちゃったワケもね」

まるでちょっとした悪戯でも打ち明けるかのように、楽しげに言う。

「ミリーは、英霊様の力が弱ってるからって言ってたわ」

「そうよ。でなけりや地神は寝返りを打ったりはしないわよう。問題はねえ、ここの所急速に弱っちゃった原因なのよう」

「……………どうして、英霊様は疲れちゃったのかな？」

「うふふ。クリスはそれを訊きに行つたんじゃないかって？」

「あ、そうだったわ」

「でもまあ、英霊は疲れるためにいるようなモンだけね」

「そうなの？」

「だって、考えてみなさいよう。人間って生き物はね、生きてるだけで世界を汚染していく生き物なのね。その人間が、ここには山の様に集まってくるじゃない？ それをイチイチ浄化してたら、どんな精霊だって疲れるってものよ」

毎年大きな神社やお寺での初詣の映像をテレビで見る度に、アレ

だけ人が集まってきたら神さまだって仏さまだってウンザリするだろうな、なんて事を考えた事がある。

英霊は願いを叶えるモノじゃないけど、それでも人々は英霊に祈る。

何を祈るのかって言ったら、そりゃ健康だとかお金だとか成功だとか良縁だとか。アタシ達が初詣で願う事と変わりない。神社仏閣は三が日がピークだけれど、聖地のそれは一年中だ。流石にご立派な英霊だってノイローゼになるのに違いない。ま、英霊がいたらの話だけでもさ。

「この英霊もそろそろ限界かもねン。どんなに英霊が浄化しても、人間が来る限り汚染は止まらない。汚染された場所を地神がむずがって寝返りを打っちゃうのよ」

「じゃあ、一昨日の『地神の寝返り』は人間のせいなの？」

「そうとも言えるわね。でもリズのお陰で、被害は最小限に抑えられたでしょう？」

「私？」

「そつ。リズがいたから我が主が動いた。アタシ達も動いた。リズがいなかったらこの辺一帯、多分ゲシユマイル高地そのものが消失していたでしょうねン」

さっきのお返してワケじゃないけど、とんでもない事を何でもない事のように言う。

アタシの言葉にリズが目を見開く。

セルリアンナさん達だけじゃなく、メリグリニアさんさえも驚きを露わにする。

勿論嘘八百どころか、八那由他な言いぐさだけど、真実は誰にも分かんないから無問題！

重要なのは、ヴィセリウス大神官が死んじゃった今、それに代わる「盾」が早急に必要だって事だ。

彼らがリズを粗末に扱うなんてことはないだろうけど。

リズを安易に利用しようなんて考えを持たせない様に。

リズを得る事は、諸刃の剣を得る事だと、思い込む様に。

「リス。アナタのためなら、アタシ達の主は創世神をも叩き起こすわよう。なんたってあの方はねえ……」

そこで言葉を切つて、アタシはチラリと横目でメリグリニーアさん達の様子を伺つた。

取り繕う余裕もなく、アタシとリズの話に聞き入っている。

そういう姿を見てみると、この人達は本当に神サマだとか精霊だとかの存在を信じているんだなう。腹の中でどんなに真つ黒な事考えていようと。

アタシにはそれが不思議だ。

ちゃんと神サマ信じてる人つて、神サマに知られて困らない様な生き方をするもんだとばかり思つてたけど。

でもまあ現実世界でも、宗教と陰謀は仲良しだし。

ましてやこつちの神サマは、人間を救いもしなければ罰もしない。

人間に興味がないから。

だから人は神サマに何も期待できない。

ある意味、現実世界のどんな宗教よりも過酷だ。

そんな神サマを信仰するつて、どんだけマゾだよつて話だよ。

アタシには一生理解できそうにないし、理解したいとも思わない。

そして当然、彼らの心情も思惑も、顧みるつもりは一欠片もない。

アタシは不意にリズから視線を外し、ううんと背伸びして言い放つた。

「ああ、クリスが帰ってくるのが楽しみねえ。あの子つたら、英霊のトコに入り浸つて、主様のトコにも帰ってきてないのよう。一体大神官は、英霊に何を祈つたのかしらね」

わざとらしいくらいに話を逸らしたのは、単にアタシも「主」とやらについて全然全く知らないから、というのは勿論秘密だ。

第六五話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません その3

「てことになっただけで、一体どうなんっただけの!?!」

アタシは開口一番、超若作り先代国王にそう言っただけで詰り寄った。茫漠たる空間に、アタシの怒声は反響せずに消えていく。

「く、苦しいっ。手を離せっ。離さんかっ」

おおっと、いかん。余りの余裕のなさに、思わず襟元掴んじやっただよ、はっはっは。

アタシはリズ父の服から手を離し、宥めるためにポンポンと肩を叩いた。

「で、どういう事?」

再び問いかけるも、リズ父からの答えは芳しいものではなかった。

「知らんっ」

「なんでっ!?!」

国王で聖者だったんだから、神教の裏事情にも詳しいんじゃないの!?!

と思っただけで質問するけれど、

「そもそも『てことに』の前に一言の説明もないではないかっ」

アレ? そうだったっけ?

「何となく、雰囲気分かるじゃん」

「分かるかっ」

ちっ。面倒くさいな。

とは思ったけれど、アタシに説明してくれそうな人間は、目の前の若作りオヤジしかない。

というか、ここにはアタシとこの男しかないワケなんだけど。

「オゲエ」

「ケロロ、ケロッ」

「キュルルルッ、キュルッ」

「ゲコゲコオ」



「……………」

あ、カエルもいたか。

けれどカエルに説明を求めるのは無理だろう。

アタシは未だに、種の壁を越えてはいないのだから。

そっぴゃあ、アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアは、アタシの気持ち次第でカエル共の言葉が分かるみたいのことを言ってたな。

本当にそんな事ができるんだろうか？

事故の記憶を取り戻したアタシは、何かが変わった、てか何かがグレードアップしたハズだ。

ファンタジー的な展開の相場からすれば、そうなっているハズだ。ただけれども。

アタシはジツとカエルを見た。

カエル共も、アタシをジツと見上げてくる。

五対のまん丸い目は、確かに知性があると思えるんだけど。む……………ん。

けれどもどんなに見つめても、カエルはカエルなワケで。

アタシは所詮人間でしかないワケで。

アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアがいれば、通訳してくれたかもしれないけれど。

彼女はもういない。

アタシとアディーリアとで作った「入れ物」としての役割は終わったのだから。

「……………」

アタシは茫漠たる空を見上げた。

今も欠けない赤い満月が、ポツカリと浮かんでいる。

この男がいる限り、きつとあの月は消えないのだろう。

或いは、この月がある限りこの男は消えないのか。

チカリと瞬いて、星が一つ流れ墮ちる。

よく考えれば会話したのは、たったの一度だけだったけど。

なんだか懐かしいよ、アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリア…。

アタシの中に寂寞たる思いが湧き上がる。

それを打ち消すかのように、突如高らかな笑い声が空間を揺るがせた。

「オッホッホッホッホ。私が懐かしいなんて！ 愁傷な事ね

！ 澄香！！」

途端にアタシは脱力して、ガツクリと肩を落とす。

「やっぱり…」

何となく、こうなる予感があったんだよね。うん。

アタシはあの瞬間の優美な唇に浮かんだ悪辣な微笑みを思い浮かべながら、振り返る。

「！！！？？」

「ふふふつ。驚いているわね！？ どうして消えたはずの私がいるのか？ 知りたい！？ 知りたいわよね！ いい？ よおくお聞きなさいっ！」

アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアは、長い髪を優雅に靡かせながら、相変わらずの上から目線で言い放つ。

ああ、うん、確かに驚いてるよ。

アタシはアディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアをマジマジと眺め見る。

紫色の長い髪、睫毛バツバサのくつきり二重、少し厚めの形の良い赤い唇。

リズにそっくりな、というか瞳の色以外まんまうり二つな顔は、確かにアディーリアのものなだけど。

肩幅よりデカイ頭部、寸足らずの手足、内臓はどこやった？ と問い質したくなる程に短い胴体。

「……………なんで、三頭身になってんの？」

「キ　！　そこは訊かない約束でしょ！！！」

「いや、そんな約束してないし」

「ま！ 何て事を言うの！ この子は！！」

アタシの言葉に、アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアは、ハツとなって手の甲を口元にあてると、

「貴女には、思いやりがないの！？」

「うん、ない」

アタシがキツパリとそう言うと、アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアは悔しげに地団駄を踏んだ。

といつても、宙に浮かんでいるので、地面は踏めてはいない。

じゃあ一体どこを踏んでんのかって話だけれど、そこら辺は夢の中なので不問としよう。

「変なところだけ不問にしないでよっ」

「……………じゃあ何処踏んでんの？」

「私を知るわけではないでしょうっ」

アディーリアであってアディーリアじゃないアディーリアは、踏ん返り返って言い切った。

うん、相変わらずの女王様気質だね。

アタシは何がどうなつてこうなったのか、アニメキャラの如く三頭身となつて現れたアディーリアであってアディーリアじゃないアディーリア いやもうマジで面倒くさいので、今後はアディーリアZとしよう を、

「ちよつと！ 『Z』って何よっ！？ 変なあだ名付けないでちよっうだい！！」

「……………さつきから気になつてんだけど、なんでアタシの心の声と会話してんの？」

「それは勿論、私が貴女の一部だからよ」

何ソレ！ そんなの初耳だしっ！

「何そのイヤそうな顔はっ」

また心の声を拾われた？

「ていうか、アタシそんなに高飛車じゃないし」

アタシが不満たつぷりにそう言うと、アディーリアZは花が綻ぶ

ように艶やかに笑って言った。

「あらだつて、アタシはアディーリアでもあるもの」

その言葉を聞いて、更にアタシは脱力する。

つまり、アディーリアであつてアディーリアじゃないアディーリアは、宮本澄香であつて宮本澄香じゃない宮本澄香でもあるって事???

一体全体、何だつてこんなややこしい事に…?

アタシの心の中の問いかけを聞こえていないハズもないくせに、ドキッパリと無視をしてアディーリアZは話を続けた。

「普通ならば、あの場で私は霧散することとなつたでしょうね。けれども、私とてこの九年間無為に過ごしてきたわけじゃなくってよ? 第一、根性のひねた貴女と性格の歪んだアディーリアとで作つたこの私を、簡単に追い払えると思う方がどうかしてるのよ」  
「なんじゃそりゃ。」

まるでプログラムされた人工智能が暴走してるかのような、サイバーパンクな展開は。

「いいこと? アディーリアの記憶が欲しければ、これから先は私を通すことね!」

オ~~~~ホッホッホと、勝利宣言でもしているかのように高らかに笑うアディーリアZ。

「だから、『Z』なんてつけないでちょうだい!」

「……………勝手に人の心の声を拾わなうように。じゃあ何て呼ぶの?」  
「特別に『アディー』って呼ばせてあげるわ!」

三頭身アディーリアは、そう言つて顎を上げてそっぽを向いてしまった。

「アディー」って、前にアタシが付けたあだ名じゃん。

う〜ん、アタシとアディーリアの合作ねえ。

頭身以外はどっからどう見てもアディーリアで、アタシの部分は、殆ど無いように思えるんだけど…。

ハッ!

まさかチビ化してる部分が「アタシ」か??

明らかに八頭身どころか十頭身くらいありそうなアディーリアと、せいぜい六頭身くらいのアタシ。足して二で割ったら三に…。

「なるかつ!!」

「な、何よ急にっ」

「心の声を拾え!」

「何よそれっ。拾うなって言ったり、拾えって言ったり。何て我が儘な子なの!」

アタシはクラリと目眩を覚えた。

アディーリアに我が儘と言われる日が来るなんて…、いや、今までも結構言われてたかも。

てか、アディーリアの場合、彼女の要求をのまない。「我が儘」になるからなあ。

アタシは三頭身になったアディーリアをつくづくと眺めながら思索する。

要するに、門番みたいなもんなんだろう。

アディーリアの持つ「有害な記憶」の。

何でこうなったのかは分かんないけど、ひょっとしたらアタシがあの瞬間躊躇したためかもしれないとも思う。

結局のところ、アタシが望んだのだろう。

彼女の存在を。

なんで三頭身になってるのは全く不明だけれど。

「ところでアディー」

「なによっ!」

普通に呼びかけたただけなのに、高飛車な口調が返ってくる。

その眉の上がり方、顎の角度、見下すような視線、嫌みっちらしい程に優美な弧を描く唇。

確かにアディーリアだけど、やっぱり本物のアディーリアとはどこかが違う。

いやまあ三頭身である時点で、大違いなんだけど。

そんなチビアディーの後ろを指差しながら言った。

「アンタの後ろで、変態オヤジが何か震えてるんだけど？」

その瞬間不穏な気配を感じたのか、チビアディーがハツとなって振り返る。

途端に、

「おおっ！ やはり！ 我が妻！ アディーリアー！」

若作り中年男が、チビアディーに飛びかかる。

バシイイイイイイン！！

派手な音と共に哀れ変態中年は、無残にも星屑となって飛び散ったのであった。

んだったらよかったのに。

残念ながら世の中そんなに上手くは事が運ばない。

いや別に消えて欲しかったワケじゃないけど。

今は訊きたいことがイロイロあるし。

けど、ぶつちやけ言つて、いずれは消えて欲しいとは思ってる。

だつてさ、何の情もない人間に夢の中に居座られるのって、相当イヤじゃね？？

「な、何をするのだ！？ アディーリアー！」

若作り中年変態オヤジは、まるで高下駄で足蹴にされた芸者のように、片手で体を支えつつも片方の手を頬にあてて三頭身と化した妻であつて妻ではない妻を詰つた。

「余は余だぞっ！ そなたの愛しい夫であろうがっ！」

なんだろう、この間抜けな台詞は。

一国の国王ともあるう者の言葉とは思えない情けなさ。

それに対するアディーの答えは、清々しいまでに容赦なかった。

「フンッ！ なれなれしくしないでちょうだい！ 私はアディーリ

アであつてアディーリアではないアディーリア！ 貴方を愛した記

憶はあつても、貴方を愛してはいないのよっ」

高らかにそう言い切ったチビアディーの手には、何故か特大のハリセンが…。

ハリセン。

それは日本の伝統的なツッコミグッズ。

それをなぜチビアディーが？

ハッ！

アタシが混じってるってのは、こういう事か！？

てか、何でハリセン？

よりによって、何故ハリセン？？

そもそもアタシ、ハリセンなんか持った事ないんですけど！？

アタシの頭の中がクエスチョンマークで一杯になっていくのを余

所に、夫と妻であって妻ではない妻との言い争いは不毛と化す一方

だった。

「なんとっ！ 余との愛の記憶がありながら、余を愛しておらぬな

どと！ 余は認めん！ 余は認めんぞっ！」

「ホホホホ！ 笑わせないでいただけ？ 貴方の許可なんか、

私には必要なくってよっ！」

「ぬぐぐぐぐ。その蔑みきった瞳！ 確かに余のアディーリアで

あるのに！」

そういうトコロで愛する相手を認識するのってどうなのよ？？

ていうか、アディーリアの記憶では、この男は薄ら寒いまでにキ

ラキラ輝いていたのに、この男の記憶の中のアディーリアってそん

なの！？

一体どこをどうすれば、そんな相手に恋愛感情が持てるのか？

やっぱり顔か？ スタイルか？？ 性格だったら、それこそマジ

で変態じゃね？？

そう考えてハッとなる。

リズの父親が変態！？

そんな事はあつてはならない！

リズの輝かしい人生の汚点となる。

そんな事、神が許したとしても、決してアタシが許さない！

ハリセンで強か打たれながらもどこか嬉しそうな若作り中年への

殺意が芽吹く。

「澄香！」

不意に名前を呼ばれて、アタシは思わずビクリとなった。  
ひよっとして、チビアディーに殺意だだ漏れ??

口ではあんな風に言っても、ツンデレ属性のアディーリアだ。流石に本体の旦那を殺されるのには抵抗があるのに違いない。

アタシが叱責を覚悟してアタフタとしていると、チビアディーは焦れたように言った。

「澄香！ さっさとこの男と契約しなさい！」  
「はいいいい??」



第六六話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません その4（前書き）

先週は予告もなくお休みしてしまい申し訳ありませんでした。

第六六話 カエルの子供がオタマジャクシとは限りません その4

そもそも「契約」とは何ぞや？

死にかけの人間が、死んだ人間の魂を代償に願いを叶える。  
それがアタシの解釈だ。

死者であるアデーリアには魂しか差し出せるモノはなかったし、  
アタシには足りない分の魂が必要だった。

見事に需要と供給が一致した結果、契約が成立した。

「魂」は存在するのか？ だとか。

「魂」って補給できるモンなのか？ だとか。

ていうか、意識だけでも「別の世界」に行けるってどういう仕組み  
みだよ、だとか。

「別の世界」ってそりや何処だよ、だとか。

ツッコミどころが満載なシステム、それが「契約」である。

「ちょっと！ 変な解説しないでちょうだいっ」

アタシの心の声を聞いたらしいチビアデーが、ハリセンを振り  
かざす。

アタシはそれを現実ではありえない反射神経で避けつつ、

「だから心の声を拾うなと」

「拾ってないわよっ。全部声に出してるじゃないのっ」

ブンツと耳元を掠めたハリセンの風圧に、こめかみ辺りがピリリ  
と疼く。

うお、何だその威力っ。当たったら確実にヤバいだろうがっ。

「け、けどさ、実際のトコロ、アタシには『契約』ってシステムが  
よく分かってないし」

それでも「契約」できるのは、自動車の仕組みを知らなくても運  
転できるのと同じ様なもんだらう。契約書読まずに闇金の借用書に  
ハンコ押す様な危うさが、なきにしもあらずだけれど。

「逆に訊くけどさ、アデーは『契約』の事、何か知ってるワケ？」

アタシがそう訊ねると、チビアディーは何故か胸を張って当然とばかりに言い放った。

「知らないわ」

ああ、そうですか。

としか言いようがないけど、それってつまり。

「その辺の知識は、アディーリアの記憶にもないんだ？」

重ねて訊ねると、チビアディーは片手を頬に添えて思案する。

アディーリアの記憶を手繰り寄せているのだろう、デフォルメされた三頭身で眉間に皺を寄せる姿は、可愛らしくもあり可笑しくもあつた。

それにしても、何で三頭身なワケ？

これで猫耳なんかついてたら、完全に萌えキャラじゃん。

まさか、萌えキャラ目指してんのか？

誰が？

言っておくけどアタシじゃないよ？

なんて全く関係のないことを考えてたら、チビアディーがビシッとハリセンを突きつけてきた。

「そこ！ 余計なことは考えない！！」

おいっ、心の声を拾うのは止めたんじゃないの？

てか、アンタにアタシの考えが読めて、アタシはアンタの考えを読めないって、不公平じゃね??

というツツコミは敢えてしないでおう。

何せ相手はアディーリアの派生物だ。舌の根の乾かぬウチに自分の都合良く意見を翻す事など、苦もなくするのに違いない。

因みに、アタシの派生物でもある、というのはこの際無かった事にしておく。

そんなアタシの考えを読んだらしいチビアディーが、眦をつり上げて睨み付けてくる。

それでも文句は言わずにおくことにしたらしい。

「私が持っているのは、アディーリアの生きている時の記憶であっ

て、死んだ後の記憶はないの。生前のアデーリアも言い伝えに望みを掛けていただけで『契約』の事は何も知らないわ。貴女も、死後のアデーリアの記憶はないでしょう？」

チビアデーの問いかけに、アタシは黙って頷いた。

今口を開けば余計は事を言ってしまうそうだったから。

何だその赤ちゃん並の小さな手は、ちゃんと関節あんのか？ だとか。

その豆粒程の鼻でまともに呼吸できんのか、だとか。

勿論、そんな事は言わぬがハナってヤツである。

チビアデーの言う通り、確かにアタシの持つてる記憶は、主にアデーリアが二十歳を過ぎてからのものだけど、死の直前までの記憶はあっても死の瞬間から後の記憶はない。

きつと「記憶」ってのは肉体に宿るものなんだろう。

そりゃそうだ、脳みそなけりゃあどこに記憶を蓄積するんだって話だし。

ソレを言うなら、チビアデーやそこで何やら萌えている若作り中年は、脳みそがない状態でどうやって思考してんだよって話にもなるんだけれど。

やっぱりそこら辺はツッコむまい。

ツッコんだら最後、アタシのパラダイムが崩壊してしまうに違いない。

人よ、保身に走るアタシを笑いたくば笑え。世の中知らない方がいい事もあるのだ。

「じゃあさ、そっちの若作り中年はどうなのよ？」

アタシはそう言って若作り中年を顎で指す。

若作り中年は、チラチラとチビアデーに視線を投げかけながら、何やら頬を染めてモジモジしている。

相手が誰だか知らなければ、青い春の到来だろうと生暖かい目で見てやらないこともないんだけど。

爛れた中年姿の記憶がある限り、それは無理ってモンである。

「どうなの、貴方」

チビアディーが腰に手を当てて踏ん張り返りながら重ねて問うと、若作り中年はうつとりとした表情を浮かべて言った。

「余も良く知らん」

バシイイ

ン！！

途端にハリセンが、若作り中年の後頭部に炸裂する。

「何頬染めて言ってるのよっ！ 気持ち悪いっ！」

ついさっきまでアタシの隣にいたチビアディーが、男の背後に瞬間移動したらしい。

うおっ！ マジですげえな！ チビアディー！

アタシときたら速く走ることはかり考えて、瞬間移動なんて思いもよらなかつたよっ。

流石夢！ そんな事までアリなんてっ！！

「痛いではないか、アディーリア」

若作り中年はそう言いつつも、表情は晴れやかですらあった。

あ。

この表情だ。

ふとアタシは気がついた。

アディーリアの記憶の中で、必要以上にキラキラしてた男は、確かこんな表情を浮かべてた。

なるほど、アレは強か殴られた後の表情だったのか…。

その直前の記憶がないのは、アディーリアによる捏造か…。

人間の記憶というのは、つくづくと当てにならないもんだと思う。

そんな男の反応は見て見ぬフリをして、

「じゃあさ、それなら何時どうやって『契約』のコトを知ったワケ？」

そう訊ねてみるも、返ってきた答えは何とも曖昧なものだった。

「どうやってと言われても、気がつけば余の頭の中にあつたとしか

言えん」

なんじゃそりゃ。

「そついやあ、アディーリアは精霊のお導きがどうとかつて言つたけれど。」

「何か神的なものが出てきてお告げ的なものがあつたとかは一切なく？」

「あつたら逆に恐いけど、取りあえずは訊いてみる。」

「なかつたな」

男はアツサリとそう言った後、続けて語り始めた。

「人は死ねば、月も星もない夜の道を夜影の導きで冥府へと赴くものだと思つておつた。ところが気がつけば、森にいた。梢の隙間から赤い月の光が零れておつた。その時余は、己が望みとそれを叶えるために契約者を捜さなければならぬのだと悟つたのだ」

「森？ 森なんかどこにあるワケ？」

「森なんか、どこにもない。」

この前、歩いて歩いて歩きまくつたけど、何処まで行つても茫漠たる天地が広がつてただけで視界を遮るようなものは何一つ見当たらなかつた。

すると若作り変態中年は、神妙な顔で首を振る。

「今はない。そなたを目にした途端消え失せた。あの時、余はそれまでとは、全く別の場所に来たのだと感じた」

「別の場所？」

「この世ならざる場所だ」

アタシとチビアディーは顔を見合わせた。

「まあ、『この世』ではないよね？」

「そもそも夢だし。」

「でも『あの世』でもなくつてよ？」

「ていうか夢だし。」

「それは余も分かつておる」

アタシとチビアディーと若作り中年は、互いの顔を見合わせた。

その顔のどれにも書いてあつた。

「じゃあ、ここは何処？」

けれど答えがない事を知っているアタシ達は、誰もそれを口にしなかった。

「ていうかさ、アンタの契約者が何でアタシなワケ？」

アディーリアはこの男を愛したかもしれないけれど。

アディーリアはそれで幸せだったかもしれないけれど。

アディーリアの死後、リズに十分な愛情を注いだとはいえないこんな男、宇宙の塵になればいいのに、とすら思うアタシが何でコイツの望みを叶えなけりゃいけないのか？

アタシが憤然としてそう言うと、チビアディーが諭すように言った。

「貴女にも必要だからこそ、彼は貴女の目の前に現れたんだと思うわ」

「アタシに？ コイツが??」

まさかつ。

「言ったでしょう？ 私は貴女でもあるのよ？」

つまりアタシの自覚しない何かを知っているってか??

「アタシはこんな男の魂なんか必要ないよ？」

アタシは死にかけてないし、死にかける予定もない。

「そなたに必要なのは、余の知識ではないか？ この前も、余にいろいろな事を訊いてきたではないか」

男は慚然とした表情でそう言うけれど、

「そんなの、契約しなくてもいいじゃん。アンタが目の前にいるんならさ。てか、アンタの記憶とか、マジでいららないからっ」

変態中年の記憶なんぞ、誰が欲しいもんかつ。

「余の知識の中には、代々のイスマイル国王しか知らぬものもあるぞ？」

うっ。それは欲しいかも。

「けどそんなの、今のヘイカに訊けばいいじゃんっ」

そんな事ができるかどうかは謎だけど、地下迷宮でみつけた本と地図を突きつければどうにかなるかもしれないと思う。

すると若作り変態中年はフツと嗤って言った。

「カウゼルには伝えておらん」

「え？　なんで？」

病で倒れてから一ヶ月くらいで死んじやったけど、その間に伝えるチャンスは幾らでもあったはずだ。第一、九年前に立太子した時に一子相伝的な知識は伝えてあるモンじゃねえの？

「カウゼルはそんなものがあることすら知らん。余の知識は、リズナターシュに伝えるつもりであったのだ。あれが成人した暁にはと……。まさかその前に寿命がつきようとは思ってもみなかったがな」

「なんで……？」

「余の知識は、リズナターシュにこそ必要なものだからだ。……………」

余は父として、余りにも不甲斐なかった……」

幼さの残る顔立ちに、年相応の苦渋が浮かぶ。

後悔したって、今更遅い。

この男は、リズを困い込むだけ困い込んで、そのくせ滅多に会いに来なかった。

それがリズを守りもしたけれど。

リズが父親を恋しがるのは寂しいからだ。

両親から無条件に与えられるべき愛情を、リズは知らずに大きくなつた。

アディーリアが死んだ後、それを与えられるのはこの男だけだったのに。

そう考えると、何だかますます腹が立ってきた。

この男の知識は確かに欲しいけれど、この男の望みを叶えるくらいなら、そんなの放棄した方がマシだ。

「ところでさあ」

我ながら悪意が顔に出てるだろうなと思いつながら、男に言った。

「アಂತアの望みって何？」

すると男は、憧憬を希有な瞳に湛えて言った。

「アディーリアに再び相見えること。そして、決して二度と離れぬ



よう共にあること」

「……………」

そりゃまあ、アタシにしか叶えられない願いだわな。

アディーリアと同じ様にアタシに喰われりゃ、二度と離れることはないだろう。

ただし「会える」かどうかは分からない。

アタシが思案していると、チビアディーが声を掛けてきた。

「澄香」

「何？」

「記憶を受け継ぐのがイヤなら、私と同じ様な存在を作ればいいのじゃなくて？」

それだけじゃない事なんて知ってるだろうに。

アタシはチビアディーを軽く睨みながら問いかける。

「そこまでしてこの若作り変態中年との契約を推す理由は何？」

チビアディーも口ではキツイことを言いながら、やっぱりこの男の事が好きなんだろうか？

アタシの心を読んだチビアディーは、ゆるりと首を振って否定した。

「そうじゃないわ。この男の、というよりももう一つ魂を食べれば、

『向こうの世界』との縁えにしが強くなるのよ」

「ふ〜ん、そしたらどうなるワケ？」

それが一体何になるのか？ ハツと嘲笑いながら訊いてみる。

するとチビアディーは、意外な程真剣な表情を浮かべて言った。

「昼間も動けるようになるわ」

「ゲコオ」

「オゲエ」

「ケロロツ」

「キュルキュルルツ」

「……………ッ」

同意するかのようにカエルが鳴いた。



## 第六七話 カエルも時には空を飛びます

昼間も動けるって、そりゃ凄い。

太陽の光の下でリズと会える。

そうすれば、リズに、一生懸命起きていようと寝ぼけ眼を擦らせることも、この前はどうして起こしてくれなかったんだと拗ねられることも、なくなる。寝ぼける姿も拗ねる姿も相当可愛いけれど、子供の発育上いいことじゃない。

これから先神教はますますリズを取り込もうとするだろうから、それを防ぐ事もできるかもしれない。神教に傾倒しすぎた教育や、親切ごかしの強制に、その場に居合わせて待ったを掛けることだってできるだろう。

メリットは沢山ある。

とは思うのに、降って湧いたような儲け話に尻込みする小市民的心理に陥っちゃうのは、何故だろう。

そりゃ勿論、アタシが小市民だからだ。

ちよつと布製品に憑依できるくらいで、人間性というのは変わったりはしない。

アタシはつらつらとそんな事に思案を巡らせながら、ゆっくりと起き上がった。

その拍子にバラバラつと色とりどりの靴が落ちる。

窓のないウオーケインシューズクロゼットの暗い床に、それはまるで宝石をちりばめたような煌びやかさだ。

ま、実際宝石がついてんだけれどもさ。

小さいモノから大きいモノまで、まるで安価なラインストーンみたいに遠慮無しにつけられている。

アタシはその中の一つを青い水かきのついた手に取り、懐かしさに眼を細め、たかったけどケロタンの目は常に全開なのでできなかった。

今のアタシはケロタン二号、クリストファル・ウディノ・ケロタ  
ウロス。

突然降って湧いたような儲け話に尻込みして、目があったのがた  
またま青いカエルで、目があった瞬間何故かアタシの口から「転送  
！」という言葉がついて出た。

するとそれに応える様に、足下にポツカリと穴が開き。

お約束の自由落下である。

当然、あらん限りの声でアタシは叫んださっ。

助かったことは助かったんだけど、あの落下システム、どうにか  
ならんものか。

ともかくアタシは今、地震の爪痕も生々しいウオークインシュー  
ズクローゼットの中である。

掌に乗せたその小さな靴には、五色の宝石がついている。

宝石には何か小難しい名前がついてんだけど、現実世界で言うル  
ビー、サファイア、真珠、エメラルド、ブラックダイヤモンドって感じだ  
ろうか。

五色の上質な宝石達は、ぶっちゃけ言って主張が強すぎて調和が  
全く取れていない。

でもそれは、リズがケロタン達を思って作らせたものだ。

作らせたっていうか、こういうのが欲しい的な事を言ったらしい。  
リズが五歳になるかならないかの頃で、リズはそれを履いて、嬉  
しそうに何やらよく分からない謎のダンスを踊ってくれた。

大人がやったら、一体何の呪いのダンスだ？ と問い質したくな  
るようなその踊りは、可愛らしいリズのお陰で可愛らしいダンスと  
なっていた。

まるで一昨日のことに覚えている。

昨日のことのよう、と言えないのは、沢山思い出があるからだ。

アタシはそれを手にしたまま、周囲を見回す。

天井まで届く高さの棚は、壁に作り付けのもの以外はことごとく  
ドミノ倒しに倒れ、床一面に靴が散乱している。二号の体は辛うじ

て棚と棚の隙間に入り込んで、綻び一つないけれど、これを元通りにするとなくなったら骨だろうな、とまるっきり他人事のように思う。イヤだって、ケロタンの仕事は掃除じゃないしっ。明確な階級社会では、自分の仕事以外の事をするとは他人の仕事を取ることになるから、不用意にそういう事はしちゃいかんだよ、はっはっはっはっは。

そういうワケだから、靴部屋の惨状は見て見ぬフリで放置しておくことにして、取りあえず持つてる靴だけでもと思い、無傷の棚に置いてみる。

.....

何故だろう。この惨状の中で一つだけキチンと棚に置かれていると、駐車場で綺麗に揃えられた靴を見つけた時のような滑稽さと不気味さが出てくるのは。

ま、いいか。

見つけた人間は何か思うかもしれないけれど。

それもまた一興、なぐんてね。

ところで、アタシが地下迷宮から持ってきた本は、どこにいった？アレを人に見られるのは非常に困る。

この惨状からして、片付けに人が入った様子はなさそうだけど。

アタシは、倒れた棚と棚の隙間に潜り込んで靴の山をかき分ける。

おお、あったあった。

四冊の分厚い本は、どうやら無事だったらしい。

さて。

これをどうしよう。

片付けに人が入るのは時間の問題だから、靴部屋には置いておけない。

どうせ衣装部屋も寝室も同じ様なモンだから、勿論置いておけない。

かといって地下に戻すのも面倒くさい。

何のために重たい思いして持ってきたんだか。

となればレゼル宮内の隠し通路にでも置いておくか？  
それなら一旦寢室に出るしかない。

アタシは靴部屋から衣装部屋へ通じる扉に手を掛けた。  
アレ???

開かない？

この扉は衣装部屋からだと言開きだ。

つまり靴部屋からだと言開き。

扉に耳をくつつけて外の様子を窺ってみる。

まあ、耳をくつつける必要はないんだけど、そこは気分の問題だ。

物音一つなく、人の気配もなさそうだ。

アタシは二、三步下がってから、扉に体当たりした。

けれど扉はビクともしない。

まあ、ぬいぐるみがつぶつかつたくらいでどうにかなるような扉じゃないけど。

仕方がないので、両足を踏ん張って全身で押してみる。

ぶぐぐぐぐ。

ケロタンはアタシより早く走れるしアタシより力持ちだし、壁歩きとかも出来たりするけど、それでも限界はある。

その点は、あの何にもない空間よりも制約があるんじゃないかと思う。

多分肉体<sup>ケロタン</sup>があるからだろう。

縫製の強度やら重力やら、物理的な要因が枷となっているのかもしれない。

ま、要するに、ケロタンには開けられないって事なんだけどさ。

衣装部屋も、部屋の構造は靴部屋と似たようなモンだ。

要するに、天井まで届く棚がズラズラ~~~~。

耐震補強なんかしてない棚は、やっぱり同じ様に倒れていることだろう。

そしてその棚が、ドミノのように折り重なってこの扉を押さえて

いるのに違いない。

てことはつまり？

どうやらアタシは、靴部屋に閉じ込められたらしい。

「マジか??」

二号の体をこのままここに置いておくのも一つの手だけど。

どうせ片付けに来た誰かが回収してくれるだろうから。

けどさ「英霊に会いに行っている」ハズの二号が靴部屋で見つかるって、不味くね??

それにこの明らかにヤバいつて分かる本はどうする？

下手すりゃ、隠し扉が、ひいては地下迷宮がバレてしまう。

アタシとしては、地下迷宮は隠したままにしておきたい。

イスマイルにとってイロイロと不味いモノが置いてある地下迷宮には、脅迫、じゃなくて交渉ネタが山とある。

「……………」

ここは一旦地下迷宮に下りて、時期を見て二号の体を回収するか。いや待てよ。

いつそのこと、地下迷宮通って王府の方に出るか？

王府の状況、正確に言えばヘイカ達が娘子軍からの地震情報をどう処理したのかが知りたいし。

セルリアンナさん達にそれとなく訊いてみたんだけど、混乱してるらしくってイマイチはつきりしないんだよねえ。

問題は、あとどれくらいの時間があるのかって事だ。

アタシは二号の首にぶら下がってる水時計を見た。

これもよく壊れなかったと思うけど。

時刻を計れない水時計じゃあ、見ても意味がない。

まあ、行くだけ行ってみるか。

どっちにしても、二号も本もこのままここに置いておくワケにも  
いなかいいし。

アタシは仕掛けを動かし、隠し扉をすり抜ける。

例の本は、地下に戻すのは面倒なので扉の裏側に置いておく。

扉が閉じたのを確認してから、アタシは地下迷宮へと下りていった。

水時計が三分の二程落ちた頃、アタシは例の小さな扉の前にいた。思ったより早く着いたのは、道中走ってきたのと、寄り道を一切しなかったためだろう。

この扉の向こうには、王府のガラクタ部屋がある。なんだって行政庁にガラクタ部屋があるのかは謎だけど、あるものはあるのだから仕方がない。

前に来た時には雑然と物が置かれていたけど、地震の後の惨状はきつと靴部屋の比ではないだろう。

ひよっとしてココも開かなかつたりして…。

なんて思いながら、そつと扉を開ける。

開いたことにホツとしつつ、隙間に顔を押しつけて中を覗く。

人はいないと思うけど、一応念のためである。

「うわっ」

隙間から見えたガラクタ部屋は、ドエライことになっていた。

前来た時はそれなりに「道」はあった。今にも倒壊しそうなほどガラクタの山ではあったけど。

けれど今はもう、その道もない。てか足の踏み場がない。

一号か三号なら、強力な吸盤を使って壁歩きができるんだけど。



残念ながら二号には水かきしかない。

水かきがあったところで、泳ぎが達者ってワケでもなさそうだけ  
ど。

どうせならもっと水かき大きくして、空飛ぶカエルにして欲しか  
った。

何年前かにヒマラヤで発達した水かきで滑空するカエルが発見さ  
れたらしいけど、こっちの世界には空跳ぶ蛙はいないんだろうか？  
きつとないんだろう。

いたらカエル好きのアディーリアの事だ。絶対ケロタンのどれか  
を空跳ぶ蛙にしたことだろう。

「ああ、空を飛べたら」

なんて歌の題名みたいな事を呟いてみても、二号は空を飛んだり  
しない。

夢なんだから気合いでどうにかならんもんかと思うけど、制約は  
あるのだ。奇妙奇天烈な布製品にも。

アタシは気合いを入れて、ガラクタ部屋への扉を潜る。

隠し扉になってる鏡をきつちり元の通りに戻して、

「さて、いきますか」

アタシは果敢にガラクタ山の制覇を目指そうとしたトコロ。

ギギギギギギギギギギ

重苦しい軋み音がしたと同時に、ガラクタ部屋に明かりが差し込  
む。

月明かりとは違うそれは、炎が作り出すものらしくそこかしこの  
影がユラユラと揺れている。

「うわっ。ホコリだらけじゃねえかっ」

「もう何年も誰も入ってないそうだからな」

聞き覚えのあるような二人の男の声に、アタシはして  
ない息を潜めジツと聞き耳を立てる。

「うわっすげえな。『地神の寝返り』のせいでこんなになったのか  
？ 元からこんななのか？」

「『地神の寝返り』のせいだろうが…。それにしても酷いな」

「本当にここを使うのか？」

「『地神の寝返り』のせいで礼拝堂がああなってしまったのでは致し方ない。ここも二百年ほど前までは礼拝堂として使われていたらしいぞ？」

アタシは用心深くガラクタ山を登り、そつと様子を窺う。

「こんな場所で陛下の即位式を行う事になるとはな…」

「陛下を大神殿に行かせるよりはマシだろう」

やっぱり。

アタシは見覚えのある金髪と茶髪の男達の姿に舌打ちした。

もつとも、ケロタンに舌はないけどねっ。

## 第六八話 カエルも時には空を飛びます その2

金髪直情と茶髪ジャイアンがガラクタの山を運び出す手筈についてアレコレと話し合っている。

あと半年でどこまでできるかとか、できるかじゃなくてやらねばならんのだとか。

アタシはそれをガラクタ山の物陰からジッと眺めてる。

テメエら被災者の救助活動はどうした？

アタシがわざわざしてやった「預言」は忘れたままか？

てかぶっちゃけ、半年後の即位式なんかどうでもいいじゃんつ。

どうせ大神官が死んじゃったんだから、最低一年は延期だよつ。

そこでアタシは気がついた。

連中がまだ即位式を「半年後」だと思ってるって事は、ヴィセリウス大神官の死亡はまだ公にされてないらしいって事に。

大神官は七つしかない大神殿の長であり、アヌハーン神教の柱だ。因みに神教にはカトリックで言うところの法王に相当する地位として首座大神官つてのがあるんだけど、もう五百年くらい空位のままだ。首座大神官つてのは、大神官を除く全神官の投票で大神官の中から選ばれるらしいんだけど、ぶっちゃけいってそんな選挙は非現実的だ。交通手段が前近代的なこちらの世界で、大陸中に散らばってる全神官の票を収集するのに一体何年かかるんだよって話だもんね。多分五百年くらい前の神教の規模なら、そんな選挙も可能だったんだらうけどさ。

というワケで、現在は大神官による合議制で神教は運営されているらしい。

教区から殆ど出ずに滅多にお互い顔を合わせることのない大神官達が、どうやって合議するのは不明だけれど。訊けば「夢ん中で会ってる」とかって頗る夢見がちな答えが返ってきてさうだから、深くはツツコまないでおく。

で。

そんな重要な地位にある大神官が死んじゃったらどうするのか？  
普通は即刻発表して、次の大神官を選定するための評議会が設置される。その間は服喪期間として、巡礼は受け付けるけど大々的な宗教的行事はしない。当然その間は大神官が司る儀式式典なんかはお休みもしくは延期になる。余所の大神官に出張してもらえばいいじゃんと思うんだけど、それはそれえイロイロと問題があるらしい。ぶっちゃけ言えば、寄付金とか礼金とかの問題だ。

と言うわけで当然、イスマイル国王の即位式も延期になる。  
ハズなんだけど。

なんで神教は大神官の死を発表してないんだ？

地震の直後だから混乱を避けるため？

だけどさ、大神官の「殉教」は宣伝効果もバツチリで、信仰心を煽るのに丁度いいと思うんだよね。

皆さんが生きているのは、大神官の貴い犠牲があったお陰です、みたいな？

そしたら寄付も増えるし、巡礼も増えるて当然実入りもよくなる。

世知辛いようだけど、世の中結局カネである。

荘厳な神殿の維持だって、清廉な神官達の生活だって、お土産処で並んでる開運グッズだって、カネがないことにはあどうにもならん。

だから、大々的な発表があってもいいんじゃないかな、てか普通すると思うんだけど。

ま、何にも分かんないウチから考えても仕方がないか。

今とはもかく、連中から少しでも情報を聞き出すこととしよう。

と思つて、先程から聞き耳を立ててるんだけど、

二人の口から出てくるのは、あ〜でもないこ〜でもないとかラクタを運び出す話ばかり。

このまま立ち聞きしてても、大した情報は得られそうにない。

時間も無いし、てかさっさとどっか行けよっ。



「全く、君らと会つとロクな事がない。コレだからイヤなんだ、男なんてものは」

アタシは深々とソファに腰掛けながら、嫌みつたらしい声でそう言った。

「き、貴様っ」

「アレはお前がっ」

ギロリと睨み付けてくる近衛騎士二人を無視して、アタシは視線を余所に移す。

「相も変わらず不景気そうだねえ」

と言つて、濃紺鉄面皮を嘲笑い、

「ちよつと見ない間に腹黒さに磨きがかかったんじゃないかい？」

と、笑顔でドス黒いオーラを撒き散らす黒髪腹黒に呆れ、

「君の頭はきつと小鳥を育てるのに適しているよ。というか寧ろそれ以外に使い道はないんじゃないかい？」

ふわふわ頭の銀髪マツド眼鏡を挿げた。

場所は変わつて、宰相閣下の私室である。

私室つたつて、日本人の思う私室とは意味が違う。

なにせ書齋と寝室と応接室と客間があるのだ。因みに今いるのは書齋だそう。

以前二号として目覚めた時も相当高級そうな部屋だったけど、あの部屋は「宰相の執務室」だそう、私室であるこちらの方が遙かに豪華だ。一体どこの高級ホテルのスイートルームだよつというツッコミは、別にやっかみじゃないよ？ テメエら国民の血税で何し

てやがんだよつという正義感からだ。

ただまあ羨ましいと思う前に、掃除が大変そうだなと思っちゃおう  
小市民なアタシには、こんな部屋には住めそうにもないけどね。そ  
もそもこんな部屋に住む人間は、自分で掃除をしたりはしない。

「何て不運なんだ。かつての祈りの場で、ただ静かに物思いに耽っ  
ていたというのに」

そう言ってアタシは、盛大な溜め息を吐いてみせる。

勿論、デマである。

あのガラクタ部屋がかって礼拝堂だったって知ったのは、ついさ  
つきだしさ。

その後、盛大な物音に駆けつけた騎士達を尻目に、隊長と副隊長  
はガラクタの雪崩から自力で脱出し、何の説明もないまま脱兎の如  
く走り去った。

当然その手には、二号の姿があった。

アタシは両手を金髪直情と茶髪ジャイアンに引つ張られて、その  
余りの力の強さに再び笑い声をあげなければいけなかった。

きっと傍目にはN S Aに連れ去られて行く宇宙人に見えたこと  
だろう。

ケロタンが青じゃなくて銀色だったら、完璧だった。

尤も、こちらの世界に「宇宙人」なんて言葉はないけどね。

アレは何だ？

隊長達は一体何を持ってるんだ！？

ぶ、不気味な！！

ち、珍妙なっ！？

アレって、もしかして人形じゃないのか！？

人形！？ 一体何の！？

どう見ても呪いだろっ！

なんて外野の声は、無視の方向で。

そして急遽呼び出された黒髪腹黒と銀髪マッドも合流して、今に  
至るってワケである。

「第三王女殿下は離宮にお移りになったというのに、何故ここに？」  
黒髪腹黒は口調だけは穏やかに、真つ黒な微笑みを貼り付けて訊いてきた。

「置いていかれたのか？」

「愛想つかされたんじゃないの？」

「うわ。なにそれ、か〜わいそ〜」

「……………哀れだな」

ムダメン共は、この前の仕返しとばかりに口々に勝手なことを言うけれど、二号が男の言うことを気に病むことはない。

「君たちは相変わらず役立たずだねえ。世の女性達が、『地神の寝返り』のせいで夜露を凌ぐのにも難儀しているというのに、随分愉しげじゃないかい？」

アタシがそう言つと、ムダメン共が途端に渋面を作る。

「別に愉しんでなどいない。王都の治安は王都騎兵隊の管轄だ」

「遊んでるワケじゃねえ。近衛隊が守るのは、国王とその家族だけなんでね」

と、近衛隊の隊長と副隊長が言い、

「既に必要な物資の手配は済ませてあります」

「復興のために王国軍も出している」

王佐と宰相が付け加えた。

まあねえ。コイツらが直接出張ったトコロで、何ができるわけもなし。

人を動かすのが仕事なんだから、それはそれで正解なんだろうけどさ。

セルリアンナさん達によると、王都騎兵隊は治安維持を名目にスラム街の人達を大勢引っ張っていつちやったり、王国軍は貴族や金持ちが住む地域ばかりを優先して作業しているらしい。

それもまたコイツらの指示なのか、コイツらが把握できてないだけなのか。

その隙を突くように、大神殿が神殿騎士団やら神官やらをこぞっ



て出して、瓦礫の撤去や炊き出しなんかをしてるんだけど。

大多数を占める平民と国庫の資金源である巡礼者を大神殿に丸投げして、どうすんだって話だよ。

ま、この国の行く末はコイツらが考えるコトであって、アタシが考えるべきコトじゃないからいいけどさ。

そう、アタシが考えるべきは唯一つ。

リズの幸せだけだ。

「トコロで君ら」

アタシは連中から得るべき情報を頭の中で箇条書きにしながら、慎重に言葉を選ぶ。

「『地神の寝返り』があつたときどうしてたんだい？」

四号からの忠告に、どう対処したのか？

アタシの言葉に、ムダメン共は互いの目線だけで会話する。

一体どんな会話があつたのか。

「クリストファル殿は、我らには興味がないのではなかったのではないですか？」

黒髪腹黒の探るような質問を、二号は勿論否定しない。

「確かに、どうでもいいね。君達も君たちのヘイカもね」

その言葉に金髪直情の顔がヒクリと引きつるのを視界の端に納めながら、アタシは更に言葉を続ける。

「ミリーは、わざわざ君らのヘイカとやらにも、知らせを出したと言っじゃないか。彼女も全く酔狂なことだ」

「勿論、ミリユリアナ殿のご忠告には感謝している」

「速やかに陛下には安全な場所へ避難していただいた」

「それは素晴らしい。奇妙だとか不気味だとか散々言ってた割に、随分素直に聞き入れたんだねえ」

普通に考えて、もうすぐ地震があるので避難してください、なんていきなり言われて信じるだろうか？ 地震が殆どないこの国の人間が。しかも、そう忠告してるのは珍妙な布製力エルだ。

けれど、ただの布製品じゃなくて「奇跡」だったら？

信じるだろう。

というか、信じてなくても従わずにはいられないだろう。

後からどんなイチャモンつけられるかわかったもんじゃありませんね。

てことは、コイツらは神殿の「奇跡認定」の動きを把握してるんだらうか？

あの何も無い空間で出くわした時点では、そんな様子は見受けられなかったけど…。

それとも。

「それとも、別の誰かから預言でも与えられていたかい？」

途端に、ムダメン共に緊張が走る。

但し、ただ一人を除いて。

連中は無表情を貫いているけれど、こちらを警戒してるのは明らかだ。

今までの、不気味なモノ、理解不能なモノを見る眼差しとは違う、鋭い切っ先のような視線にアタシはゴクリと喉を鳴らす。

イヤ勿論、ケロタンの喉は鳴らないけどさ。

どうやら連中は、あの時のことは、きっちり記憶してるらしい。

ただ問題は、あの場にいなかった銀髪マツドの事だ。

チラリとそちらに注意を向けてみると、あからさまな好奇心が見て取れた。

銀髪マツドは知らない。

仲間じゃないのか？ という疑問は直ぐに霧散した。

聖者は神教と通じてる。

アデーリアが何だかんだ言いながら離れられなかったようになるほど。

人間関係は、思った以上に複雑らしい。

アタシはニンマリと笑って言った。

「ちよっと君たちにお願ひしたい事があるんだけどね。どうだろうか？」



## 第六九話 カエルも時には空を飛びます その3

アタシは、アタシなりに考えた。  
ない知恵を絞って、沢山沢山考えた。

イスマイルの盾として、アヌハーン神教を。  
それは自体は容易なことだ。

そもそもリズは聖者だし、それはリズが神人になることでより強化される事となる。

問題は、その盾が強力すぎることだ。

じゃあ、どうやればイスマイルがアヌハーン神教の盾となるのか。正確に言えば、歴史が古いだけの小国イスマイルが、全大陸的圧力団体であるアヌハーン神教に対して強く出られるようになるのか。全ての事じゃなくていい。

リズの事だけ。

リズに関する事だけでいい。

イスマイルの唯一であり絶対的な強みは、その血筋の良さだ。

『名の失われた皇国』皇帝の血筋ということだ。

それはアヌハーン神教がお墨付きを与えてはいるけれど、元来その由来は神教とは関係ない。

そのために、元大公家であるイスマイルと他国とでは決定的に異なることがある。

他国では王権の由来が「神教からの承認」だけど、イスマイルでは「皇家に連なる正当な血筋」だということだ。

例えば、他国では即位式を「戴冠式」という。

王権の証である「王冠」を神教が「与える」ることによって、その王位を「承認する」儀式だからだ。

けれどもイスマイルでは、神教は王位を「承認」こそするけれど、「王冠」を与える事はない。

他にも、王権に関して違いがある。

他国では立太子にも神教からの承認が必要だけど、イスマイルでは国王の一存で決められると言うことだ。

そもそも、他国では王位継承権すら神教の承認が必要なのだ。

イスマイルでは、その血筋さえあればいい。

王の嫡出子である証「イス・イスマイル」が即ち王位継承権の証となるのは、現存する国でイスマイルだけなのだ。

「何故我々が貴様如きの願いを叶えねばならん」

ピクピクとこめかみをヒクつかせながら、金髪直情が唸るように言う。

今にも腰の剣を抜きそうな勢いだけど、また何かあって神殿からイチャモンつけられるのは流石にマズイと思う理性は残っているらしい。

どんなに腹立たしかろうとも、どんなに珍妙だろうとも、ケロタンは第三王女の所有物。

虎の威を借る狐って感じが満々だけど、アタシはそれを卑怯だとは思わない。ケロタンが「奇跡認定」された日じゃあ、テメエらの所行は極刑ものだぞ？

そうなった時コイツらの態度がどう変わるのか、ちょっと楽しみだったりするアタシって、性格悪いだろうか？

まあ、今更性格が良いとか言わないけどさ。

アタシは、そんな事を考えながら他のムダメン共を見回した。金髪直情のように突っぱねることも、かといって受け入れる事もなく、硬い表情のまま用心深くこちらの出方を窺っている。

アタシは連中から視線を外すと、一番端で面白そうに傍観している銀髪マッドへと向き直る。

「その鳥の巢頭君。面白い話を聞きたくないかい？」

「え？ 何々？ 面白い話？」

医者なんてやってんだからバカじゃあるまいし、連中にとって都合の悪いことだつてことくらい察しがつきそうなモンだけだ。

銀髪マッドは紫の瞳を好奇心に輝かせるばかりで、他の四人を氣遣うそぶりはなかった。

ふと思っただけで、コイツはケロタンの「奇跡認定」の事や、ヴィセリウス大神官の「殉死」について何処まで知ってんだろうか？

聖者といったって、神官になつてなけりゃあ一応部外者だし。けれど聖者もまた、神教内の派閥に組み込まれてるからなあ。

ヴィセリウス大神官派なのか、そうでないのかで、イスマイルでのコイツの立ち位置は随分変わってくるはずだ。

「実はねえ、夢境界でちょっと面白い話を仕入れてきたんだよね。君は男だけど聖者だから、特別に教えてあげなくもないよ？」

アタシの言葉に、ムダメン共の表情に緊張感が走る。それに気づいているのかいないのか、銀髪マッドは別なトコロに

食いついてきた。

「夢境界？ てことは、君らはやっぱり精霊関係のモノなんだね？」  
む。

逆にこちらの情報を引き出そうつてか？

やっぱりバカじゃないんだな。油断も隙もない。

「さあ、どうだろうね。そもそも人間の言う『精霊』ってのが、僕にはイマイチ分からないからね」

肩を竦めながら、話題の焦点を微妙にずらす。

実際、アタシには「精霊」が何なのか分からない。

勿論、知識ぐらいはあるけれど。

「神の眷属にして、人と神を繋ぐ存在って言われているね」

断定しない辺りに、意外な用心深さが見て取れた。

或いは、他人事めいた言い回しは、ひよっとしたら神とか精霊とかを信じてないのかも知れない、なんて思う。

もしそうなら、生き難いだろう。

ま、どうでもいいんだけどさ。

「じゃあ、その『神』って何なんだい？」

「うーん、そう言われるとねえ。不死なる存在、人智を越えた存在としか言いようがないかな？」

「人間の智恵の及ばない存在ね。随分と傲慢な事だねえ」

「え？ そうかな？」

「だって君ら人間が、一体何を知っているといるというんだい？ 君らは君ら自身のことすら知らないじゃないか。それではまるで、君ら自身が神だと言っているようなモンだよ」

「人は不死じゃないよ」

「じゃあ『死』とは何だい？ 肉体が滅びること？ 君たちの考えでは、魂は輪廻の輪の中で世界の終わりまで生き続けるんじゃないのかい？ それは不死とは言わないかい？ 僕にはねえ、君たちの信仰は君たち自身を神に仕立て上げるための体系にしか思えないんだよ。実際良くいるじゃないか。自分を神だと唱える人間がね」

ま、そんな人間、現実世界にもゴロンゴロンいるけどね。

結局のトコロ問題は、神と精霊を主軸とした世界観を、アタシは決して持ち得ないって事だ。

こればかりは、アデーリアの記憶を得ても無理だろう。

アデーリアの記憶は「知識」であって、「体験」じゃない。

だからアタシと連中が神や精霊について議論しても、根本的なトコロで平行線のままなのだ。

今までの議論は、本質的なところで決定的にズレている。

でもまあ、そんな事はどうでもいいのだ。







「クラリス」

「なんだ？ ナジャ」

「投げます」

「やれ」

濃紺鉄面皮と黒髪腹黒の何やらよく分からない会話の後、どこからともなく分厚い本が飛んでくる。

ドカッ！

「うげっ」

バタンッ！

分厚い本は、銀髪マツドの頭に見事命中した。

銀髪マツドはそのまま床に倒れ、部屋には平穩、じゃなくて静寂が訪れた。

ええと。その本、どっから飛んできた？？

てか何処にしまっていたわけ？

床に転がってる本は、アタシが地下迷宮から持ち出した本二冊分に相当する分厚さだ。

とてもじゃないが懐にしまえるサイズじゃない。

アレが頭を直撃したとなれば、痛いだけじゃあ済まないんじゃないかねえの？？

死んでない？ 死んでないよね？？

アタシはピクリとも動かない銀髪マツドに、内心で焦る。

ぎゃ〜っ、第一発見者とか勘弁してっ。

けれどもムダメン共は慣れた様子で、全く銀髪マツドの容体を気にするそぶりもない。

「これで暫くは静かでしょう」

シレッとした顔で黒髪腹黒はそう呟くと、ニッコリと真つ黒な笑みを浮かべて言った。

「で、クリストファル殿は、我々に何をさせようと言うのです？」

その一瞬で、緩みきっていた空気が張り詰めたものにすり替わる。濃紺鉄面皮が金色の瞳を眇め、金髪直情が切っ先のような視線を

送りつけ、茶髪ジャイアンは値踏みするかのように片眉を上げ、それぞれに二号の出方を待っている。

アタシは考えた。

精一杯考えた。

イスマイルを利用して、神教がリスを容易に取り込めないようにする方法を。

「なあに、簡単な事だよ。君たちにとっても悪い話じゃない」

アタシは一呼吸置いてから、極力軽い口調で言った。

「フィオリナ」リスナーシュ・ロラン・イスマイル・ハジェク・

イス・イスマイル。要するに我が主の養い子をね、王太子として立てろってことさ」

第六九話 カエルも時には空を飛びます その3 (後書き)

二号は女子がいないと一人称が「オレ」になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9364k/>

---

第三王女のカエル様

2011年12月15日03時51分発行